ISBN 978-4-906888-15-3

地球研言語記述論集7

大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬（編）

言語記述研究会

総合地球環境学研究所
「アジア・太平洋における生物文化多様性の探究」プロジェクト

2015 年 3 月

地球研言語記述論集 7

目 次

序文 ..... 千田 俊太郎 i

論文

ムラブリ語の数詞 ..... 伊藤 雄馬 1

モンゴル語ハルハ方言の借用語における接尾辞の母音調和 ..... 植田 尚樹 15

セデック語パラン方言の談話資料「ソメコ」と終助詞の用法 .... 落合いずみ 39

ジンポー語のテキスト資料「落雷」 ..... 倉部 慶太 65

奄美喜界島志戸桶方言の談話資料 ..... 白田 理人 75

チベット語塔公 [Lhagang] 方言の物語『菩薩の愛する地・塔公』訳注
—塔公方言の多層構造と物語の異同に関する考察を添えて— ..... 鈴木 博之 111

h̃とñ—鼻腔共鳴を伴う声門摩擦音に関する覚え書き— ..... 鈴木 博之 141

ブヌン語南部方言の第二位置疑問小詞 bis ..... 野島 本泰 151

ロロ・ポ語音論の予備的研究 ..... 林 範彦 171

北パキスタン諸言語のコピュラ ..... 吉岡 乾 207

追悼文

庄垣内さんの思い出 ..... 長田 俊樹 225

「地球研言語記述論集」第 7 號
序文

千田俊太郎

言語記述研究會、略稱「記述研」は 2014 年度も定期的に例會を開き、活潑な研究交流の場となつた。四月には遠方に移つて例會にいつも參加することが難しくなつた仲間もゐるが、一方で新たな面々も加はつてくれてゐる。英語による企劃、發表もあつた。氣輕な研究交流をといふ趣旨で海外學會報告など、新しいスタイルの發表も出てきてゐる。

論集本號も多くの原稿を寄せてもらつた。お蔭でなかなかのページ數に達してゐる。いつも通り論文、言語資料があるほか、エッセイを含んでゐる。全體に、一般化の難しい現象を扱つたものや、變はりゆく文化の貴重な記錄になつてゐるものが多い。中には記述研例會での發表が出發點になつて論文になつたものもある。記述研のウェブページの例會記錄で論文の生ひ立ちを確認することができる。

伊藤さんは「ムラブリ語の数詞」で數詞の數量句用法と非數量句用法の兩方にわたる記述をしてゐる。個々の數詞の特異な用法について叮嚀に觀察してゐる。固有數詞があまり大きな數までないこと、數詞が借用語に侵されやすいこと、貨幣經濟の導入との關連など、パプア諸語の狀況とも印象の重なるところも多い。

植田さんの「モンゴル語ハルハ方言の借用語における接尾辞の母音調和」は、非常に複雜な、複數の要因が關聯する現象を扱つてゐる。音聲の新しいデータを得て、先行研究に言はれた接尾辭の母音調和とアクセントとの關係は、決定的なものではないことを示した。話者による差よりも語による差が大きく、特に語幹末に i, e を持つ場合の振る舞ひが難しい。

落合さんの「セデック語パラン方言の談話資料「ソメコ」と終助詞の用法」は、要を得た文法概略、談話資料、談話資料に基づく終助詞研究の三本の柱からなる力作である。談話の內容は、すでに繼承が途絕えた習慣をテーマにしてゐる點が貴重である。終助詞研究も自然發話だからこそ可能な研究分野であり、氣の利いた組み合はせである。

倉部さんの「ジンポー語のテキスト資料「落雷」」は、言語資料であるとともに、貴重な文化的記錄でもある。倉部さんの記述から、テキストの內容は 100 年以上前の習慣の口傳であると考へられるが、行動樣式の描寫は非常に具體的である。ジンポー語の直譯調による翻譯の試みもとても面白く、ある種の文學的な味はひさへある。

白田さんの「奄美喜界島志戸桶方言の談話資料」は前號でも扱つた複數の話し手のやり取りの記錄である。今度は前號とは別の方言の、四つの談話を取り上げてをり、かなりの分量を書き起こしてゐる。四つのうち一つは歌であり、日常會話には見られない語形の使用例が報告されてゐる。話者の方言使用に關する經驗や認識を話題にしてゐる談話など、興味深く讀んだ。

鈴木さんは共著論文と單著論文の二本を寄せられた。共著論文は物語の譯注で、同じ物語の別のバージョンや言語に關する情報が豐富に示されてゐる。單著論文は彼の眞骨頂ともいへる前氣音關連の論文である。前鼻音の調音は「必ずしも調音器官の閉鎖を必要としない」。人間言語の音聲の多樣さについて、目を瞠らされる。

野島さんの「ブヌン語南部方言の第二位置疑問小詞 bis 」は、明らかに長年の調査の結果によるものである。問題の小詞は基本的には「疑問詞疑問文であることを標示する」。その小詞に關する記述內容は、短い 3 節に凝縮されてゐるが、文法概說に示された事實との關係や先行研究との違ひを踏まへて讀むと、濃密である。

林さんの「ロロ・ポ語音論の予備的研究」は、先行研究が非常に少ない言語について、二つの媒介言語を驅使して調査を行ひ、音聲の觀察と音素分析といふ言語記述の最も基礎的な作業を行つた結果である。音聲的に非常に近い二つの低母音が對立することなど、興味深い。充實した付錄の資料編は本論集ならではである。

吉岡さんの「北パキスタン諸言語のコピュラ」は、複數の言語、方言の現地調査に基いて、地理・系統の兩方の觀點から考察してゆくもので、背後にたいへんな作業量があつたことが明らかである。ブルシャスキー語の前身が言語特徵の傳播の源だつたとしたら、その言語の話者集團は昔の當地の社會において重要な位置を占めてゐたのだらうか。樂しい想像がふくらむ。

最後は長田さんのエッセイ「庄垣內さんの思い出 」である。若い日々の感受性、一見ぎよつとするやうな表現やエピソード、さまざまな思ひが重ね合はさり、抱腹絕倒の後に、故人を悼む氣持ちが熱く傳はつてくる。

以上、魅力的なラインナップ、今號もお樂しみいただきたい。

乙未年某月某日

千田俊太郎

ムラブリ語の数詞 *

伊藤雄馬
京都大学／日本学術振興会

キーワード：ムラブリ語，数詞，オーストロアジア語族，クム語派

1　はじめに

ムラブリ語[1] の数詞の用法は多岐にわたる．その用法は，大きく分けて数量詞用法と非数量詞用法があるが，後者のほとんどは未記述である．本稿では，ムラブリ語の数詞の用法について，数量詞用法と非数量詞用法の両方について記述する．なお，「一」から「十」を表す数詞のグロス表記は，数量句用法，非数量句用法に関わらず，一貫して漢数字で提示することとする．

1.1　系統

ムラブリ語は，オーストロアジア語族[2] (Austroasiatic)、北方モン・クメール諸語 (Northern Mon-Khmer languages)、クム語派 (Khmuic) に分類される (cf. Sidwell 2015)．この分類は，クム語派に属するとされるティン語 (T'in) とムラブリ語の間に，音対応が認められることを根拠の 1 つとしている (Rischel 2007)．ただし、ムラブリ語は，クム語派内における語彙共有率が低く，他のクム語派と言語特徴を異にすることから、系統について議論の余地を残す (cf. Sidwell 2015: 289) 。本稿で取り上げる数詞も，クム語派内で特異とみられる特徴がいくつか存在する．

1.2　変種

Rischel (2007: 30) によれば、ムラブリ語の変種には少なくとも A 変種 (A-Mlabri, α-Mlabri)、B 変種 (B-Mlabri, β-Mlabri)、C 変種 (C-Mlabri, γ-Mlabri, Yumbri) が存在する。ムラブリは「元来」[3] 狩猟採集を営み，タイ・ラオス国境の山岳部で遊動生活を送っていた．ラオスでは現在も

---

* 本研究は JSPS 特別研究員奨励費 25・4309「北タイの危機言語ムラブリ語のドキュメンテーションとその分析」の助成を一部受けたものである。本稿の執筆にあたっては，長田俊樹氏とバデノック・ネイサン氏から多くの有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表する。当然、本稿にありうべき誤りの責任は全て筆者にある．

[1] ムラブリ語の音素は以下のとおり：**[頭子音]** /p, p^h, b, ^{ʔ}b, t, t^h, d, ^{ʔ}d, c[t͡ɕ], j[d͡ʑ], k, k^h, g, ʔ; m, ^{h}m, n, ^{h}n, ɲ, ^{h}ɲ, ŋ, ^{h}ŋ; r, ^{h}r, l, ^{h}l;s, h; w, y[j], ^{ʔ}w, ^{ʔ}y[^{ʔ}j]/ **[末子音]** /p[pˀ], t[tˀ], c[cˀ], k[kˀ], ʔ[ʔˀ]; m[mˀ], n[nˀ], ɲ[ɲˀ], ŋ[ŋˀ]; r, l[lˀ], l^h[ɬˀ];ɕ, h; w, y[j]/ **[母音]** /i, e, ɛ, a, ɔ, o, u, ɯ, ɤ, ʌ/

[2] ここでいうオーストロアジア語族とは，ムンダ諸語 (Munda languages) とモン・クメール諸語 (Mon-Khmer languages) の両方を含む言語群を指すこととする．

[3] 「元来」に括弧を付けたのは，ムラブリが農耕民から狩猟採集民へ再適応 (cultural reversion) した民族である可能性を遺伝学の見地から指摘されているためである (Oota et al. 2005).

森で生活しているそうだが、タイでは森林破壊とタイ政府の定住化政策により全員が定住しており、賃金労働や小作農をして生活している。以下にムラブリの定住地を地図で示す。定住地の名前は略して示してある。後述する正式名の下線部を参照されたい。

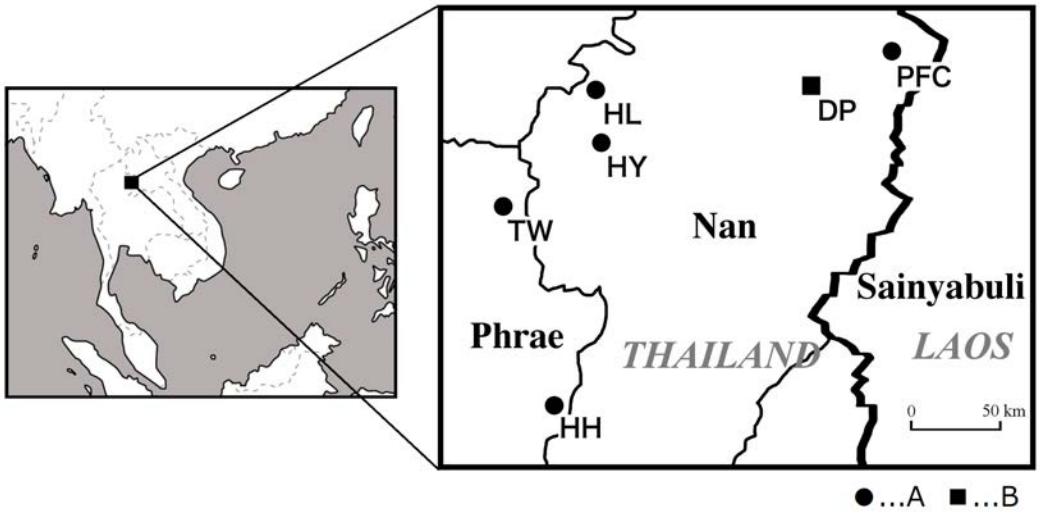


図 1　ムラブリの定住地

A 変種は、タイ北部のナーン県 (Nan) とプレー県 (Phrae) で話され、筆者の調査によれば話者数約 400 名で，最大の変種である。定住地は，フアイユアック村 (Ban Huai Yuak)，フアイホム村 (Ban Huai Hom)，フアイルー村 (Ban Huai Lu)，タワ村 (Ban Tha Wa)， プーファー開発センター (Phu Fa Development Center) である。筆者の観察では，A 変種話者の全員がムラブリ語を母語とするものと考えられる．ムラブリ語の中で最も調査されている変種であり，語彙・テキストに限ると，Bernatzik (1938) の語彙・表現集 (182 項目) に始まり，Nimmanhaeminda (1963) の語彙集 (66 項目)，Egerod (1982) の語彙集 (217 項目)，Egerod&Rischel (1987) の語彙集 (1,308 項目)，Sakamoto (2005) のテキスト集が存在する．近年では，伊藤 (2014) の文法スケッチ，伊藤・二文字屋 (2014) のテキスト，Bätscher (2015) の文法スケッチとテキストがある．

B 変種は，Rischel (1995) 以降調査されておらず，存在も確認されてこなかったが (cf. Bätscher 2015: 1004)，2015 年 3 月に行った筆者の調査によって 6 名の話者が確認できた．男性 3 名，女性 3 名である．ただし，筆者が確認した限りでは，実際に話せるのは男性 3 名のみで，女性は数語のみ覚えているか，聞いて理解するに留まる．主な居住地はフモン (Hmong，フモン・ミエン語族) の村であるドーンプライワン村 (Ban Don Praiwan) であり，男性 3 名，女性 1 名が住む。残りの女性 2 名は別のタイ族の村に嫁いでいる．この B 変種は，ムラブリ語の変種で唯一文法書が存在する変種である (Rischel 1995).

C 変種は，ラオスのサイニャブリ県 (Sainyabuli) に住む集団であり，筆者がサイニャブリ県観光局に問い合わせた情報だと，2013 年の時点で 13 名である。いくつかの調査報告があるが，断片的な資料しかない (cf. Chazée 2001, Rischel 1999)。Rischel (1999) によれば，ムラブリ語の最も古い資料である Bernatzik (1938) の資料は，この C 変種である可能性が最も高い.

本稿では A 変種を主に扱う．提示する資料は断りのない限り，筆者の独自資料である．

2　数詞

2.1　「一」から「十」

ムラブリ語 A 変種 (A-Mlabri) の数詞は，「一」から「十」まで観察されている．その形式を以下の表 1[4] に挙げる．同時に，ムラブリ語 B 変種[5] (B-Mlabri: Rischel 1995)，ムラブリ語に最も近しいとされるティン語[6] (T'in: Riscehl 1997: 285)，クム祖語 (PKm: Sidwell 2013)，モン・クメール祖語 (PMK: Shorto 2006) の対応すると考えられる数詞も合わせて挙げる．

表 1　数詞「一」から「十」の形式

	A-Mlabri	B-Mlabri	T'in	PKm	PMK
一	mɔy	mɔy	muʌj	*moːj	*muːj
二	bɛr	bɛːr	pia(r)	*baːr	*baːr
三	pɛʔ	pɛʔ	pʰɛʔ	*peʔ	*piʔ
四	pon	pon	pʰon	*puən	*puən
五	tʰɤŋ	tʰɤːŋ	sɔːŋ	*səŋ	*sən
六	tal	taːl	tʰuʌl	*tVl	*tuəl
七	gul	gul	gul	*guːl	—
八	tiʔ	tiːʔ	tʰiʔ	*tiʔ	—
九	gaɕ	gajh	gat	*kaːj	—
十	gal	gal	ma tuk	*gal	—

オーストロアジア語族の数詞については，この語族で最も重要な言語の一つであるクメール語がその数詞に五進法を含むことなどから，古くから関心を持たれ，長い比較研究の歴史を持つ (cf. Diffloth & ZIde 1976, Rischel 1997, Sidwell 1999)．ムラブリ語においても比較研究の観点から数詞を分析する必要があるが，本稿では共時的な記述が主な目的であるため，部分的にコメントを加えるに留める．

数詞「五」について，頭子音がムラブリ語は閉鎖音 tʰ-であるが，モン・クメール祖語を含め，他は全て摩擦音 s-である．これは，ムラブリ語に s->tʰ-という音変化が起こったためである (Rischel 2007: 111)．この s->tʰ-という音変化が起きたのは，管見の限り，クム語派内だけでなく，オーストロアジア語族の中でもムラブリ語のみであり，注目に値する．

ムラブリ語の数詞「八」tiʔ は「手」という意味も表す．クム祖語にも「手，前足」を意味す

[4] 表記を統一するために，一部表記を変えている．例えば，長母音は母音記号の連続で記す研究があったが，長音記号に変えた．

[5] 数詞「六」については，Rischel (1995) では tʰaːl と頭子音が有気音であるが，Rischel (1997: 286) では無気音であること，また筆者自身による調査でも無気音であったため，無気音とした．

[6] ティン語の「二」に見られる丸括弧は，変種によってはわたり音，ないしは無くなっていることを示している．また「十」に見られる ma は「一」が音声的に弱化したものである．

る*tiʔ が再建されていることから，「八」と「手」が同形式である言語がクム語派には多いことが伺える[7]．モン・クメール祖語にも「手」の再建形として*tiːʔ があるため，もともと「手」を表していた形式*tiʔ が，複数の言語において「八」という意味を持つようになったと考えるのが今のところ妥当であろう．しかし，なぜ「手」が「八」を意味するようになったのかは，明らかでない[8]．なお，オーストロアジア語族のムンダ語派においても，tiʔ は「手・腕」と数詞の両方を意味する (Zide 1978: 40)．しかし，その表す数は「五」であり，クム語派などとは異なる．

2.1.1 「一」から「十」の数え方

ムラブリ語話者の中で，固有語の数詞の全てを正確に言える者は多くない．多くの話者は言えても「一」と「二」のみで，三以降は言えない．他にも，途中の数詞を抜かして覚えていたり (例えば，「三」を抜かして覚えている)，順番を間違えて覚えていたり (例えば，「四」と「五」の順番が逆転している) する．このような背景から，固有語の数詞を「一」から「十」まで間違えずに言えることは，ムラブリ社会では知的であることを表す．

数詞を数える際は，必ず「一」から始まり，「十」で終わる．途中の数から数え始めることはせず，途中から数えるように要求しても，難しいようである．数えている途中で思い出せなくなった場合も，「一」から数え直される．このことから，「一」から「十」までを一つのまとまりとして覚えていると考えられる．

2.2 「十」より上の数

ムラブリ語の固有語には「十」より上の数詞は存在しない．「十」より上の数を数えるときは，タイ系言語からの借用語を用いる。

ただし，若年層ではムラブリ語の数詞を用いて「十」より上の数を数えようとする向きもある．例えば，11 は mɔy gal mɔy (一，十，一)，35 は pɛʔ gal tʰɤːŋ (三，十，五) などである．ただし，この「十」より上をムラブリ語の数詞で表す方法には，話者によって異なることがある．例えば，上の 11 の例は，ある話者は gal mɔy (十，一) が，前述した mɔy gal mɔy (一，十，一) よりも適切であるという．

また，一部の色彩語彙を用いて数を表すこともできる．例えば，「青，緑」をあらわす bn.liŋ は 20 を表す．同様に，「赤」を表す lɛŋ は 100 を，「白」を表す balak は 1,000 を表す．これらはそれぞれ，タイ紙幣の色と対応している．つまり，タイバーツ紙幣で 20 バーツが緑，100 バーツが赤，1000 バーツが白であり，それぞれ色と数がムラブリ語の例と対応している[9]．

---

[7] ただし，パラウン語派 (Palaungic) やペア語派 (Pearic) の言語にも「八」と「手」が同形の言語は見られる．

[8] 考えられるものとして，指と指の間の数は両手で 8 あること，また，片手の親指を除いた関節の数は 8 になることである．しかし，これらの数え方がムラブリの間に見られるわけではない．

[9] この他の色彩語彙に，「黒」pʰa.ʔdam と「黄」hlɤŋ があるが，そこれらは数を表さない．

3　数詞の用法

数詞の用法として，数量詞用法と非数量詞用法に分けて記述する．

3.1　数量句用法

数詞と類別詞[10] で数量句を形成する．語順は数詞，類別詞である．類別詞なしの数詞のみで数量を表す例も観察できる (cf. Bätscher 2015: 1019)．数量句では，タイ系言語から借用した数詞を用いるのが普通である．以下，借用語は<>に入れて表す

(1)　a. luk.ʔɔm　bɛr　klɔʔ
　　飴　　二　[類]
　　「飴 2 つ」
　b. ʔoh　ʔa=ʔday　<sɔŋ>
　　1.SG　[完]=得る　二
　　「2 つもらった」
　c. jak　nɔn　<sam>　lɛk
　　行く　寝る　三　　[類]
　　「3 日間寝に行く」

数量句は，名詞句，もしくは動詞句に後続する．

3.1.1　「一」を含む数量句の回避傾向

「1 つ」など，数量が 1 であることを表すのに，数詞 mɔy「一」を伴う数量句の形は，使用可能であるが，あまり用いられないようである．代わりに，接頭辞 do-「だけ」と数詞「一」による，do-mɔy「1 つだけ」を用いるのが最も一般的である[11]．

(2)　a. luk.ʔɔm　do-mɔy
　　飴　　だけ-一
　　「飴 1 つだけ」
　b. ʰŋuh　do-mɔy
　　居る　だけ-一
　　「1 人だけでいる」

この do-mɔy という形式は，数量句と同様に，名詞句か動詞句に後続する．

[10] ムラブリ語は類別詞がそれほど発達していない．Rischel (2007: 96–98) では，ムラブリ語の類別詞を 27 種類列挙している．そこで挙げられているほとんどの類別詞は，名詞としても用いられる．

[11] なお，この接頭辞 do-が他の数詞，例えば bɛr「二」と共起する例は観察されていない．また，接頭辞 do-はタイ語の数詞とは共起しないようである．

3.1.2 「一」を表す mʌ-

数詞 mɔy「一」を用いた数量句は回避傾向にあり，その代わりに do-mɔy が用いられることを述べたが，他にも mʌ-という形式で数量が 1 であることを表すこともできる．

mʌ-は類別詞と数量句となって数量が 1 であることを表し，この点で数詞 mɔy と性質を同じくする．しかし，単独で現れることはなく，常に類別詞を伴った形で観察される点が，数詞 mɔy と異なる．

また，全ての類別詞に mʌ-が使えるわけではない点も，数詞と異なる．例えば，もっとも頻繁に使われる類別詞 klɔʔ「個」には mʌ-は共起しない．現時点で mʌ-との共起が確認されているのは，「回数」を表す t^hɯɯ と「本数」を表す t^hl.dɯl,「年数」を表す ^{h}nam との共起が確認されている．

(3) a. pɤʔ mʌ-t^hl.dɯl
ある mʌ-[類]
「飴ひとつ」
b. jak mʌ-t^hɯɯ
行く mʌ-[類]
「(もう) 一度行く」

なお，mʌ-が「回数」を表す t^hɯɯ と共起した場合，「もう一度」の意味も表しうる．

3.1.3 「同じ」と「違う」に現れる mʌ-

これまでみた，do-「だけ」と mʌ-を組み合わせたとみられる，domʌ-という表現があり，これは後ろに名詞を伴い「同じ」という意味を表す．

(4) domʌ-buk「同じ顔」(cf. buk「顔，額」)
domʌ-bɔn「同じ集団」(cf.bɔn「集団」)
domʌ-jɯɯ「同じ種類」(cf. jɯɯ「種類」)

「違う」という表現は hak.mʌ-であり，これも mʌ-を含んでいる．mʌ-に前置されている hak は，対比談話標識 (contrastive discourse marker) のようにみえる (cf. 伊藤 2014: 67).

(5) hak.mʌ-buk「違う顔」
hak.mʌ-bɔn「違う集団」
hak.mʌ-jɯɯ「違う種類」

3.1.4 「たくさん」を意味する「四」

固有語の数詞 pon「四」を数量句に用いた場合，「たくさんの」という意味を普通表し，数量が 4 という意味で解釈されることはほとんどない．

(6) pleʔ pon klɔʔ
実 四 [類]
「たくさんの実 (／4 つの実)」

よって，固有語の数詞「四」を数量句に用いた場合，意味が曖昧になる[12]．曖昧さを避けるために，タイ系言語からの借用語を用いるか，日本語で言えば「2 つ 2 つ」のような反復形式に言い換える．この場合は，数量が 4 であることだけを意味し，「たくさんの」を意味することはない．

(7) a. pleʔ <sii> klɔʔ
実 四 [類]
「4 つの実」
b. pleʔ <sɔŋ> klɔʔ <sɔŋ> klɔʔ
実 二 [類] 二 [類]
「4 つの実 (lit. 実 2 つ 2 つ)」

固有語の「四」を含む数量句は，他の数詞を用いる数量句と比べ，いくつかの点で特殊である．まず，固有語の「四」を含む数量句は，完了を表す形式 ʔa=を取れる[13]．一方で，それ以外の数詞は，固有語と借用語のどちらについても，ʔa=を取れない．

(8) a. pleʔ ʔa=pon klɔʔ
実 [完]=四 [類]
「実がたくさんになった.」
b. *pleʔ ʔa=bɛr klɔʔ
実 [完]=二 [類]

c. *pleʔ ʔa=<sɔŋ> klɔʔ
実 [完]=二 [類]

さらに，「四」は普通は類別詞として用いない語彙にも付いて「たくさんの」という意味を表す．例えば，「子供」ʔay.tak は名詞として用いるのが普通で，類別詞としては用いない，つまり，数詞を前置して数量句を形成することはない．しかし，数詞「四」のみ前置を許し，「たく

[12] Rischel (1995: 126) では，数詞「二」bɛr が名詞に後続して複数を表す例のあることを報告している．

[13] アスペクト標識を取れる点において，「四」を含む数量句は動詞的である．ただし，四」を含む数量句は否定標識を取れない点において，動詞と異なる．伊藤 (2014) において，動詞は「否定標識を取りうるもの」と定義している．これに従えは「四」を含む数量句は，少なくとも動詞とは別のカテゴリーに属すると言える．この「四」を含む数量句に近い振る舞いをするものに，「朝」takiʔ,「昼」kha.tɔn,「夕」tr.dil などの時間表現がある．これら時間表現は，アスペクト標識をとれるが，否定標識は取れない (ʔa-takiʔ, *ki=takiʔ).

さんの子供」を意味する数量句を形成する．「2 人の子供」と言うには，必ず名詞，数詞，類別詞と並べる必要がある．

(9) a. pon ʔay.tak
四 子供
「子供たくさん」
b. *bɛr ʔay.tak
二 子供

c. ʔay.tak bɛr mlaʔ
子供 二 [類]
「2 人の子供」

この他にも，mɛʔ「雨」，lam「木」などが「四」と数量句を形成する例が観察されている．

3.1.5 「プラス 1」標識

数量句に後置して，数量が数詞よりも 1 多いことを表す標識が存在する。ここでは，「プラス 1」標識と呼ぶことにする．

(10) pleʔ <sɔŋ> klɔʔ ʰloy
実 二 [類] プラス 1
「実 3 つ (実 2 つプラス 1)」

数詞「二」を用いた数量句の時に「プラス 1」標識が表れやすいという傾向があり，それと並行的して「三」が数量句に使われることはほとんどない (cf. Rischel 1995: 147)．ただし，なぜ「プラス 1」標識が用いられるのか，また用いた場合と用いない場合との差異は不明である。

管見の限り，ムラブリ語以外のクム語派に属する言語には「プラス 1」標識に対応する形式は存在しない．

3.2 非数量句的用法

非数量句的用法には，人称代名詞，呼びかけ，また親族名称と共に用いる用法がある．

3.2.1 人称代名詞＋数詞

ムラブリ語の人称代名詞は一人称と二人称が体系をなし，三人称は二次的な形式である (cf. 伊藤 2013)．体系内の人称代名詞は単数，双数，複数であるが，複数形は双数形に，A 変種では数詞の「五」を，B 変種では数詞の「八」を後続させることで表す[14]．さらに A 変種では，

[14] 数詞「五」と数詞「八」は一見関係のないように思える．しかし，数詞「五」が (片手の) 指の本数と一致していること，そして数詞「八」tiʔ が「手」を意味することを考えると，「五」と「八」が「手」という共通項で繋がっているようにもみえる (cf. Ito & Nimonjiya 2014).

複数形に「今この場 (here-now)」にいる人のみを指す一人称複数形があり，定冠詞 ʔak，数詞「二」bɛr，数詞「五」t^hɤŋ によって表す．二人称複数にはこのような区別は観察できていない．

表 2　A 変種の人称代名詞

	単	双	複	複 (here-now)
1	ʔoh	ʔah	ʔah+t^hɤŋ	ʔak+bɛr+ʔak+t^hɤŋ
2	mɛh	bah	bah+t^hɤŋ	

表 3　B 変種の人称代名詞 (Rischel 1995)

	単	双	複
1	ʔoh	ʔah	ʔah+tiʔ
2	mɛh	bah	bah+tiʔ

三人称について，単数は A 変種が数詞「一」を用い，B 変種は定冠詞＋数詞「八」を用いる．三人称双数は，A 変種，B 変種ともに定冠詞＋数詞「二」を用いる．

表 4　3 人称単数・双数を表す形式

	3 単	3 双
A	mɔy	ʔak+bɛr
B	ʔat+tiʔ	ʔat+bɛr

三人称複数は，B 変種は定冠詞 + 数詞「八」で三人称複数を表す．この形式は三人称単数と同形である点に注意されたい．

A 変種の三人称複数形は指示対象が「同じ集団に属するかどうか」によって形式が異なる．話し手と同じ集団に属するが，今この場にいない人々を指す場合，ʔah+bɛr+t^hɤŋ 一人称双数形＋数詞「二」＋数詞「五」で表す．話し手と別の集団に属し，今この場にいない人々を指す場合は，jum+ɲʌʔ「集団」＋遠称の指示詞で表す．

表 5　3 人称複数を表す形式

	3 複 (同集団)	3 複 (別集団)
A	ʔah+bɛr+t^hɤŋ	jum+ɲʌʔ
B	ʔat+tiʔ	

使い分けについて，参与観察で実際に遭遇した例を，支障のない程度に改変して示す．

(文脈：6 人で車に乗って学校に来た．その時，3 人はトイレへ行き，もう 3 人は車に残った．そこへ，学校にもともといたムラブリ (X) が来て，車に残ったムラブリ (Y) に尋ねた．)

(11) X. bah+tʰɤŋ leh <kii> mlaʔ
2.[双] 来る いくつ [類]
「あなたたちは何人で来たのか？」
Y. <hok> mlaʔ, ʔah+bɛr+tʰɤŋ jak nɔm
六 [類], 1.[双]+ 二 + 五 行く 尿
「六人，一緒に来て，今ここにいない彼らは小便に行った.」
X. jum+ɲʌʔ jak ʔyak kalɤʔ
集団 +[遠] 行く 糞 か
「彼らは大便だったりして.」

ここでは Y を含む「車で来た 6 人」が集団とみなされており，その集団の中に X は含まれていない．トイレに行ってこの場にいない 3 人を，「車で来た 6 人」の集団に含まれる Y は ʔah+bɛr+tʰɤŋ と呼び，含まれない X は jum+ɲʌʔ と呼んでいる．同集団とみなされる集団は可変であり，場面により異なる．

3.2.2 呼びかけ

数詞 bɛr「二」は，親密さを伴った聞き手への呼びかけとして用いられる[15]．呼びかけの bɛr は，単独でイントネーションを担うことなどから，間投詞に分類できる (cf. 伊藤 2014: 48)．筆者の資料では，bɛr が呼びかけに用いられるのは，男が男に対して呼びかける場合のみで，男が女に，女が男に，もしくは女が女に呼びかける例はみられなかった．以下に用例を挙げる．

(12) bɛr, maʔ lɯŋ ʔoh
二 あげる [向] 1.[単]
「お前，俺にもよこせ.」

その他にも数詞「二」には，ʔi-bɛr，si-bɛr という呼びかけの用法が観察できる．ʔi-bɛr の ʔi- は人の名前や一部の親族名称などに前置されて，敬意を表す[16] (ʔi-taʔ「オジイサン，オジサン」taʔ「祖父，父母の兄」)．si-については，他に用例がなく，また近親の言語にも同源語が見当たらない．

[15] 数詞「二」bɛr の呼びかけ用法は，数詞「二」が「ペア」を想起させる用法であることに起因すると筆者は考えている (cf. Rishcel 1995: 147–148，三人称双数形も参照)．つまり，数詞「二」bɛr による呼びかけは，話し手と聞き手の間に「ペア」という関係性を立ち上げることで，親密さを演出していると考えられる．ただし，呼びかけに用いられる bɛr が，単に数詞「二」の同音異義語である可能性もある．どちらの分析が妥当であるかは現時点では判断できない．今後の課題とする．

[16] ʔi-はタイ系言語からの借用語と考えられる．しかし，現代のタイ系言語でこの語を用いるのは無礼にあたり，敬意を表すムラブリ語とは反対の意味である．また，B 変種で ʔi-は若い女性か子供の名前にしか用いない形式であり，A 変種の用法と異なる (Rischel 1995: 339)．

ʔi-bɛr は，話者によってその用法の説明が異なる．若者の多くは，ʔi-bɛr は親密な男女の間でお互いを呼ぶときに用いられると説明する．一方で，老年層の話者は ʔi-bɛr を年上の男に対して呼びかけるのに用いると説明する．si-bɛr には，このような年代差はなく，年配の女性を呼ぶ場合にのみ用いることができる．

表 6　「呼びかけ」の種類と説明の違い

	若年	老年
bɛr	(親密な) 二者間	
ʔi-bɛr	親密な男女間	年配の男性
si-bɛr	年配の女性	

ʔi-bɛr に見られる世代間の差が，何を表しているのかを考察することは今後の課題とする．

この他にも，X+「二」X+「八」という対句的表現が，複数のものへの「呼びかけ」として用いられる．X は名詞であることが多いが，この表現にのみ現れる形式もある. ただし，どんな名詞でもこの表現ができるわけではないようで，例えば「犬」はできない．

表 7　対句的表現による「呼びかけ」

X		X	二	X	八	
yoŋ	「男」	yoŋ	bɛr	yoŋ	tiʔ	「男たち！」
ʔuy	「女」	ʔuy	bɛr	ʔuy	tiʔ	「女たち！」
km-	不明	km-	bɛr	km-	tiʔ	「(年下の) お前たち！」
braɲ	「犬」	*braɲ	bɛr	braɲ	tiʔ	「*犬たち！」

3.2.3　親族名称

親族名称の内,「年上キョウダイ」の diŋ と「年下キョウダイ」の roy[17] に数詞「二」bɛr を後置させると,「義理の」という意味を付け加えることができる．

(13)　diŋ+bɛr「義理の年上キョウダイ」(cf. diŋ「年上キョウダイ」)
　　roy+bɛr「義理の年下キョウダイ」(cf. roy「年下キョウダイ」)

他に，bɯr という語も diŋ，roy について,「義理の」を意味する．bɯr と数詞「二」の bɛr は形が似ているが，その関係は不明である．

[17] より正確には diŋ は「年上キョウダイ」だけでなく,「父母の年上キョウダイの子」も指し，roy は「年下キョウダイ」だけでなく,「父母の年下キョウダイの子」,「年上キョウダイの子」も指す (二文字屋・伊藤 in print)．この内,「義理の」の解釈が加わりうるのは，それぞれ「年上キョウダイ」と「年下キョウダイ」のみである．

4　まとめ

本稿は，ムラブリ語の数詞を数量用法と非数量用法に分けて記述した．それぞれの数詞の用法を表にし，本稿のまとめとする．

表 8　ムラブリ語の数詞とその用法

数	Mlabri	数量詞用法	非数量詞用法
一	mɔy	あまり用いない・domɔy か mʌ-を使う	3.[単] (A)
二	bɛr	あまり用いない・タイ語を使う	3.[双]，呼びかけ，「義理の」
三	pɛʔ	あまり用いない・タイ語を使う	—
四	pon	「たくさんの」	—
五	t^hɤŋ	あまり用いない・タイ語を使う	1/2.[複] (A)
六	tal	あまり用いない・タイ語を使う	—
七	gul	あまり用いない・タイ語を使う	—
八	tiʔ	あまり用いない・タイ語を使う	「手」，1/2/3.[複]・3.[単] (B)，呼びかけ
九	gaɕ	あまり用いない・タイ語を使う	—
十	gal	あまり用いない・タイ語を使う	—

記号・略号

.(ピリオド)... 音節境界；=... 接語境界；+... 複合語境界；1... 一人称；2... 二人称；3... 三人称；単... 単数；双... 双数；複... 複数；遠... 遠称；定... 定冠詞；向... 向格；類... 類別詞；完... 完了

参考文献

Bätscher, Kevin (2015) “Mlabri” In: Mathias Jenny & Paul Sidwell (eds.) *The Handbook of Austroasiatic Languages*, 1003–1030. Leiden, Boston: Brill.

Bernatzik, Hugo A. (1938) *Die Geister der Gelben Blätter.* München, Bruckmann.

Chazée, Laurent (2001) *The Mrabri^{sic} in Laos: A World under the Canopy.* Bangkok: White Lotus.

Diffloth, Gérald & Norman Zide (eds.) (1976) “Austroasiatic Number System” *Linguistics.* 174.

Egerod, Søren (1982) “An English-Mlabri Basic Vocabulary” *Annual Newsletter of the Scandinavian Institute of Asian Studies* 16: 14–21.

Egerod, Søren & Jørgen Rischel (1987) “Mlabri-English Vocabulary” *Acta Orientalia* 48: 35–88.

伊藤雄馬 (2014) 「ムラブリ語の文法スケッチ」『地球研言語記述論集』6, 41–72.

伊藤雄馬・二文字屋脩 (2014) 「改訂版ムラブリ語テキスト」『言語と文明』12, 170-190.

Ito, Yuma & Shu Nimonjiya (2014) “‘Hand Number’ in Mlabri Numeral Usage”, 20th Himalayan Languages Symposium, July 17, Nanyang University, Singapore.

Nimmanahaeminda, Kraisri (1963) “The Mrabri^{sic} Language” *Journal of the Siam Society* 51(2): 179-184.

二文字屋脩・伊藤雄馬 (in print)「ムラブリ関係名称再考」『アジア・アフリカ言語文化研究』89.

Oota, Hiroyuki et al. (2005) “Recent Origin and Cultural Reversion of a Hunter−Gatherer Group” *PLoS Biology* 3: e71.

Rischel, Jørgen (1982) “Fieldwork on the Mlabri Language: A Preliminary Sketch of its Phonetics” *Annual Report of the Institute of Phonetics, University of Copenhagen* 16: 247–255.

Rischel, Jørgen (1995) *Minor Mlabri: A Hunter-gatherer Language of Northern Indochina*. Copenhagen: Museum Tusculanum Press.

——————— (1997) “Typology and Reconstruction of Numeral System” In: Fisiak, Jacek (ed.) *Linguistic Reconstruction and Typology*, 273–312. Berlin: Mouton de Gruyter.

——————— (1999) “The dialect of Bernatzik’s (1938) refound?” *Mon-Khmer Studies* 30: 115–122.

——————— (2007) *Mlabri and Mon-Khmer–Tracing the History of a Hunter-gatherer Language*. Copenhagen: The Royal Danish Academy of Science and Letters.

Sakamoto, Hinako (2005) *Mlabri Text.* (Endangered Languages of the Pacific Rim A3-17.)

Shorto, L. Harry (Paul Sidwell, Doug Cooper, Christian Bauer eds.) (2006) *Mon-Khmer Comparative Dictionary*. Canberra: Pacific Linguistics.

Sidwell, Paul (1999) “The Austroasiatic numerals 1 to 10 from a historical and typological perspective” In: Givozdanovic, Jandranka (ed.) *Numeral Types and Changes Worldwide*, 253–271, Berlin, New York: John Benjamins.

——————- (2013) Proto-Khmuic. ms. (http://sealang.net/monkhmer/database/)

——————- (2015) “Austroasiatic Classification” In: Mathias Jenny & Paul Sidwell (eds.) *The Handbook of Austroasiatic Languages*, 144–220. Leiden, Boston: Brill.

モンゴル語ハルハ方言の借用語における接尾辞の母音調和

植田尚樹

京都大学／日本学術振興会

1　はじめに

モンゴル語には母音調和の現象があり、語幹に接尾辞が付与されるとき、接尾辞は母音調和による交替形の中から適切なものが選ばれる。本来語は語幹内部も母音調和の原則に従っているため、接尾辞の選択に問題は起こらない。しかし借用語には、語幹内部が母音調和の原則に従っていない語も多いため、語幹内のどの母音と接尾辞の母音が調和しているかは、必ずしも自明ではない。

この問題に対して、植田 (2012; 2013) は 2 種類の調査を行い、借用語に対する接尾辞の母音調和の原則と、接尾辞の調和に影響を与える要因を明らかにした。しかし植田 (2012; 2013) では、綴り字を用いた調査と、話者の知識に基づいた調査が行われたが、聴覚的な情報を用いた調査は行われなかった。

本稿は、借用語に対する接尾辞の母音調和に関して、音声的な情報を用いた調査を行うことで、植田 (2012; 2013) の研究をさらに発展させることを目的とする。そして、音声的な情報が与えられた場合でも、与えられない場合と結果があまり変わらないことから、音声的な情報は接尾辞の選択に影響を与えないことを示す。また、語幹のアクセントが接尾辞の母音調和に影響を与え得ることが先行研究で述べられているが、それは限定的なものであることを明らかにする。

2 節で、モンゴル語ハルハ方言の音韻体系、母音調和現象について概観した後、3 節で今回の調査の方法と使用語彙について説明する。4 節で調査の結果を示し、5 節で考察とまとめを行う。

2　音韻体系

2.1　母音体系

基本母音としては、以下のものが認められる (Svantesson et al. 2005: 22)。

(1)

i	u
	ʊ
e	o
a	ɔ

母音体系、とりわけ語の第 2 音節以降の母音体系については諸説ある。Svantesson et al. (2005) は、第 1 音節と第 2 音節以降で母音体系が異なると主張している。一方、山本 (1991) などは第 1 音節と第 2 音節以降で同じ母音体系を仮定している。母音体系に関する議論は、Street (1963), 斎藤 (1984), 栗林 (1992), Svantesson (2004) なども参照されたい。

本稿では、位置に関わらず以下のような母音体系を持つと仮定する。本来語では、第 2 音節以降の短母音は音声的に弱化する。

(2)

short		*long*		*diphthongs*	
i	u	ii	uu		ui
	ʊ		ʊʊ		ʊi
e	o	ee	oo		ei
a	ɔ	aa	ɔɔ	ai	ɔi

2.2 母音調和

本節では Svantesson et al. (2005) にもとづき、モンゴル語の母音調和について概観する。なお、以下では長母音、二重母音は短母音の連続と解釈する。

モンゴル語の 7 つの母音は、素性 [F] (pharyngeal)、[R] (round)、[O] (open) の有無により同定される[1]。

(3) *Vowel classes*

non-pharyngeal vowels		*pharyngeal vowels*	
i	[ ]		
u	[R]	ʊ	[FR]
e	[O]	a	[FO]
o	[OR]	ɔ	[FOR]

(Svantesson et al. 2005: 46 (7))

このうち、[F] (pharyngeal) と [R] (round) に関して、それぞれ調和がある。

2.2.1 咽頭性の調和

non-pharyngeal の母音と pharyngeal の母音は、同一語内に共存できない。これは、語頭の母音からの素性 [F] のスプレッドと捉えることができる。

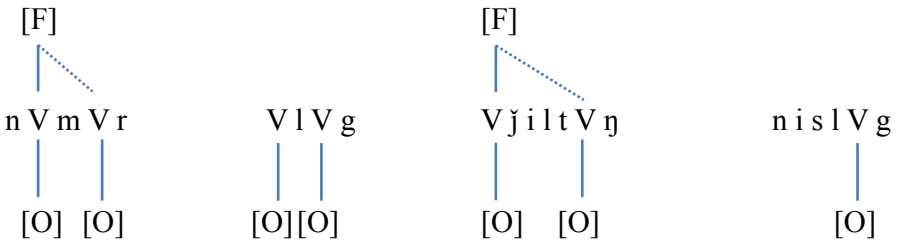
ただし i は例外的な振る舞いを見せる。i は、初頭以外の音節では透明 (transparent) な母音であり、母音調和に無関係である（non-pharyngeal と pharyngeal のどちらの母音とも共存できる）。これは、i が位置素性 (place feature) を持たない、つまり V-place node を持たない

[1] e, o も素性 [O] を持つ母音（広母音）となることに留意されたい。

ため、母音調和のターゲットとならず (van der Hulst and van de Weijer 1995)、素性 [F] を受け取らないためである。一方、i が初頭音節にある場合は non-pharyngeal の母音として機能し、後続する母音は non-pharyngeal の母音に限られる。これは、i が素性 [F] を持たないため [F] がスプレッドされることがなく、後続する母音も [F] を持たないためである。

咽頭性の調和を図式化すると、以下のようになる。

(4) a. namar ‘autumn’ b. eleg ‘liver’ c. ajǐltaŋ ‘employee’ d. nisleg ‘flight’



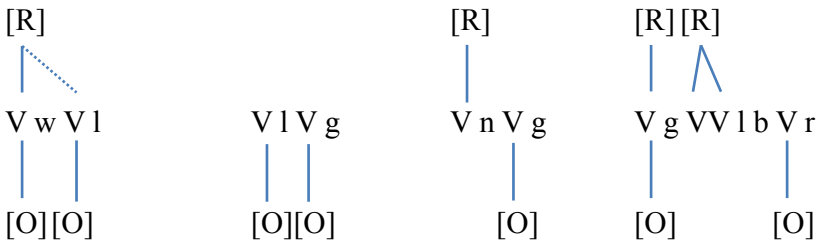
2.2.2 円唇性の調和

円唇性の調和は、広母音（素性 [O] を持つ母音 e, o, a, ɔ）に関わる。第 2 音節以降において、円唇広母音 o/ɔ は、先行する母音が o/ɔ の時にのみ現れる。これは、広母音をターゲットにした、円唇素性 [R] のスプレッドであると捉えられる。第 2 音節以降の広母音は、先行する母音から素性 [R] を受け取った場合にのみ o/ɔ として現れ、[R] を受け取らなければ e/a として現れる。なお、i は円唇性の調和に関しても透明 (transparent) である。

円唇狭母音 u/ʊ は、自身は素性 [R] を持つにもかかわらず、[R] のスプレッドを引き起こさず、素性 [R] のスプレッドをブロックする。その意味で、u/ʊ は円唇性の調和に関して不透明 (opaque) な母音である。この不透明性により、狭母音 u/ʊ に後続する広母音は必ず非円唇母音 e/a となる。

円唇性の調和を図式化すると、以下のようになる。

(5) a. owol ‘winter’ b. eleg ‘liver’ c. uneg‘fox’ d. oguulber ‘sentence’



2.2.3 母音配列

咽頭性の調和と円唇性の調和により、語内における母音配列は以下のようになる。

(6)

初頭音節	後続音節	さらに後続する音節
i, u, e	i, u, e	i, u, e
o	i, o	i, o
o	u	i, u, e
ʊ, a	i, ʊ, a	i, ʊ, a
ɔ	i, ɔ	i, ɔ
ɔ	ʊ	i, ʊ, a

2.2.4 母音調和の領域

母音調和は、複合語には適用されない。また、借用語も基本的には母音調和に従わない。

モンゴル語は膠着型の言語であり、接尾辞が次々に後続するタイプの言語である。母音調和は接尾辞にも適用され、ほとんどの接尾辞は母音調和による交替形を持つ。一般的に、広母音を持つ接尾辞では 4 つ、円唇狭母音を持つ接尾辞では 2 つの交替形を有する。（i を持つ接尾辞に交替形はない。）以下、接尾辞の右肩に付した数字は異形態の数を表す。

(7)

	ablative *-aas*[4]	plural *-ʊʊd*[2]	accusative *-iig*
gar ‘hand’	gar-<u>aas</u>	gar-<u>ʊʊd</u>	gar-iig
nɔm ‘book’	nɔm-<u>ɔɔs</u>	nɔm-<u>ʊʊd</u>	nɔm-iig
ger ‘house’	ger-<u>ees</u>	ger-<u>uud</u>	ger-iig
odor ‘day’	odr-<u>oos</u> [2]	odr-<u>uud</u>	odr-iig

2.3 接尾辞の調和

接尾辞は、上述した仕組みに従って交替形が選ばれる。固有語は語幹内でも母音調和が起こるため、固有語に接尾辞が付与される際、接尾辞の母音が語幹内のどの母音と調和しているかは必ずしも自明ではない[3]。

一方、母音調和に従わない借用語に接尾辞が後続する場合、接尾辞の母音が語幹のどの母音と調和するかは、植田 (2012; 2013) で詳しく研究されている[4]。植田 (2013) の結論をまとめると、以下のようになる。

(8) 基本的には、i, e を除いて最も語末に近い母音（T 母音）が接尾辞の調和を引き起こすと一般化できる。この傾向は、特に綴り字の情報があるときに顕著である。しかし、上記の一般化と競合する複数の規則も存在する。

「上記の一般化と競合する複数の規則」とは、以下のものである（植田 2013: 65 (46)、一部

[2] 母音で始まる接尾辞が後続する場合、第 2 音節の母音は脱落する。
[3] 詳しくは Svantesson et al. (2005)、植田 (2013) を参照されたい
[4] Steriade (1979) や橋本 (1982)、Svantesson (1985) でも、部分的には取り上げられている。

改変)。

(9) a. 定着度の高い語は、アクセントのない母音が弱化した上で、それより前の母音が調 和を引き起こす。
b. T 母音より後の i, e でも、アクセントを持っている場合、調和を引き起こす。
c. T 母音より後の i, e でも、その数が多い場合、調和を引き起こす。
d. 定着度の低い語では、T 母音より後の i, e でも調和を引き起こす。
e. 上記 c, d と同じ条件下でも、デフォルトの母音 a が選ばれることがある。
f. 聞こえ度の低い母音 /u/ は無視される。

これらの規則に本質的なランキングはなく、語や話者によって選ばれる規則が異なること、同じ環境でも複数の規則があるため、結果に差が生じることを主張している。

3 本稿で扱うデータ

3.1 本稿の目的

植田 (2012; 2013) では、綴り字を用いた調査と、話者の知識に基づいた調査が行われたが、音声的な情報を用いた調査は行われなかった。本稿は、借用語に対する接尾辞の母音調和において、聴覚的な影響がどの程度現れるかを明らかにすることで、植田 (2012; 2013) の研究をさらに発展させることを目的とする。

3.2 調査内容

3.2.1 調査方法

まず、モンゴル語話者（ウランバートル出身、20 代女性）に、借用語（地名、無意味語を含む）を読み上げてもらい、その音声を録音した。次に、録音された音声を話者に聞かせ、聞こえてくる語に対して適する接尾辞の交替形を付与して発音させる、という調査を行った。

一般名詞から調査を行い、一般名詞の調査が終わったところで、「今から読み上げられるものは地名です」とインフォーマントに伝えてから地名の調査を行うことで、無意味語も地名として認識させた。

付与する接尾辞として、奪格接尾辞を利用した。奪格接尾辞は、以下のような交替を示す。

(10)

調和を引き起こす母音	選ばれる接尾辞	語例	
a	aas	gar ‘hand’	gar-aas
ʊ	aas	zʊn ‘summer’	zʊn-aas
ɔ	ɔɔs	nɔm ‘book’	nɔm-ɔɔs
e	ees	ger ‘house’	ger-ees
i	ees	xil ‘border’	xil-ees
u	ees	sum ‘temple’	sum-ees
o	oos	tow ‘center’	tow-oos

ただし、借用語に o はほとんど現れない。また、ʊ, u は借用語に現れた際、どちらの音として借用されるかに揺れがあるなど問題が多いので、本調査では扱わない。

本調査では、語が音声によって与えられた場合でも、(9) に見られるような状況が見られるか、(9) との間に違いが現れるとすればどのような点であるかを明らかにする。特に、アクセントとの関連に注目する。音声によってアクセントの情報が得られた場合、そうでない場合に比べ、アクセントが接尾辞の母音調和に重要な働きをする可能性があると考えられるが、その真偽を明らかにする。

3.2.2 アクセントの実態

ここで、モンゴル語における借用語のアクセントの一般原則と、本調査での借用語のアクセントの実現形について述べておく。

ロシア語からの借用語に関して言えば、ロシア語でアクセントを持つ母音は長母音として発音される（塩谷・プレブジャブ 2001, Önörjargal 2013）。長母音には stress が置かれ (Hangin 1992)、音声的には相対的に高いピッチで実現する。したがって、ロシア語でアクセントを持つ母音は、長く、高く発音される。

日本語からの借用語のアクセントに関する研究は、管見の限り見いだされないが、語内のいずれかの母音が高いピッチで発音されるようである。

本調査では、1 人の話者に借用語の音声を提供してもらい、その音声を刺激音として用いたわけであるが、この話者のアクセントについて述べておく。ロシア語からの借用語に関しては、原語のアクセント位置を忠実に保ち、長母音・高いピッチで発音した。日本語からの借用語に関しては、語内のいずれかの母音が高く発音されたが、日本語のピッチアクセント位置とは異なる場合も多い。その意味で、原語のアクセントを忠実に表しているわけではないが、「刺激音のアクセントと接尾辞の調和との関係を調べる」という目的においては、原語のアクセント位置は特に問題とならないため、そのまま使用した。実在しない地名に関しては、アクセントを置く位置を指定した。その結果、その位置の母音が強く、やや長く、高いピッチで発音された。

3.2.3　借用語の発音

借用語では、分節音や音節構造の改変などが行われ、原語と異なる発音となることがある (Svantesson et al. 2005, Önörjargal 2013)。借用語の発音は、借用元の言語に対する話者の知識や、二言語併用のレベルに左右され、個人差が大きいと言われている (Svantesson et al. 2005, cf. Dohlus 2008)。

音節構造の改変について述べると、3 音節語でアクセントのない母音が脱落し、2 音節に改変されることが少なくない。

(11) a. Ru. awtomát > Mon. awtmat ‘slot-machine’
　　b. Ru. molokó > Mon. mɔlkɔ: ‘milk’
　　（Svantesson et al. 2005: 31、表記は改変）

本調査でも、刺激音を提供した話者が音節構造を改変した形で発音した例があった。

(12) a. Ru. akadém > [akʤe:m] 学士院
　　b. Ru. witamín > [ʋitmi:ŋ] ビタミン

また、(9a) にも示したように、定着度の高い借用語では、語末近くのアクセントのない母音が弱化する（植田 2013: 58-59, 63）、あるいは語末近くのアクセントのない母音の音価が、母音調和の原則に従って変化する (Sambuudorj 2012) ことがある。2.1 で述べたように、本来語では、第 2 音音節以降の短母音は弱化する。借用語に見られる母音の弱化や音価の変化は、定着度の高い借用語が（少なくとも音声的に）本来語化するために起こると考えられる。

(13) dóllar [dɔ:llɔ̲r], [dɔ:lɔ̲r]
　　átɔm [a:tɑ̲m]
　　páspɔrt [pa:spɑ̲rt]
　　（Sambuudorj (2012)、表記は一部改変）

本調査でも、これらの語の刺激音では、語末近くのアクセントのない母音が弱化し、一部では母音の音価も変わっている。

(14) telewízɔr [tełʋi:zɔ̲̆r] テレビ
　　dóllar [dɔ:łɔ̲̆r] ドル
　　átɔm [a:tɔ̲̆m] 原子
　　páspɔrt [pa:spɔ̲̆rt] パスポート

以下で調査語彙を示す際には、正書法による表記と、刺激音を提供した話者の発音を併記

する。

3.2.4　調査語彙

調査語彙は、植田 (2013) において、接尾辞の調和に影響を与えることが指摘されている要因を含む語を選んだ。具体的には、以下のようなものが挙げられる。

(i) アクセントが語末に近い i, e または ei にあるもの
これらの語では、(9b) に示したように、通常は接尾辞の調和を引き起こさない i, e, ei が、アクセントを持つために調和を引き起こしうる。

表 1：調査語彙 (i)

条件	一般名詞	地名
語末に近い i, e にアクセント	akadém [akɖʒeːm] 学士院 anténn [antiːŋ] アンテナ kafé [kafeː] カフェ kapitalízm [kapitaliːzm] 資本主義 kɔntsért [kɔntseːr̥t] コンサート manekén [manekeːŋ] マネキン mɔtɔtsíkl [mɔttsiːkɫ] オートバイ ɔfitsér [ɔftseːr] 将校 stratég [strateːg] 戦略 witamín [ʋitmiːŋ] ビタミン	amérik [ameːr̥k] アメリカ argentín [argentiːŋ] アルゼンチン brazíl [braziːɫ] ブラジル dɔminík [dɔminik] ドミニカ namíe [namie] 浪江 tɔchigí [tɔʧigiː] 栃木
語末に近い ei にアクセント	kɔktéilʲ [kɔkteːɫ] カクテル xɔkkéi [χɔkkei] ホッケー	baxréin [baχreiŋ] バーレーン kɔséi [kɔsei] 湖西

これらの語では、アクセントを持つ i, e, ei が接尾辞の調和を引き起こせば、接尾辞として -ees が選ばれ、引き起こさなければ -aas または -ɔɔs が選ばれると予測される。

(ii) T 母音より前にアクセントがあるもの
(9a) に示したように、 定着度の高い語は、アクセントのない母音が弱化した上で、それより前の母音が調和を引き起こすことがある。音声によってアクセントの情報が与えられた場合、アクセント母音が接尾辞の調和を引き起こす割合が高くなるのではないかとの予測のもと、以下のような語彙を用いた。

表 2：調査語彙 (ii)

条件	一般名詞	地名
T 母音より前の i, e にアクセント	ékspɔrt [eːkspɔr̥t] 輸出 ímpɔrt [iːmpɔr̥t] 輸入 telewízɔr [teɮʋiːzɔ̆r] テレビ wídeɔ [ʋiːɖʒɔː] ビデオ	bérɔn [beːrɔŋ] ＜実在しない＞ bíran [biːraŋ] ＜実在しない＞ méran [meːraŋ] ＜実在しない＞ mírɔn [miːrɔŋ] ＜実在しない＞
T 母音より前の ei にアクセント	béisbɔl [beisbɔɫ] 野球	séitɔ [seitɔ] ＜実在しない＞
T 母音より前の a, ɔ にアクセント	átɔm [aːtɔ̆m] 原子 dɔ́llar [dɔːɫɫɔ̆r] ドル páspɔrt [paːspɔ̆r̥t] パスポート rádiɔ [raːɖʒĭɔː] ラジオ	kjɔ́ɔbashi [kʲɔːbaɲʃi] 京橋 xɔkkáidɔɔ [χɔkkaidɔː] 北海道 árɔn [aːrɔŋ] ＜実在しない＞ ɔ́ran [ɔːraŋ] ＜実在しない＞

(iii) 語幹末から 2 音節以上 i, e が続く語

このような語では、(9c) に示したように、 i, e も調和を引き起こす場合がある。このような語として、本調査では以下の語を用いた。なお、表 1 に示した manekén《マネキン》、namíe《浪江》、tɔchigí《栃木》は、この基準にも当てはまる。

表 3：調査語彙 (iii)

条件	一般名詞	地名
最終 2 音節が i, e	márketing [maːr̥kĕtiŋg] マーケティング （manekén [maneke:ŋ] マネキン）	（namíe [namie] 浪江） （tɔchigí [tɔʧ͡ʃigiː] 栃木）

(iv) 語末に i, e, ei を持つ語

ei はアクセントを持っていなくても、接尾辞の調和を引き起こす可能性がある。また、モンゴル語では基本的に語末に短母音は現れないため、この位置に短母音が現れた場合、音声的に目立つことになり、アクセントを持っていなくても接尾辞の調和を引き起こすという可能性が考えられる。これらのような構造を持った語彙を調査語彙 (iv) とする。調査語彙 (iv) は、次に示す調査語彙 (v) と重なる語が多いので、具体的な語彙は後述する。

(v) 定着度が低い語

(9d) に示したように、定着度が低い語では、普通は調和を引き起こさない i, e も調和を引き起こす場合がある。本調査では、日本の地名と実在しない地名を定着度が低い語であると認定し[5]、それらのうち最終音節に i, e を持つ語を調査語彙 (v) とする。

[5] 逆は成り立たない。つまり、一般名詞や実在する地名であっても、定着度が低い語は存在すると考えられる。

調査語彙 (iv) と調査語彙 (v) は以下の通りである。namíe《浪江》、tɔchigí《栃木》は調査語彙 (i) と (iii)、kɔséi《湖西》は調査語彙 (i) にも属する。

表 4：調査語彙 (iv) (v)

条件	一般名詞	地名
アクセントのない ei を持つ	bɔ́bslei [bɔpsɫei] ボブスレー	
語末に i, e を持つ	kɔ́fe [kɔ:fe:] コーヒー	
語末に i, e を持つ かつ 定着度が低い		iwáte [iwate] 岩手 kɔ́ɔbe [kɔ:be] 神戸 mijági [mijagi] 宮城 （namíe [namie] 浪江） （tɔchigí [tɔʧ̍igi:] 栃木）
定着度が低い		báren [ba:reŋ] ＜実在しない＞ bɔ́ren [bɔ:rɪŋ] ＜実在しない＞ márin [ma:riŋ] ＜実在しない＞ tɔ́rin [tɔ:riŋ] ＜実在しない＞ （kɔséi [kɔsei] 湖西）

調査語彙は表 1～表 4 に挙げた、一般名詞 24 語、地名 24 語の計 48 語である。

3.2.5 インフォーマント

インフォーマントは 22 名（話者 A～話者 V）である。方言差や世代差も含め、できる限り多くのデータを得るため、あえて出身地や年齢を限定していない。

4 調査結果

4.1 調査語彙 (i) に対する結果

調査語彙 (i) は、最終音節の i, e または ei にアクセントがある語である。これらの語では、アクセントを持つ i, e, ei が接尾辞の調和を引き起こせば、接尾辞として -ees が選ばれる。そうでなければ、(8) に示した基本のパターン（(15) に再掲）に従い、-aas または -ɔɔs が選ばれることになる。

(15) 基本的には、i, e を除いて最も語末に近い母音（T 母音）が接尾辞の調和を引き起こす（(8) 再掲、一部改変）。

4.1.1　語ごとの結果

まずは、語ごとの結果を表 5 に示す。表中の「基本」とは、(15) に示した基本パターンに従った場合に選ばれる接尾辞を表す。数字は各接尾辞を選んだ人数である。太線は、アクセントを持つ母音が調和を引き起こした場合に予測される接尾辞である。「不明瞭」は、母音の音価が判断できない例である。

表 5：調査語彙 (i) に対する語ごとの結果

語彙（一般名詞）	基本	-aas	-ɔɔs	-ees	不明瞭	計
witamín ビタミン	-aas	12	0	9	1	22
stratég 戦略	-aas	14	0	5	3	22
akadém 学士院	-aas	19	0	3	0	22
manekén マネキン	-aas	18	1	3	0	22
antén アンテナ	-aas	19	0	2	1	22
kafé カフェ	-aas	19	0	2	1	22
kapitalízm 資本主義	-aas	21	0	1	0	22
kɔktéilʲ カクテル	-ɔɔs	0	16	6	0	22
kɔntsért コンサート	-ɔɔs	0	19	3	0	22
ɔfitsér 将校	-ɔɔs	0	21	1	0	22
xɔkkéi ホッケー	-ɔɔs	0	20	1	1	22
mɔttsíkl オートバイ	-ɔɔs	1	20	0	1	22

語彙（地名）	基本	-aas	-ɔɔs	-ees	不明瞭	計
namíe 浪江	-aas	11	0	11	0	22
baxréin バーレーン	-aas	20	0	1	1	22
amérik アメリカ	-aas	22	0	0	0	22
argentín アルゼンチン	-aas	22	0	0	0	22
brazíl ブラジル	-aas	22	0	0	0	22
tɔchigí 栃木	-ɔɔs	3	10	8	1	22
dɔminík ドミニカ	-ɔɔs	3	17	2	0	22
kɔséi 湖西	-ɔɔs	2	19	0	1	22

表 5 から、次のようなことが読み取れる。

(16) a. アクセントを持つ母音と接尾辞の母音が調和している例もある。
b. 最も多くの話者で -ees が選ばれた語は、一般名詞では witamín《ビタミン》で 22 人中 9 人、地名では namíe《浪江》で 22 人中 11 人であるが、いずれも半数を超えない。
c. 全ての話者で、アクセントを持つ母音と接尾辞の母音が調和しない語もある（mɔttsíkl《オートバイ》、amérik《アメリカ》など）。
d. 全体的には、「基本」の通りの接尾辞が選ばれている。

(16) は、「アクセントを持つ母音が接尾辞の調和を引き起こしている例も確かに見られるものの、それが多数を占めるわけではない」ということを意味する。

4.1.2 音声情報を用いない調査との比較

前節で示した結果は、音声情報を用いない場合と違いがあるのだろうか。植田 (2013) は、音声情報がない（アクセントが音声によって提示されていない）場合の調査を行い、以下のような結果を示している（(8), (9b) も参照）。

(17) 基本的には、i, e を除いて最も語末に近い母音が接尾辞の調和を引き起こすと一般化できるが、語末に近いアクセント母音は、i, e でも調和を引き起こすことがある。

一方、本調査は音声情報がある場合の調査だが、得られた結果は (17) とほぼ変わらない。植田 (2013) と今回の調査では、調査語彙とインフォーマントが異なるため、単純な比較はできないが、参考までに 2 つの調査で共通する語の結果（一例）を示す。

表 6：植田 (2013) と本調査の結果（調査語彙 (i)）

結果 / 語	アクセント母音と調和する接尾辞を選んだ話者数	
	植田 (2013)	本調査
manekén マネキン	5 人中 1 人 (20%)	22 人中 3 人 (13.6%)
kɔktéil^{j} カクテル	5 人中 2 人 (40%)	22 人中 6 人 (27.3%)
baxréin バーレーン	5 人中 1 人 (20%)	22 人中 1 人 (4.5%)
tɔchigí 栃木	5 人中 3 人 (60%)	22 人中 8 人 (36.4%)

表 6 から、アクセントの情報が音声的に提示されるからと言って、アクセントが接尾辞の調和に及ぼす影響が強くなるとは言えないことがわかる。

4.1.3 語による差

次に、語による差について考察する。表 5 から、一般名詞では witamín《ビタミン》、kɔktéilj

《カクテル》、stratég《戦略》、地名では namíe《浪江》、tɔchigí《栃木》で、アクセントを持つ母音が接尾辞の調和を引き起こす割合が比較的高い。これには、それぞれの語が持つ特有の事情が関与していると考えられる。

witamín《ビタミン》は、3.2.3 で示したように音節構造の改変を受けて [ʋitmiːŋ] と発音されることがあり、実際に本調査の刺激音でもそのように発音されている。この場合、語内に現れる母音は i のみとなるので、i に調和する -ees が接尾辞として選ばれることが予想される。つまり、witamín《ビタミン》には音節構造を改変しない形 (witamin) と改変した形 (witmin) の 2 種類が想定され、これらの間で接尾辞の母音調和を引き起こす母音が異なるため、接尾辞にも 2 種類（-aas と -ees）が現れると考えられる。

実際に本調査でも、接尾辞に -aas を選んだ話者は、音節構造を改変しない（[a] のある）形で発音する傾向にあったのに対し、接尾辞に -ees を選んだ話者は、全員が音節構造を改変した（[a] のない）形で発音した[6]。

(18) a. [ʋitamiːnaːs][7]
b. [ʋitmiːneːs]

以上より、witamín《ビタミン》でアクセントを持つ母音と接尾辞が調和する（ように見える）のは、アクセントを持つことが要因になっているのではなく、音節構造の改変が行われていることが要因になっていると言える。

strateg《戦略》は、本調査の刺激音では [strateg] であったが、綴り字では語末に ＜i＞が書かれるため、strategi として認識している話者がいる可能性がある。また、kokteilʲ は語末子音が口蓋化音で i の要素を持つ。これらの要因で、i と調和する接尾辞 -ees が選ばれやすくなっている可能性がある。（ただし、これらの要因に関しては確実ではないため、可能性を指摘するにとどめておく。）

また namíe《浪江》、tɔchigí《栃木》は、語末に近い i, e がアクセントを持つだけでなく、語幹末から 2 音節 i, e が続き、語末に短母音を持ち、定着度が低い（調査語彙 (iii) (iv) (v) 参照）。つまり、4 つの要素が重なっているために、-ees が選ばれる頻度が高くなったと考えられる。この点については 4.3.3 節で詳しく見る。

4.1.4 話者による差

最後に、接尾辞の選択において、話者による差が見られるかどうかを考察する。図 1 に、各インフォーマントがどれくらいの語で、アクセントを持つ母音と調和する -ees を選んだ

---

6 ただし、音節構造を改変しながらも接尾辞に -aas を選択し、[ʋitmiːnaːs] と発音した話者も少数では あるが存在したことから、「音節構造の改変」と「接尾辞 -ees の選択」は完全に一致するわけではない。

7 語頭の /w/ は [ʋ], [β], [v] など様々なバリアントがあるが、ここでは [ʋ] で代表させておく。また、語末の /ŋ/ は母音から始まる接尾辞が後続する場合、[n] として現れる。

かを示す。横軸に -ees を選んだ語数、縦軸に人数を取る。例えば、一般名詞（全 12 語）のうち 2 語で -ees を選んだ話者は、7 人いることがわかる。

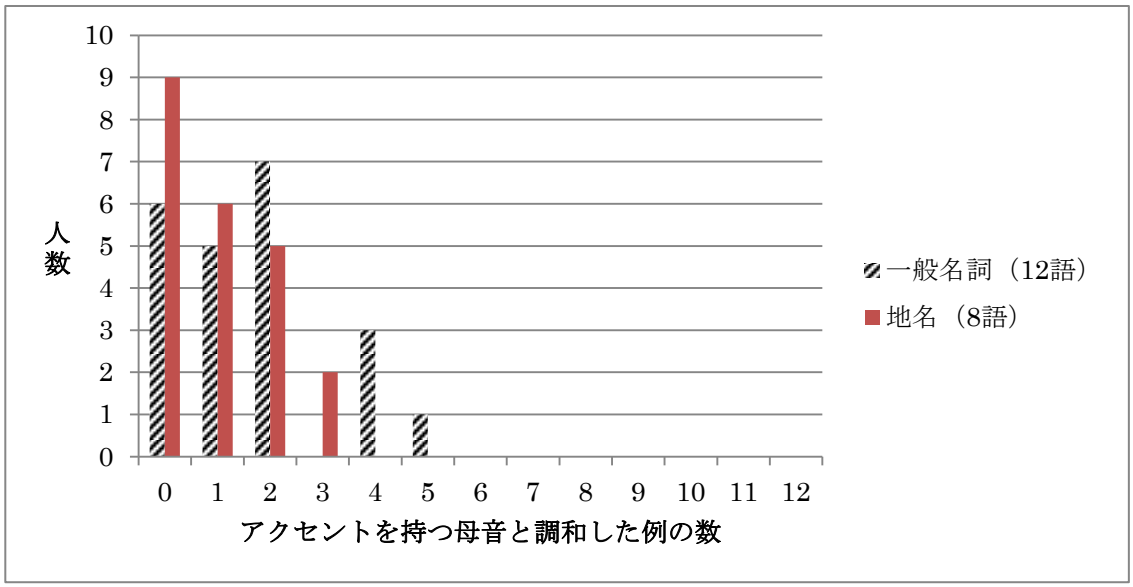


図 1：アクセントを持つ母音と調和した例の数と人数（調査語彙 (i)）

アクセントを持つ母音と接尾辞を全く調和させない話者もいる一方で、ある程度アクセントを持つ母音と接尾辞を調和させる話者もいる。その意味では、個人差が見られる。しかし、最も多くの語で -ees を選んだ話者でも、一般名詞で 5 語（話者 K）、地名で 3 語（話者 B と話者 M）にとどまることから、アクセントを重視して接尾辞を決める話者はいない、ということが読み取れる[8]。

4.1.5 調査語彙 (i) のまとめ

本節では、調査語彙 (i)（最終音節の i, e または ei にアクセントがある語）に対しての接尾辞の調和について、以下のことが示された。

(19) a. アクセントの情報が音声的に提示されても、アクセントが接尾辞の調和に及ぼす影響が強くなるわけではない。
b. アクセントを持つ母音が調和を引き起こす（ように見える）語は、同時に他の要因も関わっている。
c. 話者による差は多少あるが、特別にアクセントを重視する話者はいない。

[8] 本調査では「アクセントを重視して接尾辞を決める話者」はいないが、植田 (2013) ではそのような話者もいることが示されている。

4.2　調査語彙 (ii) に対する結果

続いて、調査語彙 (ii) （T 母音より前にアクセントがある語）に対する結果を示す。

4.2.1　語ごとの結果

語ごとの結果を表 7 に示す。「基本」は、(15) に示した基本パターンに従った場合に選ばれる接尾辞を表す。太枠は、アクセントを持つ母音が接尾辞の調和を引き起こしたときに選ばれる接尾辞を表す。

表 7：調査語彙 (ii) に対する語ごとの結果

語彙（一般名詞）	基本	-aas	-ɔɔs	-ees	不明瞭	計
telewízɔr テレビ	-ɔɔs	1	9	12	0	22
béisbɔl 野球	-ɔɔs	1	19	2	0	22
ímpɔrt 輸入	-ɔɔs	0	19	2	1	22
ékspɔrt 輸出	-ɔɔs	1	20	1	0	22
wídeɔ ビデオ	-ɔɔs	0	22	0	0	22
dɔ́llar ドル	-aas	1	20	0	1	22
átɔm 原子	-ɔɔs	15	6	0	1	22
páspɔrt パスポート	-ɔɔs	10	11	0	1	22
rádiɔ ラジオ	-ɔɔs	3	18	0	1	22

語彙（地名）	基本	-aas	-ɔɔs	-ees	不明瞭	計
bíran＜実在しない＞	-aas	20	0	1	1	22
méran＜実在しない＞	-aas	21	0	0	1	22
mírɔn＜実在しない＞	-ɔɔs	0	19	1	2	22
bérɔn＜実在しない＞	-ɔɔs	0	21	0	1	22
séitɔ＜実在しない＞	-ɔɔs	1	21	0	0	22
ɔ́ran＜実在しない＞	-aas	19	3	0	0	22
kjɔ́ɔbashi 京橋	-aas	19	1	0	2	22
árɔn＜実在しない＞	-ɔɔs	10	11	0	1	22
xɔkkáidɔɔ 北海道	-ɔɔs	3	17	1	1	22

表 7 から、次のようなことが読み取れる。

(20) a. アクセントを持つ母音と接尾辞の母音が調和している例もある。
b. 語によっては、アクセントを持つ母音と接尾辞の母音が調和する方が多数派である例もある（telewízɔr《テレビ》、dɔ́llar《ドル》、átɔm《原子》）。
c. 全ての話者で、アクセントを持つ母音と接尾辞の母音が調和しない語もある（wídeɔ《ビデオ》、méran＜実在しない地名＞など）。
d. 一般名詞では、語による差が大きい。
e. 地名では、基本的に基本通りの接尾辞が選ばれる。

(20c) に挙げたように、アクセントを持つ母音と接尾辞の母音が磨全く調和しない例があることから、たとえアクセントが音声的な情報として示されていても、接尾辞の調和にはそれほど大きな影響を与えないことがわかる。

一方で、前節でみた調査語彙 (i) の結果とはやや異なり、(20b) に示したように、アクセントを持つ母音と接尾辞の母音が調和する方が多数派である例も見られる。páspɔrt《パスポート》も、半数は超えないが、アクセント母音と接尾辞を調和させる話者が比較的多い。

しかしこれらの語は、植田 (2013) でも同様の傾向を示すため、音声情報があることが関係しているわけではない。これらの語は全て、(14) で挙げたように、刺激音において語末近くのアクセントのない母音が弱化している（一部では母音の音価も変化している）例である。

(21) telewízɔr [tełwiːzɔ̲̆r] テレビ
dɔ́llar [dɔːłł̲̆r] ドル
átɔm [aːtɔ̲̆m] 原子
páspɔrt [paːspɔ̲̆rt] パスポート
（(14) 再掲）

これらの語では、多くのインフォーマントがアクセントのない母音を弱化させ、一部では母音の音価を変化させて発音した[9]。

したがって、これらの語では、語の定着度の高さと母音の弱化（および母音の音価の変化）によって、結果的にアクセントを持つ母音と接尾辞の母音が調和しているのであって、アクセントが接尾辞の調和に重大な影響を与えているわけではない。そのことは、定着度が高くない一般名詞および地名で、アクセント母音と調和する例が少ないことからも裏付けられる。

ただし、唯一の例外は árɔn（実在しない地名）の例である。この例は実在しない地名であるために、定着度が低く、母音が弱化（あるいは前の母音に同化）しないことが予想され、刺激音でも母音の弱化が起こっていないにもかかわらず、アクセントを持つ母音と調和する -aas が多く選ばれている。これは、同じような構造を持つ ɔ́ran（実在しない地名）でアクセ

[9] ただし、ここでもやはり「アクセントのない母音の弱化」と「接尾辞の選択」は 1 対 1 に対応しない。アクセントのない母音が弱化するにもかかわらず弱化した母音と接尾辞が調和するケースや、母音の弱化が起こらないにもかかわらずアクセントを持つ母音と接尾辞が調和するケースがある。

ントを持つ母音と調和する例が少ない、という結果とは対照的である。

この理由は、árɔn を /aran/ と認識した話者が少なからず存在したのに対し、ɔ́ran はほとんどの話者が /ɔran/ と認識したためであると考えられる。árɔn を /aran/ と認識していることは、次のような発音からも示唆される。

(22) [aːrnaːs]

(24) では、第 2 音節の短母音が脱落している。母音から始まる接尾辞が後続したとき、第 2 音節の短母音が脱落するという現象は、(7) でも示したように、本来語では頻繁に見られる。

(23) odor-oos [ɵdroːs][10] 'day-ABLATIVE'
ɔrɔn-ɔɔs [ɔrnɔːs] 'country- ABLATIVE'

借用語、特に母音配列が母音調和の原則に従っていない語で母音を脱落させることは稀である。にもかかわらず、árɔn では母音の脱落が起こっていることから、本来語と同じような母音配列を持つ /aran/ として認識されていると推定できる。

では、árɔn を /aran/ と認識した話者が少なからず存在したのに対し、ɔ́ran はほとんどの話者が /ɔran/ と認識したという非対称性は、どこから生じたのであろうか。現段階では明らかでないが、ここでは円唇性の調和の性質によるものである可能性を指摘する。

2.2.2 で述べたように、円唇性の調和の原則に従うと、第 2 音節以降の ɔ は、第 1 音節に ɔ がない限り現れることはなく、分布の制限が厳しい。一方、第 2 音節以降の a は、先行する母音が a, ʊ の場合のほか、ɔ が先行していても、円唇狭母音 ʊ によって円唇性の調和がブロックされていれば現れ得る。つまり、第 2 音節以降において、a は ɔ に比べて分布の制限が緩やかである。

表 8：ɔ と a の分布[11]

<table>
<tr><td colspan="2">先行音節</td><td>後続音節</td></tr>
<tr><td colspan="2">ɔ</td><td>ɔ</td></tr>
<tr><td>ɔ</td><td>ʊ</td><td rowspan="3">a</td></tr>
<tr><td colspan="2">ʊ</td></tr>
<tr><td colspan="2">a</td></tr>
</table>

この母音配列が影響し、借用語においても、第 2 音節以降の ɔ は先行音節に ɔ がなければ許容しにくいのに対し、第 2 音節以降の a は先行音節の母音に関わらず比較的許容しや

[10] 短母音の o は [ɵ] で実現する。
[11] (6) の母音配列も参照されたい。

すいということが考えられる。

また素性の観点からも、ɔ は円唇素性 [R] を持っているという点で a よりも有標であると言える。ɔ > a の変化は、円唇素性 [R] を失うことでより無標な母音に向かう変化であり、円唇素性 [R] を得ることでより有標な母音に向かう a > ɔ の変化よりも自然である。

árɔn, ɔ́ran はともに実在しない地名であり、語に対する話者の知識はないので、刺激音が唯一の語の情報となる。刺激音から母音を判定する際、上記のような母音配列の制限と有標性により、母音の判定に非対称性が生じたと考えられる。

表 9：árɔn と ɔ́ran の非対称性

刺激音	母音配列	第 2 音節の母音の許容度	想定される変化と自然性	話者の認識
[a:rɔŋ]	a-ɔ	許容しにくい	ɔ > a（自然）	/aran/
[ɔ:raŋ]	ɔ-a	比較的許容しやすい	a > ɔ（不自然）	/ɔran/

以上、árɔn（実在しない地名）に対して -aas が選ばれやすいのは、/aran/ と認識している話者が多いためであることを示した。ここでもやはり、アクセントを持つ母音が接尾辞の調和を引き起こしているのではなく、語に特有の別の要因が影響していると言える。

4.2.2 話者による差

次に、話者による差を示す。各インフォーマントがどれくらいの語で、アクセントを持つ母音と調和する接尾辞を選んだかを、図 2 に示す。図の読み方は図 1 と同様である。

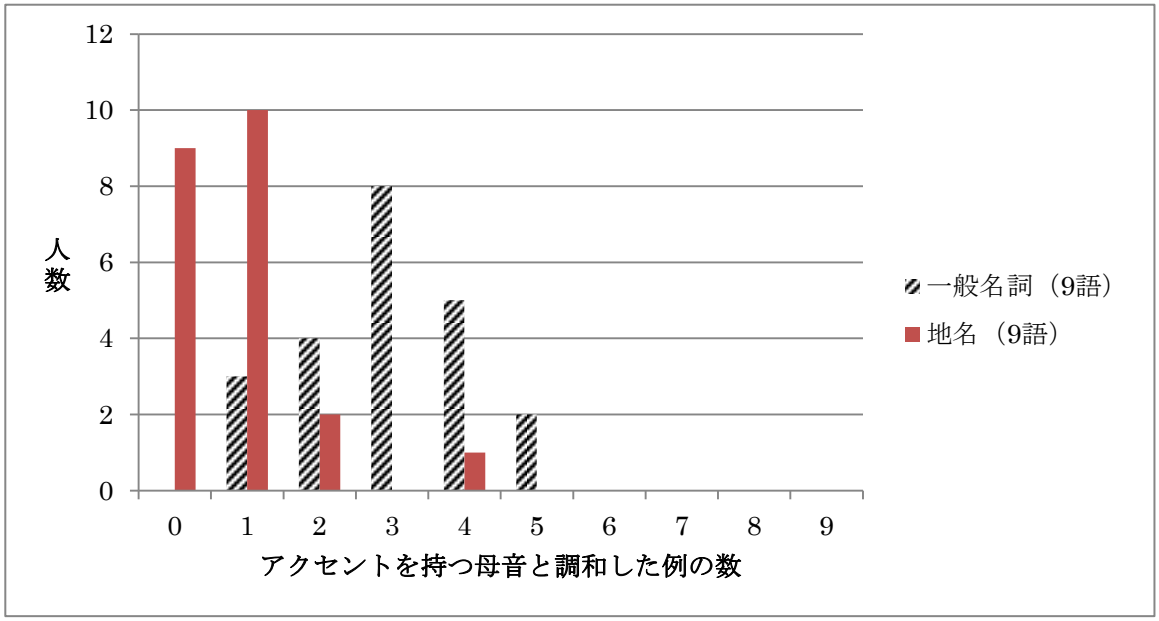


図 2：アクセントを持つ母音と調和した例の数と人数（調査語彙 (ii)）

ここでもやはり、話者によるばらつきが多少見られるが、特別にアクセントを重視している話者はいないことが見て取れる。一般名詞では、アクセントを持つ母音と接尾辞が調和する例は 9 語中 5 語が最多で、そのような話者が 2 名（話者 J と話者 K）いた。一方、地名では 9 語中 4 語が最多で、その話者は 1 名（話者 J）であった。

話者 K は調査語彙 (i) でも最もアクセントを持つ母音と調和する例が多い話者であったことから、話者 K は接尾辞の調和に関して、比較的アクセントを重視する話者であるとの見方もできるかもしれないが、他の話者とそれほど大きな差があるわけではない。同様に、話者 J は調査語彙 (ii) において、一般名詞でも地名でもアクセントを持つ母音と調和する例がやや多いが、他の話者との違いはそれほど大きなものではない。

4.2.3 調査語彙 (ii) のまとめ

本節では、調査語彙 (ii)（T 母音より前にアクセントがある語）に対しての接尾辞の調和について、以下のことが示された。

(24) a. アクセントが音声的な情報として示されていても、接尾辞の調和には影響を与えない。
b. アクセントを持つ母音が調和を引き起こす（ように見える）のは、語の定着度の高さと母音の弱化（および母音の音価の変化）による。
c. 話者による差は多少あるが、特別にアクセントを重視する話者はいない。

4.3 調査語彙 (iii) (iv) (v) に対する結果

本節では、調査語彙 (iii) (iv) (v) に対する結果をまとめて示す。調査語彙 (iii) は語幹末から 2 音節以上 i, e が続く語、調査語彙 (iv) は語末に i, e, ei を持つ語、調査語彙 (v) は定着度が低い語のうち最終音節に i, e を持つ語である。これらの語ではそれぞれの理由で、語幹末に近い i, e が接尾辞の調和を引き起こし、接尾辞として -ees が選ばれる可能性がある。

4.3.1 語ごとの結果

語ごとの結果を表 10 に示す。「調査語彙」は、当該の語が調査語彙 (i) ~ (v) のどれに属しているかを表している。例えば (i) (iii) は、調査語彙 (i) と (iii) の両方に属する語であることを表す。「基本」は、(15) に示した基本パターンに従った場合に選ばれる接尾辞を表す。

表 10：調査語彙 (iii) (iv) に対する語ごとの結果

語彙（一般名詞）	調査語彙	基本	-aas	-ɔɔs	-ees	不明瞭	計
manekén マネキン	(i) (iii)	-aas	18	1	3	0	22
márketing マーケティング	(iii)	-aas	19	0	2	1	22
bɔ́bslei ボブスレー	(iv)	-ɔɔs	2	8	11	1	22
kɔ́fe コーヒー	(iv)	-ɔɔs	1	18	1	2	22

語彙（地名）	調査語彙	基本	-aas	-ɔɔs	-ees	不明瞭	計
namíe 浪江	(i) (iii) (iv) (v)	-aas	11	0	11	0	22
báren＜実在しない＞	(v)	-aas	18	0	3	1	22
iwáte 岩手	(iv) (v)	-aas	17	0	3	2	22
mijági 宮城	(iv) (v)	-aas	20	0	1	1	22
márin ＜実在しない＞	(v)	-aas	22	0	0	0	22
tɔchigí 栃木	(i) (iii) (iv) (v)	-ɔɔs	3	10	8	1	22
tɔ́rin＜実在しない＞	(v)	-ɔɔs	0	20	2	0	22
kɔ́ɔbe 神戸	(iv) (v)	-ɔɔs	2	16	2	2	22
bɔ́ren＜実在しない＞	(v)	-ɔɔs	0	22	0	0	22
kɔséi 湖西	(i) (v)	-ɔɔs	2	19	0	1	22

表 10 から、以下のようなことが読み取れる。

(25) a. 語幹末に近い i, e が接尾辞の調和を引き起こし、接尾辞として -ees が選ばれる例もある。一方、そのようにならない例もある。

b. 語による差が大きい。

c. -ees が選ばれやすい語は、複数の調査語彙にまたがっている、つまり複数の要因が関わっている傾向にある（namíe《浪江》、tɔchigí《栃木》）。

4.3.2 音声情報を用いない調査との比較

植田 (2013) にも、同じ語彙のデータがいくつかある。植田 (2013) と本調査ではインフォーマントが異なるため単純な比較はできないが、傾向を見比べることによって、音声情報の有無と接尾辞の調和の傾向に関係があるかを考察する。

表 11：植田 (2013) と本調査の結果（調査語彙 (iii) (iv) (v)）

結果 / 語	語幹末の i, e と調和する接尾辞を選んだ話者数	
	植田 (2013) [12]	本調査
manekén マネキン	5 人中 1 人 (20%)	22 人中 3 人 (13.6%)
márketing マーケティング	5 人中 1 人 (20%)	22 人中 2 人 (9.1%)
kɔ́fe コーヒー	5 人中 0 人 (0%)	22 人中 1 人 (4.5%)
namíe 浪江	5 人中 4 人 (80%)	22 人中 11 人 (50%)
iwáte 岩手	5 人中 4 人 (80%)	22 人中 3 人 (13.6%)
mijági 宮城	5 人中 4 人 (80%)	22 人中 1 人 (4.5%)
tɔchigí 栃木	5 人中 3 人 (60%)	22 人中 8 人 (36.4%)
kɔ́ɔbe 神戸	5 人中 3 人 (60%)	22 人中 2 人 (9.1%)

一般名詞に関しては、両調査で大きな差が見られない。一方で地名に関しては、植田 (2013) では語幹末の i, e に調和する例が多いのに対し、本調査では比較的少ない。

しかし、この差が音声情報の有無に起因するものかは明らかでない。植田 (2013) の調査人数が少ないため、単なる誤差である可能性も十分にある。

4.3.3 語による差

(25c) で述べたように、-ees が選ばれやすい語は、複数の調査語彙にまたがっている、つまり複数の要因が関わっている傾向にある。namíe《浪江》、tɔchigí《栃木》の例は、4 つの要因が重なっていることで、i, e が接尾辞の調和を引き起こす割合が高まっていると考えられる[13]。

しかし、ここで問題となるのが bɔ́bslei《ボブスレー》の例である。この語は、要因が 1 つであるにもかかわらず、語幹末の ei と調和する例が多い。植田 (2013) では、bɔ́bslei《ボブスレー》が多くの話者にとって定着度の低い語であると述べられており、その影響がある（つまり要因が (iv) と (v) の 2 つになる）とも考えられるが、それでも同じ 2 つの要因を持つ語（iwáte《岩手》など）に比べ、-ees が選ばれる割合が高い。一般名詞と地名で定着度の影響が異なるなどの可能性が考えられるが、詳しくはわからない。

4.3.4 話者による差

調査語彙 (iii) (iv) の一般名詞に関しては、語彙自体が少ないため、それらの要因を重視している話者がいるかどうかは判断できない。よって本節では、一定の数のデータが得られる

[12] 植田 (2013) の 2 つの調査のうち、文字を用いない方の調査の結果である。

[13] しかし、単に複数の要因が足し合わされただけなのか、相乗効果があるのかはわからない。また、どの要因がどのくらいの影響を与えているかも明らかでない。この問題は、統計的な分析を行うこ とで解決される可能性がある。今後の課題としたい。

調査語彙 (iv) (v) の地名のみに焦点を当て、ある特定の要因を重視している話者が存在するかどうかを考察する。

まずは、調査語彙 (iv) をもとに、語末の i, e に接尾辞の母音を調和させる話者がどのくらいいたかを示す。

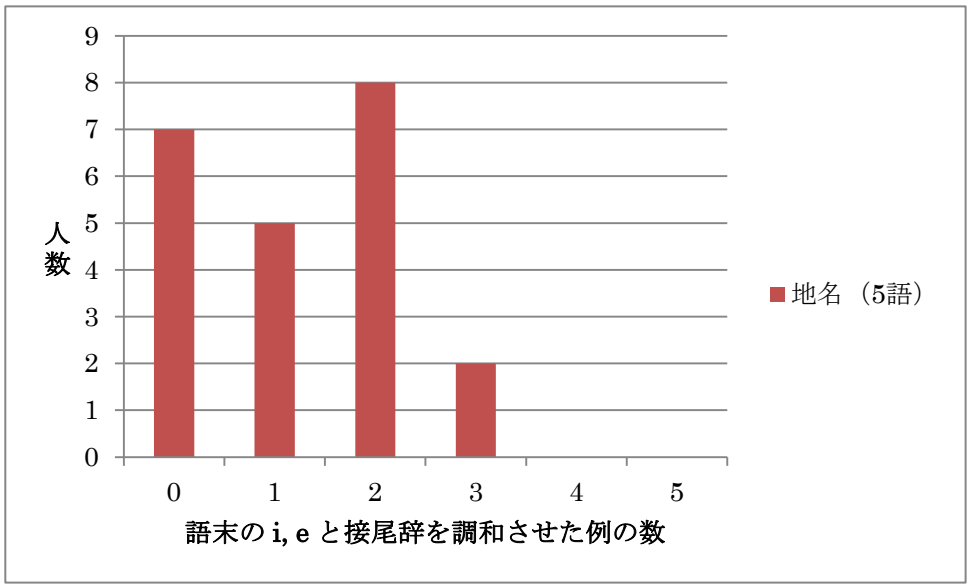


図 3：語末の i, e と接尾辞を調和させた例の数と人数（調査語彙 (iv)）

図 3 が示すように、話者による差は見られるが、全ての語で一貫して語末の i, e と接尾辞を調和させるような話者はいない。

次に調査語彙 (v) をもとに、定着度の低い語で、語幹の最終母音である i, e に接尾辞の母音を調和させる話者がどのくらいいたかを示す。

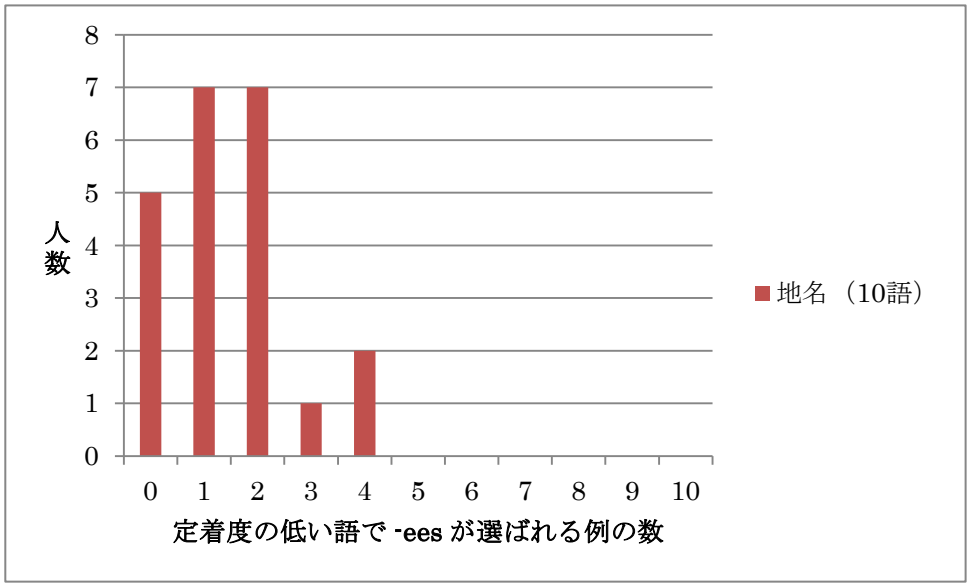


図 4：定着度の低い語で -ees が選ばれる例の数と人数（調査語彙 (v)）

こちらも、話者による差は見られるが、最も多く -ees を選んだ話者でも 10 語中 4 語にとどまることから、定着度が低い語で一貫して i, e と接尾辞の母音を調和させるような話者はいないと言える。

4.3.5 調査語彙 (iii) (iv) (v) のまとめ

本節では、調査語彙 (iii)（語幹末から 2 音節以上 i, e が続く語）、調査語彙 (iv)（語末に i, e, ei を持つ語）および調査語彙 (v)（定着度が低い語のうち最終音節に i, e を持つ語）に対しての接尾辞の調和について、以下のことが示された。

(26) a. 語による差は、関わる要因の数と関係がある。多くの話者で i, e が調和を引き起こす語は、複数の要因が関わっている傾向にある。
b. 調査方法によって結果に差が生じたが、それが音声情報の有無によるものなのかは定かでない。
c. 話者による差は多少あるが、特別に何かの要因を重視している話者はいない。

5 考察とまとめ

本稿では、植田 (2013) で行われた調査の結果と、音声的な情報を用いた調査の結果を比較することによって、音声的な情報の有無が接尾辞の母音調和に影響を及ぼすか否かについて考察した。その結果、アクセントの情報が音声的に提示されても、アクセントが接尾辞の調和に及ぼす影響が強くなるわけではないことから、音声的な情報は接尾辞の選択に影響を与えないことが示された。

また、先行研究では、接尾辞の調和にアクセントが関わっていることが述べられているが、アクセントを持つ母音が調和を引き起こす（ように見える）語は、語の定着度の高さに起因する母音の弱化（および母音の音価の変化）や、音韻構造の改変、語末の i, e の存在など、同時に他の要因も関わっていることが明らかになった。つまり、接尾辞の調和にはアクセントが決定的な要因となっているわけではなく、語の音韻構造や他の要因が組み合わさることで、結果的にアクセントを持つ母音と接尾辞の母音が調和していると言え、アクセントが接尾辞の調和に与える影響は限定的なものであると言える。

話者による差に関しては、話者による差は多少あるが、特別に何かの要因を重視している話者はおらず、語による差の方が顕著に現れることが示された。

謝辞

本研究は、日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号 24・5181）および JSPS 科研費 12J05181 の助成を受けたものである。

参考文献

Dohlus, Katrin (2008) The role of phonology and phonetics in loanword adaptation: German and French front vowels in Japanese. PhD dissertation, Humboldt University, Berlin. [Published 2010, Frankfurt: Peter Lang.]

Hangin, John G. (1992) *Basic Course in Mongolian* (*Uralic and Altaic Series*, 73). Bloomington: Indiana University.

橋本邦彦 (1982)「韻律理論による母音調和の分析」『室蘭研究報告　文化編』10 (4): 581-611.

栗林均 (1992)「モンゴル語」『言語学大辞典　第 4 巻　世界言語編（下‐2）』501-517, 三省堂

Önörjargal, G. (2013) Ormol ügiin awia züin xuwʲsal (oros xelnees orson ügiin ǰišeen deer) [Phonetic changes of loanwords (some examples of loanwords from Russian)], *Xel Šinǰlel - Utga Zoxiol Sudlal Zaluu Üye - 2013* [Current Studies of Linguistics and Literature - 2013]. Ulaanbaatar: Soyombo Printing, 63-68.

斎藤純男 (1984)「現代モンゴル語の弱化母音と母音調和」『*LEXICON*』13: 57-71.

Sambuudorj, O. (2012) *Mongol xelnii ügiin duudlagiin tolʲ* [Pronouncing Dictionary of Mongolian]. Ulaanbaatar: Monsudar.

塩谷茂樹・E. プレブジャブ (2001)『初級モンゴル語』東京：大学書林

Steriade, Donca (1979) Vowel harmony in Khalkha Mongolian. *MIT Working Papers in Linguistics* 1: 25-42.

Street, John C. (1963) *Khalkha Structure* (*Uralic and Altaic Series*, 24). Bloomington: Indiana University.

Svantesson, Jan-Olof (1985) Vowel harmony shift in Mongolian. *Lingua* 67: 283-327.

Svantesson, Jan-Olof (2004) What happens to Mongolian vowel harmony? In: Aniko Csirmaz, Youngjoo Lee and Mary Ann Walter (eds.), *Proceedings of WAFL 1: Workshop in Altaic Formal Linguistics (MIT Working Papers in Linguistics, 46)*. Cambridge, Mass.: MITWPL, 94-106.

Svantesson, Jan-Olof, Anna Tsendina, Anastasia Karlsson and Vivan Franzén (2005) *The Phonology of Mongolian*. Oxford: Oxford University Press.

植田尚樹 (2012)「モンゴル語の母音調和―外来語を用いた分析―」『日本言語学会第 145 回大会予稿集』304-309.

植田尚樹 (2013)「モンゴル語の母音調和と母音の弱化―外来語を用いた分析―」『京都大学言語学研究』32: 37-76.

van der Hulst, Harry and Jeroen van de Weijer (1995) Vowel harmony. In: John A. Goldsmith (ed.), *The Handbook of Phonological Theory*. Cambridge, Mass: Blackwell, 495-534.

山本秀樹 (1991)「モンゴル語における弱化母音をめぐる音韻解釈」『文化紀要』33 (1): 131-139.

セデック語パラン方言の談話資料「ソメコ」と終助詞の用法 *

落合いずみ
京都大学
キーワード：セデック語　談話資料　終助詞

1　はじめに

本稿の目的はセデック語パラン方言の談話を記述することである。本談話は 3 名の対話という形式を取っている。談話の内容はセデック族旧来の生活習慣に関わる染物の話題であり、染料として用いられる植物についての言及がある。本稿の談話書き起こしの手法として、Du Bois 他（1993）を用いた[1]。談話をイントネーション・ユニット（IU）ごとに区切り、IU 末の抑揚、発話間の間や、強勢、笑い、相槌などの情報も盛り込んでいる。また、本談話には対人的な働きをする終助詞が多く用いられている。本稿では談話中に現れた 4 つの終助詞の用法も紹介する。

2　セデック語パラン方言の文法概略

セデック語（オーストロネシア語族アタヤル語群）は台湾中心部から北東に分布する言語であり、セデック族の人口は約二万人である。セデック語はタロコ、トダ、パランの 3 方言に分かれるとされる（Yang 1976 : 611）[2]。本研究ではパラン方言を考察する。パラン方言は、1930 年以前はパラン（霧社）地方一帯で話されていた。現在は南投県仁愛郷に位置する 3 集落―眉渓、中原、清流―に散在する。これらの集落の人口は合わせて二千人強である。しかし、実際にセデック語パラン方言を流暢に話す人は、中年（40、50 代）以上に限られる。そのため、母語話者数はその半数を割ると見込まれる。ほぼすべての話者が中国語（台湾華語）を第二言語とする。日本統治時代（1895-1945 年）生まれの人は日本語も多少話すことができる。

音素として 5 つの母音（a, e, i, o, u）と 19 の子音（p, t, k, q, ʔ, b, d, g, m, n, ŋ, s, x, h, ts, l, r, w, j）を持つ。表記上、ts は c を、j は y を用いる。アクセントは次末音節にある。次

---

* 本稿に対し、林範彦氏と野島本泰氏から詳細なコメントをいただいた。お礼申し上げる。なお、本稿の不備は筆者の責任である。

[1] 音声の延長を示すのに Du Bois 他（1993）では「＝（イコール）」を用いるが、本稿においてこの記号はクリティックに用いている。そのため、音声の延長は Du Bois（2006）に従い、「:（コロン）」で示すことにする。

[2] Yang（1976）では、タロコ、トダ、パラン方言をそれぞれ集落名で合作方言（南投縣仁愛鄉合作村）、春陽方言（南投縣仁愛鄉春陽村）、霧社方言（南投縣仁愛鄉大同村）と呼んでいる。このうち、霧社方言は 1930 年代以降、強制移住により霧社集落では話されていないが、Yang（1976）では旧集落名を用いて霧社（Paran）方言とよんでいる。本稿もこの方針に従い、旧集落名のパランを方言名に用いる。

末前の音節は母音が弱化し、母音 u として現れることが多い（Asai 1953：3-8）。また、子音、母音ともに長短を区別しない。ただし、談話において長く発音されることがしばしばある[3]。これは、音を長めることで、語を強調したり、考えごとをしているサインとして談話の間を埋める働きをしている。語を強調するときは次末音節―つまり本来アクセントを置くことになっている音節が音声的に長くなる（談話（30）参照 *ni*：*hoŋ*「日本」）。間を埋める場合は語の最終音節が音声的に長くなる（談話（9）（10）（13）など参照）。

動詞には、態と時制、または態と命令法、または態と勧誘モダリティを伴う接辞が付く。ボイスには、動作主態（actor voice; AV）と非動作主態（undergoer voice; UV）があり、後者は更に 3 種類―対象態（patient subjecct; UVP）、場所態（location subject; UVL）、状況態（circumstance subject; UVC）―に分かれる。典型的な動詞に付く接辞の形式を表 1 に示す（Ochiai 2013：13 に多少修正を加えた）[4]。例えば語根 *osa*「行く」の動作主態現在は *m-osa*（AV.PRES-go）、動作主態過去は *mun-osa*（AV.PST-go）（談話（4））、動作主態命令法は Ø-*osa*（AV.IMP-go）、対象態・場所態命令法は *sa-i*（go-IMP.UV）である。進行相は動詞現在形の前に *gisu* や *gaga* を置くことによって作られる（Lin 2005）[5]。否定辞は 4 種類あり、動詞を否定する *ini*、名詞否定や意思否定の機能を持つ *uxe*、禁止の *iya*、存在否定の *uka* に分かれる（Chen 1996）。

表 1　動詞の形態

	動作主態	対象態	場所態	状況態
現在	<um>	-un	-an	su-
過去	<umun>	<un>	<un>...-an	—
未来	mu-/mupu-	C-un	C-an	—
命令	Ø-		-i	-ani
勧誘	—		-o, -e	-ane

接語代名詞は、第二位置（節頭の語の後）に来る。主格と属格があるが 1 人称単数（=*ku*（1SG.NOM）, =*mu*（1SG.GEN））と 3 人称単数（=Ø（3SG.NOM）, =*na*（3SG.GEN））、3 人称複数（=Ø（3PL.NOM）, =*daha*（3PL.GEN））を除き主格と属格が同形である（=*su*（2SG.NOM/GEN）, =nami（1EP.NOM/GEN）, =*ta*（1IP.NOM/GEN）, =*namu*（2PL.NOM/GEN））。代名詞には独立形もあり、述語名詞として用いられるほか、接語代名詞とともに現れて強調の働きをする。

基本語順は動作主態の場合 VOA と VS であり、非動作主態の場合は VAO である。動作主態における主語 A と S は、接語代名詞主格を用いる場合は第二位置に現れる。非動作主態におけ

[3] 閉鎖音または鼻音が最終音節のオンセットの場合はその子音が音声的に長くなり、それ以外の子音がオンセットの場合は次末音節の母音が音声的に長くなる傾向にある。

[4] C は語幹初頭子音の重複を表す。なお、表 1 はセデック語の動詞形態の一部を示すものであり、動詞の他動性に応じて異なる形態変化が見られる。また音韻形態変化が複雑に適応されるが、本稿では説明を省略する。

[5] なお、*gaga* は *waga*, *ga*, *wa*, *o* と異形態の関係にある。

る主語 O と動作主 A は、それぞれ接語代名詞の主格と属格として第二位置に現れ得る。接語代名詞の順序は主格が先、属格が後である。主格に接語代名詞を用いない場合は、例えば代名詞独立形や普通名詞や固有名詞を用いる場合は、節末に現れる（例（1-3）参照）。

(1) *kucug-un* =*su* =*mu.*
fear-UVP.PRES 2SG.NOM 1SG.GEN
あなたを私は怖れる。

(2) *m-iicu* =*ku* *isu.*
AV.PRES-fear 1SG.NOM 2SG.FREE
私はあなたを怖れる。

(3) *m-iicu* *isu* *heya.*
AV.PRES-fear 2SG.FREE 3SG.FREE
彼はあなたを怖れる。

3　セデック語パラン方言の談話資料「ソメコ」

話者は三名—Lawa と Made と Izumi（本稿筆者）である。Lawa と Made はセデック語パラン方言の母語話者であり、清流集落に在住している。Lawa は 70 代半ばの女性、Made は 50 代半ばの男性である。ちなみに、Izumi は日本語を母語とするが中国語とセデック語も多少使用する。そのため話者 3 名の共通言語として主にセデック語が用いらているが、中国語へのコード変換もよく行われる。また、日本統治時代に生まれた Lawa は、Izumi に対し日本語の単語を混ぜて話すこともある。本談話の録音時間は、139.57 秒（約 2 分 20 秒）である。

話は、Made の知人が染物の仕事を手伝いに行っているということから展開する。Lawa が「ソメコ」という語を使ったことで、Izumi が、その語について尋ねる。Lawa は「ソメコ」は日本語からの借用語でお年寄りが使っていた言葉だと言う。「染め粉」のことだろう。そしてセデック族の間で、染め粉の原料として持ちいられる植物のうち、ふたつを Lawa が紹介する。ひとつは *sero* タイワンサルスベリ（Lagerstroemia cubcostata）で、もうひとつは *tuperaq* ソメモノイモ（Dioscorea cirrhosa）である。これらが何色の染料として用いられるかの言及はないが、タイワンサルスベリは青系、ソメモノイモは赤系色のようである。また、Made が漢族の染物には藍を使うとして話を締めくくる。なお、現在では清流集落においてセデック族の染物の習慣は継承されていない[6]。

[6] 訳出はイントネーション・ユニット単位となっているため、話の流れを追いにくいかと思われるが、付録の意訳を参照していただきたい。本談話にはオーバーラップが多く見られる。特に談話（98）から（103）にかけて会話が複雑に重なり合っている。オーバーラップの始まりは [（複雑なオーバーラップの場合は [[や [[[も用いる）で示されるが、終わりを示す] は必ずしもひとつのイントネーション・ユニット内で完結するわけではない。別のスピーカーの発話を跨いで終点の記号が現れる場合もある。例えば Lawa（98）で始まるオーバーラップは Izumi（101）とであり、Made（99）を跨いで、Lawa（100）に渡っている。

(4) Lawa: .. *mun-osa su-ku^nuwan.*
AV.PST-go PST-when
（彼女は屏東へ）いつ行きましたか。

(5) Made: ... *uh yon^nichi sa%.*
FIL four.days hearsay
四日（前に）だそうです。

(6) Lawa: *uh yonnichi ye so,_*
FIL four.days Q like
四日前ですか。もしかして、そんな風に、

(7) Lawa: ...(1.2) *gi:su d<um>ayo hiya na%*
PROG help<AV.PRES> there PART
そこでお手伝いをしているのですね。

(8) Lawa: *ini huwa do malu wana.*
NEG CONNEG.do.how COND good.AV.PRES only
無事ならそれで構いません。

(9) Made: .. *ga: henu ^manu di:,_*
PROG DM what PART
あんなことをしているのです、ええと、

(10) Made: *d<um>ayo ^manu di:,_*
help<AV.PRES> what PART
あのお手伝い、ええと

(11) Made: <L2 染布 L2>.\
dye
染物

(12) Made: *kire henu kire ^peni?_*
cloth DM cloth PART
ほら、布、あの、布の（お手伝い）、

(13) Made: ...(0.8) [*henu uh:,_*]
DM FIL
あの、

(14) Lawa: [*so^meko*%?_]
dye
ソメコですか。

(15) Made: ... *kire*: [*pusa-un* *iro* ^*peni*]?_
cloth put-UVP.PRES color PART
ほら、色を付けられた布のことで、

(16) Lawa: [*someko*].\
dye
ソメコ

(17) Made: .. *uh*: [*henu* ^*rako*].\
FIL DM pattern
ええと、模様のこと。

(18) Lawa: [*someko*] ^*rako*.\
dye pattern
模様をソメコで付ける。

(19) Izumi: .. *some*[*ko*]:?/
dye
ソメコって？

(20) Made: [*kula-un* =*su*]?_
know-UVP.PRES =2SG.GEN
あなたは (ソメコという語を) 知っていますか？

(21) Lawa: .. *someko*.\
dye
ソメコ

(22) Izumi: .. *someko*?/
dye
ソメコ？

(23) Izumi: .. <L2 好 L2>.\
O.K.
わかりました。

(24) Lawa: *uxe !kari nihoŋ ^peni?_*
NEG word Japan PART
（「ソメコ」という語は）日本語じゃないんですか。

(25) Lawa: *ki\ya [someko],_*
that dye
そうですよ（日本語ですよ）。ソメコって言うのは。

(26) Izumi: [@@@]
@@@
(「そうなんですか、私は知りませんよ」という笑い。)

(27) Izumi: .. *someko?/*
dye
ソメコ？

(28) Lawa: *mhm.*
BC
はい。

(29) Izumi: .. *uh kiya,_*
FIL that
あ、そうなんですか。

(30) Lawa: *kari [ni:hoŋ so^meko].*
word Japan dye
「ソメコ」は日本語です。

(31) Made: .. [<L2 染布 L2>] *han.*
dye PART
染物のことです。

(32) Made: .. *someko?/*
dye
「ソメコ」ですか？

(33) Lawa: ...(0.9) <L2 我- 我有聽到老人説 L2> *someko.*
I I.have.heard.old.people.say dye
お年寄りがソメコと言っているのを聞きました。

(34) Lawa: <L2 我們 [[XXXX]] L2>.\
we
私達は

(35) Made: [[*sumeko* <L2 還是 L2> *someko*]]?_
sumeko or someko
スメコですかソメコですか。

(36) Lawa: ...(0.8) <MRC *someko* MRC>,_
dye
ソメコ

(37) Lawa: <L2 我也不 [太清楚] L2>.\
I.do.not.know.well
私もよくわかりません。

(38) Izumi: [*mhm mhm mhm*].\
BC
そうですか。

(39) Lawa: <L2 只有 L2> *ri-* <L2 聽到老人 L2> *someko.*\
I.have.only FS heard.old.people.say dye
お年寄りが「ソメコ」と言うのを聞いただけです。

(40) Lawa: <L2 我們 % 他們染 L2> *b-* <L2 染布料 L2>.\
we.they.dye FS dye.cloth
私達、彼らが布を染めるとき、

(41) Lawa: <L2 我們 [山地布料也是要]L2>,_
our.traditional.cloth.need.also
私達（先住民）の布もそれが必要になります。

(42) Izumi: [*mhm mhm mhm mhm*].\
BC
なるほど。

(43) Lawa: *ga* *someko* *a.*\
PROG dye.AV.PRES FIL
ソメコを使っていたのです。

(44) Lawa: <L2 黒色藍色 L2>,_
black.blue
黒だったり、青だったり、

(45) Lawa: .. <L2 [白色] L2>
white
白だったり。

(46) Izumi: [*h*<*um*>*uwa*] *cukau* ^*kari nii*]?_
how.do<AV.PRES> use.AV.PRES word this
その言葉はどう使うのですか。

(47) Izumi: *someko* ^*rako*?/
dye.AV.PRES pattern
「*someko rako*（模様をソメコする）」と言うのですか。

(48) Lawa: ... *someko*,_
dye
ソメコ

(49) Lawa: *ra- rako*,_
FS pattern
模様

(50) Lawa: *o* *someko* *ware.*\
PROG dye.AV.PRES thread
「*o someko ware*（糸を染めている）」と言います。

(51) Izumi: .. *someko* *ware*?_
dye.AV.PRES thread
「*someko ware*（糸を染める）」ですか。

(52) Lawa: *ware.*\
thread
はい、糸。

(53) Lawa: *t*<*um*>*inun*,_
weave<AV.PRES>
機織の（糸）。

(54) Izumi: *mhm mhm mhm.*\
BC
はい。（*ware tuminun* 機織糸の意味は）わかります。

(55) Lawa: *t<um>inun.*\
weave<AV.PRES>
機織の（糸）。

(56) Lawa: *someko.*\
dye
ソメコ

(57) Lawa: X *qalux* *ma* [*behege* X =*daha*].\
X black.AV.PRES conj white.AV.PRES X =3PL.GEN
黒かったり、白かったり。

(58) Izumi: [*mhm mhm mhm*].\
BC
そうですか。

(59) Lawa: .. <L2 很多種顏色嘛 L2 >
many.types.of.colors
たくさん色があるでしょう。

(60) Lawa: *some- some--*
FS FS
ソメ、ソメ、

(61) Izumi: *ma:* ^*manu ka* [*kari seediq*] *di?/*
CONJ what KA word Seediq PART
それで、（ソメコを）セデック語では何と言いますか。

(62) Lawa: <L3 *someru* L3>,_
dye
染める

(63) Lawa: ...(1.3) *posa* *a:*,_
AV.PRES.put FIL
付ける、

(64) Izumi: .. *rubeg-un* [^*iro*] ?/
soak-UVP.PRES color
「*rubegun iro* （色付けのために浸す）」ですか？

(65) Lawa: [*rubeg-un*],_
soak-UVP.PRES
（それを）浸す

(66) Lawa: *ru- rbeg-un* ^*iyu* *a*:,_
FS soak-UVP.PRES medicine FIL
「*rubegun iyu* （薬に浸す）」ですかね、

(67) Izumi: .. *iyu*?_
medicine
薬ですか？

(68) Izumi: *rubeg-un* *iyu*?/
soak-UVP.PRES medicine
「*rubegun iyu* （薬に浸す）」と言うんですか？

(69) Lawa: *mhm.*\
BC
はい。

(70) Lawa: <L2 應該 L2 > *rubeg-un* *iyu* *a*:,_
it.should.be soak-UVP.PRES medicine FIL
「*rubegun iyu* 薬に浸す」のはずです。

(71) Lawa: ...(0.8) *s- ado* <L3 *cikatta* L3> *kari ni*:*hong* ^*uri rudan*,_
FS because used word Japan too old.people
というのも、昔の人は日本語も使ったから。

(72) Lawa: *rubeg-un* *iyu* *so*^*meko m-esa.*\
soak-UVP.PRES medicine dye AV.PRES-say
（昔の人は）*rubegun iyu someko* (ソメコに浸す) と言っていました。

(73) Izumi: .. *mhm*,_
BC
そうですか。

(74) Izumi: .. *rubeg-un* *iyu* [*so^meko*]?/
soak-UVP.PRES medicine dye
「*rubegun iyu someko* （ソメコ薬に浸す）」ですか。

(75) Lawa: [*mhm*].\
BC
はい。

(76) Izumi: .. *mhm*,_
BC
そうですか。

(77) Made: ...(0.9) *uxe*: *uxe* ^*manu di*%._
NEG NEG what PART
あの、あれじゃないんですか。

(78) Made: ...(0.7) *r*<*um*>*icuh* ^*rako* @?/
rub<AV.PRES> pattern @
「*rumicuh rako*（模様を塗る）」とは言わないんですか。

(79) Izumi: <@ *r*<*um*>*icuh rako*@>?/
rub<AV.PRES> pattern
「*rumicuh rako*（模様を塗る）」ですか？

(80) Lawa: .. [*r*<*um*>*icuh*] ^*iyu* [[*ma*]],_
rub<AV.PRES> medicine CONJ
「*rumicuh iyu* （薬を塗る）」と言いますけどね、

(81) Izumi: [@@]
@@
（「*rumicuh rako*」という言い方が少し奇妙に感じられたという笑い。）

(82) Made: [[*ga*:]],_
PROG
ええと、

(83) Lawa: ...(1.2) *asi* *kesa* *r*<*u*^*m*>*icuh*,_
just say.AV.IMP rub<AV.PRES>
単に「*rumicuh*（塗る）」と言えばそれでいいです。

(84) Izumi: <L2 要泡嗎 L2 >.\
need.soak
浸さないといけませんか。

(85) Izumi: .. <L2 泡在 [水裡面] L2>?/
soak.in.water
水に浸さないといけませんか。

(86) Made: [*r*<*u*^*m*>*ebu*:] *iyu* ^*rako*?_
soak<AV.PRES> medicine pattern
染料に浸すんですか。

(87) Lawa: *mhm.*\
BC
はい。

(88) Made: .. *uka* *ini* XX *s*--
NEG NEG FS
…ではないのですか。

(89) Lawa: .. *r*<*um*>*ebu* ^*iyu.*_
<AV.PRES>soak medicine
薬に浸す、

(90) Lawa: ... *r*<*um*>*ebu* *asi* *rux*- *r*<*um*>*ebu* *iyu* *qalux.*\
soak<AV.PRES> just FS soak<AV.PRES> medicine black.AV.PRES
浸す、単に「*rumebu iyu qalux* 黒の染料に浸す」と言うのです。

(91) Lawa: [*r*<*um*>*ebu*] *iyu* *mugusama.*\
soak<AV.PRES> medicine green.AV.PRES
「*rumebu iyu mugusama* (緑色の染料に浸す)」と言ったり。

(92) Izumi: [*mhm*]._
BC
なるほど。

(93) Izumi: .. *mhm.*_
BC
そうなんですね。

(94) Made: *mukan* *we*: ^*duma* *t<um>etu* ^*sudu* *han.*\
Southern.Min PART some cut<AV.PRES> grass PART
そういえば閩南人ですが、中にはそういう人がいて、その人たちははその植物を刈りますよ。

(95) Lawa: .. *mhm* [*mhm*].\
BC
そうです。

(96) Made: [*t<um>etu*] ^*sudu* *ma*: *rubeg-un* =*daha* *qu*^*siya* *ma*:,_
cut<AV.PRES> grass CONJ soak-UVP.PRES =3PL.GEN water CONJ
彼らはその植物を刈って、それを水に浸して、

(97) Made: *ha-an* =*daha* *henu* *hii* *ka* ^*kire.*\
go-UVL.PRES =3PL.GEN DM there NOM cloth
そこに、布を、あれをしに行くんですよ。

(98) Lawa: *so* [*kiya* *hini*] *uri* [[*han.*\
like that here too PART
ここでも同じですよ。

(99) Made: [*uh* *galiq*].\
BC cloth
あ、つまり（セデック語で）*galiq*（布）のこと。

(100) Lawa: *r<um>ebu*]] *sero* *han.*\
soak<AV.PRES> Lagerstroemia.subcostata PART
タイワンサルスベリに浸すんですよ。

(101) Izumi: [[*mhm*]],_
BC
へえ。

(102) Made: .. [[[*mhm*]]],_
BC
そうでしたね。

(103) Izumi: [[[*mhm*]]],_
BC
そうなんですか。

(104) Made: .. *uh sero*,_
BC Lagerstroemia.subcostata
そうそう、タイワンサルスベリですね。

(105) Lawa: ... *sero* *ma*:,_
Lagerstroemia.subcostata CONJ
タイワンサルスベリに、それに、

(106) Lawa: *rubeg-un* *hiya* *ma*% *tu^peraq*.\
soak-UVP.PRES there CONJ Dioscorea.cirrhosa
（布を）そこに浸して、それからソメモノイモも。

(107) Made: .. *uh*,_
BC
あ、そうでしたね。

(108) Lawa: .. *tuperaq* *a* *lumiqu*
Dioscorea.cirrhosa FIL mountain
tuperaq *a* <L2 有一個好像 L2>,_
Dioscorea.cirrhosa FIL one.like
野生のソメモノイモ、ソメモノイモ、それはあれに似た、

(109) Lawa: <L2 地瓜一樣 L2>.\
like.sweet.potato
サツマイモみたいな、

(110) Lawa: <L2 山上 [拿的] L2>.\
available.in.mountain
山で採れる、

(111) Izumi: [*mhm mhm*],_
BC
へえ。

(112) Lawa: ...(0.9) <L2 染布 L2>,_
dye
布を染める、

(113) Made: *niq-an* *naq* *a* [*henu na*] *manu di.*\
stay-UVL.PRES EMPH FIL DM 3SG.GEN what PART
あれもありますよ、何でしたっけ。

(114) Lawa: [*tuperaq*].\
Dioscorea.cirrhosa
ソメモノイモ。

(115) Made: *kihilan uri han* *waso so* *hari* *sudu*:,_
Hakka too PART leaf like more.or.less grass
（閩南人以外に）客家人も使うもので、葉を使います、草のような、

(116) Made: *so* *nii* *kun-^reko*: *me*--
like this NMLZ-tall FS
草丈はこれくらいで、

(117) Made: *niq-an* *ŋerac* =*mu* *^uri.*\
stay-UVL.PRES outside =1SG.GEN too
私の庭にもありますよ。

(118) Made: ...(0.7) <L2 大青 L2> *kes-un* =*daha* *^kii.*\
Persicaria.tinctoria say-UVP.PRES =3PL.GEN that
それは、（漢族に）大青 と呼ばれているものです。

(119) Izumi: .. *mhm*,_
BC
そうですか。

(120) Made: ... *ma* *henu* <L2 藍色的 L2> *kiya han.*\
CONJ DM blue that PART
青いものです。

(121) Lawa: *mu-n^tena* *hari* [*kihilan daha*] *seediq hini ^uri*?_
AV.PRES-same more.or.less Hakka CONJ Seediq here too
ここのセデック族と客家人は（染物の習慣が）同じだということじゃないですか。

(122) Made: [<L2 藍色 L2>].\
blue
青に染めるものです。

(123) Lawa: ...(1.0) *cukau* *someko kana cu^beyo han.*
use.AV.PRES dye all past PART
昔はみんなソメコを使っていましたよ。

(124) Made: *mhm._*
BC
そうですね。

(125) Lawa: .. *posa:* *iro* *^lukus* *^peni?_*
putAV.PRES color clothes PART
ほら、服に色を付けるのに。

4 四つの終助詞

まず、セデック語の終助詞に関する先行研究として 3 つがあげられる。セデック語タロコ方言について、Tsukida（2003）は 10 個の終助詞（1. *wa*, 2. *wah*, 3. ‘*u*, 4. ‘*ur*, 5. *ha*, 6. *hug*, 7. *huwa*, 8. *heki*, 9. *binaw*, 10. *pini*）の意味、例文、文の種別による分布の違いなどを提示している。本節で扱うパラン方言の終助詞のうち、タロコ方言の終助詞と形式上で重なるのは、パラン方言の *peni* とタロコ方言の *pini* である。この形式はタロコ方言では確認や提案（confirmation, suggestion）に用いられる（Tsukida 2003：226）[7]。

小川・浅井（1935：564）は、「セデック語は一表現（文）の終に助辭を附すこと多し」と述べ、タロコ方言・パラン方言の「文尾助辭」を挙げている。パラン方言の文尾助辞は 6 つあり、*da* は「完成體」、*ga*/*wa* は「強意」、*di* も「強意」、*ho* は「疑問」、*peni* は「不確」の意味を持つとしている。小川・浅井（1935）の文尾助辞のうち、本稿で扱う終助詞に含まれるのは *peni* のみである。この終助詞について、 *wada mu-huqil peni*「死せしとか」（PST AV.PRES-die PART（グロスは筆者による））の一例で「不確」を説明している。本稿では談話における *peni* の出現文脈により意味と機能の説明を試みる。

次に、パラン方言について Holmer（2005）は、末尾助詞（final particles）が文末又は節末に現れるとし、樹形図によって語順の説明をしている。彼の挙げる助詞は 5 つ—*di*（perfect）, *na*（yet）, *do*（if）, *sa*（quotative）, *peni*（particle）であり、それぞれ括弧内は Holmer の付けたグロスである。それらの意味・機能について “*di* and *na* have Tense/Aspect connotations, *do* is a subordinator, *sa* represents some kind of evidential meaning, and *peni* is almost untranslatable into English, but serves as a discourse connector” と述べているにとどま

[7] タロコ方言の 10 個の終助詞のうち、Tsukida（2003）の掲げた 3、4、6、8 以外は、パラン方言にも同源語が存在する（4. ‘*ur* はパラン方言の *uri*「〜もまた」に相当するのかもしれない）。同源語のうちで、タロコ方言の 1. *wa*、2. *wah*、5. *ha*、7. *huwa* についてはパラン方言も同一形式であり、9. *binaw* はパラン方言では 9. *bino* となる。これらのうち、パラン方言で終助詞として使われていると思われるのは 1. *wa* と 5. *ha* のみであり、2. *wah* は感嘆詞、7. *huwa* は動詞に使われる。9. *bino* は未調査である。各形式について終助詞の用法の有無を検討するのは今後の課題である。また、月田（2009：331-334）にもこれらの語についての考察がまとめられている。

る。これらの助詞のうち、本稿で扱う終助詞に含まれるのは、*sa* と *peni* である。また、*na* は Holmer に同一形式があげられているが、「もう、まだ」を意味する語であり、本稿で扱う *na* とは異なる機能を持つ同音異義語である[8]。

Holmer が discourse connector と示唆しているように、セデック語の終助詞は自然発話において話し手が聞き手に何らかの働きかけをする機能を持つため、言語調査者が文の正誤をたずねたり、例文を引き出すという、作為的な状況ではなかなか現れない。自然発話という状況において、前後の会話の流れを考慮した上での考察が不可欠である。本稿では、談話資料「ソメコ」において得られた終助詞の用法を紹介する。本稿で言うところの終助詞とは文末に現れる助詞であり、その後に何も後続しない場合を指す。「ソメコ」には、*na*、 *sa*、 *peni*、 *han* の 4 つの終助詞が表れる。順に出現回数は、1 回、2 回、4 回、6 回であった。本節では、これらの終助詞の用法を説明する。

4.1 na「確信の高い確認」

話し手が、すでに何らかの情報を得ているか、何らかの事柄を自分なりに理解している状況において、同じ情報を持っている、または同じ理解をしているだろうと想定される聞き手に対して念を押す用法で使われる[9]。談話（7）では、共通の知人が染物の手伝いに行っていることは、先の文脈で言及があるのだが、その上で、「そこへ手伝いに行っている」という情報を再度繰り返して確認をしている。談話 (7) を以下に再掲する。

(126) Lawa: ...(1.2) *gi:su d<um>ayo hiya* ***na***%\ (=7)
PROG help<av.pres> there PART
そこでお手伝いをしているのですね。

終助詞の *na* 以外に文末に現れ得る同音異議の *na* がほかにふたつある。ひとつは Holmer（2005）にも言及のある *na*（yet）であり、肯定文において「もう（した）」、否定文において「まだ（していない）」の意味を表す。もうひとつは 3 人称単数属格を表す接語代名詞の =*na* であり、名詞に後続して所有表現を作る（例 *sapah* =*na* 「彼の家（*sapah*「家」）」）。このふたつの *na* と、終助詞の *na* は、文末のピッチや音色で区別され得る。終助詞の *na* は前部の音節よりもピッチが高く、しばしば声門閉鎖音を伴って現れる（「もう、まだ」を意味する *na* と接語代名詞の *na* は前部の音節よりピッチが高くなることはない）。例（126）として再掲した談話（7）においても声門閉鎖音が現れている（% がその記号）。確認の *na* 作例を（127-128）に示す。作例（128）に見られるように、*na* は文のあとにポーズを置いて単独で使われることもある[10]。

[8] 助詞の *di* は小川・浅井（1935）ですでに報告されているが、本談話では調査者の発話を除き、*manu di* 「ええと...」という定型表現での出現のみであったため、考察対象からはずしている。また、Holmer（2005）が挙げている助詞の *do* は、終助詞ではなく接続助詞である。

[9] もうひとつの用法として、聞き手は話し手の持っている情報を知らないが、「こういう事柄ですから覚えてください、その上で話を進めます」という意味で使われることもある。

[10] 一音節であるが、例外的にアクセントを担っていると見なせる。

(127) *b<un>ari =su hori lukus nii* ***na***.
buy<PST> =2SG.GEN Hori clothes this PART
この服はあなたが埔里で買ったのですよね、きっとそうでしょう（埔里は地名）。

(128) *b<un>ari =su hori lukus nii.* ***na***.
buy<PST> =2SG.GEN Hori clothes this PART
この服はあなたが埔里で買ったのですよね、きっとそうでしょう。

4.2 peni「確信の低い確認」

談話（12）,（15）,（24）,（125）に現れる。話し手自身が、ある事柄についてある程度理解しているが明確な情報を持ち合わせていないか、思い出すのに困難を伴う状況において、聞き手に何らかの情報の提供を求める働きがある。「確信の高い確認」の終助詞 *na* に対し、確信の低い確認の終助詞と言える。この終助詞 *peni* は二音節であるため、音節構造としてアクセントを担うことが可能である。また同時に、相手の反応を促すという訴えのイントネーションにも組み込まれ、ほとんどの場合で *peni* の第一音節に文強勢が置かれて現れる。ただ、すべての *peni* が相手の反応を求めているわけではない。不確実な理解ではあるけれど、という意味をこめた感想やコメントを述べるだけの場合もある（談話（125））[11]。 例（129）（談話（24））は聞き手（Izumi）に対し、「「ソメコ」は日本語からの借用語だと思っていましたが、そうでしょう。違いますか。」と反応を促しているところである。例（130）（談話（125））は、話し手本人が旧来の染物の習慣を直接体験してきて知っているわけではないから、はっきりとは言えないが、昔の人は漢族もセデック族も糸や布を染めて服を作る習慣は同じではなかったのかと感想を述べている。さらに、この終助詞の作例を（131）に示す。

(129) Lawa: *uxe !kari nihoŋ ^**peni**?_* (=24)
NEG word Japan PART
（「ソメコ」という語は）日本語じゃないんですか？

(130) Lawa: .. *posa: iro ^lukus ^**peni**?_* (=125)
AV.PRES.use color clothes PART
ほら、服に色を付けるのに。

(131) *b<un>ari =su hori lukus nii* ***peni***.
buy<PST> =2SG.GEN Hori clothes this PART
（恐らくそうだと思いますが）この服はあなたが埔里で買ったのですよね。

[11] 最終音節のピッチが第一音節より高くなる場合も稀にある。また、*peni* には、話し手と聞き手が共通知識として持っている事柄のひとつを取り出して提起し、会話に関わる事柄を想起させる機能もあるが、本談話には現れないため説明を省略する。

4.3　sa「伝聞」

他人から聞いたことを伝える用法であり、「～らしい」、「(誰々によれば）～だということだ」などの意味を表す。談話（5）では、「その人はいつそこへ行ったのか」という問いに対して、「四日前と聞いています」と答えている場面である。以下に再掲する[12]。

(132) Made: ... *uh yon^nichi* ***sa***%.\ (=5)
FIL four.days hearsay
四日（前に）だそうです。

引用の *sa* の語源は *m-esa*「言う（AV.PRES-say)」という動詞である。動詞が期待される位置は文頭であるため、*mesa* も作例（133）に見られるように文頭に現れ得る[13]。ところが談話（72）にあるように、*mesa* は文末、つまり *sa* の現れる位置に現れることもある（(134）として再掲)。ふたつともに文末に現れ得ること、意味の類似性と音の類似性から、*mesa* と *sa* の関連は明らかである。動詞 *mesa* から *me* が脱落した形式が *sa* である。文末に現れる *mesa*「言う」が文法化し、伝聞の機能を持つ *sa* になったのだろう。伝聞の *sa* の作例を（135）に示す。

(133) ***m-esa*** *rubeg-un* *iyu* *someko sa.*
AV.PRES-say soak-UVP.PRES medicine dye hearsay
ソメコに浸すと言ったらしいです。

(134) Lawa: *rubeg-un* *iyu* *so^meko* ***m-esa***.\ (=72)
soak-UVP.PRES medicine dye AV.PRES-say
（昔の人は）*rubegun iyu someko* (ソメコに浸す) と言っていました。

(135) *b<un>ari =su* *hori lukus nii* ***sa***.
buy<PST> =2SG.GEN Hori clothes this hearsay
（ある人から）この服はあなたが埔里で買ったのだと聞きました。

4.4　han「一次情報の標示」

この語にはふたつの意味・用法がある。「先に（時間的により早く)」、「先ずは」を意味する副詞と、一次情報を表す終助詞である。この形式 *han* は *hayan*「先に、先ず」という意味を持つ副詞が音の縮約により変化したものである。そのため *hayan* と同様に、「先に、先ず」という意味の副詞として用いられることもある。Tseng (2006 : 122) から *hayan* と *han* の両方が「先に、先ず」として使われている例を（136）に挙げる[14]。首狩りに出かけた男たちは、初めのうちは形勢が良かったが、しばらくして亡くなるという話である。そしてこの例では、*hayan* と

[12] この *sa* に似た機能を持つ終助詞として *si* がある。分布や意味の違いについては今後の課題とする。
[13] 文末に終助詞の *sa* が無いと不自然な文になるとの判断が得られた。
[14] Tseng（2006）の表記法に多少の修正を加えている。

han が「当初は」という意味で使われている。また、この用法は意味的に古い・早いという時間関係を表す語と一緒に現れることが多い。談話（123）では *cubeyo*「昔」の後に *han* が現れている（(137）として再掲)。

(136) *ma malu bale* ***hayan*** *si, deheya di.*
CONJ good.AV.PRES real first hearsay 3PL.FREE PART
m-eyah di sa,
AV.PRES-come PART hearsay
malu ba karac ***han*** *si.*
good.AV.PRES real sky first hearsay
「それで、初めは良かったそうです。彼ら (の状況) はね。（それから）戻ってきたそうです。初めは天気がよかったそうです。」

(137) Lawa: ...(1.0) *cukau someko kana* ***cu^beyo han.*** (=123)
AV.PRES.use dye all past PART
昔はみんなソメコを使っていましたよ。

さらに、時間的により早いという意味・用法から文法化により生じたと考えられるのが一次情報の標示という機能である。この場合、終助詞として *hayan* という形式は使われず、もっぱら *han* が用いられる。終助詞の *han* は聞き手が同じ情報を共有しているかどうかに関わらず、話し手の理解や知識を疑問の余地の無いものとして提示する働きがある。談話では（31）,（94）,（98）,（100）,（120）,（123）に見られる。ここではひとつづきになっている（98）と（100）を (138-139) として再掲する。閩南人が植物を染料にすると Made が言ったのに対し、Lawa が（私達）セデック人こそ本来そのようにするのだと述べるところである。また、*han* を使った作例を（140）に示す。

(138) Lawa: *so* [*kiya hini*] *uri* [[***han.*** (=98)
like that here too PART
ここでも同じですよ。

(139) Lawa: *r<um>ebu*]] *sero* ***han.*** (=100)
<AV.PRES>soak Lagerstroemia.subcostata PART
タイワンサルスベリに浸すんですよ。

(140) *b<un>ari =su hori lukus nii* ***han.***
buy<PST> =2SG.GEN Hori clothes this PART
（あなたは忘れているみたいだから言うけれど）この服はあなたが埔里で買ったのですよ。

4.5　終助詞の共起条件についての考察

ここまで 4 つの終助詞、*na*「確信の高い確認」、*peni*「確信の低い確認」、*sa*「伝聞」、*han*「一次情報の標示」を紹介した。それぞれの終助詞につき、ほかの 3 つの終助詞と共起できるかどうかを考察してみた。結果、どの組み合わせでも共起できないことがわかった。それらの組み合わせとは *na peni*（142）, *na sa*（143）, *na han*（144）, *peni na*（145）, *peni sa*（146）, *peni han*（147）, *sa na*（148）, *sa peni*（149）, *sa han*（150）, *han na*（151）, *han peni*（152）, *han sa*（153）の 12 である。作例の基となる例文を（141）に示す。例文（141）に対し、終助詞をふたつ付けて共起条件を試している[15]。ただし、（148）の *sa na* の非文法性に対し、*na* の前にポーズが置かれ（前の文から切り離され）、*na* が単独で発音される場合は許容される（154）。

(141) *b<un>ari =su hori lukus nii.*
buy<PST> =2SG.GEN Hori clothes this
この服はあなたが埔里で買いました。

(142) **bunari =su hori lukus nii* ***na peni.***

(143) **bunari =su hori lukus nii* ***na sa.***

(144) **bunari =su hori lukus nii* ***na han.***

(145) **bunari =su hori lukus nii* ***peni na.***

(146) **bunari =su hori lukus nii* ***peni sa.***

(147) **bunari =su hori lukus nii* ***peni han.***

(148) **bunari =na hori lukus nii* ***sa na.***

(149) **bunari =na hori lukus nii* ***sa peni.***

(150) **bunari =na hori lukus nii* ***sa han.***

(151) **bunari =su hori lukus nii* ***han na.***

(152) **bunari =su hori lukus nii* ***han peni.***

(153) **bunari =su hori lukus nii* ***han sa.***

(154) *bunari =na hori lukus nii* ***sa. na.***

[15] ただし、（148-150）と（154）は接語代名詞が =*su*（2SG.GEN）ではなく、=*na*（3SG.GEN）である。意味は「あの人はこの服を埔里で買った。」となる。

また、4 つの終助詞と極性疑問文との共起の可能性も試してみたが、4 つの終助詞ともに非文法的であるとの判断が得られた（156-159）。極性疑問文の基となる文法的な作例を（155）に示す。命令文とも共起できないこともわかった（161-164）。命令文の基となる文法的な作例を（160）に示す。本来、終助詞 *na* と *peni* の場合は相手に確認を取ったり反応を促す機能を備えているため、疑問法との機能と類似する部分がある。それゆえ *na* や *peni* を使って相手に問いかける文を、さらに極性疑問文に変えて、二重の疑問標示をすることが許容されないと考えられる[16]。終助詞 *sa* や *han* の場合は情報を伝える役目を負っているので、もともと疑問や命令というムードとはかみ合わないことから、共起不可能であることが理解できる[17]。

(155) ***ye*** *=su b<un>ari hori lukus nii.*
Q =2SG.GEN buy<PST> Hori clothes this
この服は埔里で買いましたか。

(156) ****ye*** *=su b<un>ari hori lukus nii* ***na****.*

(157) ****ye*** *=su b<un>ari hori lukus nii* ***peni****.*

(158) ****ye*** *=su b<un>ari hori lukus nii* ***sa****.*

(159) ****ye*** *=su b<un>ari hori lukus nii* ***han****.*

(160) ***burig-i*** *hori lukus nii.*
buy<UV.IMP> Hori clothes this
この (ような) 服を埔里で買いなさい。

(161) ****burig-i*** *hori lukus nii* ***na****.*

(162) ****burig-i*** *hori lukus nii* ***peni****.*

(163) ****burig-i*** *hori lukus nii* ***sa****.*

(164) ****burig-i*** *hori lukus nii* ***han****.*

5 おわりに

本稿は、セデック族の染物文化の一端に触れた談話資料「ソメコ」（約 2 分 20 秒、122 イントネーション・ユニット）を紹介した。談話中に現れた 4 つの終助詞―*na*「確信の高い確認」、*peni*「確信の低い確認」、*sa*「伝聞」、*han*「一次情報の標示」―の用法も説明したが、この 4 つでセデック語パラン方言の終助詞を網羅するわけではない。また、この 4 つについても他の

[16] ただし、*peni* の場合は疑問詞 *ima*「誰」や *inu*「どこ」と共起できる。

[17] 例文（159）と (164) に対し、「先に、先ず」という意味の *hayan* は許容された。
ye su bunari hori lukus nii hayan.「この服は埔里で先に買ったのですか。」
burigi hori lukus nii hayan.「この（ような）服を先に埔里で買いなさい。」

用法があるかどうか調べる必要がある。すべての終助詞の各用法を記述するのが今後の課題である。

付録

「ソメコ」意訳

Lawa　（彼女は屏東へは）いつ行きましたか。

Made　四日前だそうです。

Lawa　そうですか。四日前ですか。そこでお仕事を手伝っているのですね。無事なら構いません。

Made　ran^{3}bu^{4}（染物）の手伝いをしているそうです。ほら、あの、布に、

Lawa　ソメコですか。

Made　布、ほら、色をつける布のことです。

Lawa　ソメコですね。

Made　模様をつけたりする、

Lawa　ソメコで色付けするんですね。

Izumi　ソメコは何のことですか。

Made　（Izumi に対して）ソメコという言葉を知っていますか。

Lawa　日本語ではないのですか。日本語ですよ。ソメコは。

Izumi　ソメコ？そうなんですか。

Lawa　はい。ソメコは日本語です。

Made　ran^{3}bu^{4}（染物）のことですよ。ソメコで（発音は）合っていますか。

Lawa　お年寄りがソメコと言っているのを聞きました。

Made　スメコですかソメコですか。

Lawa　私にもよくわかりませんが、お年寄りがソメコと言うのを聞きました。私達が布を染めるのに必要なものでした。（以前は）ソメコを使っていました。黒や青や白に染めました。

Izumi　ソメコ（という言葉）はどうつかいますか。*someko rako*（色をソメコする）と言いますか。

Lawa　*someko ware*（糸をソメコする）と言います。

Izumi　*someko ware*（糸をソメコする）ですか。

Lawa　はい。機織の糸です。黒かったり、白かったりたくさん色があります。

Izumi　ソメコをセデック語では何と言いますか。

Lawa　染める、

Izumi　*rubegun iro*（色に浸す）ですか。

Lawa　*rubegun iyu*（薬に浸す）です。

Izumi　*rubegun iyu*（薬に浸す）ですか。

Lawa　はい。*rubegun iyu*（薬に浸す）のはずです。

Lawa　昔の人は日本語も使ったから、*rubegun iyu someko*（ソメコ薬に浸す）と言っていました。

Izumi　*rubegun iyu someko*（ソメコ薬に浸す）ですか。

Made　*rumicuh rako*（色を塗る）とは言いませんか。

Izumi　*rumicuh rako*（色を塗る）ですか。

Lawa　*rumicuh iyu*（薬を塗る）です。単に *rumicuh*…と言えば、

Izumi　水に浸さないといけませんか。

Made　染料に浸しますか。

Lawa　はい。薬に浸します。*rumebu iyu qalux*（黒い薬に浸す）と言います。

Lawa　*rubebu iyu mugusama*（緑色の薬に浸す）と言ったり。

Made　そういえば閩南人の中にはある種の植物を刈る人がいますよ。

Made　その植物を水に浸して、布をあんなふうに、

Lawa　ここでも同じですよ。タイワンサルスベリに浸すんですよ。

Made　そうそう。タイワンサルスベリですね。

Lawa　タイワンサルスベリに浸したり、ソメモノイモもそうです。

Lawa　野生のソメモノイモはサツマイモみたいな形をしていて、山で採れるものです。

Made　他にもありますよ。客家人も使うもので、草のような、これくらいの丈のもので、私の庭にもあります。da^{4}qing^{1}（藍）と呼ばれているものです。青く染めるものです。

Lawa　セデック族と客家人は（染物の習慣が）同じだということじゃないですか。昔はみんなソメコを使っていましたよ。服に色を付けるのに。

談話書き起こし記号

..	short pause (less than 0.2 second)
...	medium pause (between 0.3 and 0.6 second)
...(0.7)	long pause (more than 0.7 second)
.	transitional continuity [final]
,	transitional continuity [continuing]
?	transitional continuity [appeal]
\	terminal pitch direction [fall]
/	terminal pitch direction [rise]
_	terminal pitch direction [level]
\(inside word)	falling tone
^	accent
%	glottal stop
:	lengthening

!	booster
- (followed by a space)	truncated word
--	truncated intonation unit
[ ]/[[ ]]/[[[ ]]]	speech overlap
@	laughter
<@ @>	speech quality [laughing]
<L2 L2>	code switching to Mandarin
<L3 L3>	code switching to Japanese
<MRC MRC>	marcato, each word distinct and emphasized
uh	awareness, responses
mhm	affirmative responses
X	indecipherable syllable

略号一覧

AV: actor voice, BC: back channel, COND: conditional, CONJ: conjunctive, CONNEG: connegative, DM: discourse marker, EMPH: emphatic, EP: exclusive plural, FIL: filler, FS: false start, FREE: free pronoun, GEN: genitive, HORT: hortative, IMP: imperative, IP: inclusive plural, NEG: negative, NMLZ: nominalizer, NOM: nominative marker, PART: particle, PL: plural, PRES: present, PROG: progressive, PST: past, Q: question, UV: undergoer voice (patient and location), UVC: undergoer voice circumstance subject, UVP: undergoer voice patient subject, UVL: undergoer voice locaiton subject, 1: first person, 2: second person, 3: third person, < >: infix, = : clitic pronoun, - : morpheme boundary

参考文献

Asai, Erin (1953) *The Sediq language of Formosa.* Kanazawa: Cercle Linguistique de Kanazawa.

Chen, Jye-Huei (1996) The negators in Seediq. Master's thesis, National Tsing Hua University.

Du Bois, John W. (2006) Basic symbols for discourse transcription. *Transcription in action: Resource for the representation of linguistic interaction.* Department of Linguistics, University of California, Santa Barbara, accessed March 26, 2015, http://www.linguistics.ucsb.edu/projects/transcription/representing.

Du Bois, John W., Stephen Schutze-Coburn, Susanna Cumming, and Danae Paolino (1993) Outline of discourse transcription. In Jane A. Edwards and Martin D. Lampert (eds.) *Talking data: Transcription and coding in discourse research*, 45-89.

Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.

Holmer, Arthur (2005) Seediq: Antisymmetry and final particles in a Formosan VOS language. In Andrew Carnie, Sheila Dooley, and Heidi Harley (eds.) *Verb First: On the Syntax of Verb-initial Languages*, 175-201. Amsterdam: John Benjamins.

Lin, Hsiu-hsu (2005) The grammaticalization of tense/aspect auxiliaries in Seediq. *Concentric*: *Studies in Linguistics* 32(2): 111-132.

Ochiai, Izumi (2013) Tgdaya Seediq verbal morphology. Master's thesis, Kyoto University.

小川尚義・浅井恵倫（1935）『原語による台湾高砂族伝説集』台北：台北帝国大学言語学研究室.

Tseng, Temi Nawi C.（2006）『賽德克族口述傳統文化故事』[Seediq narratives on traditional cultures] 仁愛鄉：南投縣天主教山地服務研究社.

Tsukida, Naomi (2003) Distribution of sentence final particles. In Kitano Hiroaki (ed.) *Descriptive and theoretical studies in minority languages of east and southeast Asia* [ELPR Publication Series A3-016], 225-234. Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University

月田尚美（2009）「セデック語（台湾）の文法」 博士論文，東京大学.

Yang, Hsiu-fang (1976) The phonological structure of the Paran dialect of Seediq. Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica 47: 611-706.

ジンポー語のテキスト資料「落雷」

倉部慶太
日本学術振興会／東京外国語大学

キーワード：ジンポー語，カチン語，カチン人，精霊信仰，ナッ (Nat), ミャンマー, ビルマ

1　はじめに

本稿では、筆者がビルマ (ミャンマー) のカチン (Kachin) 州ミッチーナー (Myitkyina) 市において行った臨地調査により得られたジンポー語資料のうち、「落雷」と題するテキスト資料の本文を提示する。以下、2 節ではジンポー語の概況について、3 節では本稿における表記法について記す。最後の 4 節では「落雷」の本文を提示する。

2　ジンポー語

ジンポー (Jingpho) 語は、シナ・チベット語族 (Sino-Tibetan) チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) ジンポー・ルイ語群 (Jingpho-Luish/Jingpho-Asakian) に属し、言語的には、ビルマのザガイン管区・バマウッ地方で話されるカドゥー (Kadu) 語やガナン (Ganan) 語、ビルマのアラカン州北部やバングラデシュのチッタゴン丘陵で話されるチャック (Sak/Cak) 語などと特別な親縁関係を持つ (Matisoff 2013)。ジンポー語は、北東インドや中国雲南省西端にも分布するが、その分布の中心は北部ビルマにある。北東インドに分布する方言は、特にシンポー (Singpho) 語と呼ばれるが、ジンポー人の一派が北東インドへ移住したのは 18 世紀後半であることが知られている (Dalton 1872)。なお、中国において景頗 (Jingpo) 族と呼ばれる民族はジンポー人を含むが、中国の景頗族においては後述のツァイワ人がより多数を占める点に注意する必要がある。

ジンポー人はカチン (Kachin) 民族の成員として知られる。カチン民族は、北部ビルマを中心に居住するビルマ有数の民族であり、ジンポー人のほかに、ロンウォー (マル)[1] 、ラチッ (ラシ)[1] 、ツァイワ (アツィ)[1] 、ラワン、リスなどの人々を含む社会・文化的集団である。このうち、ロンウォー、ラチッ、ツァイワの言語はロロ・ビルマ語支 (Lolo-Burmese) ビルマ語群 (Burmish) に属し、言語的にはジンポー語よりもむしろビルマ語との親縁性を示す。また、ラワン語は言語的にはヌン語群 (Nungish) に、リス語はロロ・ビルマ語支ロロ語群 (Loloish) に属するなど、これらの言語も必ずしもジンポー語と近い関係にあるわけではない。それにもかかわらず、これらの人々が同一の民族意識を持つ一因として、カチン文化圏における文化的・社会的・宗教的基盤の共有が挙げられる。ここに民族と言語の一対多の対応を認めることができる。

ジンポー語はカチン民族の共通語として通用しており、カチン民族に属する人々は多かれ少

[1] 括弧内の呼称はジンポー語による他称である。

なかれジンポー語を解する場合が多い。ジンポー語はカチン語という名称でもよく知られるが、カチン民族内の言語多様性を考慮すると、この名称は必ずしも正確であるとはいえない。また、ジンポー語は北部ビルマにおいて、カチン民族に属するチベット・ビルマ系の人々のほかに、カムティ・シャン (Khamti Shan) やルマイ・パラウン (Rumai Palaung) などのタイ系やパラウン系の人々によっても用いられることがある。

ジンポー語には様々な方言的変種の存在が知られるが、本稿で対象とする方言は、ビルマのミッチーナー市、バモー (Bhamo) 市、クッカイ (Kutkai) 市などで通用する標準ジンポー語である。この方言は本来バモー市近郊に分布していたようであるが、19 世紀末のキリスト教布教活動がバモーから始まったことやジンポー語正書法がこの方言に基づいて制定されたことなどの事情から、19 世紀末以降、カチン州中部やシャン州北部など他地域にも普及したと考えられる。

3　本稿の表記

本稿の表記は筆者の分析による音素表記を用いる。ジンポー語の分節音を以下に示す。音素 /h/ は一部の借用語や擬音語、間投詞にのみ観察され、音素としての地位は極めて周辺的である。

頭子音					末子音				母音		
p	t		k	ʔ	p	t	k	ʔ	i		u
ph	th		kh						e	ə	o
b	d		g							a	
	ts	c									
	dz	j									
	s	ɕ		(h)							
m	n		ŋ		m	n	ŋ				
ʔm	ʔn		ʔŋ								
	l	r									
	ʔl	ʔr									
w		y			w	y					
ʔw		ʔy									

ジンポー語は音節声調言語であり、声調には高平調、中平調、低下降調、高下降調の 4 つが認められる。本稿では、それらをそれぞれ má、ma、mà、mâ と表記する。なお、促音節においては高と低の 2 つの声調のみが対立を成す。

ジンポー語にはローマ字による文字体系を持つ正書法があるが、正書法では声門閉鎖音および声調が表記されないため、本稿の表記には用いない。声門閉鎖音および声調はこの言語において重要な弁別機能を果たし、例えば、ʔna náʔ ná na náʔ náʔ nà na「お姉さん、あなたの耳は長い間聞こえるでしょう」という一文は、正書法で表記すると *na na na na na na na na* となり、判読が極めて困難となる。ただし、これは極端な例であり、声門閉鎖音や声調を表記せずともジ

ンポー語文は判読可能である場合が多い。東南アジア大陸部のシナ圏に分布する言語は単音節性を示すことで知られるが、ジンポー語はシナ圏とインド圏の緩衝地帯に位置し、ジンポー語に二音節語が比較的多く認められることが、正書法の可読性を高める一因であると考えられる。ジンポー語正書法は 1890 年にカチン州に赴任した米国バプティスト派の宣教師 Olaf Hanson 氏により 1890 年代前半に考案された。本稿の表記と正書法の対応を以下に示す。

Kurabe	Hanson	Kurabe	Hanson	Kurabe	Hanson
p	p	s	s	y	y
t	t	ɕ	sh	ʔw	w
k	k	h	h	ʔy	y
ʔ	–	m	m	i	i
ph	hp	n	n	e	e
th	ht	ŋ	ng	a	a
kh	hk	ʔm	m	o	o
b	b	ʔn	n	u	u
d	d	ʔŋ	ng	ə	ă
g	g	l	l		
c	chy	r	r		
j	j	ʔl	l		
ts	ts	ʔr	r		
dz	z	w	w		

4　本文

本節で提示するジンポー語テキスト資料は、筆者が 2011 年 3 月にカチン州ミッチーナー市において、Du Kahtawng 地区の男性 (当時 70 代) から対面調査により得た一次資料である。調査では、まず、リニア PCM レコーダー (ZOOM H4n) にマイク (audio-technica AT9904) を接続して音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。対面調査後、筆者が音声を文字に書き起こし、後日、コンサルタントの協力のもと、資料の確認を行った。

本文の内容は精霊 (Nat) 信仰と深い関わりがある。19 世紀末以降キリスト教に改宗する以前、カチン人の間では精霊信仰が盛んであった。精霊信仰では太陽の精霊、月の精霊、風の精霊、大地の精霊などを祀り、ドゥムサ (Dumsa) と呼ばれる司祭が重要な役割を果たす。カチンの民話には精霊に関する話も多く認められる。カチン人の精霊信仰に関しては、Hanson (1913)、Gilhodes (1922)、吉田 (2011) などに解説がある。ビルマにおける精霊 (Nat) 信仰の歴史は古く、精霊信仰はカチン人のみならず、ビルマの他民族の間にも広く認められる。

なお、本資料に文法注釈は付していないが、ジンポー語文法の詳細や概要に関しては、Hanson (1896)、戴・徐 (1992)、戴 (2012)、Kurabe (2012) などを参照されたい。なお、各文に付した和

訳はなるべく直訳となるよう心掛けたため、日本語としては多少不自然な箇所がある。

(1) **jìŋphòʔ-ʔəmyú ni thàʔ ʔè làkláy ʔay thúŋkhìŋ ləŋây mi gò ɕərà-rà kóʔ**
Jingpho-race PL LOC LOC unique NMLZ custom one one TOP place-RED LOC
múʔ thìm múʔ ʔəcéʔ jaŋ grày khrìt ʔay khu grày məjìʔ ɕim
thunder strike thunder strike when very fear NMLZ path very uncommunicative quiet
ʔay khu múʔ-nát phéʔ jòʔ màʔ ʔay rê.
NMLZ path thunder-spirit ACC give PL NMLZ COP
「ジンポー人の間で特徴的な慣習のひとつは、ある場所に雷が落ちたら、大変恐れたように、無言で静かにして雷の精霊に供物を捧げることである。」

(2) **nday ɕərà kóʔ ʔè məɕà ləŋây-ŋày thìŋgo ləŋây-ŋày thèʔ seŋ ʔay phún-kəwá**
this place LOC LOC person one-RED family one-RED COM related NMLZ tree-bamboo
ráy-ráy dum-ńtâ ráy-ráy yíʔ-sun-khawnà ráy-ráy day ɕərà kóʔ
COP-RED granary-house COP-RED swidden-garden-paddyfield COP-RED that place LOC
múʔ ʔəcéʔ múʔ thìm jaŋ day seŋ-ʔàŋ ʔay ni ʔù-wàʔ ɕòʔ
thunder strike thunder strike when that related-be.in.line.with NMLZ PL fowl-hog draw.out
ǹná múʔ-nát phéʔ jòʔ rà ʔay.
ABL thunder-spirit ACC give need TAM
「この場所に、ある人や家族と関係のある木や竹であれ、家屋であれ、田畑であれ、その場所に落雷したならば、その関わりのある人々は鶏や豚を差し出して、雷の精霊に捧げなければならない。」

(3) **báy ǹná ɕəwà thèʔ seŋ ʔay ɕərà kóʔ gəkhòŋ-ɕəwà məre-ɕəwà thèʔ**
again ABL public COM related NMLZ place LOC village-public large.village-public COM
seŋ ʔay ɕərà kóʔ byin wà jaŋ məre-ɕəwà ʔè ʔù-wàʔ ɕòʔ
related NMLZ place LOC happen come when large.village-public NOM fowl-hog draw.out
ǹná múʔ-nát phéʔ jòʔ káw rà ʔay.
ABL thunder-spirit ACC give away need TAM
「また、公共の場所、村落や村落群の公共の場所に落雷が起きたならば、村人一般が鶏や豚を差し出して、雷の精霊に捧げなければならない。」

(4) **ráy ǹná gəday mùŋ n-seŋ ʔay ɕərà kóʔ gəday mùŋ gəday mədùʔ ń-ŋâ**
COP ABL who also NEG-related NMLZ place LOC who also who host NEG-live
ʔay ɕərà kóʔ thìm jaŋ gəday mùŋ gəday ń-mû jəphày ǹná ʔədzîm ɕà tòn
NMLZ place LOC strike when who also who NEG-see feign ABL quietly only put
dá màʔ ʔay.
put PL TAM
「そして、誰も関係がない場所、誰も持ち主がいない場所に落雷したならば、誰も見なかったふりをして、静かに置いておく。」

(5) **nday kóʔ ʔè tíʔnaŋ thèʔ n-seŋ ʔay ʔnâŋ kóʔ múʔ ʔəcéʔ say lô nday**
this LOC LOC oneself COM NEG-related NMLZ here LOC thunder strike TAM SFP this
khu byin thô lô ʔlê lô ŋa jaŋ day ɕəga ʔay wà gò lít ŋà
path happen up.there SFP down.there SFP say when that speak NMLZ man TOP burden be
wà ʔay ŋú ʔay khu ce-nà màʔ ʔay.
come TAM say NMLZ path know-hear PL TAM
「ここで、自分と無関係であるここに落雷した！このようになった！あれこれ言ったならば、その言った人に責任が出来たというように皆が理解する。」

(6) **ráy ǹná yíʔ khán mi ráy-ráy gənáŋ ráy-ráy dum-ńtâ khán**
COP ABL swidden vicinity one COP-RED where COP-RED granary-house vicinity
ráy-ráy tíʔnaŋ thèʔ seŋ ʔay kóʔ múʔ thìm múʔ ʔəcéʔ wà jaŋ day
COP-RED oneself COM related NMLZ LOC thunder strike thunder strike come when that
seŋ-ʔàŋ ʔay ni ʔù-wàʔ ɕòʔ ǹná day múʔ-nát phéʔ jòʔ káw
related-be.in.line.with NMLZ PL fowl-hog draw.out ABL that thunder-spirit ACC give away
màʔ ʔay.
PL TAM
「そして、焼畑の近くであれ、どこであれ、家屋の近くであれ、自分と関係がある場所に落雷したならば、その関係する人々は鶏や豚を差し出して、その雷の精霊に捧げる。」

(7) **múʔ jòʔ ʔay ʔətèn ləkhôŋ ʔlàŋ jòʔ rà ʔay.**
thunder give NMLZ time two time give need TAM
「雷に供物を捧げる際は二回捧げなければならない。」

(8) **múʔ ʔəcéʔ ʔay tèn ǹnan ráy jaŋ gò múʔ-tsiŋ jòʔ ʔay ŋú ǹná sa jòʔ**
thunder strike NMLZ time new COP when TOP thunder-raw give TAM say ABL go give
káw màʔ ʔay.
away PL TAM
「落雷したのが初めてである場合は、生の雷を捧げると言って供物を捧げる。」

(9) **nday ɕəlóy ʔè məɕà jəkhum mənaŋ məray krúʔ ráy yàŋ ráy na.**
this when LOC person complete friend CLF six COP if COP IRR
「この時は人を集めて、友人六人かもしれない。」

(10) **məli ɕà gò ń-lû gəlo ʔay.**
four only TOP NEG-get do TAM
「四人だけではできない。」

(11) **məray krúʔ ráy-ráy mətsát ráy-ráy ɕi ráy yàŋ ráy ɕí-ləkhôŋ ɕí-məli ɕí-krúʔ ráy**
CLF six COP-RED eight COP-RED ten COP if COP ten-two ten-four ten-six COP

yàŋ ráy məçà gùp-gùp sa ǹná wàʔ-jù jòʔ ʔù-jù jòʔ ʔù-dì ni ŋá-jəkhróʔ
if COP person doubled-RED go ABL hog-burn give fowl-burn give fowl-egg PL fish-dry
ni tsáʔkhu ni thèʔ ʔətsôm-ʔəkòm di ǹná səbuŋ ŋú ʔay nát-khuŋrì jùŋ
PL fermented.liquor PL COM well-COUP do ABL *săbung* say NMLZ spirit-altar fix
ǹná jòʔ káw màʔ ʔay.
ABL give away PL TAM
「六人であれ、八人であれ、十人であるかもしれない、十二、十四、十六であるかもしれない、たくさんの人で行って、焼いた豚や鶏を捧げ、卵や乾し魚、醸造酒などで十分にして、*săbung* と呼ばれる祭壇を作り捧げる。」

(12) **nday múʔ jòʔ ʔay çəní ʔè day gəthòŋ ná ńtâ-thìŋgo ni gəthòŋ-məçà ni**
this thunder give NMLZ day LOC that village GEN house-family PL village-person PL
yòŋ nát nàʔ ʔay ŋú ʔay dum-ńtâ kóʔ ʔədzîm çà ŋà màʔ ʔay.
all spirit avoid TAM say NMLZ granary-house LOC quietly only stay PL TAM
「この雷に供物を捧げた日は、その村の家族や村人達は皆、精霊を忌むと言う家で安静にする。」

(13) **nday phéʔ nát nàʔ ʔay ŋú ʔay.**
this ACC spirit avoid TAM say TAM
「これを精霊を忌むと呼ぶ。」

(14) **çənáʔ dèʔ múʔ sa jòʔ ʔay ni nát jòʔ ʔay ni ŋút ʔay phaŋ nát koy**
night ALL thunder go give NMLZ PL spirit give NMLZ PL finish NMLZ after spirit shun
say ŋú ʔay çəlóy çèʔ bùŋlì báy gəlo màʔ ʔay.
TAM say NMLZ when indeed work again do PL TAM
「夜に雷に供物を捧げた人々がお供えなどが終わった後、精霊が静まったと言った時初めて、(通常の) 仕事を再びする。」

(15) **ráy ǹná nday múʔ jòʔ sa ʔay məçà ni thèʔ lam kóʔ məçà n-may khrúm**
COP ABL this thunder give go NMLZ person PL COM road LOC person NEG-be.okay meet
ʔay.
TAM
「そして、この雷に供物を捧げに行った人々と人は道で会ってはならない。」

(16) **məçà ni rày ń-khrúm na mətu sa wà**
person PL yet NEG-meet NMLZ for go come
「(捧げに行った) 人々は (他の人と) まだ会わないように行き…」

(17) **sa wà lèt gò day dərám ń-rê.**
go come while TOP that about NEG-COP
「行くときはそれほどでもない。」

(18) **wà lèt gò grày ɕəʔúp rà ʔay.**
return while TOP very stupefy need TAM
「帰るときには (特に) 慎まなければならない。」

(19) **lam khán məɕà thèʔ ń-khrúm na mətu thô ɕoŋ kóʔ ʔè la ləŋây phéʔ**
road vicinity person COM NEG-meet NMLZ for up.there before LOC LOC man one ACC
dàt dá rà ʔay.
release put need TAM
「道で人と会わないように、ずっと前の方に男一人を (見張りに) 行かせておかなければならない。」

(20) **nday la ləŋây phéʔ dàt ʔay phéʔ ləŋây-wà gəŋáʔ sa wà ʔay mù jaŋ**
this man one ACC release NMLZ ACC one-person shake go come NMLZ see when
gəday ráy tíʔ mùŋ lam məkaw dèʔ məkoy màt rà ʔay.
who COP but also road beside ALL hide lost need TAM
「この男一人を行かせたのを歩いてきたある人物が見たならば、誰であれ (見た人は) 道の傍に隠れなければならない。」

(21) **man n-may ɕəyoŋ ʔay.**
face NEG-be.okay turn.toward TAM
「顔を向けることはできない。」

(22) **nday məɕà ni thèʔ khrúm jaŋ nát jòʔ ʔay thèʔ nát múʔ jòʔ ʔay wà**
this person PL COM meet when spirit give NMLZ COM spirit thunder give NMLZ man
thèʔ khrúm jaŋ múʔ-nát phéʔ ɕút ʔay ŋú ǹná grày khrìt màʔ ʔay.
COM meet when thunder-spirit ACC mistake TAM say ABL very fear PL TAM
「この人々と出会ったならば、精霊に供物を捧げた人、精霊、雷に供物を捧げた人と出会ったならば、雷の精霊を誤ったと言って大変恐れる。」

(23) **ráy ǹná phaŋ ná ʔlàŋ gò múʔ ɕənay ʔay ŋú ʔay.**
COP ABL after GEN time TOP thunder cause.to.be.spiritless TAM say TAM
「そして、(上述の生の雷を捧げる儀礼の) 次 (にすること) は雷の勢いをなくすと言う。」

(24) **grày náʔ wà say ɕoŋ-ɕəniŋ ná yíʔ dèʔ ráy-ráy məli-məŋa-niŋ ná yíʔ**
very long come TAM before-year GEN swidden ALL COP-RED four-five-year GEN swidden
dèʔ ráy-ráy phaŋ dèʔ məcíʔ-məkóʔ byin ʔay nìŋwót wòt yu yàŋ nánthe
ALL COP-RED after ALL sick-COUP happen NMLZ soothsayer divine look if you.PL
mòy múʔ n-ɕənay ʔay ŋa ʔay.
before thunder NEG-cause.to.be.spiritless TAM say TAM
「大変時間の経った前年の焼畑であれ、四五年の焼畑であれ、後に病気が発生したのを占ってみれば、(占い師は) あなた方が昔、雷の勢いをなくす儀式を行わなかった (ためだ)

と言った。」

(25) **múʔ-tsiŋ ɕà jòʔ dá ʔay.**
thunder-raw only give put TAM
「生の雷の儀式しか捧げていない。」

(26) **múʔ ɕənay rà nítday ŋú ʔay kóʔ ǹná gò múʔ sa jòʔ rà ʔay.**
thunder cause.to.be.spiritless need TAM say NMLZ LOC ABL TOP thunder go give need TAM
「(占い師が) 雷の勢いをなくさなければならないと言って、(人々は) 雷の精霊に供物を捧げなければならなかった。」

(27) **ráy ǹná nday jìŋphòʔ-məɕà ni gò tíʔnaŋ thèʔ seŋ ʔay ɕərà mi kóʔ múʔ ʔəcéʔ jaŋ grày ɕəreŋ ʔay khu ǹná jòʔ jaw káw màʔ ʔay rê.**
COP ABL this Jingpho-person PL TOP oneself COM related NMLZ place one LOC thunder strike when very make.it.serious NMLZ path ABL give offer away PL NMLZ COP
「そして、ジンポー人は自分と関係する任意の場所に落雷があったならば、大変深刻に供物を捧げるのだ。」

(28) **mùŋkàn ná gəgà ʔəmyú ni gənìŋ ráy màʔ ʔay gò ń-səgòn lù ʔay.**
world GEN other race PL how COP PL NMLZ TOP NEG-research get TAM
「世界の他民族がどうであるかは調べられていない。」

(29) **ráy tîm jìŋphòʔ-məɕà ni gò nday khu múʔ phéʔ ɕəreŋ ʔay khu jòʔ màʔ ʔay.**
COP but Jingpho-person PL TOP this path thunder ACC make.it.serious NMLZ path give PL TAM
「しかしながら、ジンポー人はこのように雷を深刻に捉えて供物を捧げる。」

記号・略号

ABL	Ablative	NEG	Negative
ACC	Accusative	NMLZ	Nominalizer
ALL	Allative	NOM	Nominative
CLF	Classifier	PL	Plural
COM	Comitative	RED	Reduplicant
COP	Copula	SFP	Sentence-final particle
GEN	Genitive	TAM	Tense-aspect-mood
IRR	Irrealis	TOP	Topic
LOC	Locative		

参考文献

戴慶厦 (2012)『景頗語参考語法』北京: 中国社会科学出版社.

戴慶厦・徐悉艱 (1992)『景頗語語法』北京: 中央民族学院出版社.

Dalton, Edward T. (1872) *Descriptive Ethnology of Bengal*. Calcutta: Government of Bengal.

Gilhodes, Charles. (1922) *The Kachins: Religion and Customs*. Calcutta: Catholic Orphan Press.

Hanson, Olaf. (1896) *A Grammar of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.

Hanson, Olaf. (1913) *The Kachins: Their Customs and Traditions*. Rangoon: American Baptist Mission Press.

Kurabe, Keita. (2012) Jingpho dialogue texts with grammatical notes. *Asian and African Languages and Linguistics* 7: 121–53.

Matisoff, James A. (2013) Re-examining the genetic position of Jingpho: Putting flesh on the bones of the Jingpho/Luish relationship. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 36.2: 15–95.

吉田敏浩 (2011)「カチン世界」伊東利勝編『ミャンマー 概説』475–538. 東京: めこん.

奄美喜界島志戸桶方言の談話資料*

白田理人
京都大学／日本学術振興会

1　はじめに

奄美喜界島方言 (以下喜界島方言) は、鹿児島県大島郡喜界町（以下地図[1]参照）で話されている、琉球諸語に属する方言である。琉球諸語が話される他の地域と同様、日本語へのシフトが進行しており、喜界島方言の話者はそのほとんどが日本語とのバイリンガルである。伝統的な方言は若い世代には継承されておらず、流暢な話者は主に 50 代以上に限られる。2014 年 8 月 31 日現在の人口は町全体で 7,621 人（志戸桶集落 510 人)[2]であるが、伝統的な方言の話者はより少なく見積もられる。本稿は北部の志戸桶集落で話される方言（以下志戸桶方言）による自然談話と歌謡に語釈と日本語訳を付け、言語資料としてまとめたものである。以下、2 節で本稿で用いる表記について述べ、3 節で談話資料を示す。

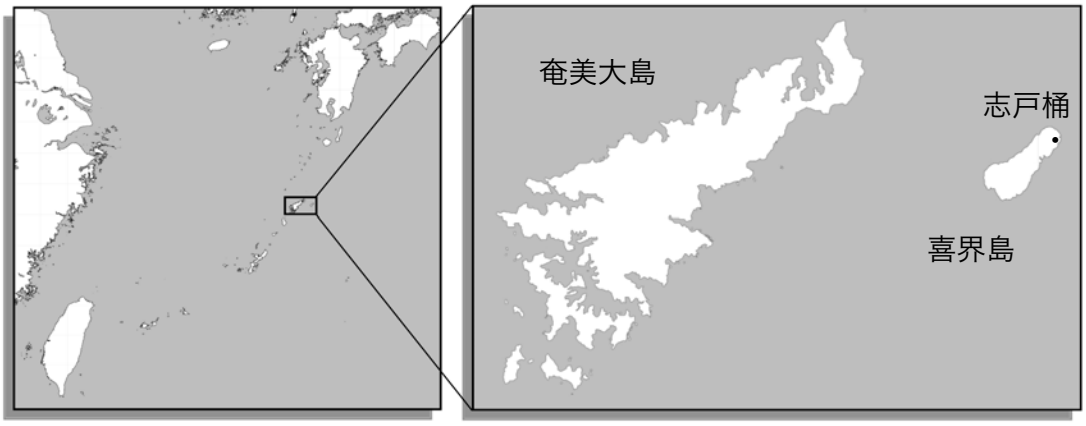


図 1　喜界島／志戸桶集落の位置

2　本稿で用いる表記

次頁に志戸桶方言の音素目録と本稿で便宜的に用いる表記を示す。[ ] 内は音声実現である。説明の便宜のため、音節構造も併せて示す。

* 本研究は平成 24〜26 年度 JSPS 科研費 24·6463「喜界島方言を中心とする琉球語の記述的・歴史的研究」の助成を受けている。

[1] 本稿では、国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard 氏が作成した地図を適宜加筆・編集して用いている。

[2] 喜界町役場発行の資料に基づく。

- 音素目録：
  - 閉鎖音: /p/[p~pˀ], /b/, /t/[t~tˀ], /tʰ/, /d/, /k/[k~kˀ], /kʰ/, /g/
  - 破擦音: /p͡ɸ/[p͡ɸ~ɸ], /t͡s/[t͡s~t͡ɕ~t͡sˀ~t͡ɕˀ], /dz/[d͡z~z~d͡ʑ~ʑ],
  - 摩擦音: /s/[s~ɕ], /h/
  - 鼻音: /m/, /n/[n~m~ŋ~ɴ], /ŋ/
  - 弾音: /ɾ/
  - 半母音：/w/, /j/
  - 母音：/i/, /e/[ɛ], /a/[ɑ̟], /o/[ɔ], /u/
- 表記：*p'* = 語幹初頭単子音の/p/, *t'* = 語幹初頭単子音の/t/, *th* = /tʰ/, *k'* = 語幹初頭単子音の/k/, *kh* = /kʰ/, *g* = /g/, *f* = /p͡ɸ/, *c'* = 語幹初頭単子音の/t͡s/, *c* = それ以外の/t͡s/, *z* = /d͡z/, *g̃* = /ŋ/, *r* = /ɾ/ *'V* = 語幹初頭母音
- 音節構造：$(C_1)(S)V_1(V_2)(C_2)$
- 補足説明：
  - 無声閉鎖音の無気／有気は語幹初頭のみで対立し、その他の位置では無気音が現れる。無気音は喉頭の緊張を伴うことがある。
  - 語幹初頭母音は声立てに [ˀ] を伴う。
  - 音節構造の S には/j/, /w/が分布し、それぞれ先行する C_1 を口蓋化／唇音化する[3]。
  - /s/, /t͡s/, /d͡z/は母音/i/, 半母音/j/の前で口蓋化して歯茎硬口蓋音で実現する。
  - 音節末子音 C_2 には、阻害音と鼻音が分布するが、調音点の対立を持たず、後続する子音と同じ調音点の子音しか現れない。語末子音は鼻音に限られる。本稿では音節末鼻音について自立語末では *n*(=/n/) を、それ以外では音声実現に応じて *m*(=/m/), *n*(=/n/), *g̃*(=/ŋ/) を用いて表記する。

3　志戸桶方言の談話資料

本節で記述する談話は、2014 年 12 月及び 2015 年 1 月に収録された志戸桶南部出身・在住の 80 代後半女性 α、志戸桶東部出身・在住の 70 代後半女性 β, γ の会話の一部と歌である[4]。(I) は結婚に関する話、(II) は結婚と恋愛に関する歌、(III) は方言に関する話、(IV) は（主に正月の）料理に関する話である。

一行目に本稿が採用している表記法による音韻表記と形態素境界、二行目に形態素ごとのグロス 、三行目に日本語訳を記している。グロスの略記については巻末を参照されたい。発話ターンの交替や言いよどみで発話が途切れた箇所は.. で示している。< >内は日本語へのコードスイッチングが見られた部分である[5]。(..) は聞き取り不能箇所である。

[3] CjV の V には前舌母音も分布する（eg. /amji/ 「網」 cf. /ami/ 「雨」）。

[4] 志戸桶集落（方言名 *sii*[ɕiː]）は行政区分上南部（方言名 *fee*[p͡ɸɛː]）と東部（方言名 *njisi*[nʲiɕi]）に分かれる。なお、*fee*, *njisi* はそれぞれ「南」、「北」を意味する。

[5] 基本的には句より大きな単位で日本語を用いた場合にコードスイッチングと判断している。< >で示した部分以外に、話者が方言語形でないと判断した箇所もあるが、特に区別せず示している。

(I) 結婚に関する話

(1) α *mukasee juinoo=tcjee nee-raa jaa*
昔.TOP 結納=QUOT.TOP ない-NEG.NPST DSC
昔は、結納というのはないよね

(2) α *'anoo fudukoo+zee*[6]*=zi muraaw-at-ti 'assissi 'atammai=nu*
DSC フドゥコーゼー (lit. 懐 + 酒)=LOC 貰う-PASS-SEQ CONJ 本式=GEN
khjekkonsikji+ssi=kara=nji=du 'issu=nji k'uras-u-tar-u jaa
結婚式 + する.SEQ=ABL=LOC=FOC 一緒=LOC 暮らす-HAB-PST-EMPH DSC
フドゥコーゼーで貰われて、そして、本式の結婚式をして初めて一緒に暮らしていたね

(3) γ *soo 'assi 'assi jaa*
そう そう そう DSC
そうね

(4) γ *jappai fudukoo+zee=tci 'i-ju-soo jappai*
やっぱり フドゥコーゼー (lit. 懐 + 酒)=QUOT 言う-NPST-NMLZ.TOP やっぱり
see=ba hora nai khjansa=ka sagg̃oobjin=ka..
酒=ACC DSC 少し いくら=Q 三合瓶=Q
やっぱりフドゥコーゼーっていうのは、やっぱり、酒をほら、少し、いくらか、三合瓶か..

(5) α *sagg̃oobjin=tu..*
三合瓶=COM
三合瓶と..

(6) β *sagg̃oobjin sigg̃oobjin=ka bakkai-naa=nu bjin jaa*
三合瓶 四合瓶=Q ばかり-DISTR=GEN 瓶 DSC
三合瓶、四合瓶かばかりずつの瓶ね

(7) γ *mut-ci.. mut-ci 'i-zi..*
持つ-SEQ 持つ-SEQ 行く-SEQ
持って.. 持っていって..

[6] 結婚を決める際に婿になる人の家族が嫁になる人の家を尋ねる儀式。他人に悟られないように、懐に酒などを隠し持っていくため、このように言われる。

(8) α *zjuu=tu jaa*
重=COM DSC
お重とね

(9) γ *'i-zi 'un jaa=zi..*
行く-SEQ その 家=LOC
行って、その家で

(10) α *'annee jo*
予約 DSC
婚約よ

(11) β *mura-i+'uki jo*
貰う-INF+ 受ける.INF DSC
（嫁として）貰い受けるのよ

(12) γ *mura-i+'uki-ju-su zja-roo*
貰う-INF+ 受ける-NPST-NMLZ COP.NPST-INFR
（嫁として）貰い受けるんでしょう

(13) β *mura-i+'uki-ju-su jo 'un jaa=zi*
貰う-INF+ 受ける-NPST-NMLZ DSC その 家=LOC
（嫁として）貰い受けるのよ、その家で

(14) β *zjaisan=nu 'atara-sa=nji 'uja-n-cjaa=ɡa k'jimi-kki-ti*
財産=NOM 惜しい-ADJVZ=CSL 親-LNK-PL=NOM 決める.INF-つける-SEQ
財産が惜しくて親たちが決めて

(15) α *mukasee hinnja=deeru jaa*
昔.TOP みんな=ASS DSC
昔はみんなだよね

(16) γ *mukasee 'assi 'assi*
昔.TOP そう そう
昔はそう

(17) α *mukasee hinnja*
昔.TOP みんな
昔はみんな

(18) γ *duu-naa* *faroozii+duusaa*
REFL-PL 親戚 + どうし
自分たち、親戚どうし

(19) α *soo* *soo* *soo*
そう そう そう
そうそう

(20) β *faroozii-duusaa*
親戚 + どうし
親戚どうし

(21) γ *faroozii+duusaa=mu* *njaa* *musub-as-un=cici* *jaa*
親戚 + どうし=も もう 結ぶ-CAUS-NPST=QUOT DSC
親戚どうしも、もう、結婚させるってね

(22) β *'assi+ssai* *mata* *'anoo* *nee-ran* *jaa=kara*
そう + する. たり また DSC ない-NEG.NPST 家=ABL
'ar-u+jaa=kai *'ik-iba* *njaa* *'uri* *si-rarin=cici*[7]
資産家 (lit. ある-ADN+ 家)=ALL 行く-COND もう それ する-PASS.NPST=QUOT
'i-ci
言う-SEQ
そうしたり、貧しい家から資産家の家に嫁ぐと、それをされる（貧しい家に財産を奪われる）と言って

(23) β *deberu=nu* *'oo-tan* *doo=kai* *jaas-un=cici* *'i-jun* *'uja=mu*
レベル=GEN あう-PST ところ=ALL 遣る-NPST=QUOT 言う-NPST 親=も
wun=cici
いる.NPST=QUOT
レベルの合ったところへ嫁にやるという親もいるって

(24) α *zaisan=nu* *juku* *jo*
財産=NOM 欲 DSC
財産の欲よ

(25) γ *soo* *soo*
そう そう
そうそう

[7] 引用標識=*tci* に動詞*'i-*「言う」の継起形*'i-ci* が融合した形式=*cici* は、引用標識として用いられる。=*tci* と=*cici* の用法上の差異は未詳。

(26) α *mukasee*
昔.TOP
昔は

(27) γ *'assi 'assi 'assi jaa*
そう そう そう DSC
そうそう、そうね

(28) α *duu-naa=nu zaisanoo duu=nu mikka wikka=nji k'uri-jun=ci*[8] *njaa*
REFL-PL=NOM 財産.TOP REFL=GEN 姪 甥=DAT 与える-NPST=QUOT もう
自分たちの財産は、自分の姪、甥にあげるって

(29) γ *k'uri-jun=ci jaa*
与える-NPST=QUOT DSC
あげるってね

(30) α *'uja-n-cjaa=zi k'jimi-ju-tan=mjiri*[9] *jaa*
親-LNK-PL=INST 決める-HAB-PST=CFM DSC
親たちで決めていたよね

(31) γ *'assissi theegee 'ura 'ituku+jin=ɡa 'us-sa-tan=mjiri jaa*
CONJ 大概 DSC いとこ＋縁=NOM 多い-VLZ-PST=CFM DSC
それで、大概いとこ婚が多かったよね

(32) β *'ittuku+jin=ɡa 'assi=dan*
いとこ＋縁=NOM そう=ASS
いとこ婚が、そうだよ

(33) α *soo=tci*[10] *jo*
そう=QUOT DSC
そうよ

(34) γ *'ittuku+jin=ɡa*
いとこ＋縁=NOM
いとこ婚が

[8] *=ci* は子音終わりの語に後接するときに現れる*=tci* の異形態である。
[9] 動詞 *mji-*「見る」の命令形 *mji-ri* から文法化した形式とみられる。
[10] *=tci* には、終助詞としての用法もあるが、機能は未詳である。

(35) β *wannaa* *ja-n-cja=a* *njaa* *sandee* *'ituku=dan*
1.PL.EXCL.GEN 家-LNK-APPR=TOP もう 三代 いとこ=ASS
うちの家なんか三代いとこだよ

(36) α *'assinati* *'uja-n-cjaa=ɡa..* *'uja-n-cjaa=nji* *sakara-ee* *diki-ran=kara*
CONJ 親-LNK-PL=NOM 親-LNK-PL=DAT 逆らう-INF.TOP できる-NEG.NPST=CSL
jaa
DSC
だから、親たちが... 親たちに逆らいはできないからね

(37) β *soo*
そう
そう

(38) α *'uja-n-cjaa=ɡa* *'ik-i=tciba* *njaa* *'i-jun* *thuui* *zjan=mjiri*
親-LNK-PL=NOM 行く-IMP=QUOT. 言う.COND もう 言う-NPST 通り COP.NPST=CFM
'uja-n-cjaa=nu
親-LNK-PL=GEN
親たちが行けって言ったら、もう、言う通りよね、親たちの

(39) γ *huntoo* *'ituku+jin=ɡa* *'us-sa-ti*
本当 いとこ + 縁=NOM 多い-VLZ-PST
本当、いとこ婚が多かった

(40) α *'assi=tci* *jo*
そう=QUOT DSC
そうよ

(41) β *'ituku+jin* *hotondo=deeru* *waacja=n* *sima=zjee*
いとこ + 縁 ほとんど=ASS 1.PL.INCL=GEN 集落=LOC.TOP
いとこ婚 ほとんどだよ、うちの集落では

(II) 結婚・恋愛に関する歌[11]

(42) α *sagõgoobjin=nu kh-jun=doo 'uri 'uki+thu-runa*
三合瓶=NOM 来る-NPST=ASS それ 受ける.INF+ 取る-PROH
三合瓶が来るぞ、それを受け取るな

(43) γ *joisa joisa joisa joi joi*

(44) α *'uri=ba 'uki+thu-riba jare da=du jaras-un=doo wanna=ja*
それ=ACC 受ける.INF-取る-COND 2.SG=FOC 遣る-NPST=ASS 1.APPR=TOP
'ik-an=doo
行く-NEG.NPST=ASS
それを受け取ったらお前を嫁にやるぞ、私は行かないぞ

(45) β *wattari=tci=du 'umu-ti=du wu-tan=mun*
1.DU.INCL=QUOT=FOC 思う-SEQ=FOC 居る-PST=のに
私とあなたと思っていたのに

(46) γ *'uma jaa 'uma jaa makutu=ja 'uma jo*
そこ DSC そこ DSC 真=TOP そこ DSC
そこだね、そこだね、真はそこだ

(47) β *than=ɡa naka jabu-ta-ra 'are wattari=tci=ja 'umu-i=nu*
誰=NOM 仲 破る-PST-INFR 1.DU.INCL=QUOT=TOP 思う-INF=NOM
na-ran=doo
なる-NEG.NPST=ASS
誰が仲を割いたのだろう、私とあなたとは、思いを遂げられないよ

(48) γ *wuzi+biree=mu c'ju+biree jo wuba+biree=mu c'ju+biree*
伯父 + 仕える.INF=も 人 + 仕える.INF DSC 伯母 + 仕える.INF=も 人 + 仕える.INF
たとえ伯父、伯母でも、人に仕えるのは同じこと

(49) α *'uma jo 'uma jo makutu=ja 'uma jo*
そこ DSC そこ DSC 真=TOP そこ DSC
そこだね、そこだね、真はそこだ

(50) γ *'ikanji khuba-sa-ti=mu 'are waa-'uja waa-'uja masar-i*
如何に 固い-VLZ-SEQ=も （掛け声） 1.SG-親 1.SG-親 勝る-INF
どれほど厳しくても、我が親が一番だ

[11] 歌では日常会話と異なる語形（eg. 歌／日常会話 *'ikanji/khjansa*「どれほど」、*khuba-/huba-*「固い」、*masar-i-/masa-i*「勝る」、*wattari/wattai* 1.DU.INCL, *=ɡa~=nu/=ɡa* NOM）がみられる。なお、(43), (46), (49) は方言で *feesi*（囃子）と呼ばれる合いの手である。掛け声にはグロスを振っていない。

(III) 方言に関する話

(51) γ *'un khuru-n-cja=a 'ora waacja=n hoogjen 'a-ti=mu*
その 頃-LNK-APPR=TOP DSC 1.PL.INCL=GEN 方言 COP-SEQ=も
その頃なんかは、ほら、私たちの方言にしても

(52) α *'assi=tci jo jaa hoogjen*
そう=QUOT DSC DSC 方言
そうだよね、方言

(53) γ *hoogjen 'a-ti=mu k'a-n-cjaa mago-n-cjaa=ja 'ujafa-n-cjaa=tu 'issu=nji*
方言 COP-SEQ=も 子-LNK-PL 孫-LNK-PL=TOP 祖父母-LNK-PL=COM 一緒=LOC
s-un=kara
する-NPST=CSL
方言にしても、子供たち、孫たちは、祖父母たちと一緒にするから

(54) α *soo*
そう
そう

(55) γ *waka-jun=khjedo njama=nu k'a-n-cjaa=ja njaa zenzen hoogjen*
分かる-NPST=けど 今=GEN 子-LNK-PL=TOP もう 全然 方言
waka-ran=mjiri jaa
分かる-NEG.NPST=CFM DSC
分かるけど、今の子供たちはもう全然方言分からないよね

(56) α *waka-ran..*
分かる-NEG.NPST
分からない..

(57) γ *wannaa.. wannaa X-taa=ja theegee=ja mani s-un=doo wa*
1.PL.EXCL.GEN 1.PL.EXCL.GEN PN-APPR=TOP 大概.TOP 真似 する-NPST=ASS DSC
うちの X（γ の孫）なんかは大概は真似するよね

(58) γ *wanoo njaa hoogjen=zi bakkai=du s-un=kara*
1.SG.TOP もう 方言=INST ばかり=FOC する-NPST=CSL
私は方言でばかり話すから

(59) α *'assinati duu-naa=mu hoogjen=zi k'a-ram-ba 'ik-an-su jo*
CONJ REFL-PL=も 方言=INST 使う-NEG-COND いける-NEG.NPST-NMLZ DSC
だから自分たちも方言で使わないといけないのよ

(60) β *k'a-ram-ba 'ik-an-su jo*
使う-NEG-COND いける-NEG.NPST-NMLZ DSC
使わないといけないのよ

(61) γ *wanoo hoogjen=zi bakkai=du s-ui*
1.SG.TOP 方言=INST ばっかり=FOC する-NPST
私は方言でばかり話す

(62) α *njama=nu c'ju-n-cjaa=ja hoogjen k'a-radana jattukattu..*
今=GEN 人-LNK-PL=TOP 方言 使う-NEG.CSL 無理して
今の人たちは方言を使わないから、無理して..

(63) β *mago-n-cjaa=mu waka-raa k'a-i juu si-raa*
孫-LNK-PL=も 分かる-NEG.NPST 使う-INF POT する-NEG.NPST
孫たちも分からない、使えない

(64) α *jattukattu fucuugo k'a-ran=dimu jaa*
無理して 普通語 使う-NEG.NPST=CONC DSC
無理して共通語を使わなくてもね

(65) γ *soo soo soo soo*
そう そう そう
そうそう

(66) α *hoogjen=zi si-riba hoogjen 'ucu-ju-su zjan=mun*
方言=INST する-COND 方言 分かる-NPST-NMLZ COP.NPST=のに
方言ですれば方言が分かるのに

(67) β *'assinati wanoo wannaa thoocjanoo mata mago-n-cjaa=nji 'oo-ci*
CONJ 1.SG.TOP 1.PL.EXCL 父ちゃん.TOP また 孫-LNK-PL=DAT 合わせる-SEQ
jari fucjuugo=bee k'a-jun=kara
たくさん 普通語=RESTR 使う-NPST=CSL
だから私は、うちの父ちゃんはまた孫たちに合わせてたくさん共通語ばかり使うから

(68) β *'akikiki 'assi suu-ti fucjuugo k'a-jun cju=ja suba-n-cja*
INTJ そう する.PROG-SEQ 普通語 使う-NPST 人=TOP 舌-LNK-APPR
k'jikk-jui (..)
噛む-NPST ??
「あらあら、そうやって共通語を使う人は舌なんか噛んでしまう」

(69) β *sima+jumita si-ri jaa=cici wanoo njaa wazjaatu wanjaaku+ssi*
集落 + ことば する-IMP DSC=QUOT 1.SG.TOP もう 敢えて 冗談 + する.SEQ
'ari si-riba jo
あれ する-COND DSC
「方言使いなさい」って、私は敢えて冗談を言って、あれするとね

(70) β *baacjan waka-ju-su=dan=cici mata mago-n-cjaa=ja henzi*
ばあちゃん 分かる-NPST-NMLZ=ASS=QUOT また 孫-LNK-PL=TOP 返事
s-u-su jo jaa
する-NPST-NMLZ DSC DSC
「ばあちゃん、分かるのよ」って、また孫なんかは返事するのよね

(71) α *'ee <soojone>*
RESP そうよね
ああ、そうよね

(72) β *'in jo hoogjen waka-ju-su=dan=ci*
RESP DSC 方言 分かる-NPST-NMLZ=ASS=QUOT
うん、「方言分かるのよ」って

(73) α *'assi jo*
そう DSC
そうよ

(74) β *'assinati k'a-ti mji-ri=cici 'i-riba*
CONJ 使う-SEQ みる-IMP=QUOT 言う-COND
だから「使ってみなさい」って言うと

(75) β *mun kham-a-ci thaboo-ri=cici 'i-ri=tciba mun*
もの 食べる-CAUS-SEQ 下さる-IMP=QUOT 言う-IMP=QUOT. 言う.COND もの
kham-a-ci thaboo-ri
食べる-CAUS-SEQ 下さる-IMP
「食べ物を食べさせてください」って言いなさいって言うと、「食べ物を食べさせてください」

(76) β *'uma-sa-ti=na=tci* *'i-cja-riba* *'uma-sa-tan=doo=cici* *'i-cjai* *jaa*
旨い-VLZ-PST=YNQ=QUOT 言う-PST-COND 旨い-VLZ-PST=ASS=QUOT 言う-たり DSC
t'it~t'icu *hoogjen=ɡ̃a* *k'a-i+diki-jun=doo* *jaa*
一つ~RED 方言=GEN 使う-INF+ できる-NPST=ASS DSC
「美味しかったか」って言ったら「美味しかったよ」って言ったりね、一つ一つ方言が使えるよね

(77) α *'anoo* *hoogjenoo* *k'a-ee* *diki-raa* *jaa*
DSC 方言.TOP 使う-INF.TOP できる-NEG.NPST DSC
方言は使うことはできないね

(78) γ *k'a-ee* *diki-raa*
使う-INF.TOP できる-NEG.NPST
使うことはできない

(79) α *k'a-ee* *diki-raa* *wanna=ja..*
使う-INF.TOP できる-NEG.NPST 1.PL.EXCL=TOP
使うことはできない、うちは..

(80) γ *sumi-riba* *c'jotto* *'akusento=ɡ̃a* *nama~nama*
させる-COND ちょっと アクセント=NOM なかなか~RED
させるとちょっとアクセントが、なかなか

(81) α *'in* *na-tu-raa*
RESP なる-PROG-NEG.NPST
うん、なっていない

(82) γ *na-ran=mjiri*
なる-NEG.NPST=CFM
できないよね

(83) α *'in* *na-tuu-ran=mjiri*
RESP なる-PROG-NEG.NPST=CFM
うん、なっていないよね

(84) γ *'assi* *'ora* *njama=a* *waacja=n* *c'joo=zi=mu* *jaa*
そう DSC 今=TOP 1.PL.INCL=GEN 町=LOC=も DSC
そしてほら、今はうちの町でもね

(85) α *soo=tci* *jo*
そう=QUOT DSC
そうよ

(86) γ *<hoogjenwo c'ukaimasjoo> zjan=mjiri*
方言を 使いましょう COP.NPST=CFM
「方言を使いましょう」だよね

(87) α *fukkacu jaa*
復活 DSC
復活ね

(88) γ *'assi zjan=mun naka~naka*
そう COP.NPST=のに なかなか~RED
それなのになかなか

(89) β *sjoogakkoo=nu thukjee hoogjen k'a-riba 'abidan fuda*
小学校=GEN 時.TOP 方言 使う-COND 大きな 札
fak-as-at-ti
身に付ける-CAUS-PASS-SEQ
小学校の時は方言を使うと大きな札を付けさせられて

(90) β *<watasiwa hoogjenwo c'ukaimasita>=cici 'i-jun fuda*
私は 方言を 使いました=QUOT 言う-PROG.NPST 札
fak-as-at-ti
身に付ける-CAUS-PASS-SEQ
「私は方言を使いました」って言う札を付けさせられて

(91) β *c'ugji=nu c'ju=ba mikki-jun=ciba naka~naka*
次=GEN 人=ACC 見つける-NPST=QUOT. 言う.COND なかなか~RED
mikki-ra-raa
見つける-POT-NEG.NPST
次の人を見つけるって言うとなかなか見つけられない

(92) γ *mikki-ran=madi duu=ja fa-cjuu-ram-ba*
見つける-NEG.NPST=LMT REFL=TOP 身に付ける-PROG-NEG-COND
'ik-an=mjiri
いける-NEG.NPST=CFM
見つかるまで自分は付けていないといけないよね

(93) β *fa-cjuu-ram-ba* *'ik-aa* *jaa=kai* *khjii=nji* *wanoo*
身に付ける-PROG-NEG-COND いける-NEG.NPST 家=ALL 来る.NMLZ=LOC 1.SG.TOP
thocjuu=zi *thu-ti* *thisagi-n-naa* *hammi-ju-tan=dan*
途中=LOC 取る-SEQ 手提げ-LNK-中 隠す-HAB-PST=ASS
付けていないといけない、家へ帰る時に私は途中で取って手提げの中に隠していたよ

(94) α *jaa=kai=g̃ari* *na*
家=ALL=LMT YNQ
家までなの

(95) β *jaa=kai=g̃ari* *jaa*
家=ALL=LMT DSC
家までだね

(96) γ *njaa* *c'ju* *mikki* *juu* *si-ran=kara* *jo* *wa*
もう 人 見つける.INF POT する-NEG.NPST=CSL DSC DSC
もう人を見つけられないからよね

(97) β *mata* *jig̃g̃a+warabi-n-cjaa=ja* *jo* *hoogjen* *k'a-ti=mu* *<'anta* *hoogjen>*
また 男 + 子-LNK-PL=TOP DSC 方言 使う-SEQ=も あんた 方言
k'a-ta=g̃a=cici *'i-ci* *fak-as-un=ciba*
使う-PST=ASS=QUOT 言う-SEQ 身に付ける-CAUS-NPST=QUOT. 言う.COND
fak-an-su *jaa*
身に付ける-NEG.NPST-NMLZ DSC
また男の子たちはね、方言使っても「あんた方言使ったよ」って言って付けさせようとしても付けないのよね

(98) γ *baba* *zja-roo* *wa*
嫌 COP.NPST-INFR DSC
嫌なんだろうね

(99) β *baba=cici* *jaa* *'assinati* *duu=g̃a* *njaa* *njisanci=mu* *wanoo* *mut-cjan*
嫌=QUOT DSC CONJ REFL=NOM もう 二三日=も 1.SG.TOP 持つ-PST
khutu=g̃a *'a-i*
こと=NOM ある-NPST
嫌だってね、だから自分がもう二三日も私は持ったことがある

(100) γ *'agee*
INTJ
あらまあ

(101) β *'assinati 'aree 'ik-an-tan=doo*
CONJ あれ.TOP いける-NEG-PST=ASS
だから、あれはよくなかったよ

(102) β *nuu 'a-ta-su=ka*
何 COP-PST-NMLZ=Q
なんだったのか

(103) γ *zidai zidai=tci jaa*
時代 時代=QUOT DSC
時代時代ってね

(104) α *zidai zidai=tci jaa*
時代 時代=QUOT DSC
時代時代ってね

(105) γ *njama=a <hoogjen c'ukaimasjoo>=tci*
今=TOP 方言 使いましょう=QUOT
今は「方言を使いましょう」って

(106) β *njama 'anoo suupaa 'i-zjai 'ura 'assun madoguci 'i-zjai*
今 DSC スーパー 行く-たり DSC あんな 窓口 行く-たり
s-un thukjee njaa hinnja=ɡa hinnja 'anoo fucjuugo=bee
する-NPST 時.TOP もう みんな=NOM みんな DSC 普通語=RESTR
zja-roo
COP.NPST-INFR
今スーパーに行ったり、ほら、ああいう窓口行ったりする時はもうみんながみんな共通語ばかりでしょう

(107) γ *'in 'in 'in*
RESP RESP RESP
うんうんうん

(108) β *wanoo 'uma=ara wazjaatu hoogjen k'a-ju-su jo*
1.SG.TOP ここ=ABL 敢えて 方言 使う-NPST-NMLZ DSC
私はこちらから敢えて方言を使うのね

(109) β *kh-jee-ra wannoo 'assi s-innja=du kh-jee-tan mun den=ɡ̃a*
来る-POL-INT 1.SG.TOP そう する-PURP=FOC 来る-POL-PST FN COP.POL.NPST=ASS
thamm-jee-ra=tci 'i-cja-riba haa=cici 'i-jun=kara=nji
頼む-POL-INT=QUOT 言う-PST-COND RESP=QUOT 言う-NPST=CSL=LOC
「お邪魔します。私はこれこれしに来ました。お願いします。」って言ったら「はあ？」って言うから

(110) β *<'anta simano hitozja nainone>=tciba <simano hitojo>=cici*
あなた 島の 人じゃ ないのか=QUOT. 言う.COND 島の 人だよ=QUOT
'i-jun=kara
言う-NPST=CSL
「あなた島の人じゃないのか」って言うと「島の人だよ」って言うから

(111) β *sima=nu+tcjoo sima+jumita=mu k'ji-cjuu-ran=mun*
島=GEN+ 人.TOP 島 + ことば=も 聞く-PROG-OBLG(lit.-NEG.NPST=FN)
naraa-ran=mun=cici..
習う-OBLG(lit.-NEG.NPST=FN)=QUOT
「島の人は方言も聞いていないと、習わないと」って..

(112) β *'assi 'i-riba njaa jappai jo sima=nu+tcju=ka thabji=kara thenkjin*
そう 言う-COND もう やっぱり DSC 島=GEN+ 人=Q 内地=ABL 転勤
sit-cjun c'ju=ka=ɡ̃a sugu waka-ju-su jaa
する-てくる.PROG.NPST 人=Q=NOM すぐ 分かる-NPST-NMLZ DSC
そう言うと、やっぱりね、島の人か内地から転勤してきている人かがすぐ分かるのね

(113) β *sima+jumita k'a-riba*
島 + ことば 使う-COND
方言を使うと

(IV) 正月料理に関する話

(114) α *sjoogacu=tciba njaa buta+jak-ji=kara hazimari jo waacja=n*
正月=QUOT. 言う.COND もう 豚 + 焼く-INF=ABL 始まり DSC 1.PL.INCL=GEN
sima=a
集落=TOP
正月といえば豚焼きから始まりだよ、うちの集落は

(115) α *zentoo khakko njaa buta k'anaa-tu-ti fjakkjin+buta=cici jaa*
全島 各戸 もう 豚 飼う-PROG-SEQ 百斤 + 豚=QUOT DSC
全島各戸豚を飼っていて、百斤豚（百斤目以上の重さが有る豚）ってね

(116) α *'assissi ja-ci sjoogacu+zjumbji s-u-ta-su zja=ɡa*
CONJ 焼く-SEQ 正月 + 準備 する-HAB-PST-NMLZ COP.NPST=ASS
そして焼いて正月準備をしていたんだよ

(117) β *njaa wuna-n-daci-i+jaa=du buta k'ana-i juu*
もう 母子家庭 (lit. 女-LNK-立つ-INF-CM+ 家)=FOC 豚 飼う-INF POT
sir-aa
する-NEG.NPST
母子家庭だけ豚を飼えない

(118) β *hotondo 'ikkjen~'ikkjen buta k'anaa-tu-ti sjoogacu fasuka+mukoo*
ほとんど 一軒~RED 豚 飼う-PROG-SEQ 正月 二十日 + 向こう
na-riba njaa 'an jaa 'un jaa buta k'jii~k'jii[12]
なる-COND もう あの 家 この 家 豚 OMP~RED
ほとんど一軒一軒豚を飼っていて、正月二十日以降になるともうこの家もあの家も豚がキーキー（鳴く）

(119) β *njizjuugonci=madi=njee jak-ji+'uwa-jui*
二十五日=LMT=LOC.TOP 焼く-INF+ 終わる-NPST
二十五日までには焼き終わる

[12] 豚を殺す前、逆さ吊りにした時の鳴き声。

(120) γ *njaa 'assi+ssi njaa 'asa=kara k'amma=kara 'an jaa=mu 'un*
もう そう＋する.SEQ もう 朝=ABL 朝=ABL あの 家=も この
jaa=mu buta k'jiik'jii k'jiik'jii nak-a-ci jaa 'assi s-u-ta-su jo
家=も 豚 OMP~RED OMP~RED 鳴く-CAUS-SEQ DSC そう する-HAB-PST DSC
そうやって、もう、朝からあの家もこの家も豚をキーキー鳴かせてね、そうしていたのよ

(121) γ *khaku+'ikkjen~'ikkjen njaa buta k'anaa-ti moo 'ubi-sa-nu..*
各＋一軒~RED もう 豚 飼う-SEQ もう 大きい-VLZ.NPST-ADN
'ubi-san.. thaa-jaa=nu buta=ɡ̃a 'iciban 'ubi-sak=ka=tci
大きい-VLZ.NPST 誰-家=GEN 豚=NOM 一番 重い-VLZ.NPST=Q=QUOT
各一軒一軒豚を飼って、大きい.. 誰の家の豚が一番大きいかって

(122) α *'in soo zja=ɡ̃a 'in 'in*
RESP そう COP.NPST=ASS RESP RESP
うん、そうだよ、うんうん

(123) γ *'assun khutu=mu 'a-ta-su zja=ɡ̃a*
そんな こと=も ある-PST-NMLZ COP.NPST=ASS
そんなこともあったんだよ

(124) β *njaa mata buta khurus-un k'jii~k'jii nak-as-an mee=njee mata*
もう また 豚 殺す-NPST OMP~RED 鳴く-CAUS-NEG.NPST 前=LOC.TOP また
furuu+numjii-naa juu waa-cju-ti
風呂＋いっぱい-LMT 湯 沸かす-PROG-SEQ
豚を殺す、キーキー鳴かせる前には風呂いっぱいまで湯を沸かしていて

(125) β *njaa buta=ɡ̃a njaa jak-ji+'uwa-tan khuroo mata zida=nji ganaa*
もう 豚=NOM もう 焼く-INF+ 終わる-PST 頃.TOP また 地面=LOC 浅い穴
fu-ti=kara wara si-ci
掘る-SEQ=ABL 藁 敷く-SEQ
豚が焼き終わった頃は地面に浅い穴を掘ってから藁を敷いて

(126) β *wara+mussu-u si-ci 'un=ɡ̃a wii=nji buta=ba*
藁＋筵-CM 敷く-SEQ それ=GEN 上=LOC 豚=ACC
foo-ra-ci=kara=njee juu khee-ti khjemukji
腹ばいになる-CAUS-SEQ=ABL=LOC.TOP 湯 かける-SEQ 毛剥き
藁の筵を敷いてその上に豚を腹ばいにさせてから湯をかけて、毛剥き

(127) β *hii+muĝ-ji*
毛 + 剥く-INF
毛剥き

(128) β *'assissi hii+muĝ-ji 'uwa-riba njaa khondoo mata 'umji=kai*
CONJ 毛 + 剥く-INF 終わる-COND もう 今度.TOP また 海=ALL
mut-ci-zi
持つ-ていく-SEQ
そして毛剥きが終わるともう今度はまた海へ持っていって

(129) β *nannjin-naa=zi hatami-ti mut-ci-zi*
何人-DISTR=INST 担ぐ-SEQ 持つ-ていく-SEQ
何人かずつで担いて持っていって

(130) β *fjii-sa fjii-sa*
寒い-ADJVZ 寒い-ADJVZ
寒い、寒い

(131) β *'umji-n-naa 'it-cju-ti buta 'araa-ti*
海-LNK-中 入る-PROG-SEQ 豚 洗う-SEQ
海の中に入っていて豚を洗って

(132) β *wata 'assi+ssi fjira-ci khjura-asa naizoo 'izja-ci 'akka-ti*
腹 そう + する.SEQ 開く-SEQ きれい-ADVLZ 内蔵 出す-SEQ 捌く-SEQ
腹をこうして開いてきれいに内蔵を出して捌いて

(133) β *'unui=nu njaa 'un buta=nu 'abura=ĝa thii=nji k'a-ta=khagjiri njaa*
その時=GEN もう その 豚=GEN 油=NOM 手=LOC 付く-PST=限り もう
hippai=mu fjik-ji=mu na-raa
引っ張り=も 引く-INF=も なる-NEG.NPST
その時の、その豚の油が手に付いたらもう引っ張りも、引くこともできない

(134) β *njaa njaa nabbu-sa*
もう もう すべっこい-ADJVZ
ぬるぬるする

(135) β *'assissi mata jaa=kai mut-cit-ci mata ja-n-mee=nji mussu*
CONJ また 家=ALL 持つ-てくる-SEQ また 庭 (lit. 家-LNK-前)=LOC 筵
fatee-ti 'un=ɡa wii=nji buta nibb-a-ci=kara=njee mata
広げる-SEQ それ=GEN 上=LOC 豚 寝る-CAUS-SEQ=ABL=LOC.TOP また
khoma~goma jari k'ji-jaa-ci
細かく~RED たくさん 切る-ITER-SEQ
そして家へ持ってきて、庭に筵を広げてその上に豚を寝かせてから、また細かくたくさん切り分けて

(136) β *wuna-n-njinzjoo mata naizoo juga-ci wata juga-cjai suu-ti*
女-LNK-PL.TOP また 内蔵 ゆがく-SEQ 腹 ゆがく-たり する.PROG-SEQ
kharazjuui[13]*+sabaku-i*
カラジューイ + 支度する-INF
女たちは内蔵をゆがいて、腹をゆがいたりしていてカラジューイの支度

(137) γ *'assi 'assi 'assi kharazjuui+sabaku-i jaa*
そう そう そう カラジューイ + 支度する-INF DSC
そうそう、カラジューイの支度だね

(138) β *kharazjuui=ba mata buta jak-an jaa=kaee c'ju+sara-naa*
カラジューイ=ACC また 豚 焼く-NEG.NPST 家=ALL.TOP 一 + 皿-DISTR
'iri-ti mata mut-ci-zjai
入れる-SEQ また 持つ-ていく-たり
カラジューイを、豚を焼かない家へ、一皿ずつ入れて持っていったり

(139) γ *'annjii kharajuui=ɡa mata nuu jukka=mu jappai 'uma-sa-ta wa*
あの カラジューイ=NOM また 何 COMPR=も やっぱり 旨い-VLZ-PST DSC
あのカラジューイがまた何よりも、やっぱり、美味しかったね

(140) α *'uma-sa-ti jaa*
旨い-VLZ-PST DSC
美味しかったね

(141) γ *'in 'uma-sa-ti*
RESP 旨い-VLZ-PST
うん、美味しかった

[13] 山羊、豚を使い、内蔵、血を肉や野菜と一緒に煮込んだ料理。

(142) α　*'abidan　sammee+nabi=nji　njaa　deekunii..*
大きな　サンメー＋鍋=LOC　もう　大根
大きなサンメー鍋[14]に大根..

(143) γ　*'agii　huntoo*
INTJ　本当
ああ本当だ

(144) α　*jaa　judi-ti　　'ucii-tu-ti*
DSC　茹でる-SEQ　置く-PROG-SEQ
そうよね、茹でて置いていて

(145) β　*'assissi　mata　jamatu=nji　wu-n　k'wa-n-cjaa-n-nai　　k'wanzjumi*
CONJ　また　内地=LOC　居る　子-LNK-PL-LNK-ところへ　缶詰
s-un=ci　　mata　'aa+mjii+gaci　k'ji-ci　　'oo-cju-ti　　mata
する-NPST=QUOT　また　赤＋身＋がち　切る-SEQ　合わせる-PROG-SEQ　また
fuka=n　nabi=nji　thak-ku-di
他=GEN　鍋=LOC　炊く-??-SEQ
そして、内地にいる子供たちのところへ缶詰するって、赤身がちに切って合わせていて、他の鍋にたくさん炊いて

(146) β　*thak-ku-duu-ti　　mata　'anoo　wazjaatu　'un　thoozjee　k'wanzjumi*
炊く-??-PROG-SEQ　また　DSC　わざわざ　その　当時.TOP　缶詰
'uku-jun=ci　　kharazjuui　　'uku-jun=ci　　k'an~k'an　(..)
送る-NPST=QUOT　カラジューイ　送る-NPST=QUOT　缶~RED
'u-i+juu=ɡ̃a　　'a-tan=nati
売る-INF+用=NOM　ある-PST=CSL
たくさん炊いていて、わざわざ、その当時は、缶詰を送るって、カラジューイを送るって缶々.. 売り用があったから

(147) β　*'un　k'an=ba　hoo-tit-cju-ti　　'ina-sa　　'ubi-sa　　khazoku=nji*
その　缶=ACC　買う-てくる-PROG-SEQ　小さい-ADJVZ　大きい-ADJVZ　家族=DAT
'oow-a-ci　　c'jumi-jaa-ci　　jamatu=kai　'ukuida-ci
合う-CAUS-SEQ　詰める-ITER-SEQ　内地=ALL　送り出す-SEQ
その缶を買ってきていて小さい大きい家族に合わせて詰め分けて内地へ送り出して

[14] 大きめの鍋の名前。

(148) β *'assissi=kara=nji=du mata 'atoo khjura-asa+ssi 'abidanaa haba*
CONJ=ABL=LOC=FOC また あと.TOP きれい-ADVLZ+ する.SEQ 大きく 幅
k'ji-ci k'ji-jaa-ci=kara=nji 'un fji=nji sugu masu=zi 'un-di
切る-SEQ 切る-ITER-SEQ=ABL=LOC その 日=LOC すぐ 塩=INST 埋める-SEQ
そして、後はきれいにして大きく幅（取って）切って、切り分けてからその日にすぐ塩で埋めて

(149) β *njisanci masu+ssi=kara mata thuida-ci soowi-n-cja=nji 'iri-ti*
二三日 塩 + する.SEQ=ABL また 取り出す-SEQ 笊-LNK-APPR=LOC 入れる-SEQ
二三日塩をしてからまた取り出して、笊なんかに入れて

(150) β *fjirãgi-n-cja=nji 'iri-ti hãgĝi-ti 'i-zi 'umji=zi khjura-asa mata*
籠-LNK-APPR=LOC 入れる-SEQ 背負う-SEQ 行く-SEQ 海=LOC きれい-ADVLZ また
t'in-naa t'in-naa 'araa-ti
一つ-DISTR 一つ-DISTR 洗う-SEQ
籠なんかに入れて背負っていって海できれいにひとつずつ洗って

(151) β *mata jaa=kai hãgĝi-tit-ci mata mussu-n-wii=nji*
また 家=ALL 背負う-てくる-SEQ また 筵-LNK-上=LOC
fjirugi-ti=kara=njee gusii thuu-ci himo khee-ti 'amadani-n-saa=nji
広げる-SEQ=ABL=LOC.TOP 棒 通す-SEQ 紐 掛ける-SEQ 軒-LNK-下=LOC
khawak-a-ci
乾く-CAUS-SEQ
また家へ背負ってきて、筵の上に広げてから棒を棟して紐をかけて軒下に乾かして

(152) α *k'ura-n-sabaii=nji*
蔵-LNK-軒下=LOC
蔵の軒下に

(153) γ *k'ura-n-sabaii=nji=ssai*
蔵-LNK-軒下=LOC=する. たり
蔵の軒下にしたり

(154) β *k'ura=ĝa 'an jaa=ja 'assi na-jui*
蔵=NOM ある.NPST 家=TOP そう なる-NPST
蔵がある家はそうなる

(155) α *njisi+khazi=nji 'ut-as-iba jaa njaa k'afa~k'afa*
北 + 風=LOC 打つ-CAUS-COND DSC もう OMP~RED
北風に当てればね、もうカチカチ（になる）

(156) α *'uma-sa* *'uusi-ran-tan* *mun* *jaa*
旨い-ADVLZ たまる-NEG-PST FN DSC
美味しくてたまらなかったもんね

(157) γ *'aree..*
あれ.TOP
あれは..

(158) β *'assissi* *njaa* *'uri=ɡa* *k'afa~k'afa* *haarak-iba* *mata* *'uru-ci* *thu-ti*
CONJ もう それ=NOM OMP~RED 乾く-COND また 下ろす-SEQ 取る-SEQ
そして、それがカチカチに乾けばまた下ろして取って

(159) γ *'aree* *'anoo..*
あれ.TOP DSC
あれは..

(160) α *soo* *soo* *mata* *'umm-ji+khata*
そう そう また 埋める-INF+ 方
そうそうまた埋める

(161) β *mata* *masu+ssi* *hami-n-naa=nji*
また 塩 + する.SEQ 瓮-LNK-中=LOC
また塩をして瓮の中に

(162) γ *masu=zi* *'assi* *'assi*
塩=INST そう そう
塩で、そうそう

(163) β *k'i-ti*
漬ける-SEQ
漬けて

(164) γ *'aree* *'anoo* *wara=zi=mu* *'assi+ssi* *k'ut-ci*
あれ.TOP DSC 藁=INST=も そう + する.SEQ 括る-SEQ
あれは藁でもこうして括って

(165) α *c'un-di* *jaa*
包む-SEQ DSC
包んでね

(166) γ　*c'un-di*　*si-ran-ti=na*
包む-SEQ　する-NEG-PST=YNQ
包んで、しなかった？

(167) α　*'assi=mu*　*s-u-ta=ɡ̃a*
そう=も　する-HAB-PST=ASS
そうもしていたよ

(168) β　*wanoo*　*wara=zjee*　*si-raa*
1.SG.TOP　藁=INST.TOP　する-NEG.NPST
私は藁ではしない

(169) γ　*'assi*　*burasaɡ̃a-tun*　*mun=ba*
そう　ぶら下がる-PROG.NPST　FN=ACC
こう、ぶら下がっているのを

(170) α　*'in*　*'assi*　*zja=ɡ̃a*
RESP　そう　COP.NPST=ASS
うん、そうだよ

(171) γ　*wara=zi*　*c'un-di*
藁=INST　包む-SEQ
藁で包んで

(172) γ　*'uri=mu..*
それ=も
それも..

(173) α　*njaa*　*'ikkanin=nu..*
もう　一ヵ年=GEN
一年間の..

(174) γ　*'uri=mu*　*'ubii-tu-i*
それ=も　覚える-PROG-NPST
それも覚えている

(175) α　*jaa*　*ninzjuu=nu*　*waacja=nu*　*thampakusicu*
DSC　年中=GEN　1.PL.INCL=GEN　タンパク質
そうね、年中の私たちのタンパク質

(176) γ *soo soo*
そう そう
そうそう

(177) α *bassaizjuu=nu 'ari 'a-ta-su jo jaa*
伐採中=GEN あれ COP-PST-NMLZ DSC DSC
さとうきび伐採期間中のあれだったのよね

(178) β *bassaizjuu*
伐採中
さとうきび伐採期間中

(179) β *'icinen juu mut-cjan mun jaa*
一年 良く 持つ-PST FN DSC
一年、よくもったものだね

(180) α *funi=tu.. funi=ja mata masu+ssi*
骨=COM 骨=TOP また 塩 + する.SEQ
骨と.. 骨はまた塩をして

(181) β *masu+ssi 'ucii-tu-ti*
塩 + する.SEQ 置く-PROG-SEQ
塩をして置いていて

(182) α *hami-n-naa=nji 'iri-tu-ti jaa dasi s-u-tan=mjiri*
瓷-LNK-中=LOC 入れる-PROG-SEQ DSC だし する-HAB-PST=CFM
瓷の中に入れていてね、だしにしていたよね

(183) γ *'assi 'assi 'assi*
そう そう そう
そうそうそう

(184) γ *'assissi njaa 'ora masu=zi 'umm-ji zja-soo jo*
CONJ もう DSC 塩=INST 埋める-INF COP.NPST-CFM DSC
そうそう、もう、ほら、塩で埋めるじゃない

(185) α *soo jo*
そう DSC
そうよ

(186) β　*'umm-jikum-ji　jo　njaa*
埋める-??-INF　DSC　もう
埋めこむんだね

(187) α　*'umm-am-ba=a　njaa　na-jun=nja*[15]　*waa-cja=n　sima=a　jaa*
埋める-NEG-COND=TOP　もう　なる-NPST=YNQ　1.PL.INCL=GEN　集落=TOP　DSC
埋めないとできないよ、うちの集落はね

(188) γ　*masu=zi　'un-di*
塩=INST　埋める-SEQ
塩で埋めて

(189) β　*'umm-jiku-duu-ti　mata　njaa　k'a-i+ssaa=nji　'izja-ci*
埋める-??-PROG-SEQ　また　もう　使う-INF+ たび=LOC　出す-SEQ
埋めこんでいて、使うたびに出して

(190) α　*suu　nu-zi　jaa*
塩　抜く-SEQ　DSC
塩抜きしてね

(191) β　*suu　nu-zi　jaga-ci　suu　nu-zi*
塩　抜く-SEQ　ゆがく-SEQ　塩　抜く-SEQ
塩抜きして、ゆがいて塩抜きして

(192) β　*'assissi　zjuugacu=nu　ja+fusin　s-un=ci　gaja　ha-i*
CONJ　十月=GEN　家 + 普請　する-NPST=QUOT　萱　刈る-INF
そして、十月の家普請するって萱刈りをする

(193) α　*soo　zja=ɡ̃a*
そう　COP.NPST=ASS
そうだよ

(194) β　*nanazjoo=nu　'ama　nanaban+jama　'i-zjai　suu-ti　si-riba*
PLN=GEN　あそこ　PLN　行く-たり　する-PROG-SEQ　する-COND
fjiraɡ̃i=nji　bintoo　haɡ̃ɡ̃i-ti　'i-zi　'unui　suuki-n-fana..
籠=LOC　弁当　背負う-SEQ　行く-SEQ　その時　料理-LNK-飾り
七城のあそこ、七番山に行ったりすると、籠に弁当を背負って行って、その時料理の飾り..

[15] =*nja* は=*na* の異形態で、非過去形に後接する。

(195) β *janse-n-fana=a* *buta* *'abidanaa* *k'ji-ci*
野菜-LNK-飾り=TOP 豚 大きく 切る-SEQ
野菜の飾りは豚を大きく切って

(196) α *'an* *'abura=a* *'abura=bee* *thuka-ci* *hami-n-naa=nji* *'iri-tu-ti..*
あの 油=TOP 油=RESTR 溶かす-SEQ 瓷-LNK-中=LOC 入れる-PROG-SEQ
あの油は油だけ溶かして瓷の中に入れていて..

(197) γ *'abura=zi* *tharikumji=cici* *'ici*
油=INST タリクミ=QUOT 言う-SEQ
油で、タリクミ[16]と言って

(198) β *'iri-tu-ti* *dasi* *s-u-tan=mjiri*
入れる-PROG-SEQ だし する-HAB=PST=CFM
入れていてだしにしていたよね

(199) α *tharikumji=zi*
タリクミ=INST
タリクミで

(200) γ *tharikumji=cici* *s-u-tan=mjiri*
タリクミ=QUOT する-HAB-PST=CFM
タリクミってしていたよね

(201) α *dasi* *s-u-tan=doo* *jaa*
だし する-HAB-PST=ASS DSC
だしにしていたよね

(202) γ *'assissi* *'ura* *'uri=ba* *dasi+ssi*
CONJ DSC それ=ACC だし + する.SEQ
そして、ほら、それをだしにして

(203) α *'assi=tci* *jo*
そう=QUOT DSC
そうだよ

(204) γ *mata* *sjoogacu=njee* *njaa* *firu+'ikkjaasii*
また 正月=LOC.TOP もう フィルイッキャーシー (lit. にんにく + 炒めもの)
正月にはフィルイッキャーシー[17]

---

[16] 豚の油から作る調味料。
[17] 塩豚とにんにくの茎、葉の炒めもの。

(205) α *soo soo*
そう そう
そうそう

(206) γ *'uri=ɡ̃a 'iciban njaa sjoogacu=nu njaa rjoori zja-soo jo*
それ=NOM 一番 もう 正月=GEN もう 料理 COP.NPST-CFM DSC
それが一番、正月の料理じゃない

(207) α *'assi=tci jo*
そう=QUOT DSC
そうだよ

(208) γ *nati njama.. firu.. jappai njama jaa*
CSL 今 にんにく やっぱり 今 DSC
だから今.. にんにく.. やっぱり今ね

(209) γ *firu=ɡ̃a 'a-riba=mu jappai 'assun khutu 'umiida-ci jaa*
にんにく=NOM ある-COND=も やっぱり そんな 事 思い出す-SEQ DSC
にんにくがあってもやっぱりそんなこと思い出してね

(210) γ *buta 'ikkjaasii=cici 'i-ci*
豚 炒めもの=QUOT 言う-SEQ
豚、炒めものって言って

(211) α *soo jo.. firu+'ikkjaasii jo*
そう DSC フィルイッキャーシー (lit. にんにく + 炒めもの) DSC
そうよ.. フィルイッキャーシーよ

(212) γ *firu+'ikkjaasii jo wa*
フィルイッキャーシー (lit. にんにく + 炒めもの) DSC DSC
フィルイッキャーシーよね

(213) β *mukasi=kara=nu firu+'ikkjaasii=nati* (..)
昔=ABL=GEN フィルイッキャーシー (lit. にんにく + 炒めもの)=CSL
zjuuttu wanna=ja c'juzju-cjun=doo
ずっと 1.PL.EXCL=TOP 続く-PROG.NPST=ASS
昔からのフィルイッキャーシーだから.. ずっとうちは続いているよ

(214) α *'uma-sa-tan mun*
美味しい-VLZ-PST FN
美味しかったもの

(215) β *sjoogacu=nji khanarazu firu+'ikkjaasii*
正月=LOC 必ず フィルイッキャーシー (lit. にんにく + 炒めもの)
s-ui
する-NPST
正月に必ずフィルイッキャーシーをする

(216) α *'assi zjan=mun jo thusi thu-riba njaa jo huba-sa.. 'ee*
そう COP.NPST=のに DSC 年 取る-COND もう DSC 固い-ADJVZ DSC
sibu-sa
噛み切りにくい-ADJVZ
だけどね、年を取るともうね、固い.. いや、噛み切りにくい

(217) γ *'aa firu jaa*
INTJ にんにく DSC
ああ、にんにくね

(218) α *firoo*
にんにく.TOP
にんにくは

(219) α *'assinati 'anoo faa=nu 'ama-n-khata=a njaa fannagi-jui*
CONJ DSC 葉=GEN 向こう-LNK-方=TOP もう 捨てる-NPST
だから葉の、向こうの方はもう捨てる

(220) β *'umjitci nji-ran=mun*
たくさん 煮る-OBLG(lit.-NEG.NPST=FN)
たくさん煮ないと

(221) α *nji-ci=mu..*
煮る-SEQ=も
煮ても..

(222) β *'attas-iba 'attas-u=fudu jafara-san=dan firroo*
加熱し直す-COND 加熱し直す-NPST=ほど 柔らかい-VLZ.NPST=ASS にんにく.TOP
加熱し直せば加熱し直すほど柔らかいよ、にんにくは

(223) α *nji-ci=mu sen+'i=ɡ̃a jaa*
煮る-SEQ=も 繊 + 維=NOM DSC
煮ても 繊維がね

(224) γ　*'assissi　njaa　masu=zi　'un-den=kara*
CONJ　もう　塩=INST　埋める-てある.NPST=CSL
そしてもう塩で埋めてあるから

(225) α　*mutoo　'ittoo　zjan=mun*
元.TOP　いい　COP.NPST=のに
（にんにくの葉の）根元のところはいい（噛み切りにくくない）のに

(226) γ　*njaa　'uri　s-ii=njee　njaa　'ippai　judi-ram-ba*
もう　それ　する-NMLZ=LOC.TOP　もう　いっぱい　茹でる-NEG-COND
それをするときにはもういっぱい茹でないと

(227) β　*judi-ram-ba*
茹でる-NEG-COND
茹でないと

(228) γ　*judi-ram-ba　hara-sa*
茹でる-NEG-COND　辛い-ADJVZ
茹でないと塩辛い

(229) β　*hara-sa*
辛い-ADJVZ
塩辛い

(230) γ　*hara-san=ci*
辛い-VLZ.NPST=TOP
塩辛いって

(231) α　*'in　'assi　zja=ɡ̃a*
RESP　そう　COP.NPST=ASS
うんそうだよ

(232) γ　*'assi　'i-ci*
そう　言う-SEQ
そう言って

(233) α　*sio+buta=nati*
塩豚=CSL
塩豚だから

(234) γ *zjan=khjedo* *'an* *dukji=nu* *sio+buta=a* *njaa* *jaa*
COP.NPST=けど あの 時=GEN 塩 + 豚=TOP もう DSC
だけどあの時の塩豚はもうね

(235) γ *nantomo* *'i-ra-raa*
なんとも 言う-POT-NEG.NPST
何とも言えない、美味しい

(236) β *nuu=thun* *thaatui-ra-raa*
何=とも 例える-POT-NEG.NPST
何とも例えられない

(237) γ *'uma-sa*
旨い-ADJL
美味しい

(238) β *njama=nu* *buta+njiku=too* *hee-ra-ran* *mee*
今=GEN 豚 + 肉=COM.TOP 替える-POT-NEG.NPST INFR
今の豚肉とは替えられないでしょ

(239) α *hee-ra-ran=dan* *'azi=ɡ̃a*
替える-POT-NEG.NPST=ASS 味=NOM
替えられないよ、味が

(240) β *hee-ra-raa* *'azi=ɡ̃a*
替える-POT-NEG.NPST 味=NOM
替えられない、味が

(241) β *njama=n* *munoo* *njaa* *foocjuu=zi* *k'ji-ci=mu* *jo* *'abura=mu* *nee-raa*
今=GEN FN.TOP もう 包丁=INTJ 切る-SEQ=も DSC 油=も ない-NEG.NPST
今のものはもう包丁で切ってもね、油もない

(242) β *njaa* *sa=tci* *'araa-riba* *'araaw-ari-su*
もう OMP=QUOT 洗う-COND 洗う-POT.NPST-NMLZ
もうさっと洗えば洗えるの

(243) β　*'agii　njaa　'un　thoozjee　njaa　c'ju+kee　c'ju+kee　njaa　juu*
INTJ　もう　その　当時.TOP　もう　一＋食　一＋食　もう　湯
thagg̃-a-cju-ti　juu=zi　naga-ci=kara=nji　'araaw-am-ba
沸騰する-CAUS-PROG-SEQ　湯=INST　流す-SEQ=ABL=LOC　洗う-NEG.COND
senzai=tci=mu　nee-raa
洗剤=　QUOT=も　ない-NEG.NPST
ああ、その当時は一食一食ずつ湯を沸かして、湯で流してから洗わないと、洗剤もない

(244) β　*juu=g̃a　senzai　'a-tan=mjiri*
湯=NOM　洗剤　COP-PST=CFM
湯が洗剤だったよね

(245) α　*deezooko=g̃a　nee-dana　juu　k'ura-cja　jaa*
冷蔵庫=NOM　ない-CSL　よく　暮らす-PST　DSC
冷蔵庫がないから、よく暮らしたね

(246) γ　*'assi　jaa　mukasi=nu　c'ie*
そう　DSC　昔=GEN　知恵
そうだね、昔の知恵

(247) α　*mukasino　c'ie　seikacuno　c'ie*
昔の　知恵　生活の　知恵
昔の知恵、生活の知恵

(248) γ　*seikacuno　c'ie*
生活の　知恵
生活の知恵

(249) β　*wummi　si-riba=mu　njaa*
お祭り　する-COND=も　もう
お祭りをしても

(250) β　*suuki=mu　deezooko=nji=mu　'iri　na-raa*
料理=も　冷蔵庫=LOC=も　入れる.INF　なる-NEG.NPST
料理も冷蔵庫にもいれられない

(251) γ　*'assi　'assi　'assi　jaa*
そう　そう　そう　DSC
そうそう、そうね

(252) β *'asu-dit-ci* *'asub-innja* *'ik-jun* *madu=njee* *mata* *thu-jaa-ci=kara*
遊ぶ-てくる-SEQ 遊び-PURP 行く-NPST 暇=LOC.TOP また 取る-ITER-SEQ=ABL
nabi=nji *thaĝĝ-a-ci*
鍋=LOC 沸騰する-CAUS-SEQ
遊んできて、また遊びに行くまでの間に、集めてから鍋に沸騰させて

(253) α *'assi* *zja=ĝa*
そう COP.NPST=ASS
そうだよ

(254) β *thaĝĝ-a-ci=kara=nji* *mata* *fama=kai* *'asub-jinnja* *'ik-ju-tan=mjiri*
沸騰する-CAUS-SEQ=ABL=LOC また 浜=ALL 遊ぶ-PURP 行く-HAB-PST=CFM
沸かしてからまた浜に遊びに行っていたよね

(255) γ *njaa* *'annjii* *buta..*
もう あの 豚
もうあの豚..

(256) β *'uri=tu* *si-riba..*
それ=COM する-COND
それに比べて..

(257) γ *buta=tciba* *njaa* *sugu* *wanoo* *'ari* *jaa*
豚=QUOT. 言う.COND もう すぐ 1.SG.TOP あれ DSC
豚って言うともうすぐ私はあれね

(258) γ *jaa* *kharazjuui*
DSC カラジューイ
ねえ、カラジューイ

(259) β *kharazjuui*
カラジューイ
カラジューイ

(260) α *kharazjuui* *'uma-sa* *jaa*
カラジューイ 旨い-ADJVZ DSC
カラジューイ、美味しいね

(261) γ *kharazjuui=ĝa* *njaa* *'iciban* *'ari* *s-ui*
カラジューイ=NOM もう 一番 あれ する-NPST
カラジューイがもう、一番あれだね

(262) α *’an sammee+nabi=nji ’ansa s-u-ta=g̃a jaa*
あの サンメー＋鍋=LOC あれほど する-HAB-PST=ASS DSC
あのサンメー鍋にあれほどしていたよね

(263) γ *’in ’in ’assi=tci jo wa*
RESP RESP そう=QUOT DSC DSC
うん、うん、そうだよね

(264) β *njaa nuu=kara hii=kara k’jik-ku-di thak-kum-jii zja-soo ’abidan nabi=nji jaa*
もう 何=ABL ??=ABL 切る-??-SEQ 炊く-??-INF COP.NPST-CFM 大きい 鍋=LOC
もう何でもかんでもたくさん切ってたくさん炊くじゃない、大きな鍋に

(265) α *soo=tci jo k’jik-ku-di thak-kum-ji jaa*
そう=QUOT DSC 切る-??-SEQ 炊く-??-INF DSC
そうよ、たくさん切ってたくさん炊くね

(266) α *’assi mut-cja=g̃a jaa njisancjee jaa*
そう 持つ-PST=ASS DSC 二三日.TOP DSC
そんなに持ったよね、二三日はね

(267) γ *’uri=tu mata ’annjii..*
それ=COM また あの
それとまたあの..

(268) α *’aree thag̃g̃-as-u-ta-su=ka jaa*
あれ.TOP 沸騰する-CAUS-HAB-PST-NMLZ=Q DSC
あれは沸騰させていたのかな

(269) γ *’abura=zi ’annjii tharikumji=tci ’i-ju-su jo jaa*
油=INST あの タリクミ=QUOT 言う-NPST-NMLZ DSC DSC
油で、タリクミって言うんだよね

(270) α *soo jo tharikumji ’aree ’ittoo jaa*
そう DSC タリクミ あれ.TOP よい DSC
そうだよ、タリクミ、あれはいいね

(271) β *'aree njaa k'ubji+zisi-n-cja=a njaa jutu~jutu 'ari=nati 'assun dooru*
あれ.TOP もう 首 + 肉-LNK-APPR=TOP もう OMP~RED あれ=CSL そんな ところ
k'ji-jaa-ci 'abura=tu thak-ku-di dasi s-u-ta-su jo
切る-ITER-SEQ 油=COM 炊く-??-SEQ だし する-HAB-PST-NMLZ DSC
あれはもう首の肉なんかはもうぶよぶよ、あれだからそんなところを切り分けて油とたくさん炊いてだしにしていたのよ

(272) α *sakusi=zi fjikkee-ti jaa*
おたま=INST 掬う-SEQ DSC
おたまで掬ってね

(273) β *fjikkee-ti jaa*
掬う-SEQ DSC
掬ってね

(274) α *deekuni-n-faa=ɡari=mu judi-ti 'assi+ssi kham-ju-tan=mjiri jaa*
大根-LNK-葉=LMT=も 茹でる-SEQ そう + する.SEQ 食べる-HAB-PST=CFM DSC
waacja jaa
1.PL.INCL DSC
大根の葉までも茹でてそうやって食べていたよね、うちらね

(275) γ *'aa deekuni-n-faa jo wa 'in 'in 'in*
INTJ 大根-LNK-葉 DSC DSC RESP RESP RESP
ああ、大根の葉ね、うんうん

(276) α *na-n-faa deekuni-n-faa*
菜-LNK-葉 大根-LNK-葉
菜の葉、大根の葉

グロス

1	first person	一人称
2	second person	二人称
ABL	ablative	奪格
ACC	accusative	対格
ADJZ	adjectivizer	形容詞化
ADN	adnominal	連体
ALL	allative	方向格
APPR	approximative	曖昧
ASS	assertion	断定
CSL	causal	理由
CAUS	causative	使役
COM	comitative	共格
COMPR	comperative	比較
CM	compound marker	複合語標識
CONC	concessive	譲歩
COND	conditional	条件
CNF	confirmation	確認
CONJ	conjunction	接続詞
COP	copula	コピュラ
DAT	dative	与格
DSC	discourse marker	談話標識
DISTR	distributive	分配
DU	dual	双数
EMPH	emphatic	強調
EXCL	exclusive	除外
FOC	focus	焦点
FN	formal noun	形式名詞
GEN	genitive	属格
HAB	habitual	習慣
IMP	imperative	命令
INCL	inclusive	包括
INFR	inferential	推量
INF	infinitive	不定
INST	instrumental	具格
INT	intention	意志
INTJ	interjection	間投詞
ITER	iterative	反復
lit.	literally	逐語的
LMT	limitative	限界
LNK	linker	連結辞
LOC	locative	処格
NEG	negative	否定
NMLZ	nominalizer	名詞化
NOM	nominative	主格
NPST	nonpast	非過去
OMP	onomatopoeia	オノマトペ
PASS	passive	受動
PST	past	過去
PN	personal name	人名
PLN	place name	地名
PL	plural	複数
POL	polite	丁寧
POT	potential	可能
PROG	progressive	進行
PROH	prohibitive	禁止
PURP	purposive	目的
Q	question	疑問
QUOT	quotative	引用
RED	reduplication	重複
REFL	reflexive	再帰
RESP	response	応答表現
RESTR	restrictive	制限
SEQ	sequential	継起
SG	singular	単数
TOP	topic	主題
VLZ	verbalizer	動詞化
YNQ	yes-no question	諾否疑問
+	複合境界	
~	重複境界	
=	接語境界	
-	接辞境界	
??	不明	

チベット語塔公[Lhagang]方言の物語『菩薩の愛する地・塔公』訳注

—塔公方言の多層構造と物語の異同に関する考察を添えて—

鈴木博之　　四郎翁姆　　拉姆吉*

1　はじめに

本稿はチベット文化圏東部（カム）に位置する塔公郷（図１）において伝えられる口承物語の中で最もよく知られた伝説『菩薩の愛する地・塔公』について、同地で用いられるチベット語方言による言語資料を提示し、かつ言語学的注釈を与える。同時にこの物語の複数ある伝承形式の異同を取り上げ、考察する。本稿は１つの完結した物語の分析を通して、塔公郷において定住民が用いる Lhagang（塔公）方言（カムチベット語 Minyag Rabgang（木雅熱崗）方言群北部下位方言群）の音声、形態統語について紹介する役割も兼ねる。

図１：塔公郷塔公村の全景（2013 年）　　澤旺居麥 撮影

* 第二著者チベット文語転写表記bSod-nams dBang-mo、欧文表記Sonam Wangmo、第三著者チベット語文語転写表記Lha-mo-skyid。

1.1　塔公郷の社会的背景とチベット語塔公方言

塔公[Lha-sgang][1]郷は中国四川省甘孜[dKar-mdzes]藏族自治州康定[Dar-mdo]県内に位置し、同県城爐城[Dar-rtse-mdo]鎮から北西に 113km 離れた海抜 3730m 前後の高原地帯にあり、郷内に川藏路が通っている（図２）。

図２：塔公郷の位置

塔公とはチベット語で「菩薩の愛する地」を意味する。郷内にある塔公寺[dPal Lha-sgang dGon]は甘孜州内でもっとも著名なチベット仏教サキャ派の寺院の１つであり、「小大昭寺[gTsug-lag-khang Chung-chung]」の異名をもち、カム地域のチベット人が巡礼を行う聖地の１つである（図３参照）。塔公寺の正式名は「塔公一見如意解脱寺[dPal Lha-sgang dGon mThong-grol bSam-’grub-bling]」といい、現在に至るまで長い歴史を持ち、カム地域のチベット人の中で非常に重要な位置を占めている（Sonam Wangmo 2013; Epstein、彭文斌 2013）。同寺院の中にはラサの大昭寺と同じ形の釈迦牟尼像が安置されている。伝説によれば、文成公主のチベット入りの時にこの地域を経由し、ラサに運搬する釈迦牟尼像のレプリカをこの寺に残したことになっている。それゆえ、両者の間には極めて特殊で奇特な縁があり、そのために現地の人々の中には「チベット・ラサへ巡礼に行きたくても行けない者は、カムの塔公寺の釈迦牟尼像を拝むことでもまた同様の効果と功徳がある」と言われており、ゆえに「小大昭寺」の異名が生まれたといえる。

---

[1]　以下の記述において、初めて現れるチベット語の固有名詞またはチベット語の対応語が必要とされる例について、[ ]に入れてチベット文語形式（以下「蔵文」）を Wylie 方式に基づいたローマ字転写で示す。ただし、固有名詞の最初頭音節の基字を大文字とする。

図３：塔公寺の正面（2013 年）　　澤旺居麥 撮影

塔公郷の住民のほとんどはチベット人で牧畜民であるが、塔公郷の中心である塔公村（図１参照）を含め、いくつかの定住地点（村）がある。大部分の住民のアイデンティティーは牧畜民[’brog-pa]かつムニャ（木雅[Mi-nyag]）人である。ムニャという名称は、康定を中心とするチベットの伝統的な地理上の名称であるとともに、同地域の民族の名称でもある。地理の視点からみると、ムニャとはチベット人の伝統的な地理概念におけるカム地域の「四河六崗三塘[mDo-khams chu-bzhi sgang-drug thang-gsum][2]」の中の１つ「木雅熱崗[Mi-nyag Rab-sgang]」のことを指す。塔公は木雅熱崗の北端に位置する。木雅熱崗のおおよその範囲は、東西については雅拉拉澤[bZhag-brag Lha-rtse][3]、折多山[brGyud-lam-ri]、木雅貢嘎[Mi-nyag Gang-dkar]を含む山脈以西、雅礱江[Nyag-chu]以東となり、南北については塔公

[2] 一般に「四河六崗」の名称をよく見かける。「四河」とは、怒江[rNgul-chu]、雑曲[rDza-chu]、瀾滄江[Zla-chu]、金沙江[’Bri-chu]を指し、「六崗」とは、熱莫崗[Zal-mo-sgang]、擦瓦崗[Tsha-ba-sgang]、芒康崗[sMar-khams-sgang]、奔波崗[sPo-’bor-sgang]、瑪雑崗[dMar-rdza-sgang]、木雅熱崗を指す（Karma rGyal-mtshan 2002:438）。「三塘」とは、カム南部の理塘[Li-thang]、巴塘[’Ba’-thang]、建塘[rGyal-thang]を指す。

[3] 《藏漢大辞典》(1995:2434)によれば、雅拉拉澤の最初の２音節の藏文は bZhag-bra となっているが、現地の書き方では bZhag-brag となっている。

郷と八美[Bar-smad]鎮の境界線[4]を北端とする一方、南端については明らかではないものの、おそらくは現九龍[brGyad-zil]県内とすることができるだろう。

現在、木雅熱崗地域の住民は大部分がチベット人であるが、彼らの母語は２種類認められる。１つはカムチベット語 Minyag Rabgang 方言群に属する方言であり、もう１つは羌語支に属するムニャ語である[5]。この地域に関する言語の研究の中では、後者が常に注目され、さまざまな研究が提出されている[6]。前者については、カムチベット語の中でムニャ地域にのみ認められる特徴を持ってはいるものの、言及されることは少なく、格桑居冕(1985)が本稿の言う Minyag Rabgang 方言群がカムチベット語の独立下位方言群「中路次方言」を形成するという意見を述べているのみである。

塔公郷のチベット語に関する先行研究は、それゆえ、さらに少なく、最も早く提出された報告は鈴木(2006)であり、この中で塔公村のチベット語はカムチベット語であると紹介されている。鈴木(2009)および Suzuki (2009)の方言分類によると、このチベット語はカムチベット語 Minyag Rabgang 方言群北部下位方言群[7]に属するものとされ、のちに Lha-mo-skyid (2010)もこの分類に基づいて Minyag Rabgang 方言群の２つの方言（Lhagang 方言および Rangakha 方言）の概観を述べている。ただし塔公郷の純牧畜地域に暮らすチベット人が話す言語は一般的にアムドチベット語牧畜区方言（現地では「草地話」と呼ばれる）である[8]。加えて塔公郷には農地が存在しないことから、牧畜区の住民の生活は放牧を中心としているため、塔公のチベット語はカムチベット語ではなく牧畜区方言、すなわちアムドチベット語としばしばみなされるが、この見方は塔公のチベット語の一面しか把握していないといえる[9]。

塔公郷で話されるチベット人の言語は、その地理、社会構造などの原因からチベット系諸言語の中でも独特の言語環境にあり、この環境が現地のチベット語に独自の発展をもたらしたため、方言分化の状況も極めて複雑である。共時的な視点で観察すると、塔公村で用いられる言語には２種類あり、すなわちカムチベット語とアムドチベット語である。しかしながら、すべての住民が両者を操るわけではなく、それぞれの家庭環境によってカムチベット語もしくはアムドチベット語を話すといった具合である。Suzuki & Sonam Wangmo

---

4 筆者の調査によると、塔公、八美双方の住民もまた木雅熱崗の北端をこの地とすると考えている。鈴木(2014)も参考にされたい。

5 ただしムニャ語が羌語支に属するかどうか、また羌語支という分類が成立するかどうかは、なお議論の余地がある。

6 たとえば黄布凡(1985)、池田(1998)などがある。

7 鈴木(2009)が示した方言群の名称は「木雅(Minyag)方言群」であるが、のちに鈴木(2013)でそれを「木雅熱崗(Minyag Rabgang)方言群」に改めた。一方で鈴木(2009)は Lhagang 方言を農区方言と述べているが、これは誤りである。

8 ただし、分布地域が一般に認識されているアムド地域の外にあるため、この種のチベット語方言の研究は少なく、王双成(2012)などアムドチベット語の全体を研究対象とする文献においても塔公や理塘など非アムド地域のアムドチベット語については言及がない。

9 さらに詳細な塔公郷の社会背景については、Sonam Wangmo (2013)を参照。

(2014, 2015)は塔公郷のチベット語の多様性について詳しく分析し、その複雑な言語状況を明らかにした。それによると、塔公郷のカムチベット語は少なくとも２種類あり、両者とも塔公郷に長期にわたって定住している住民によって伝承された言語であり、周辺で話されるアムドチベット語との接触を通じて発展したものであるという。

1.2　物語資料の概要

本稿で記述・分析する物語『菩薩の愛する地・塔公[10]』は、塔公郷においてもっとも流布している口承の伝説物語である[11]。この物語の主な内容は塔公寺にまつられているジョウォ[Jo-bo]（釈迦牟尼像；図４、５）の由来に関するもので、文成公主が塔公を通過したときに起こった出来事、および「塔公」の名称の来歴が含まれている。近年同地の社会と旅行業の発展に伴い、より多くの人が塔公を訪れている。現地のチベット人による文成公主が塔公を訪れた各種の伝説の描写もまた詳細で徹底している。筆者は何度も現地の多くの人々を訪ねてみたが、老若男女によらず、みな文成公主が塔公を訪れたと考えている。

図４：塔公のジョウォ・正面（2012 年）
四郎翁姆 撮影

図５：塔公のジョウォ・側面（2012 年）
四郎翁姆 撮影

---

[10] この物語には正式な名称が存在しない。本稿では、その内容に基づき、仮に『菩薩の愛する地・塔公』と名づける。参考として、漢語名を《菩萨喜欢的地方·塔公》、チベット語名を ཤ་ལྷ་དགའ་བའི་ས་ཆ་ལྷ་སྒང་ *Lha dga'-ba'i sa-cha Lha-sgang* としておく。

[11] この物語は現地において有名であるとはいえ、これまで現地のチベット語による語りに基づいて最初から最後まで記録されたことはない。

物語『菩薩の愛する地・塔公』は確かに非常によく知られているが、Suzuki & Sonam Wangmo (2015)が Lhagang 方言の音転写に逐語訳を付し、基礎的な文法分析およびフランス語訳を提供している以外は、チベット語によるテクストの記録やその言語学的分析を行った先行研究は未見である。本稿のチベット語資料はカムチベット語 Minyag Rabgang 方言群に属する Lhagang 方言によって発話されたものを基礎とする。この点は Suzuki & Sonam Wangmo (2015)と一致する。この方言は塔公寺周辺の定住民が話すものを代表とする、方言学上その地名によって名づけられた Lhagang 方言である。

この物語は長く口承されてきたため、すでに細かい部分において差異が生じている。本稿で分析するものは「短編版」であり、「濃縮版」ともいえる性格のものである。筆者はすでにいくつかの「長編版[12]」も記録しており、それにはアムドチベット語による語りのものや、カムチベット語 Minyag Rabgang 方言群の Lhagang 方言による語りのものがある。ただしこれらの分析は本稿では扱わない。短編版物語の言語学的注釈と分析ののちに、これら各版との異同について論じることにする。

本稿で用いる物語の言語資料、および分析時に用いるその他の言語資料は、すべて筆者の現地調査によって得たものである。短編版物語は本稿の第３著者（塔公村出身）によって発話されたものである。

1.3　本稿の構成

本稿の目的は Lhagang 方言による物語の記述（言語学的な研究用の資料）を中心とし、詳細な言語学的分析と注釈のほかに、さらに同物語の版の多様性について議論し、その資料的価値を高めることにある。このため、本稿の構成は以下のように行う。

まず２節でテクストの基本的分析を行い、加えて全体の翻訳を提示する。３節でさらに詳細な音声・形態・統語方面の注釈を与える。４節で物語の各版の異同について論じる。

２節において、物語はその発話を音標文字を用いて記述しつつ語釈を与え、さらに各語に対応する蔵文形式を添える。これはより広い視点からチベット語を研究する際に利便であるためである。蔵文形式の転写方法は注１で述べた原則に従う。

また、付録として、現地への貢献のため、蔵文を転写せず記述した３つの物語のバージョン（文語、２節の発話に基づいた Lhagang 方言の蔵文表記、２節の発話を改めて整理した蔵文表記）を付す。

[12] 長編版は物語の細かい部分まで詳細な描写が含まれるだけでなく、文成公主が塔公を訪れる前のくだりが物語の大半を占める。このことが塔公郷のチベット人がこの物語を *lo-rgyus*（歴史伝説）の一部であると考えるゆえんである。

1.4　Lhagang 方言の音体系

以下に第２節で分析する Lhagang 方言の音体系を子音、母音、超分節音素に分けて示す。

表１：子音体系

		両唇	歯茎	そり舌	前部硬口蓋	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	pʰ	tʰ	ʈʰ		*cʰ	kʰ	
	無声無気	p	t	ʈ		*c	k	ʔ
	有声	b	d	ɖ		*ɟ	g	
破擦音	無声有気		tsʰ		tɕʰ			
	無声無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʑ			
摩擦音	無声有気		sʰ		ɕʰ		xʰ	
	無声無気	ɸ	s	ʂ	ɕ		x	h
	有声		z		ʑ		ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ȵ		ŋ	
	無声	m̥	n̥		ȵ̊		ŋ̊	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥					
半母音	有声	w				j		

注：*を伴う硬口蓋閉鎖音は Lhagang 方言 A 類（２節参照）にのみ認められる。

表２：母音体系（舌位置）

i	ɨ			ɯ u
e	ɵ ə		o	
ɛ			ɔ	
	a	ɑ		

注：母音は長短および鼻母音/非鼻母音の対立も認められる。

超分節音素

ピッチの高低による４種類の声調が認められ、語声調として現れる。以下の記号を語頭に付す：

¯:高平　　ˊ:上昇　　ˆ:昇降　　ˋ:下降

一音節語における声調は、高低の２種のみ（高平および下降を高調、上昇および昇降を低調とする）が区別される。

2　『菩薩の愛する地・塔公』言語資料と翻訳

本節ではカムチベット語 Minyag Rabgang 方言群の Lhagang 方言によって語られた物語『菩薩の愛する地・塔公』の音形式、語釈、直訳ならびに全体の翻訳を行う。

言語資料の言語は Suzuki & Sonam Wangmo (2014, 2015)に紹介、かつ定義される２種類の Lhagang 方言（A 類、B 類[13]）における B 類の発音と基本的に一致する[14]。そのため、それぞれの句の通し番号の前に B を付す。この番号は続く３節、４節においても用いられる。各句は基本的に４段から構成され、その内容は以下のようである。第１段は Lhagang 方言（B 類）の音標文字[15]による、形態素分析を伴う記述である。第２段は Lhagang 方言（B 類）の発音に対応する蔵文文語形式を与える。文語形式を欠く場合は現地で用いられている慣用的な蔵文表記を与える。第３段は語釈である[16]。第４段は文全体の和訳である。

2.1　言語資料

(B1)　´ȵə ma `ʱna ʱna-la　´ʱdʑa ʱza ´kõ dʑo-Ø　´po-la　´ja la　´ʱde ʈɔ̃
nyi ma gna' gna' la　*rgya bza' kong jo*　*bod la*　*yar la*　*gdan grangs*
昔々-[位]　文成公主[17]-[絶]　チベット-[位]　上へ　迎える
`ʰkɑʔ-la

skabs la
時-[位]
昔々[18]、文成公主がチベットへ迎えられたとき、

---

[13] A 類と B 類は同じ方言（Lhagang 方言）の中の２つの発音上の類型であり、両者とも同一の Lhagang 方言母語話者の言語体系に含まれる、社会言語学的変種とみなされる（Suzuki & Sonam Wangmo 2014）。A 類はアムドチベット語の影響を比較的強く受けている変種で、B 類は塔公村の地域方言の特徴を多く留保している変種である。A 類と B 類の間の言語特徴に関する詳細な異なりについては Suzuki & Sonam Wangmo (2015)を参照。

[14] 物語の語りの一部は A 類に属する方言音が含まれる（個々の事例については３節で指摘する）。このような状況は Lhagang 方言ではよく見られる。

[15] 1.4 節の表記に従う。

[16] 語釈に用いる略号は以下の通り：

2 二人称	3 三人称	[絶] 絶対格	[達] 達成	[共] 共格	[接] 接続詞
[判] 判断動詞	[祈] 祈願	[定] 定性	[能] 能格	[属] 属格	[伝] 伝聞
[感] 感嘆詞	[内] 内格	[意] 意志未来	[位] 位格	[否] 否定	[名] 名詞化
[過] 過去	[状] 状態	[主] 主題			

２つの機能が１つの音形式に現れる場合、[名.属]のように . を用いて表す。

物語の中には位格を伴わない地名などの語がしばしば現れるが、これは文法格としての絶対格におかれているわけではない。それゆえ「ゼロ」格表記を与えない。

[17] チベット語 *rgya bza' kong jo* は「漢族の地域の姫」の意味である。この物語の中では文成公主を指すことが自明であるため、語釈もそのように与える。

[18] この物語にかかわる資料（４節参照）を参考にすると、物語の舞台は西暦 641 年になる。

(B2) ˉtʰɔ̃ ˊʱdʑa po-gə `kʰo-la ´tɕo wo ´tɕiʔ-Ø `ʐĩ-zə-reʔ
thang rgyal po gyis kho la jo bo cig sbyin zin red
唐の皇帝-[能] 3-[位] ジョウォ 1 -[絶] 贈る-[過]-[判]
唐の皇帝[19]が彼女に１体のジョウォを送りました。

(B3) ´te ´tɕo wo-tə-Ø-na ˊʱdʑa ʱza ´kõ dʑo-gə ˉl̥a sʰa ´ja la `kʰɯ
de jo bo de na rgya bza' kong jo gyis lha sa yar la khur
それで ジョウォ-[定]-[絶]-[主] 文成公主-[能] ラサ 上へ 携帯する
´ⁿɖo-ʱgo `ʰsɑ̃-zə-reʔ-sə reʔ

'gro dgos bsam zin red zer red

行く-[意] 思う-[過]-[判]-[伝]

それで、そのジョウォを文成公主はラサに持っていこうと思ったそうです。

(B4) ´te ˉl̥a ʱgɔ `ʰtseʔ `ʰkɑʔ-la
de lha sgang slebs skabs la
それで 塔公 到着する 時-[位]
（彼女が）塔公に到着したとき、

(B5) ´tɕo wo-gə `kʰa ʈɑʔ-zə-reʔ-sə reʔ
jo bo de na kha grags zin red zer red
ジョウォ-[能] 口を開く-[過]-[判]-[伝]
ジョウォが口を開いたそうです。

(B6) ˉsʰa tɕʰa `ʰtɕi po `ʰʈɑʔ mo ´tɕiʔ-Ø ´reʔ
sa cha skyid po skrag mo cig red
ところ 幸せで美しい とても 1 -[絶] [判]
「（ここは）とても幸せで美しいところだなあ！」

[19] 文成公主がチベット入りしたときの唐皇帝は太宗である。

(B7) ¯kʰo-Ø ´ta ´ja la ´mə-ⁿɖo ˆzeː-zə-reʔ-sə reʔ
kho da yar la mi 'gro zer zin red zer red
3-[絶] 今 上へ [否]-行く 言う-[過]-[判]-[伝]
「私はもう（ここから）進まないぞ」と言ったそうです。

(B8) ´te ´ʱdʑa ʱza ´kõ dʑo-gə ´zeː-na
de rgya bza' kong jo gyis zer na
それで 文成公主-[能] 言う-[接]
そこで、文成公主が言うことには、

(B9) `tɕʰoʔ-Ø ´ja la ´ⁿɖo-ʱgo-reʔ ´mə tsʰe
khyod yar la 'gro dgos red mi tshad
2-[絶] 上へ 行く-[意]-[判] のみならず
「あなたは（ラサへ）行かなければならないだけでなく」

(B10) ¯l̥a sʰa ´ja la `kʰɯ ´ⁿɖo-ʱgo-reʔ ´tə ⁿɖa ˆzeː-zə-reʔ-sə reʔ
lha sa yar la khur 'gro dgos red de 'dra zer zin red zer red
ラサ 上へ 携帯する 行く-[意]-[判] あのように 言う-[過]-[判]-[伝]
「（私が）ラサへ持っていかなければならないのです」のように言ったそうです。

(B11) ´te ´tɕo wo-gə ´zeː-na
de jo bo-gyis zer na
それで ジョウォ-[能] 言う-[接]
そこで、ジョウォが言うことには、

(B12) ˉkʰo-dɑ ˊⁿdạ ⁿdạ ˊtɕiʔ-Ø ˊte-Ø ˉl̥a ʱgɔ ˋʱdʑõ-nə-Ø
kho dang 'dra 'dra cig te lha sgang bzhengs ni
3-[共] 同じ 1-[絶] それ-[絶] 塔公 塑像する-[名]-[絶]
ˋʱʑɑʔ-roʔ-ɦo
bzhag rogs 'o
置く-[祈]-[感]
「私と同じものを塑像して、それを塔公[20]に置いていってください」

(B13) ˊte ˉkʰo-Ø ˊja la ˊⁿdo-liː ˊzeː ˋʰkɑʔ-la
de kho yar la 'gro lis zer skabs la
それで 3-[絶] 上へ 行く-[意] 言う 時-[位]
「そうしたら私は（ラサへ）行きましょう」と言ったので、

(B14) ˊte ˊʱdʑa ʱza ˊkõ dʑo-gə ˉʔa na ˉl̥a sʰa-gə ˊtɕo wo ˊji ʑĩ ˊno rɯ-dɑ
de rgya bza' kong jo gyis a na lha sa gyi jo bo yid bzhin nor bu dang
それで 文成公主-[能] ここ ラサ-[属] ジョウォ イジン・ノルブ-[共]
ˊⁿdạ ⁿdạ ˊtɕiʔ-Ø ˋʱdʑõ-nə ta
'dra 'dra cig bzhengs ni da
同じ 1-[絶] 塑像する-[接]
そこで文成公主はここでラサのジョウォ・イジン・ノルブと同じものを塑像したのち[21]、

(B15) ˉʔa na ˉl̥a ʱgɔ ˊtɕu xʰõ-nə ˋʱʑɑʔ-ɣə-reʔ
a na lha sgang jo khang nang bzhag gi red
ここ 塔公の釈迦牟尼殿-[内] 置く-[状]-[判]
ここ塔公の釈迦牟尼殿[22]に置いていきました。（そして今もここにあります）

---

[20] この物語に描写される出来事が起きる以前に「塔公」という固有名詞は存在しなかったため、この語の挿入は語り手による補充的説明といえる。

[21] この物語が成立する前にジョウォはラサには存在しなかったため、この部分は語り手による補充説明であるといえる。

[22] 図３の右手にある白い建物が釈迦牟尼殿である。

(B16) ´te ¯l̥a ʱgɔ `ʰtseʔ `ʰkɑʔ-la-tə ´tɕo wo-gə `kʰa ʈɑʔ-ji
de *lha sgang* *slebs* *skabs la* *jo bo gyis* *kha grags yi*
それで 塔公 到着する 時-[位] ジョウォ-[能] 口を開く-[属]
´ʱdʑɯ ⁿtsʰɛː-tə-Ø ˆⁿtʰõ-la-nə
rgyu mtshan de *mthong la ni*
理由-[定] 考慮する-[接]-[主]
さて、塔公に到着したとき、ジョウォが口を開いた理由を考慮したら、

(B17) ´te ¯l̥a ʱga-Ø ˆzeː-nə-Ø-tə ¯l̥a-Ø `ʱga-wɛː ¯sʰa tɕʰa-Ø
de *lha dga'* *zer ni de* *lha* *dga' ba'i* *sa cha*
それで ラガ-[絶] 言う-[名]-[絶]-[主] 菩薩-[絶] 愛する-[名.属] ところ-[絶]
´jĩ-na
yin na
[判]-[接]
ラガというのは、菩薩（ラ）が愛する（ガ）ところであるという意味で、

(B18) ¯l̥a ʱga-Ø ´zeː ´mĩ `ʰtɑʔ-zə-reʔ
lha dga' *zer* *ming rtags zin red*
ラガ-[絶] 言う 名づける-[過]-[判]
ラガという名前をつけました。

(B19) ¯l̥a ʱgɔ̃-Ø ´ma ʰtsa ´mĩ-tə-Ø ¯l̥a ʱga-Ø ˆzeː-reʔ
lha sgang *ma rtsa* *ming de* *lha dga'* *zer red*
塔公-[絶] 本来 名前-[定]-[絶] ラガ-[絶] 言う-[判]
塔公は本来その名前をラガと言うのです。

(B20) ´te ´tʉ tsʰoʔ-Ø ´mɑ̃ bo ¯pʰa rə ´ʱgɛː-tsʰa `ʰkɑʔ-la
de *dus tshod* *mang po* *pha ru* *rgal tshar* *skabs la*
それで 時間-[絶] たくさん あちら 過ぎる-[達] 時-[位]
それから長い時間が過ぎたのち、

(B21) ´te ¯l̥a ʱgõ-Ø ˆzeː-nə-Ø ¯pʰa rə `ⁿdʐɯ ʱdoʔ-Ø `tʰẽ-zə-reʔ
de lha sgang zer ni pha ru ’gyur ldog then zin red
それで 塔公-[絶] 言う-[名]-[絶] あちら 変化-[絶] 経る-[過]-[判]
´mə tsʰeʔ ´ma ʐə ¯l̥a ʱga-Ø ˆzeː-reʔ
mi tshad ma gzhi lha dga’ zer red
のみならず そもそも ラガ-[絶] 言う-[判]
塔公というのは、変化を経た（名前）であるだけでなく、そもそもラガと言うのです。

(B22) ¯l̥a-Ø `ʱga-ji ¯sʰa tɕʰa-Ø ˆjiʔ-kə ´ʱdʐɯ ⁿtsʰɛː-te-Ø
lha dga’ yi sa cha yid kyis rgyu mtshan de
菩薩-[絶] 愛する-[属] ところ-[絶] 意味-[能] 理由-[定]
ˆjĩ-tɕẽ-tə-Ø ´te ¯l̥a ʱga-Ø ´zeː-reʔ-ta nə
yin rkyen de de lha dga’ zer red da ni
[判]-[名]-[絶]-[定] それで ラガ-[絶] 言う-[判]-[接]
菩薩の愛するところという意味があるのでラガと言うのですが、

(B23) ¯kə tsa pʰa ¯l̥a ʱgõ-Ø ˆzeː-nə ´mĩ-Ø `ⁿdʐɯ-zə-reʔ
ki tsa pha lha sgang zer ni ming ’gyur zin red
のちに 塔公-[絶] 言う-[名] 名前-[絶] 変わる-[過]-[判]
のちに塔公という名前に変わったのです。

2.2 物語の和訳[23]

『菩薩の愛する地・塔公』

昔々、文成公主がチベットへ迎えられたとき、唐の皇帝太宗が彼女に１体のジョウォ（釈迦牟尼像）を贈りました。そこで、文成公主はそのジョウォをラサに持っていこうと思ったそうな。彼女が塔公を通りかかったときのこと、ジョウォが口を開いて言ったそうな：「ここはとても幸せで美しいところだなあ！私はもうここから進まないぞ」と。そこで文成公主が言ったそうな：「あなたはラサへ行かなければならないだけでなく、私があなたをラサへ持っていかなければならないのです」と。するとジョウォは「ならば私と同じものを塑像して、それを塔公に置いていってください。そうしたら私はラサへ行きましょう」と言ったので、文成公主はここでラサのジョウォ・イジン・ノルブと同じものを塑像したのち、ここ塔公の釈迦牟尼殿に置いていきました。そして今もここにあるのです。

[23] 本稿末尾にチベット語版（文語版、口語原文版、口語改訂版）を添える。

さて、ジョウォが塔公に到着したとき口を開いた理由を思い起こすと、「ラガ[Lha-dga’]」という名前は菩薩（ラ[lha]）が愛する（ガ[dga’]）ところという意味であるので、「ラガ」と名づけました。塔公はもともとラガと言うのです。それから長い時間が過ぎたのち、塔公というのは、変化を経てこの名前になったのですが、そもそもラガと言いました。菩薩の愛するところという意味があるのでラガと言うのですが、のちに塔公という名前に変わったのです。

3　『菩薩の愛する地・塔公』音声・文法の注釈

２節で提示した物語は、その内容および語りの言語の特徴によって２段に分かれる。(B1)から(B15)までが１段、(B16)から(B23)までがもう１段となる。前者は伝説の本体であり、後者がそれに対する解釈である。両者では語りの言語の特徴が異なっている。もっとも明瞭な差異は、前者には伝聞の接尾辞/-sə reʔ/が現れ、後者には現れない点である。加えて、後者には文語に直接影響を受けたと考えられる表現や語彙が認められる。

以下、文の通し番号に基づいてそれぞれ注釈を与えていく。

(B1)

Lhagang 方言において、物語の導入句としては/ˊɳə ma ˋʱna ʱna/「昔々」が用いられる。このような時間を表す句に位格標識を加えて/ˊɳə ma ˋʱna ʱna-**la**/「昔々」のようにすることもできるし、位格標識を加えなくてもよい。この/-la/という格標識は位置、方向を表す格標識と同一の形式であり、すべて位格と呼ぶ。この導入句の実際の発音は、第３音節が特別に強調され、[ˊɳə ma ˋ**ʱnaː**ʱna]と聞こえる。

/ˊja la/「上へ」はこの物語を通して何度も出現するが、一貫してラサの方向を示す時に用いられる。

/ˊʱde ʈɔ̃/「迎える」という語は、対応する蔵文 *gdan drangs* と音対応の面から見ると、第１音節の末尾鼻音が脱落しているという点について、Lhagang 方言の特徴であるとみなすことができる。この語の発音は、それがどの言語層（すなわち Lhagang 方言の A 類もしくは B 類）に属していても、第１音節の末尾鼻音は脱落することになる。

(B1)には「迎える」という動詞の行為者が現れていない。物語の背景を踏まえれば、文成公主は迎え入れられる側であり、迎える側はチベットの王ソンツェン・ガンポである[24]。動詞「迎える」は他動詞であり、その行為者は能格でもって表されるはずである。(B1)の/ˊʱdʑa ʱza ˊkõ dʑo/「文成公主」は絶対格であり、文法構造からみれば、文成公主は行為者として解釈されることはない。

時間表現を形成する/ˆʰkɑʔ-la/「～の時」の直前の動詞は TAM 標識を伴わなくてもよい。Lhagang 方言の動詞は、いくつかの動詞[25]を除けば、すべて「三時一式（現在・過去・未

[24] 第４節を参照。

[25] たとえば「行く」、「来る」など。

来・命令）」の形態変化が存在せず、一般的に動詞に TAM 標識と判断動詞が後続することによって、TAM を表現する。

(B2)

他動詞の行為者は一般に能格標示[26]され、被動者は無標である。Lhagang 方言では、能格は基本的に/-gə/という標識を付加することによって表示される。

Lhagang 方言の３人称代名詞は/ˉkʰo/しかなく、男女の区別をしない。

名詞に後続する数詞「１」は、その発音が/ˆʰtɕiʔ/ではなく/ˊtɕiʔ/となり、「ある～」の意味で用いられる。ただし(B2)の中では「１つの」の意味で用いられる。

動詞の接尾辞/-zə/は過去を表す場合に用いられ、一般的に判断動詞/-jĩ/または/-reʔ/が後続する必要がある。

(B3)

この文の初頭に現れる/ˊte/は、この物語の中に何度も現れ、主な意味として「それで、そこで」があげられる。物語を語るときにしばしば出現する要素で、一般的に文の中で文法的機能を持っているとは言えず、フィラーとしての機能もある。実際の発音ではその母音が非常に長く発音される場合が多く、[teː]のようになる。

名詞句/ˊtɕo wo-tə-Ø-na/の各要素の配列は次のようである：中心語（名詞）＋定性標識＋格標識＋主題標識。これらの順序は変更不可能である。

この文が示すのは、動詞句が「他動詞＋移動動詞」となっている場合、その主語は能格で表示されうるということである。Lhagang 方言では、自動詞の主語が能格標示を受けることは一般的に認められない。また、動詞/ˆʰsɑ̃/「思う」の主語もまた能格標示を必要としない。

動詞句/ˆkʰɯ ˊⁿɖo-ʱgo/「持っていく」は、文法上動詞/ˆʰsɑ̃/「思う」の目的語として分析される。この文の構造が示すのは、ある動詞が別の動詞の目的語となる場合、Lhagang 方言では何ら接辞を必要としないということである。

この文には格標識を伴わない地名「ラサ」が出てくるが、この種の用法は Lhagang 方言において頻繁に認められ、「音形式のない位格」と解釈する。この現象は地名や時間などを示す名詞に現れる。

(B3)の最後に伝聞標識が現れているが、これは発話者がこの文の内容を未確認のことであると表明している。これに対し、１つ前の(B2)の発話には伝聞標識が現れていないので、(B2)の発話は発話者にとって確実なことであるということを示している。

[26] チベット系諸言語の中には、能格標示を行うか行わないかの条件として、動詞の「制御可能/制御不可能」の対立によって決まるというものがある。ただし Lhagang 方言の場合、この条件が必要とされず、ただ動詞が他動詞か否かを考えればよい。

(B4)

この物語の中で、(B4)において初めて/˥l̥a ᶯgɔ/「塔公」という語が現れる。ここでの発音は Lhagang-B 方言の発音によっており、音節末鼻音を欠いている。物語の後のほうに音節末鼻音要素（鼻母音）を伴う/˥l̥a ᶯgɔ̃/の形式も現れるが、これは Lhagang-A 方言の発音に基づいており、両者は異なる言語層に属している（**4.3** 参照）。

この文の「塔公」もまた格標識を欠いている。しかしながら、構文上動詞/˩ʰtseʔ/「到着する」の目的語ではないため、(B3)文の中の「ラサ」と同じく音形式を伴わない位格と考える。

動詞/˩ʰtseʔ/「到着する」の初頭子音は蔵文 *sl* の対応形式であるが、この音対応は Lhagang 方言の特徴である。

(B5)

現地のチベット語話者は、動詞/˩kʰa ʈɑʔ/を Lhagang 方言に特有の口語形式と考えている。その第１音節は蔵文 *kha*「口」と同源であると考えられるが、第２音節は文語には認められない。しかしいくつかのアムドチベット語、たとえば rMachu（瑪曲）方言などに、類似の口語形式が存在し、/kʰa tɕək/といった形式が認められる[27]。音形式に基づけば、おそらく(B5)の分析時に添えた蔵文形式 *kha grags* に対応しうるだろう。

(B6)

Lhagang 方言の名詞句の構造は次のようである：中心語（名詞）＋形容詞＋副詞＋数詞/指示詞。(B6)文の構造は、/˴tɕiʔ/「ある～」の存在により、/˩ʰtɕi po ˋʰʈɑʔ mo/「非常に幸せな」が/˥sʰa tɕʰa/「ところ」の修飾要素であると理解できる。

形容詞の程度を強調する副詞/˩ʰʈɑʔ mo/「とても」は Derge（徳格）方言などカムチベット語北路方言群においても用いられる地域語であり（王詩文 2012:136）、蔵文では *skrag mo* と書ける。

名詞句の最後の位置を占める数詞「１」は、/˴tɕiʔ/のように、声調が上昇調となる。蔵文との対応関係から見ると、蔵文無声無気音字に由来する字を初頭子音とするものが上昇調をとるのは特殊である。

(B7)

この文の中で、/˴mə-ⁿɖo/「行かない」より前の部分はジョウォが話した部分の引用であるが、１人称で現れるべきところが３人称で現れている。物語の語りにおける対話部分の中で１人称であるところが３人称によって置き換えられているのは Lhagang 方言に特有の構造なのではなく、語り手個人の習慣による。

引用部分の最後を占める動詞句/˴mə-ⁿɖo/「行かない」と引用を示す動詞/˴zeː/「言う」の間にはいかなる標識も必要とされない。

---

[27] この情報は周毛草氏（中国社会科学院民族所）による。

(B8)

動詞/ˊzeː/「言う」は他動詞であるので、行為者は能格で表示される。(B11)の例も同様である。

この文の最後にある/-na/は一般的に接続詞として用いられるが、引用を始めるときの標識としても用いられ、ここでの用法は後者のものである。

/-na/の直前には伝聞の標示がないが、(B10)の最後に現れる。

(B9)

この文のように、自動詞の主語は基本的に能格標示をすることができない。

意思未来と必然性を表す接辞/-ʱgo/の後ろには判断動詞を付加することができる。

(B10)

この文は行為者も被動者も欠いているが、文脈に基づけば、行為者は「私（＝文成公主）」で、被動者は「あなた（＝ジョウォ）」であろう。

/ˊtə ⁿɖa/「あのように」は直前までの内容が引用部分であることを指示している。

(B12)

この文はジョウォによる語りの引用部分であり、文中に現れる３人称代名詞は「私（＝ジョウォ）」と解釈できる。(B7)を参考にすると、Lhagang 方言の語りの中の会話部分には１人称を用いない傾向にあると分析することができる。

Lhagang 方言において、/-dɑ/の機能は文法格の１つとしての共格である。形容詞/ˊⁿɖa ⁿɖa/「同じである」が共格を要求するといえる。

/ˉkʰo-dɑ ˊⁿɖa ⁿɖa ˊtɕiʔ/の部分は名詞化標識を伴わない名詞句であり、動詞/ˆʱʑɑʔ/「置く」の被動者に相当する。

(B12)の文中に現れる/ˊte/は、その前にポーズが置かれており、指示代名詞として機能する。ここの場合、直前の名詞句を指示している。

動詞/ˆʱdʑõ/「塑像する」は Lhagang 方言の口語形式で、完全に文語に対応する語は認められないが、蔵文 *bzhengs*「塑像する（敬語）」に非常によく似ている。

(B13)

この文には行為者の積極的意思を表す動詞接辞/-liː/が用いられている。これは主語（ジョウォ）の決心を表しており、この場合、もう１つの意思未来の接辞/-ʱgo/を用いることはできない。なぜなら、必要性を示す外因がないからである。

(B14)

固有名詞/ˊji ʐĩ ˊno rɯ/「イジン・ノルブ」の発音の中で、第１・第２音節は Lhagang-B 方言に属する発音で、第３・第４音節は Lhagang 方言（A 類）に属する発音である。後者はアムドチベット語の発音とほぼ同じであるが、前者のアムドチベット語 Yichang（依羌）方言による発音は/ji ᵛʐin/となる。

/ˉʔa na/「ここ」は物語の中の参照点を指示しているのではなく、直接語り手のいる地点、すなわち塔公を指示している。(B15)にも同様の用法が認められる。

(B14)中の属格は/-gə/で、能格標識と一致する。Lhagang 方言の属格には、ほかに/-ji/（B16、B22 など）という形式もあり、使用環境から考えると、前者は名詞に後続し、後者は動詞に後続するものといえる。

この文の最後の接続詞/-nə ta/は「～の後、そして」を意味し、またそれに先行する動詞は TAM 標示をする必要がない。

(B15)

この文中の/ˊtɕu xʰɔ̃/「釈迦牟尼殿」の発音は特殊で、蔵文 *jo khang*[28]の対応形式であるとはいえ、第２音節の初頭子音について本来の有気閉鎖音が有気摩擦音になっている。この現象は Lhagang 方言では珍しい。

(B16)

この文は、動詞語幹の後ろに直接属格標識/-ji/が付加されることを示している。

/ˆʰkɑʔ-la-tə/のうちの/-tə/は主題標識であるが、ここではポーズを置くということを示しているにとどまる。

この文の末尾にある/ˆⁿtʰõ-la-nə/の中の/-la/は位格標識ではなく、文と文を並列につなぐ接続詞である。

(B17)

名詞化接辞/-nə/の後ろには、さらに主題標識/-tə/が付加されうる。これは、名詞化接辞が名詞句を形成するためで、さらに加えて絶対格の格標示も加えられる必要がある。格標示の後ろが主題標識の位置である。

/ˆʱga-wɛː/と蔵文 *dga' ba'i* は完全に対応する。ただし、この口語形式、特に動詞語幹に *ba* 接辞を加えかつ母音の音質を変えることによって格標示を行う点は、文語の語形成とその読書音に属するものである。というのも、(B16)のように、Lhagang 方言では動詞語幹に直接属格標識を付加できるからである。しかしながら、物語の文脈から考えて、この文は地名の来歴を述べる箇所であり、語り手の意識の中に文語形式が想定された可能性が高い。同一の表現が(B22)にも現れるが、そこでは動詞語幹/ˉʱga/に直接属格標識が付加されている。

[28] 塔公寺の文献の中において、この語は *jo bo khang* とつづられている。

(B18)

この文の語釈には２つの動詞、すなわち/´zeː/「言う」と/´mĩ `ʰtɑʔ/「名づける」とが存在するが、両者の間には何の標識も付加されていない。しかし文の構成の解釈としては、第１の動詞は何の標識を付加することなく直接後続の動詞句の一部/´mĩ/「名前」を修飾していると考え、全体の意味では「～という名前」となっていると考える。

(B19)

この文に現れる/´ma ʰtsa/「本来」は、(B18)のように後続の名詞/´mĩ/を修飾しているわけではない。というのも、単純形容詞は必ず被修飾名詞に後続しなければならないからである。

文頭の「塔公」は主題標識を伴っていないものの、文中の役割としては主題であり、文の主語ではない。主語は/´mĩ-tə/「あの名前」である。

(B20)

/˜pʰa rə/は特定の場所を指示しているのではない。この文中では具体的な「ところ」の意味はなく、単に象徴的に用いられているだけである。直訳すれば、次のようになろう：「それから多くの時間があちらへ過ぎていったとき」

(B21)

この文には２つの動詞/ˆʰtẽ/「存在する」と/´zeː/「言う」があるが、これらの主語は１つで、/˜l̥a ʱgõ ˆzeː-nə/「塔公というの（＝名称）」である。

動詞/ˆⁿdʑɯ ʱdoʔ `tʰẽ/「変化する」は Lhagang 方言に特有の口語である。

(B22)

(B16)と同じく、属格は直接動詞語幹に後続できる。/˜l̥a `ʱga-ji ˜sʰa tɕʰa/「菩薩の愛した地」と/ˆjiʔ/「意味」は並列関係であり、/ˆjiʔ-kə/の能格は原因を示す用法として用いられており、また/´ʱdʑɯ ⁿtsʰɛː/「理由」と並列関係を構成する。

名詞/ˆjiʔ/「意味」は文語であり、口語としてはあまり用いられない。

/ˆjĩ-tɕẽ/「～であるため」もまた文語であり、特に原因を表す名詞化接辞/-tɕẽ/は口語としては非常に珍しい。

(B23)

/˜kə tsa pʰa/「のちに」は Lhagang 方言に特有の口語形式であり、対応する蔵文形式はこの発音に基づいて書かれている。Lhagang 方言において、/˜kə tsa/は単独で「後ろ、あと」を意味する。第３音節/pʰa/は蔵文 *phar*「あそこ」と対応する可能性がある。さらなる研究が必要である。

4　『菩薩の愛する地・塔公』物語の版の異同と関連する問題

口承によって伝えられてきていることに起因し、物語の内容はほぼ同じではあるものの、版によって細かい部分でさまざまな差異が生じている。Sonam Wangmo (2013:32-51)はこの物語にこめられた意味を詳細に検討し、木雅地域の関連する物語について紹介と分析を行っている。その中で、Sonam Wangmo (2013:34-40)はこの物語に関連する２種類の文語による記録が存在することを紹介した。それらは 1) *Yang-gsang mkha'-'gro'i thugs-kyi ti-ka-las/ lHa-dga' ring-mos gnas-kyi dkar-chag*（『塔公寺誌目録』）、2) *Bal lHa-sgang gi gNas-bstod*（『塔公地方頌』）で、それぞれ塔公寺で継承されてきたものである。この２種の文献はまた Karma rGyal-mtshan (2002:288-314)にも収録されている[29]。ただし、これら２種の文献と民間に伝わる物語では伝承の文脈が異なる[30]ため、ここでは取り扱わない。

4.1　塔公村に伝わるその他の版

1.2 で述べたように、２節で記述・分析した物語は「短編版」であり、それ以外に「長編版」もある。長編版の内容は一般にソンツェン・ガンポ[Srong-btsan sGam-po]が唐の太宗に娘の文成公主を降嫁させる要求を出すくだりから始まり、長安でいかに太宗に同意させるか、また文成公主がチベット入りする道中どのような出来事があったかなどの内容があり、物語の最終部分になって初めて直接塔公と関係のある描写になる[31]。一方で、２節で掲げた物語と対比すると、長編版の描写は詳細であるため、まず筆者が収集した２編の比較的詳しい描写のある塔公と文成公主にかかわる物語のくだりを紹介していく。

まず１つめは塔公のガラ・ジャツェ[mGar-ra 'Jags-tshe]さん[32]の口述に基づいて整理したものである[33]：

> 「西暦 641 年、吐蕃の国王ソンツェン・ガンポは名をはせた大臣ガル・トンツェン[mGar sTong-btsan]を唐に派遣し、唐の太宗に文成公主の降嫁を要請した。太宗は吐蕃国の法整備が厳格であり，王から民衆まで力を持ち、国力が強盛であること見て

---

[29] ただし、２つめの文献名は *dPal-dang yon-tan-gyis mngon par mtho-ba BA lHa-sgang-gi gnas-la bstod-pa dung-dkar skye-ba lnga-pa'i rang-sgra dad-pa'i 'khri-shing 'od-kyi zla-zhun* となっている（Karma rGyal-mtshan 2002: 301）。また、Epstein、彭文斌(2013:120)にも同様の文献について言及があるが、名称が *Bā lha khang gi gnas bstod* となっており、つづりが異なっている。

[30] ただし、これら２種の文献の記述によれば、文成公主がチベット入りするとき、塔公にジョウォのために塔公寺を建てた旨の簡潔な記述があり（Sonam Wangmo 2013:34-40 ; Karma rGyal-mtshan 2002:288-314）、歴史背景については文献と口承物語とで一致する。

[31] それゆえ、現地の人々は長編版を蔵文で *lo-rgyus* と呼ばれる歴史伝説であると考えており、短編版もその歴史伝説の一部であるとする。史衛国(2013:52)は次のように述べている：“チベット人が用いる Lo-rgyus という語は、一般的にいうと、「歴史」と訳しうる。口頭伝承の情景において、Lo-rgyus は必ず一種の「民間に伝わる当地の歴史」と理解しなければならない。”（筆者訳）

[32] 彼は現地を代表する知識の豊富な老人として知られていたが、不幸にも 2013 年 6 月に逝去した。

[33] この部分の記録は本稿第２著者による。また、Sonam Wangmo (2013:41)にも記述がある。

取った。そこで吐蕃と和睦を結ぶためにこの要請を承諾し、娘の文成公主をソンツェン・ガンポに嫁がせることとし，特別に礼部尚書江夏王李道宗に公主のチベット入りの護送を命じた。言い伝えによれば、文成公主が長安からチベットに向かう途中，嫁入り道具として携えていた 12 歳の釈迦牟尼等身像を美しい塔公草原まで運んだ時，突然重たくなったので、馬もヤクも運ぶことができなくなった。このとき仏像が口を開いて『この土地は美しすぎる。私はここにとどまりたい』と言った。公主はこの仏像をチベットに持っていかなければならないため、従者の職人に全く同じ仏像を作るよう命じ、伝説によると、その当日職人はその半分を塑像し、その夜仏像本体が自然と完成したという。次の日、新しい仏像を塔公に残すため、あわせて寺院を立て、その仏像をその寺に安置した。これが以降の塔公寺であり、『菩薩の愛する地』という表現もここに由来する。これ以降、塔公寺はカム地域で有名になった。」

このほかにも、現地の老人が筆者に塔公寺の後ろにある 108 つの塔（図６）もその年文成公主が選んだものであると語ってくれた。

図６：塔公寺後方の仏塔（2012 年）　　四郎翁姆 撮影

２つめは塔公寺釈迦牟尼殿の前に掲示してある紹介文である[34]：

「历史授记公元 641 年大唐文成公主与藏王松赞干布联姻，为了加强民族团结，巩固边疆。唐太宗把文成公主许配给藏王松赞干布时，并把一尊释迦牟尼佛（藏语称“觉悟”） 12 岁的等身佛像赐给公主作为嫁妆。（. . . 中略. . . ）。文成公主进藏经过塔公的时候，在此休息，开始要启程的时候奇迹的事情就发生了，这尊觉沃佛（12 岁的等身像）竟然像在地上生了根一样，再也无法移动半步。就在众人千方百计要拉动这尊佛像的时候，佛像竟自己开口说：这里是一块吉祥之地是诸佛菩萨欢喜的圣地，不愿在向前行。但由于佛像乃唐太宗赠送给藏王松赞干布的，必须要请往拉萨。贤明的文成公主与智慧的禄东赞当即决定派已降服了的妖魔鬼怪去圣地取用圣泥，圣水后按照原貌复制了一尊。
历史记载：在复制过程中，当天复制完下半身，而后把圣泥圣水都堆在了复制完下半身的前面，第二天早晨来复制上半身的时候。谁也没有料到，没复制完的上半身一夜之间竟自然生成，诸佛菩萨虚空中现身，加持，沐浴此复制的佛像，虚空还传来美妙动听的法器音乐，降下了花雨等瑞相，原貌才得以顺利启程（现供奉在拉萨大昭寺）。」

「西暦 641 年、唐の文成公主とチベットの王ソンツェン・ガンポが民族の団結と辺境を強固にするため婚姻関係を結んだ。唐の太宗は文成公主をソンツェン・ガンポに嫁がせるとき、釈迦牟尼仏（チベット語で「ジョウォ」）の 12 歳の等身像を嫁入り道具として持たせた。（. . . 中略. . . ）。文成公主がチベット入りするとき塔公を通りがかった時にここで休憩を取り、出発しようとしたときに奇跡的な出来事が起こった。このジョウォ（12 歳の等身像）がまるで地に根を下ろしたかのように、半歩も動かなくなってしまったのである。人々がさまざまな方策を尽くしてこの仏像を動かそうとしたとき、仏像が自ら口を開いて「ここは吉祥の地、諸仏・菩薩の喜ぶ聖地であるから、これより先には行きたくない」と言ったのである。ところが仏像は唐の太宗がチベットの王ソンツェン・ガンポに送るものであるから、必ずラサに向かうように請わなければならない。賢明な文成公主と知恵のあるガル・トンツェンはすぐにすでに降伏させた妖魔妖怪に命じて聖地に聖土と聖水を取りに行かせたのち、もともとの仏像にならって１体を複製した。

[34] 2014 年 2 月に実際に確認した。この文章には作者が記されていない。ただし筆者が現地の僧に聞いたところ、原版はカンド・イェシェ・ツォジェ[mKha’-’gro Ye-shes mTsho-rgyal]の埋蔵宝典によるという。筆者の入手した版はラマのサンジェ[Sangs-rgyas]が原版から圧縮した版である。Sonam Wangmo (2013:32-51)は僧と民間の間で塔公の歴史に関する理解は異なっており、僧の理解は一般に上に述べた２種の文献によっている、と述べているため、寺院にこの物語が掲げられているのは興味深いことであるといえる。まず以下に漢語原版を掲げ、そののち和訳を付す。原版の漢字表記ならびに句読点はそのまま維持する。

歴史が記すところには次のようにある：複製の過程において、当日は下半身を完成させ、そののち聖土と聖水を複製した下半身の前に積んでおいた。２日目の朝上半身を複製しようとやってきたところ、誰もが予想しなかったことに、複製し終えていなかった上半身は一夜のうちに自然に成り上がっており、諸仏・菩薩が虚空より姿を現し、この複製した仏像を加持、沐浴したうえ、空からは妙なる聞きよい音楽が聞こえ、花雨が降るなど縁起の良いことが起こった。それでもともとの仏像は問題なく出発することになった（現在はラサの大昭寺に奉納されている）。」

これらの内容は、本稿で分析した物語の中の(B1)-(B15)とが対応するだけでなく、細かい部分が非常に明確になっている[35]。加えてガラ・ジャツェ版の中の「『菩薩の愛する地』という表現もここに由来する」という部分が本稿の(B16)-(B23)の地名の解釈を行う部分と対応する。

上に示した２種の物語の背景は大部分似てはいるが、異なっている部分も少なくない。これら２種の物語と２節に記述した物語の版の間に認められるもっとも大きな差異はジョウォと文成公主の間の対話の有無とジョウォが口にした発話の内容、すなわち(B9)、(B10)における「文成公主のジョウォに対する返事」の部分と(B12)の「ジョウォが自ら文成公主に複製するよう願い出た」という部分であり、これらは直前の２種の物語には含まれていない。筆者は調査中に見出したことには、塔公で流布している物語には確かにこの差異が認められ、それゆえ２種の版が存在するといえる。さらに、ジョウォが「重くなった」または「根が生えたよう」といった表現の有無、「私は行きなくない」と「私はとどまりたい」といった表現方法などについても異なりが認められる。特に後者の表現方法の問題は比較的重要であり、**4.2** でまた議論することにする。

このほかにも興味深いことがある。長田(2002[3]:228)が塔公を紹介する項目で次のように述べている：

「釈迦牟尼像が『ここ（＝塔公[36]）に置いていってくれ』と言ったそうな——少なくとも地元ではそういうことになっているのである。」

しかし筆者が確認した限りでは、塔公にはこのくだりと全く対応する物語は伝えられておらず、ただ(B12)のようにジョウォが「**私と全く同じもの**をここに置いていくように」と言った版のみである。筆者が推測するに、長田(2002[3]:228)における記述はおそらく(B12)の

[35] 本稿では歴史上の事情について議論するつもりはないが、次の観点は言及に値する。上に述べた２種の版はいずれも西暦 641 年に文成公主がチベット入りしたと述べているが、山口 (1983:370-387, 576-648)の研究によれば、文成公主がチベット入りした年は西暦 640 年で、文成公主を護送したのは唐の江夏王道宗で（ガラ・ジャツェ版と一致）、ガル・トンツェンは公主がチベット入りするとき長安にとどまり、公主とは行動を共にしなかったという。少なくとも歴史文献の詳細な研究によって得られた結論が山口 (1983)の観点ではあるが、民間伝承の物語の中にはしばしばこれとは異なる描写が認められる。

[36] 本稿筆者による注。

部分の過度な簡略版ではないだろうか。しかしながら、もう１つ別の考え方もあり、それは塔公村以外で流布している版の影響である。次にこれについて述べていく。

4.2　塔公村以外に伝わる版

本稿で扱った物語は塔公郷のみならず、塔公郷と隣接する道孚[rTa'u]県八美鎮、色卡[gSer-kha]郷、協徳[Zhi-bde]郷[37]、および康定県木雅地区にも流布している[38]。その中で、道孚県に伝わる物語は塔公村のものとほぼ一致するが、新都橋[Ra-rnga-kha]鎮に伝わる物語はこれとは異なった特徴がある。たとえば、新都橋鎮東俄洛[mGo-log-thog]村に伝わる版はまったく異なり、おおよその内容は次のようである：

> 「文成公主が多くの嫁入り道具を携えてチベット入りする途上、塔公を通りかかった時に，このあたりに疫病が蔓延し、多くの子供が病気に苦しんでいるのに気づいた。この状況に際し、彼女が携えていたいくつかの仏像のうちの１体が突然口を開いて話し始めた：『私はもう先へ進まず、ここにとどまり病を治そう』と。 このとき文成公主は口を開いた仏像をここに置いていくことを決め、ここに残された仏像が今の塔公寺にあるジョウォである。」

この版は確かに塔公郷の版と背景が似てはいるが、仏像が口を開いて「私はもう先へ行かない[39]」という段以外は、全く異なるといっても過言ではない。東俄洛村の版の重要な記述は次のようである：口を開いた仏像が現在の塔公寺のジョウォであり、かつ文成公主が

---

[37] 協徳郷にある惠遠寺[mGar-thar dGon]のチベット名に含まれる *mGar* という語はガル・トンツェンの氏族名 *mGar* に由来し、文成公主がチベット入りするときにガル・トンツェンもこの地を訪れたという当地の伝説に基づいている。Zla-ba sGrol-ma (2014:5-6)も参照。

[38] 一方で、筆者はこの物語が丹巴県の各郷には伝わっていないことを確認した。道孚県城などの地区でも本来は流布していなかったという。ところが塔公のジョウォの影響力が非常に大きいため、現在では多くの人々がこの物語を聞き知っている。現在の道孚県においてこの物語がそもそも流布していたのは、旧乾寧県（道孚県と合併ずみ）のチベット語分布地区とほぼ一致する。

[39] この表現の Rangakha/mGolothog（東俄洛）方言による形式は/ˊŋa ˊmə-ᶯɖo/「私は行かない」となっている。東俄洛村の版では、仏像は確かに「私は行かない」と述べたことになっている。というのも、塔公のジョウォの別名を「先へ行こうとしなかった仏像」と言うからである。塔公村の版においてジョウォが話した内容には次のような３つの差異がある：「私は行かない」（本稿で訳注を与えた版および塔公寺に掲示されている版）、「私はここにとどまろう」（ガラ・ジャツェ版；Sonam Wangmo 2013:41 参照）、「私は行かず、ここにとどまろう」（本稿では紹介していない長編版）。ほかにも、塔公村の版ではジョウォが口を開いた原因は塔公の風景が美しいからであり、それ以外の描写がある版は未見である。Epstein、彭文斌(2013:120)もまたこのくだりに触れ、「ジョウォは（塔公という）吉祥の地によって引き寄せられ、先に進むことを拒んだ」ということを述べている。

複数の仏像を携えていた[40]。言い換えれば、文成公主がジョウォを複製したというくだりを欠いているということになる。

先行研究の中で、Warner (2011:252)は塔公寺のジョウォが唐の太宗が贈った１体であり、ラサの大昭寺のジョウォが複製されたものであると述べている。この種の物語は筆者が収集した物語のさまざまな版の中には見られない。このため、筆者はこの語りはおそらく東俄洛村の版も含めた多数の版の物語をまとめて再編した版に基づいていて、ムニャ地域で口承により伝えられた版ではない可能性が高いと推測する[41]。長田(2002[3]:228)が記述している物語もまた東俄洛村の版に影響を受けて成立したものである可能性がある。

4.3　地名「塔公」の由来について

以上で議論した問題は、主に本稿で紹介した物語の中の(B1)～(B15)の内容とかかわっている。ここでは (B16)～(B23)の内容と他の版の記述について述べていきたい。

4.1 で述べたように、ガラ・ジャツェ版の中には「『菩薩の愛する地』という表現もここに由来する」という段が含まれている。ただし、短編版の(B16)～(B23)のような詳しい説明はない。民間に伝わる物語の中で、「塔公」という名称はまず初めにジョウォが塔公に到着したときに口を開いたことによって *Lha-dga'*「菩薩の愛する地」という名称が成立し、のちにゆっくりと *Lha-sgang* となり、その音訳として「塔公」と呼ばれるようになった、とされている。ガラ・ジャツェ版の内容に基づくならば、この版もまた短編版と同じ地名の由来を支持しているものといえる。それでは、*Lha-sgang* の第２音節の意味は一般的な蔵文 *sgang* の語義「小高い丘、高地」であるのか、またはそれ以外の特別な意味を持っているのだろうか？筆者が収集した長編版もまた *Lha-sgang* の由来を述べており、その第２音节は木雅熱崗 *Mi-nyag Rab-sgang*[42]の最終音節に由来するといい[43]，*Lha-sgang* の含意は「木雅熱崗にある菩薩の愛する地」となる。

この説明は民間の伝承にのみ存在し、先に言及した２種の文献（*Yang-gsang mkha'-'gro'i thugs-kyi ti-ka-las/ lHa-dga' ring-mos gnas-kyi dkar-chag* と *Bal lHa-sgang gi gNas-bstod*）の記述とは異にする。*Yang-gsang mkha'-'gro'i thugs-kyi ti-ka-las/ lHa-dga' ring-mos gnas-kyi dkar-chag* の記述では、最初に *mTsho-lung*「湖の谷」という名称があり、のちに *Lha-lung*「菩薩の谷」（７世紀）、*Lha-dga'*「菩薩の愛する地」（８世紀）といった名称が出現した（Sonam

---

[40] 東俄洛村の版では、口を開いた仏像は塔公郷で流布している版の言うような 12 歳の釈迦牟尼等身像ではなく、別の１体であるという。12 歳の釈迦牟尼等身像は無事にラサまで運ばれ、大昭寺に奉納されたという。

[41] 言語学的な目的で分析対象とする物語については、口承の伝説とされるものが実際に長きにわたって口承されたものであるか語り手が口承に基づいて新たに構成した「新作」であるかを考慮する必要性はないかもしれない。ところが現地の言語文化（無形文化遺産；漢語では「非物质文化遗产」）を記録し保存していく対象として見るとき、この問題は議論される必要がある。

[42] 長編版の中において、木雅熱崗はしばしば *Mi-nyag Rab-sgang Phyug-mo*「豊かな木雅熱崗」と呼ばれる。

[43] Sonam Wangmo (2013:49)もまた同様の解釈を提示している。

Wangmo 2013:34-38）。塔公寺の僧たちは、*Lha-sgang* という名は文献に記述されているように、もともとは *Lha-dga'*であったと考えている。ただし文献の中に、のちに *Lha-sgang* に変化した説明は存在しない。

現在のところ、村の名称も寺院の名称も蔵文では *Lha-sgang* と書かれている。ただし口承の伝説でも文献の記述でも *Lha-dga'*がもともとの名称であったとされている。これら両者の形式の関係について、Suzuki & Sonam Wangmo (2015)は１つの仮説を提示している。それは、Lhagang 方言は末尾鼻音が脱落する傾向にあるために、*Lha-sgang* と *Lha-dga'*の間の発音が非常に近くなったということである。この状況は２節に紹介した物語それ自体の中にも見て取ることができる。短編版の物語の中で、*Lha-sgang* と対応する形式は７回現れるが、そのうち４回が鼻音成分を含まない/l̥a ʰgɔ/（B4、B12、B15、B16）である一方、残りの３回が鼻音成分を伴う/l̥a ʰgɔ̃/（B19、B21、B23）である。前者は Lhagang 方言（B 類）の発音であり、後者は Lhagang 方言（A 類）の発音である。後者の出現状況を考えれば、すべて塔公の地名にかかわる箇所であり、そのほかにも(B16)～(B23)は多くの点で文語形式と似通った表現がある（３節参照)。

音節末尾鼻音の有無が以上のように出現するので、Lhagang 方言の現状から推測するに、この方言の歴史上ある時期に *Lha-sgang* と *Lha-dga'*の交差が起きてしまった可能性が高い。この種の解釈の可能性は、ほかの現象からも支持されうる。塔公村周辺のアムドチベット語の中で、Yichang 方言と gSerkha（色卡）方言にも類似の音声現象が認められる。２音節語の第２音節に末尾鼻音を伴う例において、特に発話が早い場合には、発音上末尾鼻音が失われることがあり、たとえば *Lha-sgang* の本来の音韻表記では/l̥a ʳgaŋ/（Yichang 方言)、/l̥a ʳgæŋ/（gSerkha 方言）となるけれども、[l̥a ʳgã]、[l̥a ʳga]、[l̥a ʳgæ̃]、[l̥a ʳgæ]のような発音も聞くことができる。

以上に述べた現象に基づいて、Minyag Rabgang 方言群に属する Lhagang 方言およびアムドチベット語においても、発音上 *Lha-sgang* と *Lha-dga'*が極めて似通った形式になる可能性は十分にある。「塔公」という地名の由来が何であれ、言語学の角度から見れば、現地の説明の仕方にはその土地の方言の特徴がよく反映されているといえる。

5　まとめ

本稿では塔公郷でもっとも流布している口承の物語『菩薩の愛する地・塔公』のカムチベット語 Minyag Rabgang 方言群に属する Lhagang 方言による語りの資料を提示し、言語学的な分析を行った。加えて、この物語の複数の版における異同について考察した。

チベット系諸言語の各種方言・変種が現代社会のさまざまな要因により消滅の危機に瀕している状況において、筆者が共有する願いはゆっくりと消滅しつつあるこのような口承の伝統とその言語文化をできる限り記録し、保護することである。物語の内容の異同に関する議論はこのためにも必要とされる。塔公には多くの口承による民間の物語が存在する。以後、他の物語も本稿のような方法で記録されることが期待される。

付録

A　『菩薩の愛する地・塔公』文語版[44]**（短編版(B1)～(B15)に対応）**

བོད་རྒྱལ་སྲོང་བཙན་སྒམ་པོ་ནི་འགྲན་ཟླ་བྱལ་བའི་དཔའ་བོ་ཞིག་དང་། ཆབ་སྲིད་པ། དམག་དོན་ལ་མཁས་པ་ཞིག་ཡིན་པ་མ་ཟད་ཆོས་ལུགས་རིག་གནས་ལ་མཁས་པ་ཞིག་ཀྱང་ཡིན་པས། ཁོང་གིས་རྒྱལ་སྲིད་བཟུང་མ་ཐག་ཐབས་དང་རྩལ་ལ་བརྟེན་ནས་ཆབ་འབངས་ངོ་ལོག་པ་ཆེམས་སླར་བཀྲག་ནས་བདེ་འཇགས་ཀྱི་སྒྲུ་ཚོགས་ཞིག་བསྒྲུན་ཡོད་ལ། ཡང་བཙན་པོས་ཁྱིམ་མཆོས་ཀྱི་རྒྱལ་ཁབ་རྒྱ་དང་བལ་པོ་གཉིས་ནི་སྐབས་དེར་ཤེས་རིག་ལག་རྩལ་དང་། སངས་རྒྱས་ཆོས་ལུགས། ལྷག་པར་དུ་སྲིད་འཕྲོར་དམག་གསུམ་ཐད་དར་ཞིང་རྒྱས་པ་རྟོགས་ནས་༧༩ཡོར་མཁར་རིག་པ་ཅན་སོགས་བློན་པོ་ཁག་ཅིག་རྒྱ་ནག་ཏུ་བཏང་ནས་གོང་མ་ཐང་ཐེ་ཚུང་གི་སྲས་མོ་ལྷེ་ཁྲན་ཀོང་ཇོ་བཙུན་མོར་བསྲས་ཤིང་། དེ་དང་མཉམ་དུ་སྐུ་རྟེན་ཇོ་བོ་ཕྱག་མྱ་ནི་གཙོ་བྱས་པའི་གསུང་རབ་དང་སྨན་ཚིས་སོགས་ཀྱི་བསྟན་བཅོས་མང་པོ་ཇོངས་སྐལ་དུ་བླངས་ནས་ཡར་བོད་ཁ་བ་ཅན་དུ་འགྲོ་ལམ་དུ། ཁམས་མི་ཉག་ཤར་སྟོད་བཞག་བྱ་དཀར་པོའི་མདུན་ཞོལ་ལྷ་སྐང་ཞེས་གྲགས་པའི་གནས་འདིར་སྲིབས་སྐབས་ལྷ་ས་ཇོ་བོ་གློར་བུར་དུ་ཇེ་ལྷོད་ལ་སོང་ནས་མིས་མི་ཐེག་པར་ཐུར། འོན་ཀྱང་ཀོང་ཇོས་ཇོ་བོའི་སྐུ་འདི་ཁྱེར་ནས་ངེས་པར་དུ་ལྷ་ས་ཞེབས་དགོས་ན་ཡང་ཇོ་བོའི་སྐུ་འགྲལ་མི་ཐུབ་པར་ཐུར། སྐབས་དེར་ཡུལ་མི་ཆོས་བཤད་སྲོལ་ལྷར་ཇོ་བོའི་སྐུར་གློ་བུར་དུ་གསུངས་བྱོན་ནས་ས་ཆ་འདི་ཅ་ཅང་རྒྱུད་པས་ང་རང་འདིར་བསྟད་རྒྱ་ཡིན་ཞེས་པར་གྱིས། དེ་ནས་ཀོང་ཇོ་ཅི་བྱ་གཏོལ་མེད་དུ་ཐུར་ནས་མཁར་བ་རྣམས་ལ་བཀའ་ཕབས་ཏེ་ཇོ་བོ་འདི་དང་གཅིག་པ་གཅིག་ཀྱང་ཡིན་པའི་སྐུ་ཞིག་བཟོས་པ་མ་ཚད་ཇོ་བོ་དེར་ལྷ་ཁང་ཞིག་བཞེངས་པ་རེད།།

B　『菩薩の愛する地・塔公』Lhagang 方言短編版[45]

ཉི་མ་གནའ་གནའ་ལ་རྒྱ་བཟའ་ཀོང་ཇོ་བོད་ལ་ཡར་ལ་གདན་དྲངས་སྐབས་ལ་ཐང་རྒྱལ་པོ་ཀྱིས་ཁོ་ལ་ཇོ་བོ་གཅིག་སྦྱིན་ཟེ་རེད། དེ་ཇོ་བོ་དེ་ན་རྒྱ་གཟའ་ཀོང་ཇོ་ཀྱིས་ལྷ་ས་ཡར་ལ་ཁུར་འགྲོ་དགོས་བསམ་ཟེ་རེད། དེ་ལྷ་སྐང་སྲིབས་སྐབས་ལ་ཇོ་བོ་ཀྱིས་ཁ་གྲགས་ཟེ་རེད། ས་ཆ་སྐྱིད་པོ་སྐྱ་མོ་ཅིག་རེད། ཁོ་ད་ཡར་ལ་མི་འགྲོ་ཟེར་ཟེ་རེད། དེ་རྒྱ་བཟའ་ཀོང་ཇོ་ཀྱིས་ཟེར་ན་ཁྱོད་ཡར་ལ་འགྲོ་དགོས་རེད་མི་ཚད་ཟེར་ལྷ་ས་ཡར་ལ

44　この記述は bSod-nams dBang-mo (2014)の内容に基づいて書き改めたものである。

45　この記述は本稿 2 節に掲げた語りについて、Lhagang 方言の実際の発音に近くなるようにつづりを若干調整し、かつ伝聞標識を取り除いたものである。

ལྷུར་འགྲོ་དགོས་རེད་དེ་འདྲ་ཟེར་ཟི་རེད།　དེ་ཇོ་བོ་གྱིས་ཟེར་ན་ཁོ་དང་འདྲ་འདྲ་ཅིག་དེ་ལྟ་སྒང་བཞེངས་ནི་བཞག་རོགས་འོ་དེ་ཁོ་ཡར་ལ་འགྲོ་ལིས་ཟེར་སྐབས་ལ་དེ་རྒྱ་བཟའ་གོང་ཇོ་གྱིས་ཨ་ན་ལྟ་ས་གྱི་ཇོ་བོ་ཡིད་བཞིན་ནོར་བུ་དང་འདྲ་འདྲ་གཅིག་བཞེངས་ཟི་རེད་དེ་ཨ་ན་ལྟ་སྒང་ཇོ་ཁང་ནི་བཞག་ཡོད་རེད།

དེ་ལྟ་སྒང་སྒྲེབས་སྐབས་ལ་དེ་ཇོ་བོ་གྱིས་ཁ་གྲགས་ཡི་རྒྱ་མཚན་དེ་མཐོང་ལ་ནི་དེ་ལྟ་དགའ་ཟེར་ནི་ད་ལྟ་དགའ་བའི་ས་ཆ་ཡིན་ན་ལྟ་དགའ་ཟེར་མིང་རྡགས་ཟི་རེད། ལྟ་སྒང་མ་ཙུ་མིང་ན་ལྟ་དགའ་ཟེར་རེད། དེ་དུས་ཚོད་མང་པོ་ཕ་ཏུ་ཆལ་ཚར་སྐབས་ལ་དེ་ལྟ་སྒང་ཟེར་ནི་ཕ་ཏུ་འགྱུར་ལྡོག་ཐེན་ཟིན་རེད་མི་ཚད་མ་གཞི་ལྟ་དགའ་ཟེར་རེད། ལྟ་དགའ་ཡི་ས་ཆ་ཡིན་པའི་རྒྱ་མཚན་དེ་ཡིན་རྒྱུན་དེ་ལྟ་དགའ་ཟེར་ཟིན་རེད་ད་ནི་ཀི་ཙ་ཕ་ལྟ་སྒང་ཟེར་ནི་མིང་འགྱུར་ཟི་རེད། ।

C　『菩薩の愛する地・塔公』Lhagang 方言短編版の再整理版[46]

གནའ་སྦྱ་མོ། བོད་རྒྱ་རབས་ཀྱི་སྐབས་སུ། རྒྱ་བཟའ་གོང་ཇོ་བོད་ལ་མནའ་མ་འོང་ཁ། ཐང་ཐེ་ཙོང་གིས་གོང་ཇོ་ལ་མནའ་མའི་སྐལ་བ་ལྟ་སྐུ་ཞིག་སྦྱིན་ཟི་རེད། རྒྱ་བཟའ་གོང་ཇོ་ལྟ་སྒང་བཙེའམ་ཁ། ལྟ་སྐུ་ཡིས་གསུངས་སྒྲོག་ཟི་རེད། གསུངས་སྒྲོག་ནང་དོན་ནི། འདི་ན་ས་ཆ་སྐྱིད་པོ་ཞིག་རེད། ང་རང་འདི་ན་འདུག་སྟེང་དོ་དུ། ད་འགྲོ་ལེ་མ་ཡོན། རྒྱ་བཟའ་གོང་ཇོ་ཡིས་ཁྱེད་ངེས་པར་ལྟ་ས་ཐོན་དགོས་རེད། ངས་ཁྱེད་རང་གི་འདྲ་སྐུ་ཞིག་བཀོས་ནས་འདི་ན་བཞག་ཆོག་ཟེད། ད་ས་ང་ལྟ་སྒང་དགོན་པའི་ནང་གི་ལྟ་སྐུ་ནི་ཐང་རྒྱ་རབས་སྐབས་སུ་རྒྱ་བཟའ་གོང་ཇོས་བཞག་རྒྱ་དེ་རེད།

མིང་ལ་ཇོ་བོ་མི་འགྲོ་གསུངས་འཇོག་ཟེར། ལྟ་སྒང་ཞེས་པ་ནི་སྟོན་མ་ཇོ་བོ་མི་འགྲོ་གསུངས་འཇོག་དགའ་བའི་ས་ཆ་ཡིན་པའི་རྒྱུ་ལྟ་དགའ་ཐོག་བ་རེད། ཇེས་མར་སྒྲ་འགྱུར་བའི་རྒྱུ་ཀྱི་ལྟ་སྒང་ཞེས་དགའ་ནི་སྒང་སུ་འགྱུར་སོང་།

[46] この記述は第３著者が２節の語りを書き改めたものである。

参考文献

Epstein, Lawrence、彭文斌 (2013)〈甘加和墨尔多：藏东两个朝圣地的空间社会结构〉（才让卓玛　訳），載：苏发祥主编《人类学视野中的安多藏区研究》，101-128，中央民族大学出版社（原版：Autumn Ganjia and Murdo: The social construction of space at two pilgrimage sites in Eastern Tibet. *Tibet Journal* 19(3), 21-40, 1994）

黄布凡 (1985)〈木雅语概况〉《民族语文》第 3 期 62-77.

池田巧 (1998)〈木雅语语音结构的几个问题〉『内陸アジア言語の研究』XIII，83-91.

Karma rGyal-mtshan (2002) *mDo-Khams gnas-yig phyogs-bsgrigs dad-bskul lha-dbang rnga-sgra zhes bya-ba bzhugs-so*. Mi-rigs dPe-skrun-khang.

格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med] (1985)〈藏语巴塘话语音分析〉《民族语文》第 2 期 16-27.

Lha-mo-skyid (2010) *Mi-nyag sa-khul-gyi kha-skad-kyi khyad-chos-la rags-tsam gleng-pa*. 西北民族大学畢業論文

長田幸康 (2002[3])『旅行人ノート　チベット』旅行人

史卫国 [Schwieger, Peter] (2013)〈口述史：康区察雅集体认同之建构〉（索朗卓玛　訳），載：徐建华主编《云南藏学研究（一）》，52-76，民族出版社（原版：History as oral tradition: the construction of collective identity in Brag g.yab. In Lawrence Epstein (ed.) *Khams pa Histories: Vision of People, Place and Authority*, 127-154, Brill, 2002）

Sonam Wangmo (2013) *Lhagang Monastery in Myth, History and Contemporary Society*. M.Phil. Thesis, Universitetet i Oslo.

bSod-nams dBang-mo (2014) *lHa-sgang dgon dang de'i spyi-tshogs phan-nus-skor gleng-ba*. 中央民族大学碩士論文

鈴木博之 (2006)「チベット語塔公[Lhagang]方言の方言特徴とその背景」『ニダバ』35 号 39-47.

——— (2009)〈川西地区"九香线"的藏语方言:分布与分类〉《汉藏语学报》第 2 期 19-27.

——— (2013)《《天全译语》及《打箭炉译语》与当代木雅热岗藏语的关系》"华夷译语"和西夏字符国际学术研讨会（北京）会議論文

——— (2014)《藏语方言学研究的基础问题：以木雅热岗地区为例》中国社会科学院民族学与人类学研究所人类学论坛第五十六讲　講座稿

Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan. In Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol.3, 15-34, National Museum of Ethnology.

Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2014) *Language evolution and vitality of Lhagang Tibetan, a Tibetic language as a minority in Minyag Rabgang*. Paper presented at the workshop on the linguistic minorities of the Chinese Tibetosphere (Uppsala).

——— (2015) Quelques remarques linguistiques sur le tibétain de Lhagang, «l'endroit préféré par Bodhisattva». *Revue d'Etudes Tibétaines* (in press).

王诗文 (2013)《藏语康方言语法研究---德格话语法》民族出版社

王双成 (2012)《藏语安多方言语音研究》中西書局

Warner, Cameron David (2011) A miscarriage of History: Wencheng Gongzhu and Sino-Tibetan historiography. *Inner Asian Journal* 2, Vol. 13, 239-264.

山口瑞鳳 (1983)『吐蕃王国成立史』岩波書店

张怡荪主编 (1995)《藏汉大辞典》民族出版社

朱晓农 (2010)《语音学》商務印書館

Zla-ba sGrol-ma (2014) *mGar-thar dgon-pa'i lo-rgyus dang da-lta'i gnas-bab-skor-la rags-tsam dpyad-pa*. 中央民族大学碩士論文

h̃ と ñ

―鼻腔共鳴を伴う声門摩擦音に関する覚え書き―*

鈴木 博之

キーワード：チベット系諸言語、声門摩擦音、前鼻音、前気音

[要旨] 本稿では、チベット系諸言語のうち限られた少数の方言に認められる声門摩擦音に先行する鼻音要素の調音音声学的特徴を記述し、加えて前鼻音と前気音が交替する現象と有気音の気音部分が鼻音化する現象をいかに解釈するかという問題についても検討を加える。

1　はじめに

国際音声字母 (IPA) の子音表において、鼻音と言うのは口腔内で閉鎖を伴う調音方式について、特定の音標文字が定められている。しかし一般に考えて鼻音とは口蓋帆の開放状態によって産出される音といえるため、口腔内での特定の調音動作を伴わなくても鼻腔共鳴を伴う音声を発することは可能である。

チベット系諸言語（Tibetic languages; Tournadre 2014）のうち、ある子音音素に何らかの音的特徴が従属しかつそれに先行して現れる鼻音要素、すなわち前鼻音をもつ言語は、分布地域の東半分、すなわちチベットの伝統的地理区分においてカムおよびアムドと呼ばれる地域に分布する言語に多く認められる。これらの言語において、前鼻音は一般に閉鎖音・破擦音に先行するものが見られ、前鼻音の有無で対立を形成する例もしくは前鼻音と前気音で対立を形成する例が認められる。加えて、少数ではあるが、摩擦音に先行する前鼻音も存在する。しかしながら、摩擦音に先行する前鼻音は、その調音位置が歯-歯茎（/ⁿ̥sʰ, ⁿ̥s, ⁿz/）のものか、前部硬口蓋（/ⁿ̊ɕʰ, ⁿ̊ɕ, ⁿʑ/）のものがほとんどを占め[1]、他の調音位置についての事例は非常に少ない。

以上のような状況に関して、アムドチベット語のいくつかの方言には、音韻表記上声門摩擦音に先行すると考えられる前鼻音、すなわち/ⁿh/や/nh/といった記述がある。声門摩擦音の場合、口腔での調音位置が形成されないため、それに先行する鼻音要素とはいったい何であるのか、これを明らかにする必要があるが、先行研究はこの点に関して必ずしも明確な記述を提供しているわけではない。これを明らかにすることが本稿の主たる目標である。加えて、少数の言語

---

* 本稿の基幹部分は国立民族学博物館共同研究『言語の系統関係を探る―その方法論と歴史学研究における意味―』の研究会（2013 年）において発表したものに基づいている。その後、最新の調査を踏まえて増補改訂した。

[1] 一般的にチベット系諸言語において、無声無気音に先行する前鼻音はほとんど認められないが、存在しないわけではない（鈴木 (2007) などを参照）ため、無声有気、無声無気、有声の３つの子音音素を挙げておいた。

では特定の条件下で前鼻音と前気音が対立を形成せず、いずれも前気音として実現する事例がある。また、有気音（帯気音）音素の気音部分に鼻腔共鳴を伴う例も存在する。これらについて、方言を超えて具体例を挙げ、どのような類型があるのかをあわせて考察する。

以下、声門摩擦音に先行する鼻音要素、前鼻音が前気音と交替する事例、有気音の気音部分が鼻音化する事例にわけて現象を記述する。記述に先立ち、前鼻音に対応するチベット語文語形式（蔵文）をまとめておく。

前鼻音と蔵文の対応関係の概観

蔵文は表音文字として設計されたと考えられるため、これを便宜的にチベット系諸言語の古期の発音を表したと理解する。推定音価は格桑居冕・格桑央京 (2004:379-390) を参照。また、ローマ字転写は Wylie 方式を用いる。

現代口語の例から考えて、前鼻音の対応関係は概して蔵文無声有気音または有声音の閉鎖・破擦音の前置子音となる m, ’ の２種に集約される。

1. m + 有声音：*md-, mg-, mj-, mdz-, mgy-, mgr-, ...*
2. m + 無声有気音：*mth-, mkh-, mch-, mtsh-, mkhy-, mkhr-, ...*
3. ’ + 有声音：*’b-, ’d-, ’g-, ’j-, ’dz-, ’br-, ’gr-, ...*
4. ’ + 無声有気音：*’ph-, ’th-, ’kh-, ’ch-, ’tsh-, ’phr-, ’khr-, ...*

以上のうち、蔵文 m は単独で初頭子音を形成するときも両唇鼻音と対応関係を持ち、そもそも鼻音としての性質を伴っていたと考えて問題ないが、もう一方の ’ については音価が未確定である。現代口語において、蔵文 ’ が単独で初頭子音を形成したとき、方言にもよるが、[ɦ, ʁ, γ, ʔ][2]のような音と対応する。蔵文 ’ が単独の初頭子音として現れる形式に鼻音要素が含まれないことに注意が必要である。このため、単独の初頭子音として現れる蔵文 ’ と子音連続の一部として現れる蔵文 ’ とで口音か鼻音かという決定的な違いが存在することになる。

なお、以下の記述において、語例を掲げるときには対応する蔵文も添える。

2　声門摩擦音に先行する鼻音要素の調音音声学的記述

声門摩擦音に鼻音要素が前鼻音として現れる現象[3]は通言語的に見たならば、極めて珍しい現象であるといえるだろう。アムドチベット語の中には、この組み合わせが認められる方言があ

[2] 本稿で議論の対象となる諸言語についてみると、カムチベット語では全般に有声声門摩擦音 [ɦ] と対応し、アムドチベット語では全般に有声口蓋垂摩擦音 [ʁ] と対応する。後者の一部の方言では、[ʔ] と対応するものがあるほか、初頭子音としては対応する音声実現が音声学的に認められないものもある。これら以外の言語では各種方言で異なり、[ɦ, ʁ, γ, ʔ] のうちのいずれかに対応する。
なお、関連する議論に Hill (2006) がある。

[3] 独立した２つの子音音素の連続ではない点に注意しなければならない。チベット系諸言語の音配列には一定の枠組みがあり、本稿では鈴木 (2005) および Tournadre & Suzuki (forthcoming) に基づいた表記と枠組み（*pandialectal phonetic description*）を用いる。「前鼻音」という用語を用いるのは子音音素の連続ではないことを示すためである。

るが、その音声学的な記述は明確な形でほとんど提供されていなかった。

語例を記述している文献に、耿顯宗等 (2007:523) の「環青海湖方言[4]」の例がある。

/nhəl/「追い出す」(*'phud*)
/nhok/「命中する」(*'phog*)
/nhər, nphər/「飛ぶ」(*'phur*)
/nhoŋ/「臀部」(*'phongs*)
/nho/「注ぐ」(*'pho*)

ただし、この記述方法では/nh/がどういう音価で発音されるのかが不明であると言わざるを得ない。また、筆者はこの言語に相当する方言の音声に接したこともないため、実際の音声実現は知りえない。しかしながら筆者は自身の調査資料の中に前鼻音つき声門摩擦音を記述していた。それは rNgawa（中阿壩）方言[5]の事例である（鈴木・イェシェムツォ 2006）。語例には次のようなものがある。

ⁿ̥hon「投げる」(*'phon*)
ⁿ̥hen「射とめる」(*'phog*)
ⁿ̥hən「射る」(*'phen*)
ⁿ̥hi「押す」(*'phud*)

この記述に対し、鈴木・イェシェムツォ (2006:64) は次のような解説を与えている。

/ⁿ̥h/は音声的には [ñʰh] となる

声門摩擦音/h/に先行する鼻音要素は決して歯-歯茎鼻音 [n] ではないのであるが、音声表記を原則とする *pandialectal phonetic description* を確立していなかった当時では、声門摩擦音に先行する前鼻音を/ⁿ̥/と書いたのは仕方がなかったことである。しかし [ñʰ] は口腔内での調音位置を指定していない。そうならば、[ñʰ] で表そうとした音は何か？答えは一般的に「鼻息」と呼ばれているものである。口音か鼻音かという決定的な違いは口腔内の調音ではなく、ただ 1 箇所口蓋帆によって生み出される。つまり、[ñʰh] は呼気を口腔内に通しながら、その初頭位置のみ口蓋帆を開放することによって産出される音声といえるだろう。この意味で、前鼻音を伴う声門摩擦音は調音音声学的に決して無理な現象ではない。

このような音声は、通言語的にはやはり珍しいといえるだろう。アムドチベット語以外のチベット系諸言語について見ると、筆者の収集した資料の中では Cone（卓尼）チベット語 Wadmar（完冒）方言[6]に存在するのみである。たとえば、以下のようである。

⁻ñʰoː「射とめる」(*'phog*)
⁻ñʰɑː「吐く」(*'phen*)
⁻ñʰiː「釈放する」(*'phud*)

[4] 実際にはこのような特定の地域変種は存在しない。むしろ社会的方言の一種とみなされる。現地では sBranag 方言と呼ばれるものを指していると考えられる。

[5] 四川省阿壩州阿壩県で話される。

[6] 卓尼県完冒郷の 5 つの村で話される。地理的に見て、この方言は卓尼チベット語とアムドチベット語との言語境界地区で話されており、卓尼チベット語に分類される言語ではあるが、その言語特徴においてアムドチベット語との共通点も少なくない。

rNgawa 方言でも Wadmar 方言でも [h̃] が単独で初頭子音の位置を占めることはないが、チベット・ビルマ諸言語の中には、リス語のように [h̃] が単独で初頭子音として現れる（ただし一般に/h/と記述されている[7]）言語がある。

以上に見られる前鼻音つき声門摩擦音/$^{\tilde{h}}$h/は、蔵文形式が示唆するように、もともとは ’ と ph の組み合わせに由来すると考えられる。言い換えれば、/$^{\tilde{h}}$h/はほかに蔵文との対応関係を持たない。アムドチベット語において、ph が/p^{h}/ [p^{h}] ではなく/h/ [h] で実現するという対応関係が広く認められる。この現象が発生したのちもなお前接字 ’ 対応形式、すなわち前鼻音を保持していたものといえる。ただしその前鼻音は両唇音 [p^{h}] に先行する鼻音要素 [$^{\underset{\circ}{m}}$] ではなく、後続子音の調音位置に一致している点に注意するべきであろう。前鼻音という特質が後続子音（主たる子音）の調音位置に従属するという特徴に現れているといえる。ただし rNgawa 方言において蔵文 ’ が単独で初頭子音となる例の対応形式には/ɦ, ʁ/などの音があたり、鼻音性は認められない。

翻って、前鼻音の調音が必ずしも調音器官の閉鎖を必要としないことが確認できた今、摩擦音に先行する前鼻音もまた [h̃, ɦ̃] として実現されることが保証される。たとえば、/$^{\underset{\circ}{n}}$s^{h}/ という音は実際に前鼻音部分が閉鎖を伴う事実上の [$^{\underset{\circ}{n}}$s^{h}] という調音もある一方で、前鼻音部分が閉鎖を伴わない [$^{\tilde{h}}$s^{h}] という発音もありうるということである。このような口腔内調音を行う摩擦音に先行する鼻音要素をもつ言語・方言は/$^{\tilde{h}}$h/をもつものよりも多くなる。たとえば、巴西チベット語 Babzo（包座）方言[8]の/$^{\underset{\circ}{n}}$ɕ^{h}iː/「拭く」、カムチベット語 Sagong（沙貢）方言[9]の/$^{\underset{\circ}{n}}$s^{h}a mɔ̃/「箒」などの例がある。

3　前鼻音が前気音と交替する事例について

前鼻音は鼻腔共鳴を伴うものである。鼻腔共鳴を伴わない前鼻音は前鼻音とは呼べないのであるが、特定のチベット系言語には、前鼻音の現れに鼻腔共鳴を伴わない変異音を含む例がある[10]。mBrugchu（舟曲）チベット語[11]dGonpa（拱壩）方言がその一例である。鈴木 (2013) に記述されているように、この方言には以下のような現象が認められる。

たとえば、p^{h}ɑ「ぶた」(*phag*) と $^{\underset{\circ}{m}}$p^{h}ɑ「高貴な」(*’phags*) の異なりは、前鼻音の有無によって対立をなす最小対である。ところが実際の音声実現は、単に前鼻音の有無だけではなく、前鼻音を伴う例のほうが音節全体を通して相対的にピッチが低く、また息漏れ音が現れうるという点で、まったく聴覚印象が異なる。有気音に先行する前鼻音は、場合によってさまざまな変異を見せる。

上の p^{h}ɑ と $^{\underset{\circ}{m}}$p^{h}ɑ の例でいうと、前者の分節音の実現がほぼ [p^{h}ɑ] で一定であるのに対し、後

[7] 木玉璋、孫宏開 (2011) 参照。ただし筆者の記述では/h̃/を採用している（鈴木 2012）。

[8] 四川省阿壩州若爾蓋県包座郷で話される。

[9] 四川省甘孜州郷城県沙貢郷で話される。

[10] この現象は Matisoff (1975) が述べる *rhinoglottophilia* という現象と関連するところがあるかもしれない。

[11] 甘粛省甘南州舟曲県東部で話される。

者は [ᵐ̥pʰɑ] のほか、[ᵐ̥pʰɑ̤, ᵐ̥pʱ̃ɑ̤, ᵐ̥pɦ̃ɑ̤, pʱ̃ɑ̤] のように、有気音の気音成分が異なったり、極端な場合前鼻音部が脱落したりもする。注目したいのは、息漏れ音の現れである。息漏れ音は有声前気音の音声実現の主要な特徴であり、一種の発声類型[12]の異なりと関連する。前鼻音が出現する例においてピッチは低めで現れるということを考慮すれば、前鼻音の存在が発声類型の異なりに反映されると分析することで、dGonpa 方言の前鼻音の特徴を的確にとらえることができるといえる。

このような現象は有気音に先行する前鼻音に特に起こりやすいが、実際には有声音に先行する前鼻音でもより限定的ではあるが起こりうる。単独で有声音に先行する前鼻音をもつ語が語中に来る場合に、前鼻音要素の鼻腔共鳴を失って有声前気音で発音されるということが起こりうるのである。たとえば、次のような語で認められる。

ᵐbɯᶣ「虫」(*'bu*)
ⁿdə「矢」(*mda*)
ᶮdʑə「釣る」(*'dzin*)
ⁿ̥tʰɤ ᵐbɤ「高い」(*mthon po*)
ⁿ̥tɕʰe ʰpə「胆嚢」(*mkhris pa*)
ⁿ̥ɕʰi「拭く」(*'phyid*)

前鼻音と息漏れ音の間に関連があるということは、言い換えれば、発声類型の 1 つに分類される息漏れ音に対して、さらに口音（有声前気音）と鼻音（前鼻音）の異なりを認めるということであり、鼻腔共鳴を伴う息漏れ音が dGonpa 方言における前鼻音の本質的特徴であるといえるかもしれない。

以上に見られる前鼻音は、1 節に提示したすべての蔵文形式 (1-4) が当てはまる。dGonpa 方言における以上の現象は前鼻音という音声実現に付随する現象であり、前鼻音をもつすべての例が該当する。

前鼻音と前気音が交替する事象としては、以上の現象と異なるものも認められる。たとえば、Thewo-smad（下迭）チベット語[13]'Azha（阿夏）方言があげられる。'Azha 方言では、語頭において前鼻音と前気音は対立するが、語中に位置する有声音の場合、両者がしばしば対立せず自由に交替する。自由変異の中に鼻腔共鳴を伴う声門摩擦音も含まれることに注意が向けられる。また、一部の語では合流が完了し前気音になったものもある。

/˚nɔ ᵑgo/[14][nɔ ᵑgo, nɔ ɦ̃go, nɔ ɦgo][15]「天」(*gnam mgo*)
/˚ʰŋɛ ɦgo/ [ʰŋɛ ɦgo, ʰŋɛ ɦ̃go]「枕」(*sngas mgo*)
/˚ʰpɯ ɦdu/ [ʰpɯ ɦdu]「毛色」(*spu mdog*)

[12] 発声時の喉頭の状態に基づいて分類する。主に仮声、無声、有声、息漏れ、ささやきなどを挙げることができる。朱曉農 (2010:294-297) によると、言語音としては 13 種類を区別することができる。mBrugchu 方言における発声類型と音声実現の関係の詳細は Suzuki (2015) を参照。

[13] 甘粛省甘南州迭部県東部から舟曲県西部にかけて話される。

[14] 'Azha 方言では超分節音素として声域（レジスター）が対立する。有標である高域には語頭に ˚ を付す。[ ] 内の音声表記では、簡便のため超分節音の記述を省略する。

[15] 音声事実を注意深く観察すると、これら 3 つの音声実現について、第 1 の例については、第 1 音節母音の鼻母音化を認めることができる一方、それ以外の 2 つの例については、第 1 音節の母音は鼻腔共鳴を伴っていない。

蔵文との対応関係から見ると、前鼻音も前気音も 1 節に提示した蔵文形式のうち、有声音とかかわる (1, 3) に対応する[16]。この現象は、現在起こりつつある段階にある音変化ととらえられる。

以上の例以外にも、'Azha 方言には複音節語の語中で、蔵文の先行音節末鼻音が後続音節初頭に前鼻音として現れる現象[17]が認められ、この場合の前鼻音はしばしば前気音と交替するもののほか、やはり一部の語で合流が完了し前気音になっている。たとえば、*rtsam pa*「ツァンパ」は/°^{h}tsɔ ^{ɦ}bɜ/となる。第 2 音節初頭が前鼻音のままの例としては、*mkhan po*「僧院長」/$^{n̥}$k^{h}ɛ ^{m}bo/などがある。

4　有気音の気音部分が鼻音化する事例について

有気音の気音部分に異なりが認められるとすれば、単に声帯振動の遅れ（VOT）にかかわる部分に発声類型の異なりによって生じる一定の差異であるといえ、よく観察されるのは [^{h}] と [^{ɦ}] の差異である。

これまでの研究では通常気息部分を口音ととらえているものがほとんどであるが、発声器官の特徴を見る限り、鼻腔共鳴を伴うことも可能である。そして、鼻腔共鳴を伴う気音が認められる言語は確かに存在する。その 1 つがアムドチベット語の Cherje（共和切吉）方言で、鈴木 (2004:160) は当該の発音について次のような解説を加えた。

> 先に示した音声記述において、たとえば $^{n̥}$ts^{h}-に対し [$^{n̥}$ts$^{n̥h}$-][18]という音声表記を与えた。この音声実態は、有気音の気音部分を鼻腔に抜くというものである。この場合、閉鎖音開放前の前鼻音要素は微弱で脱落することもありうる。これは Chabcha/Cherje 方言の特徴的な発音様式であるが、必ずしも気音相当部分を鼻腔に抜かなくてもよい。

これは $^{n̥}$ts^{h}-にかかわらず、すべての有気音に先行する前鼻音を伴う形式に共通である。また、前鼻音のつかない単独の有気音の気音部分が鼻音化することは認められない。つまり、気音に口音と鼻音の区別が必要になっているといえる。この現象は有気音のときにのみ認められ、有声音に先行する前鼻音はその名の通り前鼻音のみが現れる。Cherje 方言では、調音点の一致する前鼻音は蔵文 ' にほぼ由来するといえる。蔵文先行子音 m の場合は両唇鼻音が先行するタイプの子音連続を構成し、また有気音の気音部分が鼻音化することはない。このため、蔵文 ' と鼻音化気音の間に関連性を認めることができるといえるだろう。

上の現象に関連するものとして、カムチベット語からも例をあげることができる。最もよく記述されている Derge（徳格）方言の事例を見ると、この方言には有気閉鎖・破擦音に前鼻音が存在するという記述（Häsler 1999）と、存在しないという記述（江荻 2002:132）と、一部の話

[16] ただし前気音の蔵文との対応関係はさらに存在するが、それは前鼻音とは関連しない。

[17] この背景には'Azha 方言が開音節型の言語であり、音節末子音がまったく存在しない類型の言語であることも影響しているものと考えられる。

[18] 今考えると、[$^{n̥}$ts$^{h̃}$-] と記述するほうがよい。当時から音声学的な現象を把握してはいたが、表記方法に関する検討が不十分であった。

者にのみ存在するという記述（格桑居冕・格桑央京 2002:98）がある。筆者の観察と記述は、第一の分析と同じになる。有気音にも前鼻音の有無の対立があり、前鼻音を伴う有気音は、Cherje 方言ほど明確であるとは言えないけれども、有気音の気音部分に鼻音化の兆候が認められる。これはその他の多くのカムチベット語方言とも共通し、前鼻音を伴う有気音は前鼻音位置における鼻音特徴よりも有気音の気音部分に現れることが認められる[19]。これは前鼻音が音声学的に存在しないこととは異なる。この音声記述がなされないまま前鼻音が存在しないと音韻分析するのは、本来的に存在しない事例と区別がつかなくなる点に注意が必要であろう[20]。

5　まとめ

声門摩擦音が鼻腔共鳴を伴うことは、調音音声学上まったく問題ない現象であるが、実際の言語音において有意な特徴として現れる例が限られているため、これまで記述研究の上であまり取り上げられてこなかったものといえる。鼻腔共鳴を伴う声門摩擦音というのは、あまりよく知られていないものであるという印象を与えるが、実際のところチベット系諸言語の中で東部に分布する諸言語において、ある程度まとまって見かけるものであるということは特筆に値する。

現象が存在しないことと、音声学的に存在するが音韻的に有意でないことはまったく異なる。現象を観察できても表記法が備わっていなければ、これもまた問題である[21]。本稿の役割はこの２つの問題点を具体的な現象の記述を通して明らかにするところにあった。鼻腔共鳴を伴う声門摩擦音を [h̃] や [ɦ̃] と表現することの正当性はさまざまな角度から検討されなければならない。これは今後の課題である。

参考文献

鈴木博之 (2004)「アムドチベット語チャプチャ・チェルジェ牧民方言の音声分析」『京都大学言語学研究』第 23 号 145-165

—— (2005)「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23

—— (2007)「チベット語包座 [Babzo] 方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 74 号 101-120

—— (2009)〈川西地区 “九香線” 上的藏語方言：分布與分類〉《漢藏語學報》第 3 期 17–29

—— (2012)《維西傈僳語阿㑩話 “緊元音” 的語音描写》第六届国際彝緬語學術研討會發表論文（成都）

[19] ただし筆者のカムチベット語諸方言に関する記述では通常この現象について述べていない。直接音韻表記として前鼻音を伴う有気音として記述に反映させている。

[20] このような問題点が認められるため、音声記述の立場および方針を一にしない各種記述を比較言語学的観点や類型論的観点からまとめて音形式について議論することは困難である。

[21] 客観的に見て、IPA に定義される音標文字の組織は必ずしも合理的とはいえない。朱曉農 (2010) や Suzuki (to appear) などを参照。

—— (2013)「蔵文対応形式から見た舟曲県チベット語拱壩 [dGonpa] 方言の特徴—舟曲県チベット語の概説を添えて—」『京都大学言語学研究』第 32 号 1-35

鈴木博之、イェシェムツォ (2006)「アムドチベット語中阿壩 [rNgawa] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 1 号 59-88

西田龍雄 (1987)「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108-169 冬樹社

Häsler, Katrin Louise (1999) *A Grammar of the Tibetan Dege* (རྡེ་དགེ་) *(Sde dge) Dialect*, Selbstverlag.

Hill, Nathan W. (2006) Tibetan *vwa* 'fox' and the sound change Tibeto-Burman *wa -> Old Tibetan *o*. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 29 (2), 75-90.

Matisoff, James A. (1975) Rhinoglottophilia: The mysterious connection between nasality and glottality. In Charles Ferguson, Larry M. Hyman and John Ohala (eds.) *Nasálfest: Papers from a Symposium on Nasals and Nasalization*, 265-287. Stanford: Stanford University.

Suzuki, Hiroyuki (2015) New perspective on the suprasegmentals in mBrugchu Tibetan: An introduction to the tonogenesis triggered by a breathy voice. *Bulletin of Chinese Linguistics*. (in press)

—— (to appear) In defense of the prepalatal non-fricative sounds and symbols: Towards the Tibetan dialectology.

Tournadre, Nicolas (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan Linguistics: Historical and Descriptive Linguistics of the Himalayan Area*, 105-129, Walter de Gruyter.

Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan* (with the collaboration of Konchok Gyatso and Xavier Becker)

耿顯宗、李俊英、龍智多傑 [Lhun-grub rDo-rje] (2007)《安多藏語口語詞典》甘粛民族出版社

江荻 (2002)《藏語語音史研究》民族出版社

格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002)《藏語方言概論》民族出版社

—— (2004)《實用藏文文法教程 [修訂本]》四川民族出版社

木玉璋、孫宏開 (2011)《傈僳語方言研究》民族出版社

朱曉農 (2010)《語音學》商務印書館

[付記]

筆者による各種言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001）

- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21-23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007）
- 平成 25-26 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B) 「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」（研究代表者：鈴木博之、課題番号 25770167）

ブヌン語南部方言の第二位置疑問小詞 bis

野島本泰

nojima.motoyasu@gmail.com

キーワード：ブヌン語，南部方言，オーストロネシア語族，疑問小詞，第二位置

1　はじめに

本稿[1]の目的は，ブヌン語南部方言の第二位置疑問小詞 *bis* の統語的および意味的な諸特徴を明らかにすることである。それを考察することにより，ブヌン語南部方言における「疑問文」の特性，そして，「第二位置」とはどのようなものかを解明するのに必要となる諸事実が明らかになる。

本稿で用いる主な資料は，本稿筆者（野島）が採集した昔話に現れる言語形式と，作例に対する母語話者の内省報告である。

以下，本節では，ブヌン語の系統，分布，方言，音韻について述べたあと，文法を概観する。そこでは，語順，態，格標示体系，ここでとりあげる第二位置小詞にはどのようなものがあるのかを少し詳しく見る。

1.1 系統・分布・方言・音韻

ブヌン語は，オーストロネシア語族に属する言語で，台湾中南部（南投縣仁愛鄉および信義鄉，花蓮縣萬榮鄉および卓溪鄉，台東縣海端鄉および延平鄉，高雄市那瑪夏区および桃源区）で話されている。ブヌン族は約 5 万人である。3 つの方言群，すなわち北部方言群，中部方言群，南部方言群に大きく分かれ，さらに 5 つの下位方言に分かれる（小川・浅井 1935，Li 1988）。本研究で記述の対象とするのは南部方言で，言語資料は高雄市那瑪夏区で収集した。

---

[1] 本稿の執筆にあたっては，多くの方々に助言をいただいた。特に，落合いずみ氏，千田俊太郎氏，それに言語記述研究会（2014年6月29日，京都大学）のメンバーに感謝の気持ちを述べたい。本研究の基礎となる資料の収集では，数多くの母語話者の方々にお世話になった。高雄市那瑪夏区達卡努瓦村（旧：三民鄉民生村）のブヌン語話者の皆様，特に周文罷氏（ブヌン名 Bukun Takistaulaan, 男性，80歳代），周銀能氏（ブヌン名 Lanihu Takistaulaan, 男性，70歳代），また，同じく那瑪夏区瑪雅村（旧：三民鄉民権村）出身の卜袞氏（ブヌン名 Bukun Ismahasan Islituan，男性，50歳代）には，わずらわしい質問に丁寧に答えていただき，多くのことを教えていただいた。どうもありがとうございます。なお，本稿における誤りはすべて本稿筆者（野島）に責任がある。

南部方言の子音は *p, b, v, m, t, z* [ð], *d, n, s, l* [ɬʲ ~ l], *k, ng* [ŋ], *h* [h ~ χ], ′ [ʔ]の 14 個。このうち，子音 *s, t* は母音 *i* の直前で口蓋化し，それぞれ [ɕi], [tɕi] と発音される。また，子音 *s* は同じ音節の中で母音 *i* の後ろに来た時も口蓋化して [iɕ] と発音される。子音 *y* [j], *w* は外来語を含む少数の語にのみ現れる。母音は *a, i, u* の 3 つ。母音には長短の区別があり，本稿では長い母音を同じ母音を並べることで表記している。アクセントは非弁別的である。2 音節以上からなる語の場合，「語の，後ろから数えて 2 番目の母音を含む音節」が高いピッチで発音される。

ブヌン語は，大雑把に言って，いわゆる膠着語である。つまり，語は接辞などの形態素をかなり多数ふくみうるが，形態素どうしの境界は概ね明瞭である。語形成には，接頭辞，接尾辞，接中辞，接周辞などの接辞付加のほか，さまざまな型の重複が頻繁におこなわれる。また，複合も用いられる。

1.2 文法概観

本節では，ブヌン語南部方言の文法を概観する。語順，態，格標示体系，第二位置小詞について述べる。

1.2.1 語順

述語が節頭に来る。述語以外の成分は，基本語順では，述語の後ろに来る。

(1) *mabananaz saia.*
man NOM.3SG.DIST
あれは男だ。

(2) *mataz a asu=a.*
AV.die NOM dog=NOM.DIST
その犬は死んだ。

(3) *ma-pataz kaimin mas hanvang*
AV-kill NOM.1PE OBL deer
私どもは鹿を殺した

(4) *mauk-'ainunu-a sia dalah=tan.*
AV.turn:round-round-IMP.AV LOC earth=NEU.PROX2
この島の周りを回りなさい。

1.2.2 態

ブヌン語には「フィリピン型」と呼ばれる態（ボイス）の体系がある。どの動詞も，動作主態(Agent Voice, AV)か，被動者態(Patient Voice, PV)か，場所態(Location Voice, LV)か，状況態(Circumstance Voice, CV)のいずれかである。これらの態範疇の標示は，接辞付加またはゼロ派生のいずれかの手段によっておこなう。例えば，語根形態素 *pataz*「殺す」から

は，動作主態 *ma-pataz*, 被動者態 *pataz-un*, 状況態 *is-pataz* が作られる（期待される場所態 **pataz-an* は用いられないようである）。

例(3)では述語動詞が動作主態であり，その態範疇は，節の主格成分 *kaimin*「私ども」が（述語動詞の表す「殺す」という事象において）動作主であることを表している。その結果として，斜格成分 *mas hanvang*「鹿」が被動者であると解釈される。これに対し，次の例(5)では述語動詞が被動者態であり，その態範疇は，節の主格成分 *a maaz a ivut*「その蛇」が被動者であることを表している。その結果として，動作主者格成分 *=s isbabanal*「ババナル姓の人」が動作主であると解釈される。

(5) *pataz-un dau=s isbabanal a maaz a ivut.*
kill-PV HS=AGT CN NOM what NOM snake
ババナル姓の者がその蛇を殺したそうだ。

このように，節の主要部である述語動詞の態範疇によって，従属部が動作主なのか，被動者なのかといったことがわかるしくみになっている。

1.2.3 格標示体系

格標示体系は，人称代名詞と他の名詞類で異なる。人称代名詞は大きく格変化する。まず中立形と非中立形の区別があり，非中立形として 5 つの異なる格形式を持つ。5 つの格とは，すなわち，主格，動作主格[2]，斜格，所格，所有格である。主格，斜格，所有格には自立形と接語形の区別がある。以下，表 1 にブヌン語南部方言の人称代名詞を挙げる（ただし，すべての形式を網羅しているわけではない）。なお，表 1 で「ー」としてあるのは，該当する形式が存在しないことを示す[3]。

表 1：ブヌン語南部方言の人称代名詞

	中立形	非中立形							
		主格		動作主格	斜格		所格	所有格	
		自立形	接語形	接語形	自立形	接語形	自立形	自立形	接語形
1SG	*zaku*	*saikin*	*=ik*	*=ku*	*mazaku*	*=ku*	*zakuan*	*inaak*	*=nak*
1PE	*zami*	*kaimin*	*=im*	——	*mazami*	——	*zamian*	*inaam*	*=nam*
1PI	*ita*	*kata*	*=ta*	*=ta*	*ma'ita*	*=ta*	*itaan*	*imita*	*=ta*
2SG	*suu*	*kasu*	*=as*	*=su*	*masuu*	*=su*	*su'uan*	*isuu*	*=su*
2PL	*muu*	*kamu*	*=am*	*=mu*	*mamuu*	*=mu*	*mu'uan*	*imuu*	*=mu*
3SG	*sai=tia*	*sai=a*	——	*=sia*	*masai=tia*	——	*saian=tia*	*isai=tia*	——
3PL	*nai=tia*	*nai=a*	——	*=nai*	*mania=tia*	——	*naian=tia*	*inai=tia*	——

このうち，接語代名詞の主格と動作主格の違いが，小詞 *bis* の現れ方にとって意味を持つことを第 3.5 節で見る。

[2] 動作主格は，三人称単数および三人称複数以外は，斜格接語形と同一である。

[3] 三人称単数および三人称複数は，前接語指示詞によって近称，遠称を区別しうるが，表では遠称のみを挙げてある（遠称は，前接語指示詞 *=a*（主格）または *=tia*（中立形）によって標示されている）。

それに対し，人称代名詞以外の名詞類は格変化に乏しい。形態的には，中立形と所有格形の区別がわずかにあるのみである。所有格形は中立形から接辞付加により作られる。その際，語幹が固有名詞の場合には接辞 *is-* が用いられ，普通名詞の場合には接辞 *itu-* が用いられる。次の例では，例(6)の *tina*「母」が中立形，例(7)の *is-tina*「母の」が所有格形である。また，例(8)の *titi*「動物」が中立形，例(9)の *itu-titi*「動物の」が所有格形である。

(6) ***tina***.
mother
お母さん。

(7) ***is-tina*** *tu* *sin-tupa*
POSS-mother NEU.LG CV.PST-mother
お母さんの言ったこと

(8) *ma-sinap* ***titi*** *ma-damu*
AV-chase animal AV-catch
動物を追いかけて捕まえる

(9) ***itu-titi*** *tu* *vauvu*
POSS-animal NEU.LG backbone
動物の背骨

形態的な格変化の乏しさのかわりに，それを補う統語的な格標示として，名詞句の前に置かれる格標示詞と呼ばれる小詞がある。主格標示詞には，単純主格標示詞 *a* と，複合主格標示詞 *maaz a* の 2 つがある[4]。両者がともに現れることもあり，その場合は単純主格標示詞が先行し，複合主格標示詞が後続する。複合主格標示詞は，疑問詞 *maaz*「何」と主格標示詞 *a* がその順序で連続したものである。

(10) *haungun* ***a*** *tumaz=a*
AV:get:angry NOM bear=NOM.DIST
その熊は怒った

(11) *m-insuma* ***maaz a*** *babu*
AV-appear what NOM pig
その豚は来た

(12) *haungun* ***a*** ***maaz a*** *tumaz.*
AV.get:angry NOM what NOM bear
その熊は怒った。

単純主格標示詞と複合主格標示詞の違いが，小詞 *bis* の表れ方にとって意味を持つことを第 3.6 節で見る。

[4] 単純主格標示詞と複合主格標示詞の間には，意味上の，または，機能上の差異があるのかもしれないが，現時点では何もわかっていない。

斜格標示詞には，自立形式 *mas* と接語形式 =*s* がある。後者は母音または子音 *n* を末尾音に持つ語の直後に現れる。子音 *n* の直後に前接語の斜格標示詞 =*s* が現れた場合は，その子音 *n* は脱落する。

(13) *ma-pataz* ***mas*** *asu*
AV-kill OBL dog
犬を殺す

(14) *siza***=*s*** *lukis*
AV.get=OBL tree
木を取る

(15) *maun***=*s*** *taun*
AV.eat=OBL steam
湯気を食べる

動作主格標示詞は斜格標示詞と同形で，やはり自立形式 *mas* と接語形式 =*s* がある。後者は母音または子音 *n* を末尾音に持つ語の直後に現れる。子音 *n* の直後に接語形式の斜格標示詞 =*s* が現れた場合は，その子音 *n* は脱落する。

(16) *pataz-un* ***mas*** *tama*
kill-PV AGT father
お父さんが殺した（お父さんに殺された）

(17) *pataz-un***=*s*** *ivut*
kill-PV=AGT snake
蛇が殺した（蛇に殺された）

所格標示詞は小詞 *sia* である

(18) *mu~mutah* ***sia*** *daan*
AV.vomit~vomit LOC road
道で吐いている

1.2.4 第二位置小詞

ブヌン語には「第二位置」に現れる小詞がある。ここで「第二位置」とは，「“節”における“第 1 番目の自立語”の直後」のことである。ただし，小詞の種類によって，何を「節」と見なすか，何を「第 1 番目の自立語」と見なすかが異なる。以下，第二位置小詞の意味・機能にしたがい，第二位置小詞のうち使用頻度が高いものを選んで概観していく。

1.2.4.1 接語代名詞

例(19)では，一人称単数主格の接語代名詞 =*ik* が節の「第二位置」，つまり，述語動詞 *tahu-av* の直後に現れている。同様に，例(20)では，二人称複数主格の接語代名詞 =*am* が節の「第二位置」，つまり，述語動詞 *uka-an* の直後に現れている。

(19) *tahu-av**=ik***
tell-IMP.NAV=NOM.1SG
私に知らせなさい

(20) *uka-an**=am*** *tamasaz.*
not:exist-LV=NOM.2PL power
あなたたちには力がない。

例(21),(22)では，述語動詞に叙想法を標示する小詞 *na* が先行している。例(21)では，一人称単数主格の接語代名詞 *=ik* が現れる「第二位置」は，小詞 *na* の直後ではなく，述語動詞 *tahu* の直後である。また，例(22)では，一人称複数包含動作主格の接語代名詞 *=ta* が現れる「第二位置」は，小詞 *na* の直後ではなく，述語動詞 *is-takunav* の直後である。

(21) *na tahu**=ik*** *mas maluspingaz tu ma-kasa.*
IRR AV.tell=NOM.1SG OBL woman NEU.LG STAT-lazy
私は（ある）怠け者の女のことを話します。

(22) *na is-takunav**=ta*** *sain ma-kau-na-sia taklis tu asik*
IRR CV-discard=AGT.1PI NOM.PROX AV-throw-NA-LOC root:of:trunk NEU.LG palm
私達はこれをシュロの根元に捨てよう

例(23)では，述語動詞の前に，時間詞 *laupakadau*「いま」が現れているが，一人称単数主格の接語代名詞 *=ik* が現れる「第二位置」は，時間詞 *laupakadau* の直後ではなく，述語動詞 *tahu* の直後である。

(23) *laupakadau hai, na tahu**=ik*** *mas hanvang mas sakut.*
now LDM IRR AV.tell=NOM.1SG OBL deer and pygmy:deer
いま（いまから），私は鹿と羌について話します。

例(24)では，2 つの節が接続されているが，二人称単数主格の接語代名詞 *=as* が現れる「第二位置」は，第 1 番目の節の述語 *ma-daing=in* の直後ではなく，第 2 番目の節の否定辞 *nii* の直後である。

(24) *ma-daing=in isuu a tian=an hai, na nii**=as*** *mahtu*
STAT-big=already POSS.2SG NOM.LG belly=NOM.PROX2 CONJ IRR NEG=NOM.2SG able
matin-biska~biskav.
run-quick~quick
お前の腹はもう大きくなっている（=妊娠している）から，お前はあまり速く走れないだろう。

例(25)では，接続詞 *masa* に導かれている従属節に，主節が先行しているが，二人称複数主格の接語代名詞 *=am* が現れる「第二位置」は，主節の述語動詞 *ma<i>ka-'isa* の直後ではなく，従属節の述語動詞 *m-udaan* の直後である。

(25) *ma<i>ka-'isa bis kamu masa m-udaan**=am*** *kau-diip i.*
AV. through<PST>-where BIS NOM.2PL when AV-leave=NOM.2PL AV.to-there SFQP2
あなたたちはそこへ行った時，どこを通って行ったのか?

例(26)では，接続詞 *mais* に導かれている従属節に，主節が先行しているが，一人称複数排除主格の接語代名詞 *=im* が現れる「第二位置」は，主節の述語動詞 *is-pa-kaun* の直後ではなく，（アスペクト小詞 *=in* を介して）従属節の述語動詞 *m<in>aun* の後ろである。

(26) *na is-pa-kaun zami=s luhi mais m<in>aun=in**=im**.*
IRR CV-CAUS-eat NEU.1PE=OBL puppy if AV<PST>eat=already=NOM.1PE
私どもは（ご飯を）食べ終えたら，（そのご飯を）子犬に食べさせます。

例(27)では，補文標識 *tu* に導かれている補文，つまり従属節に，主節が先行しているが，二人称複数主格の接語代名詞 *=am* が現れる「第二位置」は，主節の述語動詞 *tupa* の直後ではなく，補文の述語動詞 *ma-tamasaz* の直後である。

(27) *tupa kamu tu ma-tamasaz**=am** at sikamangmang hai,*
AV.say NOM.2PL COMP STAT-strong=NOM.2PL and huge CONJ
あなたたちは，あなたたちは強くて大きいと言ったが，

例(28)では，主格連結辞 *a* に導かれている補文，つまり関係節が主節に埋め込まれているが，一人称単数斜格の接語代名詞 *=ku* が現れる「第二位置」は，主節の述語動詞 *sadu-av* の直後ではなく，関係節の述語動詞 *ma-pataz* の直後である。

(28) *sadu-av a bunun a na ma-pataz**=ku**=an.*
look:at-IMP.NAV NOM human NOM.LG IRR AV-kill=OBL.1SG=NOM.PROX2
私を殺そうとしている人を見なさい。

接語代名詞は否定文では節頭の否定辞の直後に現れる。例(29)では，第 1 番目の節に否定辞 *nii* と動詞 *haiyap* とが含まれているが，二人称複数主格の接語代名詞 *=am* が現れる「第二位置」は，否定辞の直後であって，動詞 *haiyap* の直後ではない。同様に，例(30)では，第 1 番目の節に否定辞 *nii* と動詞 *i-suuan* とが含まれているが，一人称単数主格の接語代名詞 *=ik* が現れる「第二位置」は，否定辞の直後であって，動詞 *i-suuan* の直後ではない。

(29) *nii**=am** haiyap tu ma-tamasaz kaimin.*
NEG=NOM.2PL AV.know COMP STAT-strong NOM.1PE
あなたたちは，私どもが強いことを知らない。

(30) *nii**=ik** i-suuan i, uka sui.*
NEG=NOM.1SG AV.at-LOC.2SG because AV.not:exist money
私はあなたのところにいません，お金がないから（=私はあなたのところへ嫁ぎません，あなたにはお金がないから）。

同様に，例(31)では，接語代名詞 *=im* が現れる「第二位置」は，禁止辞 *kaa* の直後であって，動詞 *pataz-un* の直後ではない。

(31) *kaa**=im** pataz-un*
PROH=NOM.1PE kill-PV
私どもを殺すな

接語代名詞は 2 つ連続することがある。例(32)では，一人称単数動作主格の接語代名詞 =*ku* が節の「第二位置」に現れ，その直後にさらに二人称単数主格の接語代名詞 =*as* が現れている。

(32) *na saiv-an**=ku=as*** *mas duhtas*
IRR give-LV=AGT.1SG=NOM.2SG OBL burnt:rice
私はお前にお焦げをあげます

2 つの接語代名詞が，同一の「節」に含まれる 2 つの「述語」それぞれに分かれて現れることがある。例(32)では 2 つの接語代名詞が述語動詞 *saiv-an* の直後に連続して現れているが，例文(33)では，2 つの接語代名詞のうち主格の方 =*as* が第 1 番目の「述語」である否定辞 *nii* の直後に現れ，一人称単数動作主格の接語代名詞=*ku* は第 2 番目の「述語」である動詞 *saiv-an* の直後に現れている。

(33) *na nii**=as*** *saiv-an**=ku*** *mas duhtas*
IRR NEG=NOM.2SG give-LV=AGT.1SG OBL burnt:rice
私はお前にはお焦げをあげない

1.2.4.2 アスペクト小詞 =in, =ang

接語代名詞以外の第二位置小詞の中で 1 つの類をなしているのは，小詞 =*in*「もう…になった，…した」と，小詞 =*ang*「まだ，依然として」という 2 つのアスペクト小詞である。

アスペクト小詞 =*in* は，例(34)のように，述語の直後に現れる。

(34) *ma-sauhzang**=in*** *a bunun=a.*
STAT-hungry=already NOM human=NOM.DIST
その人はお腹がすいた。

アスペクト小詞 =*in* は，接語代名詞とともに現れる場合には，例(35),(36)のように接語代名詞に先行する。

(35) *pantinaun, ka-nahtung-an**=in=ku**.*
aunt do-finish-LV=already=AGT.1SG
おばさん，私はもう（掃き掃除を）終えましたよ。

(36) *p-anghanu-un**=in=ku*** *a maaz a sia bunun=a*
CAUS-adrift-PV=already=AGT.1SG NOM NOM NOM DIST human=NOM.DIST
私はその人間をもう（川に）流した

アスペクト小詞 =*ang* は，例(37)のように，述語の直後に現れる。

(37) *ma-t'ah**=ang*** *hai,*
STAT-raw=still CONJ
（その里芋は）まだ生だったから，

アスペクト小詞 =*ang* は，接語代名詞とともに現れる場合には，例(38)のように接語代名詞に先行する。

(38) *nii**=ang=as*** *ka-nahtung*
NEG=still=NOM .2SG AV.do-finish
お前はまだ終えていない

次の例(39)では，アスペクト小詞 =*ang* と 2 つの接語代名詞が連続している。

(39) *na p-islunghu-un**=ang=ku=as*** *tastu-hanian.*
IRR CAUS-rest-PV=still=AGT.1SG=NOM.2SG one-day
私はお前をまだ 1 日休ませる。

1.2.4.3 新しい認識を表す小詞 hang

小詞 *hang* は，節の表すことがらを，話者がようやく認識したことを示すようである。例(40)では，文頭の述語 *tuza~tuza* の直後に現れている。

(40) *tuza~tuza* ***hang*** *a sain tu kama'ikit tu bunun*
true~true I:just:learned NOM NOM.3SG.PROX NEU.LG small NEU.LG human
tu ma-tamasaz-daingaz.
COMP STAT-strong-very
この小さな人は，なるほどやっぱり本当に強いなあ。

1.2.4.4 伝聞標示小詞 dau

伝聞小詞 *dau* は，節の表すことがらが，他人から伝え聞いたものであることを示す。例(41)では，文頭の述語動詞 *m-u-halhal* の直後に伝聞小詞が現れている。例(42)では，文頭の述語動詞 *m-insuma* の後ろに（アスペクト小詞 =*in* を介して）現れている。

(41) *m-u-halhal* ***dau*** *a tumaz*
AV-INTR-fall:down HS NOM bear
その熊は落ちたそうだ

(42) *m-insuma=in* ***dau*** *maaz a saia.*
AV-appear=already HS what NOM NOM.3SG.DIST
あいつがやって来たそうだ。

例(43)では，時間詞と主格成分とが述語動詞 *ma-kavas* の前に現れているが，伝聞小詞は文頭の時間詞 *habas* の直後に現れている。

(43) *habas* ***dau*** *a takbanuaz hai, ma-kavas.*
long:before HS NOM CN LDM AV-go:head:hunting
昔，バヌアズ姓（の人たち）が首狩りに出かけたそうだ。

伝聞小詞 *dau* は，現れうる位置の点で他の第二位置小詞とは異なる。例(44),(45)では，主格成分が述語動詞の前に現れているが，例(44)では伝聞小詞 *dau* は文頭の複合主格標示詞の第 1 要素 *maaz*「何」の直後に現れているのに対し，例(45)では主格成分の後ろに現れている。

(44) *maaz* ***dau*** *a dalah=an hai, ma-'azumu.*

what HS NOM earth=NOM.PROX2 LDM STAT-globular
この地球というのは，丸いのだそうだ。

(45) *maaz a saang=a* ***dau*** *hai, i-sia-n=in kalapat.*
what NOM pine=NOM.DIST HS LDM at-LOC-VBZ=already cliff
その松というのは，崖のところにいるようになったのだそうだ。

伝聞小詞 *dau* は，1 つの文の中に複数回現れうるという点でも，他の第二位置小詞とは異なっている。例(46)では，時間詞 *habas*「昔」が述語動詞の前に現れているが，伝聞小詞 *dau* は時間詞の直後に現れているのみならず，述語動詞 *aiza*「存在する」の直後にも現れている。

(46) *habas* ***dau*** *hai, aiza* ***dau*** *a maluspingaz=a, ma-nau'az*
long:before HS LDM AV.exist HS NOM woman=NOM.DIST STAT-beautiful
昔，美しい女がいたそうだ。

2 先行研究

本節では，小詞 *bis* についての先行研究を見る。先行研究には以下の 5 つがある。

2.1 何汝芬その他(1986)

何汝芬その他(1986:109)には小詞 *bis* の記述がある。何汝芬その他(1986)はその品詞を「助词」とし，「助词」のうちの「表示疑问语气（的）」（=疑問の「語気」を表すもの）の 1 つとしている。そして「*bif* 用于谓语之后，代替助词 *a* 的位置，表示特指问，含有难以置甚至轻视的语气」（=小詞 *bis* は述語の後ろ，つまり，助詞 *a* に代わる位置に用いられ，特殊疑問[5]を表示し，信じがたいという語気，さらには軽蔑の語気を含むことさえある）と記述している。例は，次の 2 つを挙げている（次の 2 つの例(47),(48)において，1 行目は何汝芬その他(1986)の表記，2 行目と 3 行目は本稿筆者の表記と分析，4 行目は何汝芬その他(1986)の中文訳と，本稿筆者による日本語訳である）：

(47) *madahpa bif saia i?*
ma-dahpa ***bis*** *saia i*
STAT-sick BIS NOM.3SG.DIST SFQP2
他当真生病吗?（あいつは本当に病気なのか?）

(48) *nani bif kasu haiap na mapatasi?*
na nii ***bis*** *kasu haiyap na ma-patas i.*
IRR NEG BIS NOM.2SG AV.know IRR AV-write SFQP2
你到底不会写呢?（お前は本当に書くことができないのか?）

[5] 特殊疑問（何汝芬その他(1986)の「特指问」）は，本稿の疑問詞疑問文に相当すると考えられる。

2.2 布農語詞典（原住民族族語線上詞典）

布農語詞典（原住民族族語線上詞典）はブヌン語南部方言のオンライン辞典であるが，*bis* という見出し語はない。しかし，例には小詞 *bis* が見つかる。例えば，疑問詞 *maaz*「何」の例として例(49)が挙がっている（次の 4 つの例(49)-(52)において，1 行目は布農語詞典の表記，2 行目と 3 行目は本稿筆者の表記と分析，4 行目は布農語詞典の中文訳と本稿筆者による日本語訳である）。

(49) *Maazbis saicia sinkuzakuza ii?*
maaz bis saitia sin-kuzakuza i.
what BIS NEU.3SG.DIST CV.PST-work SFQP2
他到底做了什麼事啊?（あいつは一体どんなことをしたのか?）

同様に，例えば，疑問詞 *ku-isa*「どこへ」の例として例(50)が挙がっている。

(50) *Ku-isabis kasu sangan ii?*
ku-'isa bis kasu sangan i.
to-where BIS NOM.2SG a:while:ago SFQP2
你剛才到底去哪裡啊?（お前はさっき一体どこへ行ったのか?）

上記の例(49),(50)の文頭の *Maazbis, Ku-isabis* の語尾 *bis* が，本稿で考察対象としている小詞である。この中文訳にあるように，小詞 *bis* は「到底」（いったいぜんたい）と訳されている。

このオンライン辞典にも出てくる小詞で，小詞 *bis* と似た機能を持つものに小詞 *bin* がある。例えば，疑問詞 *maaz*「何」の例として例(51)が挙がっている。

(51) *Maazbin suu laupaku kasalpuun ii?*
maaz bin suu laupaku ka-salpu-un i.
what BIN NEU.2SG now SF-worry-PV SFQP2
你現在到底在憂慮什麼呢?（お前はいま一体何を心配しているのか?）

同様に，例えば，疑問詞 *sima*「誰」の例として例(52)が挙がっている。

(52) *Simabin bunun tanghahai-iu mas maduhtan?*
sima bin bunun tang-ha~haiu mas maduh=tan.
who BIN human stroll-steal~steal OBL millet=NEU.PROX2
到底是什麼人經常偷這些小米?（この粟を盗んでいるのは一体誰なのか?）

例(51),(52)の文頭の *Maazbin, Simabin* の語尾 *bin* が，本稿で考察対象としている小詞 *bis* との間に統語的，意味的な共通点を持つ小詞である。

2.3 Shi (2009)

Shi (2009) はブヌン語南部方言の小詞 *tu* に関する論文である。ここには，小詞 *bis* を含む疑問文の考察がある。Shi (2009:123)は「私のインフォーマントによれば，標識 *tu* を持つ *wh*-疑問文は，標識 *bis* を持つ *wh*-疑問文の代わりと見なすことができる。ブヌン語の *bis* は

on earth「いったい」という意味を持つ。」[6]と述べている。Shi (2009)が挙げている小詞 *bis* を含む例は次の例(53)である（次の例(53)において，1 行目は Shi (2009)の表記，2 行目と 3 行目は本稿筆者の表記と分析，4 行目は Shi (2009) による英訳と，本稿筆者による日本語訳である）。

(53) *m-a<i>via=as* *bis* *tu* *m-a-muhu?*
mai-via=as *bis* *tu* *ma-muhu.*
??-why=NOM.2SG BIS COMP STAT-feet:tired
"Why on earth are you (so) tired?"（お前はいったい何故に足がくたくたなのか?）

例(53)は Shi の例(131b)であるが，本稿筆者のおこなったエリシテーションでは，容認度が低いと判断されている。例(53)の容認度が低い理由は，主格の接語代名詞（ここでは二人称単数主格の *=as*）が小詞 *bis* の前にあるからだと思われる。このことは第 3.5 節で述べる。

2.4 Chang (2009)

Chang (2009)は，ブヌン語南部方言の疑問文の統語分析である。小詞 *bis* について，以下のように書いている。Chang (2009: 60-61)は，「*sima*「誰」は *simabin* あるいは *simabis* と交換可能である。われわれのインフォーマントによると，*sima* に接尾辞として付加されている *-bin* あるいは *-bis* は驚きの気持といった態度を表す。Lin (1999)[7]もまた *bis* が付いている wh 疑問文を「いったい」という意味を表すものと解釈している」[8]と述べ，次の 3 つの例を挙げている（次の 3 つの例(54)-(56)において，1 行目は Chang (2009)の表記，2 行目と 3 行目は本稿筆者の表記と分析，4 行目は Chang (2009) による英訳と本稿筆者による日本語訳である）。

(54) *na-sima-**bin**/sima-**bis*** *sidangkaz* *mas* *Tahai* *(tu)?*
na *sima* ***bin/bis*** *si-dangkaz* *mas* *tahai* *(tu).*
IRR who BIN/BIS AV.pull-stand:up OBL PN SFPQ1
"Who will save Tahai?"「誰がタハイを助けるのか?」

(55) *sima-**bin*** *haungu* *suu* *(tu)?*
sima ***bin*** *haungun=su* *(tu).*
who BIN AV.get:angry=OBL.2SG SFQP1

[6] 原文は以下の通り："According to my informants, *tu* marked *wh*-questions can be seen as an alternative *bis* marked *wh*-question. *Bis* in Bunun means "on earth"."

[7] 林聖賢（1999）『山棕月影』晨星出版

[8] 原文は以下の通り："… *sima* is interchangeable with *simabin* or *simabis*. According to our informant, the *-bin* or *-bis* affixed to *sima* conveys an attitudinal tone such as a surprising emotion. Lin (1999) also interprets the *bis* marked *wh*-questions as conveying the meaning 'on earth'."

"Who are you angry with?"[9]「お前は誰のことを怒っているのか?」

(56) *sima suu haungun-un?*

sima=su haungun-un.

who=POSS.2SG get:angry-PV

"Who is angry with you?"[10]「誰がお前のことを怒っているのか?」

また，Chang (2009: 48)は，「空間の疑問詞「どこ」はブヌン語南部方言では *isa* または *isabin/isabis* で表す」[11]と述べている。

2.5 Li (2010)

Li (2010)は修士論文で，ブヌン語南部方言における接語の統語分析である（言語調査は南投縣信義鄉羅娜村および東埔村でおこなったと述べている）。Li (2010)はこの論文の中で小詞 *bis* について，何汝芬その他(1986)の例と，Shi (2009)の例を以下のように引用している（次の 2 つの例(57),(58)において，1 行目は Li (2010)の表記，2 行目と 3 行目は本稿筆者の表記と分析，4 行目は Li (2010) による英訳および出典，それに本稿筆者による日本語訳である）。

(57) *na=niʔ=bis [kasu] ϕ-haiap na=mapatas-i?*

na nii ***bis kasu*** *haiyap na ma-patas i.*

IRR NEG BIS NOM.2SG AV.know IRR AV-write SFQP2

"Will you be able to write after all?" 「お前はいったい書くことができるのか?」（何汝芬その他 1986:109）

(58) *ma-i-via=as=bis tu …*

*mai-via***=as** ***bis*** *tu*

??-why=NOM.2SG BIS COMP

"Why were you [...]? 「お前は何故…たのか?」(Shi 2009:123)

この 2 つの例を分析し，Li (2010:143)は次のように観察している：「例(57)では，小詞 *bis* は接語の位置にあり，主格代名詞の自立形に先行しているのに対し，例(58)では，その小詞 *bis* が同様に接語の位置にあるが，主格代名詞の接語形に先行していることに注目すべきである」[12]。「この 2 つの例は，小詞 *bis* が主格代名詞の 2 つの位置に違いを設けていること

[9] 例(55)は，「誰がお前のことを怒っているのか?」（"Who is angry with you?"）という意味にしかとれない。

[10] 例(56)は，「お前は誰のことを怒っているのか?」（"Who are you angry with?"）という意味にしかとれない。

[11] 原文は以下の通り："The spatial *wh*-word 'where' is represented by *isa* or *isabin/isabis* in Isbukun Bunun."

[12]原文は以下の通り："Note that in (5.12a) =*bis* is in clitic position and followed by a long NOM pronoun, whereas in (5.12b) the same Q marker is also in clitic position but preceding a short NOM pronoun." ここで，例(5.12a)は本稿の例(57)であり，また，例(5.12b)は本稿の例(58)である。例(58)では，接語代名詞 =*as* が疑問小詞 *bis* に先行している。したがって，Li (2010)の英文における preceding は following の誤りだと思われる。

を示唆している：すなわち，主格代名詞（接語形）> 小詞 *bis* >主格代名詞（自立形）。このことは，さらなる研究に値する。」[13]。

しかし，第 2.3 節ですでに述べたように，例(58)（=Shi の例(131b)の一部）は，本稿筆者のおこなったエリシテーションでは，容認度が低いと判断されている。したがって，Li (2010)が主格代名詞の位置に関して述べていることは，本稿で記述の対象としている方言（高雄市那瑪夏区で話されている方言）にはそのままではあてはまらない。この問題は第 3.5 節で取り上げる。

興味深いのは，Li (2010:143)が小詞 *bis* に Q (= yes/no-interrogative)という語釈をあてていることである。これに関して，第 3.1 節で示すように，小詞 *bis* は肯否疑問文にのみ現れるわけではなく，疑問詞疑問文においても疑問詞の直後に頻繁に現れることに注意すべきである。

3 小詞 bis の文法と意味

本節では，小詞 *bis* の統語的側面と意味的側面を明らかにする。

3.1 疑問詞疑問文における小詞 bis

小詞 *bis* は，疑問詞疑問文，つまり「誰?」「どこ?」「どう?」などの情報を求める文に頻繁に現れる。

(59) *maaz* ***bis***[14] *sian* *tu* *bunun* *tu.*
what BIS NOM.3SG.PROX NEU.LG human SFQP1
この人は何か?

(60) *ma-kua* ***bis*** *saia* *tu* *halinga* *i.*
STAT-how BIS NOM.3SG.DIST NEU.LG story SFQP2
その話はどのようなものなのか?

(61) *na* *pia* ***bis*** *babu* *kaun-un* *i.*
IRR how:many BIS pig eat-PV SFQP2
豚はいくつ食べるか?

(62) *ma<i>ka-'isa* ***bis*** *kamu* *masa* *m-udaan=am* *kau-diip* *i.*
through<PST>-where BIS NOM.2PL when AV-leave=NOM.2PL to-there SFQP
あなたたちはそこへ行った時，どこを通って行ったのか?

---

[13] 原文は以下の通り："These examples suggest that =*bis* differentiates the positions of the two subparadigms of NOM pronouns: short nom before =*bis* before long NOM. This issue deserves further study."

[14] 疑問詞 *maaz* の直後に第二位置疑問小詞 *bis* が現れると，疑問詞の末尾子音 *z* は義務的に脱落する。つまり，[maːbiɕ]と発音される。ちなみに，子音 *z* の義務的な脱落は，もう 1 つの第二位置疑問小詞 *bin* が後続した場合にも起きる。つまり，[maːbin]と発音される。この事実は，疑問詞 *maaz* と疑問小詞とが融合し，すでに半ば一語化していることを示唆している。

小詞 *bis* が現れるのは疑問詞疑問文における疑問詞の直後が圧倒的に多い。このことから，小詞 *bis* の主要な機能の 1 つが「疑問詞疑問文であることを標示する」というものであることは間違いないと言える。

3.2 理由を尋ねる疑問文における小詞 bis

本研究で主な資料としている昔話の中で，理由を尋ねる疑問詞疑問文，つまり「何故?」と訊いて理由が何かを求める文を探してみると，そこでは小詞 *bis* は現れていないことがわかる。

(63) *via tu m-insuma adii tumaz.*
why COMP AV-appear DIST bear
あの熊はなぜ来たのか?

(64) *via tu ka maupa=tan a inaak a*
why COMP ?? similar:to=NEU.PROX2 NOM POSS.1SG NOM.LG
sin-pi-nau'az=an is.
CV.PST-CAUS-beautiful=NOM.PROX2 SFQP3
私が綺麗にしたこのものは，なぜこのようなのか?（=私が施した化粧はなぜこんなふうにされたのか?）

(65) *ma-via tu panah-un saikin is.*
STAT-why COMP shoot-PV NOM.1SG SFQP3
なぜ私を撃ったのか?

(66) *mai-via saia tu tupa-un tu pitu i.*
??-why NOM.3SG.DIST COMP say-PV COMP seven SFQP2
あれは（=“七撃ちのダホ”というあだ名のあの人は）どうして「七」といわれるのか?

このように，理由を尋ねる疑問文では，小詞 *bis* は現れていない。しかしながら，エリシテーションでは，例(67)のように「理由を尋ねる疑問文に小詞 *bis* が現れても，容認度は低くはならない」ということが確認できた。

(67) *mai-via* ***bis*** *kasu tu ma-muhu.*（作例）
??-why BIS NOM.2SG COMP STAT-feet:tired
お前はどうして足が棒なのか?

3.3 不定用法の疑問詞と小詞 bis

ブヌン語の疑問詞には疑問用法に加えて，不定用法がある。第 3.1 節，第 3.2 節で，小詞 *bis* が疑問用法の疑問詞を「述語」とする節にはよく現れることを見たが，それに対し，不定用法の疑問詞を「述語」とする節には小詞 *bis* は現れないようである。例(68)では疑問詞

sima「誰」が，例(69)では疑問詞 *ku-isa~isa*「どこへ行く」が不定用法で用いられているが，その直後に小詞 *bis* は現れていない。

(68) *sima mahtu ma-p-indadu hai, na ... pa-isuu.*
who able AV-CAUS-cure CONJ IRR CAUS-POSS.2SG
誰でもいい，（娘の病気を）直すことができる者がいたら，（娘は）そなたのものにしよう

(69) *ana tupa saikin tu ku-isa~isa hai, sa-kula'az-an.*
CF AV.say NOM.1SG COMP to-where~where CONJ see-bad-LV
私はどこへ行っても，見下される（=馬鹿にされる，苛められる）。

3.4 疑問詞を含まない文における小詞 bis

第 3.1 節で小詞 *bis* が疑問詞疑問文に現れることを見たが，この小詞は疑問詞を含まない文にも現れうる。その場合，その文は例(70)のように普通の肯否疑問として解釈されることもあれば，例(71)のように反語疑問として解釈されることもあるようだ。

(70) *aiza* ***bis*** *kamu a kau-baav=tia i.*
AV.exist BIS NOM.2PL NOM.LG to-far:up:the:mountain=NEU.DIST SFQP2
あなた方の中に，山の上の方へ行った者はいるか?

(71) *ungat, sima bis kamun i.*
and:then who BIS NOM.2PL SFQP2
antalam-un dau=s nas-tama-biung tu,
answer-PV HS=AGT the:late-father-Biung COMP
nii ***bis*** *kasu inaak tu masinauba i.*
NEG BIS NOM.2SG POSS.1SG NEU.LG younger:sibling SFQP2
“で，お前は誰?”（と亡くなったブクンおじさんが言うと）亡くなったビオンおじさんが答えて言った，“お前は私の弟じゃないか。”

3.5 小詞 bis の直前に現れうる接語代名詞

すでに見たように，小詞 *bis* は文の「第二位置」に現れるが，その「第二位置」には接語代名詞が小詞 *bis* とともに現れることがある[15]。その場合の接語代名詞は動作主格である。例(72)では，述語 *na pi-ku-un*「どういうふうにするのか?」の直後に二人称複数動作主格の接語代名詞 *=mu* が現れており，そのさらに後ろに小詞 *bis* が現れている。

(72) *na pi-ku-un****=mu*** ***bis*** *kuus=an i,*

[15] ちなみに，アスペクト小詞 *=in*「もう，すでに」は小詞 *bis* の直前に現れうる。例：
(a) *u-isa****=in*** ***bis*** *uvaaz=a.*
at-where=already BIS child=NOM.DIST
あの子供はどこへいったのか?

IRR CAUS-how-PV=AGT.2PL BIS arrow:bamboo=NOM.PROX2 because
via tu ka mati-tmang m-astabal tu.
why COMP ?? AV.cut-randomly AV-cut SFQP1
あなたたちはこの箭竹をどうするつもりなのか，なぜ（箭竹を）むやみやたらに切るのか?

例(73)では，述語 *na ku-maaz-an*「何を使うのか?」の直後に一人称複数包含動作主格の接語代名詞 *=ta* が現れており，そのさらに後ろに小詞 *bis* が現れている。

(73) *na ku-maaz-an**=ta*** ***bis*** *saia ma-pataz, mais m-insuma=in.*
IRR use-what-LV=AGT.1PI BIS NOM.3SG.DIST AV-kill if AV-appear=already
私達はあれを（=あの熊を）何で殺そうか，もし来たら。

それに対し，「第二位置」に（動作主格ではなく）主格の接語代名詞があり，その直後に小詞 *bis* が来る文は，容認度が低いことがエリシテーションで明らかになっている。例(74a-c)の 3 つは Shi (2009: 123)をもとに作ったものだが，この 3 つを対照するとわかるように，小詞 *bis* の前後に主格代名詞が来る場合，例(74a)のように自立代名詞が後続するのであれば容認度は高いが，例(74b,c)のように接語代名詞が前後に現れるのだと容認されなくなってしまう。

(74) a. *mai-via* ***bis*** ***kasu*** *tu ma-muhu.*（作例）
??-why BIS NOM.2SG COMP STAT-feet:tired
お前はどうして足がくたくたなのか?

b. **mai-via**=**as*** ***bis*** *tu ma-muhu.*（作例）
??-why= NOM.2SG BIS COMP STAT-feet:tired
お前はどうして足がくたくたなのか?

c. **mai-via* ***bis=as*** *tu ma-muhu.*（作例）
??-why BIS= NOM.2SG COMP STAT-feet:tired
お前はどうして足がくたくたなのか?

このように，接語代名詞と小詞 *bis* の連続は，代名詞の格によって容認度が変わり，そして，代名詞が自立形か接語形かの別によって容認度ががらりと変わってしまう。

3.6 単純主格標示詞 a は小詞 bis の直後に現れえない

単純主格標示詞 *a* は小詞 *bis* の直後に現れえない。例(75a, b)を対照のこと。しかし，複合主格標示詞 *maaz a* は，小詞 *bis* の直後に現れうる。例(75c)を参照のこと。

(75) a. *u-isa* ***bis*** ***saia*** *i.*（作例）
at-where BIS NOM.3SG.DIST SFQP2
あれはどこにいるのか?

b. **u-isa* ***bis*** ***a*** *saia i.*（作例）
at-where BIS NOM NOM.3SG.DIST SFQP2

c. *u-isa* ***bis*** ***maaz a*** *saia i.*

at-where BIS what NOM NOM.3SG.DIST SFQP2
あれはどこにいるのか?

何汝芬その他(1986:109)は小詞 *bis* の記述で「*bif* 用于谓语之后，代替助词 *a* 的位置」（= 小詞 *bis* は述語の後ろ，つまり，助詞 *a* に代わる位置に用いられ）と述べている。この記述は，「単純主格標示詞 *a* は小詞 *bis* の直後に現れえない」という事実に初めて注目したものといえる。

3.7 後ろに自立語がない場合は小詞 bis は現れえない

第 2.2 節で小詞 *bis* と，それに似た意味を持つ小詞 *bin* を見た。この 2 つを比べてみると，統語的振る舞いに決定的な違いがある。その違いとは，小詞 *bin* は，節に自立語が 1 つしか含まれていない場合にも現れうるのに対し，小詞 *bis* は，そのような場合には用いることができない，というものである。例えば，小詞 *bin* は疑問詞 *sima*「誰」に後続して *sima* ***bin*** *i.*「誰?」のように文を完結させることができるのに対し，小詞 *bis* はそのような位置には現れることができず（つまり **sima* ***bis****.* / **sima* ***bis*** *i.* はともに不適格），自身の後ろに何か自立語を後続させなければならないという統語上の性質を持っている。

4 おわりに

本研究を通じて，小詞 *bis* の統語的および意味的な諸特徴が明らかになった。以下，それをまとめる：

(a) 小詞 *bis* は，疑問詞疑問文（つまり「誰?」「どこ?」「どう?」などの情報を求める文）に頻繁に現れる。小詞 *bis* は節の「第二位置」，つまり疑問詞の直後によく現れる。

(b) 理由を尋ねる疑問詞疑問文（つまり「何故?」と訊いて，理由を尋ねる文）に限っては，テキストでは小詞 *bis* は現れていない。しかしながら，エリシテーションでは，理由を尋ねる疑問文に小詞 *bis* が現れても容認度は低くならない，ということが確認できた。

(c) 小詞 *bis* は，不定用法の疑問詞の直後には現れえないようである。

(d) 小詞 *bis* は，疑問詞疑問文にのみ現れるというわけではなく，疑問詞を含まない文にも現れうる。ただし，その場合，その文は普通の肯否疑問と解釈されることもあれば，反語疑問と解釈されることもある。

(e) ただし，「第二位置」とはいっても，つねに述語の直後というわけではなく，述語の直後に動作主格接語代名詞がついている場合，小詞 *bis* が現れるのはそのさらに後ろである。

(f) しかし，同じ接語代名詞でも，動作主格ではなく主格代名詞の直後には，小詞 *bis* は現れえないようである。

(g) 小詞 *bis* の直後には単純主格標示詞は現れえない。ただし，複合主格標示詞 *maaz a* は現れうる。

(h) 小詞 *bis* は，節に自立語が 1 つしか含まれていない場合には，現れることができない。

以上(a)から(h)までの事実は，ブヌン語における「第二位置」および「疑問文」の考察を今後すすめていくにあたって，きわめて重要だと考えられる。

略号

1SG: 一人称単数，1PE: 一人称複数排除，1PI: 一人称複数包含，2QP: 第二位置疑問小詞，2PL: 二人称複数，2SG: 二人称単数，3PL: 三人称複数，3SG: 三人称単数，AGT: 動作主格，AV: 動作主態，CAUS: 使役接頭辞，CF: 反事実標識，CN: 氏族名，COMP: 補文標識，CONJ: 接続詞，CV: 状況態，DIST: 遠称，HS: 伝聞小詞，IMP: 命令法，INTR: 自動詞化接辞，IRR: 叙想法，LDM: 左方転移標識，LG: 連結辞，LOC: 所格，LV: 場所態，NAV: 非動作主態，NEG: 否定辞，NEU: 中立形，NOM: 主格，OBL: 斜格，PN: 個人名，POSS: 所有格，PROH: 禁止辞，PROX: 近称，PROX2: 近称2，PST: 過去時制，PV: 被動者態，SF: 語幹形成辞，SFQP1: 文末疑問小詞1，SFQP2: 文末疑問小詞2，SFQP3: 文末疑問小詞3，STAT: 状態接頭辞，VBZ: 動詞化辞

参考文献

布農語詞典（原住民族族語線上詞典）[Available at: http://e-dictionary.apc.gov.tw/bnn/Intro.htm; accessed 26 June 2015]

Chang, Chung-yang Marco. 2009. On the interrogative constructions in Isbukun Bunun. M.A.thesis, Graduate Institute of English, National Taiwan Normal University.

何汝芬，曽思奇，李文甦，林青春 （1986） 『高山族語言簡誌（布嫩語）』北京：民族出版社

Li, Lilian Li-ying. 2010. Clitics in Nantou Isbukun Bunun (Austronesian). M.A. thesis. National Chi Nan University, Taiwan.

Li, Paul Jen-kuei. 1988. A comparative study of Bunun dialects. Bulletin of the Institute of History and Philology 59.2: 479-508.

小川尚義，浅井恵倫（1935）『原語による台湾高砂族伝説集』東京：刀江書院

Shi, Chaokai. 2009. The linker TU in Isbukun Bunun. M.A. thesis. Kaohsiung: National Kaohsiung Normal University, Taiwan.

ロロ・ポ語音論の予備的研究*

林 範彦

神戸市外国語大学　jinozu@yahoo.co.jp

キーワード：ロロ・ポ語、彝語、チベット・ビルマ諸語、 音韻論、ラオス北部

1. はじめに

チベット・ビルマ諸語の下位区分のうち、ロロ・ビルマ諸語(Lolo-Burmese/ Yipho-Burmese)と呼ばれる言語群は中国雲南省や四川省、広西チワン族自治区などの中国南部からビルマ・タイ・ラオス・ベトナムの各北部地域[1]で話されている。このうち中国およびタイのロロ・ビルマ諸語は現地調査やその結果に基づく分析が比較的進んでいる。しかし、その他の地域ではこれまで調査が困難であったため、調査やデータ公開が非常に限定されていた。

筆者はこのたび勤務校より在外研究(2014 年度)の機会を得た。これによりタイ王国を拠点とし、中国雲南省・ラオス北部・ビルマ東北部を中心に現地調査を進めることができた。このなかで特にラオス北部の現地調査ではロロ・ビルマ諸語のいくつかの言語の基礎語彙を中心に

地図 1 : ラオス・ムアンシン地区の位置

---

*本研究は 2014 年 9 月上旬に行った。ロロ・ポ語の発話データ協力者は主としてラオス・ルアンナムター 県ムアンシン地区ノンブア村に住む Su Vanli 氏(48 歳・男性), Laoxing Laoli 氏(64 歳・男性)である。本調査は日本学術振興会科学研究費補助事業(基盤研究 C [26370492]「東南アジア北部地域の諸言語の地域特徴と接触による言語変容の研究」; 研究代表者 林範彦)および三島海雲記念財団の助成を受けている。また現地調査についてはラオス国立大学文学部の Sisamouth Sisomboun 氏およびルアンナムター県庁・ムアンシン地区政府のご協力を得た。本稿作成時には落合いずみ氏(京都大学大学院)、倉部慶太氏(日本学術振興会/ 東京外国語大学)から多くのコメントをいただいた。上記の方々および関係機関に記して心から感謝申し上げます。なお、当然ながら本稿におけるすべての誤謬は筆者個人に帰する。

[1] 同地域はチベット・ビルマ諸語のほかにも、タイ・カダイ諸語、ミャオ・ヤオ諸語、モン・クメール諸語などが話されている。

採集した。本稿はラオス北部のムアンシン(Muang Sing)地区(地図 1[2]を参照)で話されるロロ・ポ(Lolopho)語の音論の問題について、筆者の現地調査による一次資料をもとに報告する。ただし、本稿におけるデータ分析はいまだ資料の限界もあり、予備的なものであると断っておく。

2. ロロ・ポ語について

2.1 ロロ・ポ語の位置づけ

ロロ・ポ語はチベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語支ロロ語群に属すると考えられる。ロロ語群はアカ語・ラフ語・リス語・ビス語・チノ語など多くの言語をもつが、その中心に据えられるのがロロ語である。

ロロ語は中国国内では彝(イ)族の話す言語、すなわち「彝語」とされる。「彝語」は多くの「方言」に分かれる。しかし、その方言間の通話は難しいとされる。実際には各「方言」はもはや言語と見なした方がよいだろう。

中国国内の「彝語」諸方言の研究は連綿たる歴史がある。20 世紀前半には Vial (1909)や Liétard (1909)などのフランス人による研究にはじまり、中国国内では馬學良 (1951)や高華年(1958)といった研究者を筆頭に現在に至るまで多くの研究が存在する。その中心となるのが四川省涼山で話されるノス・イ(Nuosu Yi, 诺苏彝)語である。ノス・イ語以外にもナス語・リポ語・タル語などの数多くのロロ諸語が確認されている。

ロロ・ポ語はこのロロ諸語の一つに位置づけられる。現在の中国領内(おそらく四川省以北)に元来居住していたのが雲南省を経て、現在のラオス領内に移住したものと考えられる。中国国内のロロ・ポ語は雲南省南華県や景東県などで話される[3](Matisoff 1996: 54, Lama 2012: 80)。中国国内のロロ・ポ語はすでに 20 世紀初頭に Liétard (1909)が記述しており、そのデータをもとに Shafer (1950)によるロロ諸語の分類や Benedict (1972)[4] のシナ・チベット諸語の概説が書かれている。Bradley (2000: 99)は中国のロロ・ポ語をリポ語とともに中央ロロ諸語(Central Yi)グループに位置づけている。中国国内のロロ・ビルマ諸語を中心に比較し、最新の系統分類を提示した Lama (2012: 235)によれば、中国のロロ・ポ語は Nisoic-Burmic (従来のロロ・ビルマ諸語と同等)の中の Lisoish に位置づけられるとされる。参考までに図 1 に Lama (2012)の系統樹を引用しておく。

---

[2] この地図は以下のサイトから提供されている地図を筆者が加工したものである。
http://n.freemap.jp/tp/laos (2015 年 4 月 5 日アクセス)

[3] Ethnologue によれば中国国内のロロ・ポ語話者は約 38 万人(2007 年)存在する。ただ、Lolopo Southern という項目もたてられており、こちらは約 19 万人(2002 年)の話者が存在するという。なお、現時点においては Ethnologue 上でラオス側に話されるロロ・ポ語の記述はない。なお、中国雲南省南華県のロロ・ポ語の語彙は黄(1992)に収録されている。

[4] Benedict (1972: 8)ではロロ・ポ語はビルマ・ロロ語支(Burmese-Lolo)の北部ロロ語群(Northern Lolo)に属するとしている。

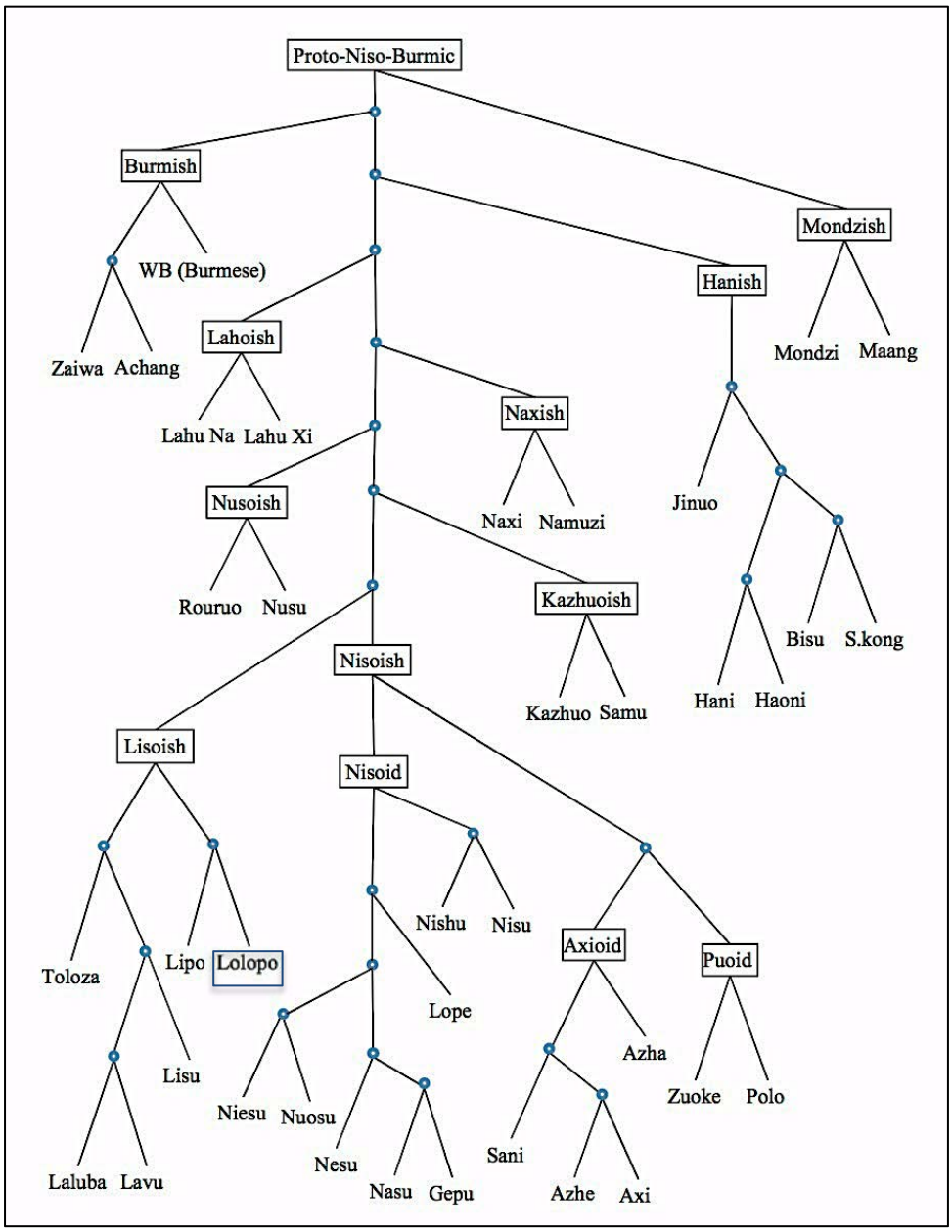


図 1: ロロ・ポ語[本図では Lolopo]の系統的位置 (Lama 2012: 235)

本稿で取り扱うロロ・ポ語はラオス人民民主共和国ルアンナムター(Luang Namtha)県の最北に位置するムアンシン地区で話される変種である。ただし、筆者の聞き取りによると、この地区のロロ・ポ人たちは元来ポンサリ(Phongsali)県のニョート・ウー(Nyot-U)地区から 2003 年に移住してきたということである[5]。

[5] ラオスの 2005 年の人口統計によれば、ロロ族は 1691 人で全人口の 0.1%を占めるとされる(Sathāban Vithayāsāt Sankhom Hængsāt 2009: 63)。その大多数はポンサリ県に住む。ポンサリ県に居住するロロ・ポ人に関する民族学的・歴史学的記述については Rattanavong (1997)が有用であるようだが、筆者は未見である。

ムアンシン地区には主として 2 つのロロ・ポ人を擁する村落がある。Nongbua 村と Xiengmoon 村である。いずれの村もムアンシン地区の中心街からは徒歩圏内である。ムアンシン地区は全体的にタイ・ルー(Tai Lue)族[タイ・カダイ系]の村落が多数を占め、その間隙にその他の少数民族の集落が雑居する形となっている。Xiengmoon 村におけるロロ・ポ人の集落はタイ・ルー族の集落に囲まれている。一方で、Nongbua 村におけるロロ・ポ人はホー人(Haw, 雲南省から来た漢族で漢語雲南方言を話す)とともに集落を形成し、タイ・ダム(Tai Dam)族[タイ・カダイ系]とプノイ(Phunoi)族[チベット・ビルマ系]の集落と隣接している点で特徴的である。

ロロ・ポ語話者は中国国境地域から移住したことに加え、ホー人と集落を共有している。これにより、一般的に漢語雲南方言との二言語併用話者[6]である。筆者は今回の調査ではラオ語のほか、漢語雲南方言も媒介言語として使用した。

2.2 Kato (2008)について

中国のロロ・ポ語を記した Liétard (1909)などの 20 世紀前半期のものを除けば、近年の現地調査に基づいたデータの公開は管見の及ぶ限り Kato (2008: 173-191)のみである。Kato (2008)は他のラオス北部のチベット・ビルマ諸語の言語調査を新谷忠彦氏らのグループの作成した調査表(Saya U Aung Caw et.al. eds. 2001)から重要語彙を拾いだして行い、同書では約 300 語の語彙データの公開を行っている。なお、Kato (2008)の調査データによれば、ポンサリ県ニョート・ウー地区出身のロロ・ポ語話者を協力者として調査したようである。

Kato (2008)はこれまでほとんど明らかにされなかった近年のラオス国内のロロ・ポ語のデータを公開した点で非常に貴重である。しかし、(おそらく声調以外の分節音における)音素分析がなされていない。このため、データが音声記述に近いものであることは指摘しておかねばならない。

本研究は Kato (2008)の記述とは全く別個で筆者の独自に行った調査に基づくが、研究史としては Kato (2008)を引き継いでいると言えよう。本研究では音素分析を進めているが、更なる詳細については今後の継続的な調査がまたれるところである。

3. ロロ・ポ語の音韻体系

本節では筆者の一次資料をもとに、ロロ・ポ語の音韻体系を提示したい[7]。まず、音節構造については以下のように定式化できよう。

(1) a. C1C2V/T
　　b. C1/T

[6] 筆者の調査対象の村では少なくとも調査協力者の男性 2 名はロロ・ポ語と漢語雲南方言のほかに、ラオ語も話せるようであった。ただ、周囲はロロ・ポ人と漢族の共住村であるため、日常の言語生活はロロ・ポ語と漢語の二言語併用であると見なした方が良いだろう。ただし、漢字に対する知識はないようである。

[7] 本稿の分析はまだ初期段階である。おそらく形態音韻論的問題も存在するはずであろう。ただ、これについては今後の研究課題としたい。

C1 は頭子音(onset, initial)を、C2 は介音(medial)を、V は主母音(vowel)を、T は声調(tone)を指す。声調を持つ他の多くの言語同様、語形成の観点からみると、単音節で語をなすことが可能である。ただ、2 音節以上の語彙が多く存在する。

(1a)はロロ諸語で広く見られる音節構造である。V を音節主核にもち、その前方に C が立ちうる開音節の構造である。このとき C は音節により生起する場合もあれば、しない場合もある。すなわち、T を除く構造を書き出せば、C1V, C1C2V, V が具体的に起こりうる。

(1b)は成節鼻音(syllabic nasal)が声調を伴って音節を構成する場合である。これもシナ・チベット諸語に広く見られる。本稿のロロ・ポ語の現時点のデータでは C1 の具体的な要素として/m, n, ŋ/が挙げられる。成節鼻音の問題は後に論じたい。

ここで本稿において説明する音素体系について先に表 1 にその一覧をまとめておく。

表 1: ロロ・ポ語（ムアンシン方言)の音素体系の一覧

[子音]			
p ph b	t th d		k kh g
	tʂ tʂh dʐ	tɕ tɕh dʑ	
m	n	ȵ	ŋ
f v	ʂ ʐ	ɕ j	x ɣ
(w)	l		

[普通母音]			[鼻母音]			[緊喉母音]		
i	ɯ	u	ĩ		ũ	ḭ	ɯ̰	ṵ
e	ɤ	o	ẽ	ɤ̃	õ	ḛ	ɤ̰	o̰
ɛ		ɔ	ɛ̃		ɔ̃	ɛ̰		ɔ̰
a		ɐ			ɐ̃	a̰		ɐ̰

[声調] 55, 33, 31
(,35)

なお、以下の各小節ではできるだけ分布域の広さがわかるように各音素で 2 例から 4 例程度の語彙例を挙げた。最小対は現段階では見いだしにくいが、今後調査を進める過程で明らかにして行きたい。語彙例を挙げる際、/ /で音素表記を、[ ]で(簡易)音声表記を示すこととする。また各語例の語釈部分に（)内の数字は本稿末尾の付録における語例の番号を示している。

3.1 頭子音

以下では調音様式別に音素の例を挙げる。頭子音として現れるのは破裂音、鼻音、破擦音、摩擦音、側面音である。

[破裂音]

有声無気音・無声無気音・無声有気音の 3 項対立である。調音点においては両唇音・歯茎音・軟口蓋音の対立がある。ロロ諸語の中ではアカ語諸方言などに見えるごく一般的な体系である。

/p/ [p]: /u^{55}**p**i^{55}/ [u^{55}**p**i^{55}] 「櫛(#13)」、/no^{55}**p**ɐ^{33}/ [no^{55}**p**ɐ^{33}] 「耳(#17)」、/**p**o33ɐ33/ [**p**o33ɐ33] 「粗い(#398)」、 /lɛ^{33}gɯ^{33}**p**u^{55}/[lɛ^{33}gɯ^{33}**p**u^{55}] 「腕(#29)」

/ph/ [p^{h}]: /**ph**i^{31}ɐ^{33}/ [**p^{h}**i^{31}ɐ^{33}]「遅い(#437)」、/**ph**ɐ^{31}mɛ^{33}/ [**p^{h}**ɐ^{31}mɛ^{33}] 「顔(#14)」、/mo^{55}**ph**u^{31}/ [mo^{55}**p^{h}**u^{31}] 「竹(#224)」

/b/ [b]: /**b**i^{33}ji^{33}/ [**b**i^{33}ji^{33}] 「膿(#7)」、/ɐ^{31}ɳi^{33}**b**ɐ^{55}/ [ɐ^{31}ɳi^{33}**b**ɐ^{55}] 「昨日(#453)」、/**b**u^{33}pɛ̠^{33}/ [**b**u^{33}pɛ̠^{33}] 「太もも(#49)」

/t/ [t]: /li^{33}**t**i^{55}ɕu^{33}/ [li^{33}**t**i^{55}ɕu^{33}] 「落花生(#238)」、/kǫ^{33}**t**ą^{33}ną^{33}/ [kǫ^{33}**t**ą^{33}ną^{33}] 「カエル(#200)」、/mi^{31}**t**o^{55}lo^{55}sɛ^{31}/ [mi^{31}**t**o^{55}lo^{55}sɛ^{31}] 「ジャックフルーツ(#246)」

/th/ [t^{h}]: /**th**e^{31}/ [**t^{h}**e^{31}]「1(#73)」、/**th**a^{55}pɤ^{31}li^{33}/ [**t^{h}**a^{55}pɤ^{31}li^{33}] 「へそ(#38)」、/ɐ^{55}**th**o^{31}lje^{31}/ [ɐ^{55}**t^{h}**o^{31}l^{j}e^{31}] 「ナイフ(#147)」

/d/ [d]: /**d**e^{33}ɐ^{33}/ [**d**e^{33}ɐ^{33}] 「浅い(#396)」、/**d**a^{33}/ [**d**a^{33}] 「掃く(#145)」、/le^{33}**d**u^{31}/ [le^{33}**d**u^{31}] 「物語(#308)」

/k/ [k]: /ŋɔ^{33}**k**ɛ^{33}/ [ŋɔ^{33}**k**ɛ^{33}] 「我々(1PL) (#485)」、/**k**ɐ^{33}jɛ^{33}mo^{33}/ [**k**ɐ^{33}jɛ^{33}mo^{33}] 「柱(#134)」、/**k**o^{33}tje^{55}/ [**k**o^{33}t^{j}e^{55}] 「会う(#361)」

/kh/ [k^{h}]: /**kh**ɛ^{31}/ [k^{h}ɛ^{31}] 「切る(#150)」、/lɛ̠^{31}**kh**ɐ^{55}thɐ^{55}/ [lɛ̠^{31}**k^{h}**ɐ^{55}t^{h}ɐ^{55}]「手のひら(#31)」、/dɐ^{31}**kh**o^{55}/ [dɐ^{31}**k^{h}**o^{55}] 「答える(#294)」

/g/ [g]: /ɕõ^{33}**g**ɛ^{33}/ [ɕõ^{33}**g**ɛ^{33}] 「ウジ(#189)」、 /**g**ɐ^{31}**g**ɐ^{31}/ [**g**ɐ^{31}**g**ɐ^{31}] 「骨(#3)」、/mɛ^{31}**g**ǫ^{31}/ [mɛ^{31}**g**ǫ^{31}]「歌(#310)」

[鼻音]

有声音のみが認められる。調音点の位置により、4 項対立となる。

/m/ [m]: /**m**ɛ^{55}ɳi^{33}/ [**m**ɛ^{55}ɳi^{33}] 「さび(#118)」、/ɐ^{33}**m**ɐ^{33}/ [ɐ^{33}**m**ɐ^{33}] 「母(#331)」、/**m**u^{33}ʨhu^{33}lɤ^{55}/ [**m**u^{33}ʨhu^{33}lɤ^{55}] 「(服を)乾かす(#273)」

/n/ [n]: /**n**ɛ^{31}/ [**n**ɛ^{31}] 「精霊(#357)」、/**n**a^{55}ʨhi^{31}/ [**n**a^{55}ʨ^{h}i^{31}]「薬(#326)」、/**n**u^{31}ɐ^{33}/ [**n**u^{31}ɐ^{33}] 「柔らかい(#415)」

/ɳ/ [ɳ]:/**ɳ**i^{55}**ɳ**i^{33}/ [**ɳ**i^{55}**ɳ**i^{33}] 「赤い(#403)」、/**ɳ**ɐ^{55}/ [**ɳ**ɐ^{55}] 「貼る(#306)」、/ɐ^{55}**ɳ**u^{31}/ [ɐ^{55}**ɳ**u^{31}] 「牛(#170)」

/ŋ/ [ŋ]: /**ŋ**ɛ^{31}to^{33}le^{33}/ [**ŋ**ɛ^{31}to^{33}le^{33}] 「立ち上がる(#71)」、/**ŋ**ɐ^{55}ʐo^{31}/ [**ŋ**ɐ^{55}ʐo^{31}]「鳥(#162)」、/**ŋ**o^{55}ʐo^{31}/ [**ŋ**o^{55}ʐo^{31}] 「魚(#170)」

/m, n, ŋ/は成節性を有し、音節主核に立ちうる。以下に例を挙げる。

/m/ [m̩]: /nɛ^{33}xɛ^{55}**m**^{31}bɐ^{55}/ [nɛ^{33}xɛ^{55}**m̩**^{31}bɐ^{55}] 「来年(#446)」
/n/ [n̩]: /**n**^{31}/ [**n̩**^{31}] 「否定辞」
/ŋ/ [ŋ̩]: /ɐ^{55}mɛ̃^{31}**ŋ**^{33}kɤ^{33}/ [ɐ^{55}mɛ̃^{31}**ŋ̩**^{33}kɤ^{33}] 「今(#451)」

まだ非常に例が少ないので結論は出しにくいが、上の例では、成節鼻音としての/m/は後続音節の頭子音が/b/, また成節鼻音としての/ŋ/は後続音節の頭子音が/k/である。これによりともすると、成節鼻音としては/n/のように整理され、後続音節の頭子音に対して調音点が音声的に同化すると分析したほうがよいかもしれない[8]。

[破擦音]
有声無気音・無声無気音・無声有気音の 3 項対立である。調音点についてはそり舌音と前部硬口蓋音との対立がある。現時点のデータにおいて前部硬口蓋音[tɕ]は母音/ɐ/との結合時に歯茎音([ts])と自由に変異するようである(下例「ものを探す(#365)」を参照)[9]。

/tʂ/ [tʂ]: /**tʂ**i^{55}ji^{33}/ [**tʂ**ɿ^{55}ji^{33}] 「霧(#100)」、/nʂ^{33}mo^{33}**tʂ**o^{33}/ [nʂ^{33}mo^{33}**tʂ**o^{33}] 「胸(#34)」、/**tʂ**u^{33}**tʂ**u^{33}/ [**tʂ**u^{33}**tʂ**u^{33}] 「テーブル(#143)」
/tʂh/ [tʂ^{h}]: /**tʂh**i^{55}ɐ^{33}/ [**tʂ^{h}**ɿ^{55}ɐ^{33}]「甘い(#380)」、/**tʂh**o^{33}lɑ̨^{33}/ [**tʂ^{h}**o^{33}lɑ̨^{33}] 「塩(#225)」、/ɐ^{55}**tʂh**u^{31}/ [ɐ^{55}**tʂ^{h}**u^{31}] 「とげ(#222)」
/dʐ/ [dʐ]: /**dʐ**i^{55}bɛ^{31}/ [**dʐ**ɿ^{55}bɛ^{31}] 「酒(#259)」、/**dʐ**o^{33} pɛ^{33}**dʐ**o^{31}/ [**dʐ**o^{33} pɛ^{33}**dʐ**o^{31}] 「米を炊く(#261)」、/**dʐ**ɔ^{33}**dʐ**ɤ^{33}/ [**dʐ**ɔ^{33}**dʐ**ɤ^{33}] 「稲(#227)」
/tɕ/ [tɕ~ts]: /ɕɛ^{31}**tɕ**i^{55}/ [sɛ^{31}**tɕ**i^{55}] 「キュウリ(#231)」、/**tɕ**o^{33}/ [**tɕ**o^{33}] 「探す(#365)」、/ɐ^{33}**tɕ**ɐ^{33}**tɕ**ɐ^{33} **tɕ**o^{33}/ [ɐ^{33}**tɕ**ɐ^{33}**tɕ**ɐ^{33} **tɕ**o^{33}~ ɐ^{33}**ts**ɐ^{33}**ts**ɐ^{33} **tɕ**o^{33}] 「ものを探す(#365)」、/**tɕ**ɛ^{33}**tɕ**ɤ^{33}/ [**tɕ**ɛ^{33}tɕɤ^{33}] 「糸(#269)」
/tɕh/ [tɕ^{h}]:/**tɕh**i^{55}gɤ̞^{31}/ [**tɕ^{h}**i^{55}gɤ̞^{31}] 「脚(#47)」、/**tɕh**o^{55}/ [**tɕ^{h}**o^{55}] 「6(#78)」、/ɯ^{55}**tɕh**ɤ^{33}/ [ɯ^{55}**tɕ^{h}**ɤ^{33}] 「髪(#12)」
/dʑ/ [dʑ]: /**dʑ**i^{31}/ [**dʑ**i^{31}] 「銅(#121)」、/**dʑ**o^{33}phu^{33}/ [**dʑ**o^{33}phu^{33}] 「鍵(#138)」、/**dʑ**ɤ^{31}gɤ̞^{31}/ [**dʑ**ɤ^{31}gɤ̞^{31}] 「腰(#36)」

[摩擦音]
有声音・無声音の 2 項対立である。調音点においては唇歯音・そり舌音・前部硬口蓋音・軟口蓋音の 4 種の対立が見られる。現在の調査データ上、/ʐ//ɕ//j//ɣ/は以下のような特徴を有する。/ʐ//ɣ/は後舌母音とのみ結合する。[ɕ]は[s]と相補分布をなし、分布域の広さから音素としては/ɕ/にまとめられる[10]。/j/は母音/ɐ/との結合時、[z]と自由に交替しうる。

---

[8] ただし、調音点同化の適用範囲については検討を要する。否定辞/n^{31}/は後続する動詞の初頭子音の調音点に関わらず、音声的にも[n^{31}]で実現する(付録 #423「悪い」など)。このため、同化の適用は文法語の内部に限られると考えねばならないかもしれない。今後の研究が待たれる。
[9] 現時点のデータでは[tɕ^{h}]と[ts^{h}], [dʑ]と[dz]の自由変異の状況は見られない。
[10] 現時点でのデータによると、以下の結合状況が見られる。

/f/ [f]: /**f**ɛ^{33}ɐ^{33}/ [**f**ɛ^{33}ɐ^{33}] 「乾いている(#413)」、/the^{31}**f**ɛ̃^{33}/ [t^{h}e^{31}**f**ɛ̃^{33}] 「100 万(#93)」、/ɐ^{55}jɛ^{33}**f**u^{33}/ [ɐ^{55}jɛ^{33}**f**ɣ^{33}] 「鶏の卵(#164)」

/v/ [v]: /**v**ɛ^{33}lu̯^{33}/ [**v**ɛ^{33}lu̯^{33}]「花(#219)」、/tsa^{55}**v**a^{31}/ [tsa^{55}**v**a^{31}] 「ひも(#154)」、/ɐ^{33}**v**u^{33}/ [ɐ^{33}**v**̩^{33}] 「兄(#337)」

/ʂ/ [ʂ]: /**ʂ**i^{55}sɛ^{31}**ʂ**i^{55}mo^{33}/ [**ʂ**ʅ^{55}sɛ^{31}**ʂ**ʅ^{55}mo^{33}] 「種(#208)」、/ji^{33}**ʂ**ɤŋ^{33}/ [ji^{33}**ʂ**ɤŋ^{33}] 「医者(#354)」(< Ch. 医生)、/**ʂ**u^{55}vɑ̩^{31}/ [**ʂ**u^{55}vɑ̩^{31}] 「書く(#301)」

/ʐ/ [ʐ]: /**ʐ**ɐ^{31}/ [**ʐ**ɐ^{31}] 「彼/彼女(3SG) (#484)」、/thɐ^{33}lo^{55}**ʐ**o^{31}/ [t^{h}ɐ^{33}lo^{55}**ʐ**o^{31}]「ウサギ(#177)」、/lɛ̯^{33}ɛ̃^{55}**ʐ**ɔ^{31}/ [lɛ̯^{33}ɛ̃^{55}**ʐ**ɔ^{31}] 「指(#32)」

/ɕ/ [s~ɕ]: /**ɕ**ɛ^{31}tɕi^{33}/ [**s**ɛ^{31}tɕi^{33}] 「キュウリ(#231)」、/**ɕ**ɐ^{33}mi^{33}/ [**s**ɐ^{33}mi^{33}~ɕɐ^{33}mi^{33}]「畑(#252)」、/jen^{31}**ɕ**ɤ^{31}/ [jen^{31}**s**ɤ^{31}]「色(#403)」(< Ch. 颜色)

/j/[11] [z~ʝ]: /**j**ɐ^{31}ɕi^{55}/ [**z**ɐ^{31}ɕi^{55}~ **ʝ**ɐ^{31}ɕi^{55}]「新しい(#418)」、/**j**ɐ^{31}xa^{31}pɤ^{33}/ [**z**ɐ^{31}xa^{31}pɤ^{33}] 「愚かな(#434)」、/**j**ɐ^{31}tɕhu^{33}/ [**z**ɐ^{31}tɕ^{h}u^{33}] 「つの(#157)」

/x/[12] [x]: /nɛ^{33}**x**ɛ^{55}m^{31}bɐ^{55}/ [nɛ^{33}**x**ɛ^{55}m^{31}bɐ^{55}] 「来年(#446)」、/**x**ɐ^{33}mo̯^{31}/ [**x**ɐ^{33}mo̯^{31}]「猿(#175)」、/the^{31}**x**o^{33}/ [t^{h}e^{31}**x**o^{33}] 「100(#87)」

/ɣ/ [ɣ]: /**ɣ**o̯^{31}mɛ^{31}/ [**ɣ**o̯^{31}mɛ^{31}]「山(#122)」、/**ɣ**ɔ^{31}nɔ^{55}/ [**ɣ**ɔ^{31}nɔ^{55}] 「休む(#315)」、/**ɣ**ɯ^{55}mɐ^{31}/ [**ɣ**ɯ^{55}mɐ^{31}] 「熊(#178)」

[側面音]

有声側面音が 1 種認められる。無声側面音は存在しない。

/l/ [l]: /**l**i^{33}/ [**l**i^{33}] 「4(#76)」、/**l**ɐ^{33}/ [**l**ɐ^{33}] 「軽い(#411)」、/**l**u^{33}/ [**l**u^{33}] 「吠える(#180)」

[半母音]

/w/が認められる。しかし、この出現は極めて限定的である。漢語からの借用語、あるいは一部の助詞(下例「勝つ」の wɐ33 など)にしか見られない。機能負担量が極めて低い。

	/i/	/e/	/ɛ/	/a/	/ɐ/	/ɔ/	/o/	/ɤ/	/u/	/ɯ/
[ɕ]	○	○	○	―	○	○	○	―	○	―
[s]	―	―	○	―	○	―	―	○	―	―

/ɛ/と/ɐ/については[ɕ]と[s]の間で自由に変異する。ただ、/ɤ/についても[ɕ]と自由に変異しているのではないかと考えられる発音もあり、実質的には相補分布というよりも自由変異と見なした方がよいかもしれない。

[11] [z]と[ʝ]を/j/という音素にまとめるのには異論もあるかもしれない。ただ、この言語では介音で[ʲ]が現れており、これらを総合して考えると音素として/z/あるいは/ʝ/を用いるよりも/j/のほうが同系言語の対応関係をとらえる上では有利であると判断した。よって、[z]と[ʝ]は/j/の頭子音位置における位置異音として見なしておく。

[12] /x/は鼻母音 ũ の前におかれる際、[ç]となるようである(/mɛ^{33}x**ũ**^{33}/ [mɛ^{33}**çũ**^{33}] 「染める(#271)」)。ただし、今後も詳しい分析が必要である。

/w/ [w]: /**w**ɛ̃^{31}tʂɛ̃^{55}/ [**w**ɛ̃^{31}tʂɛ̃^{55}]「蚊帳(#142)」(<Ch. 蚊帳)、 /ɣo^{31}**w**ɐ^{33}/ [ɣo^{31}**w**ɐ^{33}] 「勝つ (#312)」、
/ɕi^{33}**w**ɐ^{33}/ ［ɕi^{33}**w**ɐ^{33}］「死ぬ(#319)」

3.2 介音

次に頭子音と主母音をつなぐ介音について概観しよう。介音の要素としては /-j-/のみが認められる。これが頭子音 /p-, ph-, b-, t-; m-; l-/ と結合する。現時点で得られたデータでは、/tj-/の組み合わせを除き、介音は後舌母音と結合する。

通時的な観点からやや注意が必要なのは/tj-/, /lj-/であろう。漢語からの借用語から由来するものも多い。

以下に例を挙げる。

/pj-/ [p^{j}-] : /ɐ^{33}mo^{33}**pj**ɐ^{33}/ [ɐ^{33}mo^{33}**p^{j}**ɐ^{33}] 「あひる(#184)」、/nǫ^{31}**pj**ɐ̣^{33}/ [nǫ^{31}**p^{j}**ɐ̣^{33}] 「濡れている(#414)」、 /dɐ^{31}**pj**ɔ^{31}/ [dɐ^{31}**p^{j}**ɔ^{31}] 「話す(#294)」

/phj-/ [p^{jh}-] : /**phj**ɐ^{33}bɛ^{31}**phj**ɐ^{33}lɔ^{55}/ [**p^{jh}**ɐ^{33}bɛ^{31}**p^{jh}**ɐ^{33}lɔ^{55}] 「服(#274)」、/vi^{31}**phj**ɔ^{31}/ [vi^{31}**p^{jh}**ɔ^{31}] 「放屁する(#44)」、/**phj**u^{33}/ [**p^{jh}**u^{33}] 「金銭(#290)」

/bj-/ [b^{j}-][13] : /**bj**o^{33}/ [**b^{j}**o^{33}] 「飛ぶ(#163)」、/**bj**o^{31}/ [**b^{j}**o^{31}] 「蜂(#185)」、/**bj**o^{31}jo^{33}/ [**b^{j}**o^{31}jo^{33}] 「蟻(#190)」

/tj-/ [t^{j}-] : /ko^{33}**tj**e^{55}/ [ko^{33}**t^{j}**e^{55}] 「会う(#361)」、/**tj**ɐo^{55}lǫ^{31}/ [**t^{j}**ɐo^{55}lǫ^{31}] 「かご(#153)」、/**tj**ɔ^{33}/ [**t^{j}**ɔ^{33}] 「（魚を）釣る(#203)」(< Ch. 钓)

/mj-/ [m^{j}-] : /**mj**ɐ^{31}tɐ^{55}/ [**m^{j}**ɐ^{31}tɐ^{55}] 「使う(#364)」、/**mj**ɐ^{33}tɛ^{33}/ [**m^{j}**ɐ^{33}tɛ^{33}] 「見える(#54)」、/**mj**u^{31}ɐ^{33}/ [**m^{j}**u^{31}ɐ^{33}] 「多い(#94)」

/lj-/ [l^{j}-][14] : /ɐ^{55}**th**o^{31}lje^{31}/ [ɐ^{55}**t^{h}**o^{31}l^{j}e^{31}] 「ナイフ(#147)」、/**lj**ɛ̃^{55}/ [**l^{j}**ɛ̃^{55}] 「光 (#108)」(< Ch. 亮)、/tɕu^{55}tɕhu^{31}to^{33}**lj**ɐ^{33}/ [tɕu^{55}tɕ^{h}u^{31}to^{33}**l^{j}**ɐ^{33}] 「起きる(#318)」

3.3 主母音

それでは続いて主母音について概観しよう。主母音には単母音と二重母音が認められる。主母音の系列としては、普通母音・鼻母音・緊喉母音の 3 種を認める。後二者は普通母音に比べて数が少ない。以下、例を挙げる。まずは単母音から見て行こう。

[普通母音]

普通母音としては以下の 10 種を認める。比較的母音の種類は多いと言えるが、ロロ諸語としては一般的なものと言えよう。ここでは相補分布の状況と類型論的な観点から/i//u//a//ɐ/に注意が必要である。

相補分布の状況としては/i//u/に注意すべきである。/i/は頭子音が/tʂ/などのそり舌破擦音([+retroflex])であるとき[ɿ]のように実現される。その他の条件では[i]で実現される。一方、/u/

[13] 現時点でのデータでは /bj-/は/-o/との結合例しか見つかっていない。
[14] 現時点でのデータでは /lj-/は/-ɐ/と/−e/との結合例しか見つかっていない。

は頭子音が唇歯音/f, v/ ([+labiodental])のとき、[ɣ]として実現される[15]。その他の条件では[u]で実現される。

類型論的な観点からは/a//ɐ/に着目すべきであろう。非常に音声的に近い 2 者が対立しているが[16]、比較的珍しいタイプであろう。ロロ・ビルマ系諸語で見れば、ラオス北部で話されるシダ語(Sida)や中国雲南省西部で話されるアチャン語梁河方言などに見られるが、これらの言語との比較研究は今後進めて行く必要がある。

/i/ [i]: /l**i**^{33}/ [l**i**^{33}] 「4(#76)」、/ɳ̩**i**^{55}ɳ̩**i**^{33}/ [ɳ̩**i**^{55}ɳ̩**i**^{33}] 「赤い(#403)」

[ʅ]/ [+retroflex]_ :/ʂ**i**^{55}sɛ^{31}ʂ**i**^{55}mo^{33}/ [ʂ**ʅ**^{55}sɛ^{31}ʂ**ʅ**^{55}mo^{33}] 「種(#208)」、/tʂ**i**^{55}/ [tʂ**ʅ**^{55}] 「咳をする(#72)」

/e/ [e]: /l**e**^{33}du^{31}/ [l**e**^{33}du^{31}] 「話(#308)」、/th**e**^{31}/ [t^{h}**e**^{31}] 「1(#73)」、/**e**^{55}khɐ^{33}/ [**e**^{55}khɐ^{33}] 「家(#129)」

/ɛ/ [ɛ]: /l**ɛ**^{33}/ [l**ɛ**^{33}] 「来る(#474)」、/n**ɛ**^{33}x**ɛ**^{55}m^{31}bɐ^{55}/ [n**ɛ**^{33}x**ɛ**^{55}m^{31}bɐ^{55}] 「来年(#446)」、/th**ɛ**^{33}ɐ^{33}/ [t^{h}**ɛ**^{33}ɐ^{33}] 「鋭い(#400)」

/a/ [a]: /d**a**^{33}/ [d**a**^{33}] 「掃く(#145)」、/th**a**^{55}pɤ^{31}li^{33}/ [t^{h}**a**^{55}pɤ^{31}li^{33}] 「へそ(#38)」、/ts**a**^{55}v**a̰**^{31}/ [ts**a**^{55}v**a̰**^{31}] 「ひも(#154)」

/ɐ/ [ɐ]: /d**ɐ**^{31}kho^{55}/ [d**ɐ**^{31}k^{h}o^{55}] 「答える(#294)」、/l**ɐ**^{55}tʂi^{31}/ [l**ɐ**^{55}tʂʅ^{31}] 「唐辛子(#257)」、/th**ɐ**^{33}lo^{55}ʐo^{31}/ [t^{h}**ɐ**^{33}lo^{55}ʐo^{31}] 「ウサギ(#177)」、/ʐ**ɐ**^{31}/ [ʐ**ɐ**^{31}] 「彼/彼女(3SG) (#484)」、/**ɐ**^{33}v**ɐ**^{33}/ [**ɐ**^{33}v**ɐ**^{33}] 「おじ(#344)」

/ɔ/ [ɔ]: /ɣ**ɔ**^{31}n**ɔ**^{55}/ [ɣ**ɔ**^{31}n**ɔ**^{55}] 「休む(#315)」、/l**ɔ**^{33}/ [l**ɔ**^{33}] 「舌(#20)」、/dʑɛ^{55s}th**ɔ**^{31}/ [dʑɛ^{55}t^{h}**ɔ**^{31}] 「冬(#461)」

/ɤ/ [ɤ]: /d**ɤ**^{31}/ [d**ɤ**^{31}] 「押す(#62)」、/ji^{33}ʂ**ɤ**ŋ^{33}/ [ji^{33}ʂ**ɤ**ŋ^{33}] 「医者(#354)」、/l**ɤ**^{55}l**ɤ**^{33}/ [l**ɤ**^{55}l**ɤ**^{33}] 「丸い(#399)」、/**ɤ**^{55}dɯ̰^{33}/ [**ɤ**^{55}dɯ̰^{33}] 「頭(#10)」

/o/ [o]: /n**o**^{55}pɐ^{33}/ [n**o**^{55}pɐ^{33}] 「耳(#17)」、/l**o**^{55}/ [l**o**^{55}] 「投げる(#64)」、/th**o**^{33}ɐ^{33}/ [t^{h}**o**^{33}ɐ^{33}] 「厚い(#393)」

/u/ [u]: /n**u**^{31}ɐ^{33}/ [n**u**^{31}ɐ^{33}] 「柔らかい(#415)」、/l**u**^{55}lṵ^{33}/ [l**u**^{55}lṵ^{33}] 「青い(#406)」

[ɣ]/ [+labiodental]_: /ɐ^{55}jɛ^{33}f**u**^{33}/ [ɐ^{55}jɛ^{33}f**ɣ**^{33}] 「鶏の卵(#164)」、/ɐ^{33}v**u**^{33}/ [ɐ^{33}**ɣ**^{33}] 「兄(#337)」、

/ɯ/ [ɯ]: /v**ɯ**^{33}lɔ^{55}/ [v**ɯ**^{33}lɔ^{55}] 「手に持つ(#60)」、/l**ɯ**^{55}ɐ^{33}/[l**ɯ**^{55}ɐ^{33}] 「熱い(#375)」

---

[15] 鈴木(2013)はこの音声について「唇歯母音」の名称を与えて、その音声記号のあり方と実態の多様性について論じている。筆者のロロ・ポ語の調査経験では、[ɣ]の実現は舌の位置に関与しないものである。また、音韻論的にはあくまでも頭子音の条件による相補分布であると見なせる。鈴木(2013: 18)は[ɣ]の音声類型について、「A: [v]が 1 つの音素として現れる言語」「B: [v]が何らかの音素の自由変異音として現れるもの」の 2 種を掲げている。しかし、ロロ・ポ語の例を考えれば、「ある音声と相補分布の関係をなしうる」という類型もあると言えそうである。

[16] 現時点では残念ながら最小対を見つけられていない。本文中の音素の箇所での語例では頭子音を共有する例をできるだけ挙げている。最小対については今後の調査で明らかにしたい。

[鼻母音]

8 種を認める。普通母音より数は少ない。現時点でのデータでは/ã/ ũ/が存在しない。また、漢語あるいはラオ語からの借用語も散見される。鼻母音を持つ借用語形については借用元言語(donor language)の音節末子音に鼻音が存在していることが通常である[17]。

/ĩ/ [ĩ : /**ĩ**^{33}/ [**ĩ**^{33}] 「見る(#54)」、/m**ĩ**^{31}tʂi^{55}/ [m**ĩ**^{31}tʂɿ^{55}] 「名前(#329)」(< Ch. 名字)、/ʂu^{55}**ĩ**^{33}/ [ʂu^{55}**ĩ**^{33}] 「読む(#302)」

/ẽ/ [ẽ]: /m**ẽ**^{55}kuɐ^{33}/ [m**ẽ**^{55}kuɐ^{33}] 「カボチャ(#233)」、/jɐ^{31}j**ẽ**^{33}vɛ^{33}/ [jɐ^{31}j**ẽ**^{33}vɛ^{33}] 「ケシ(#221)」(< Ch. 鴉烟？+/vɛ^{33}/ 「花」)、/lʐ^{33}**ẽ**^{55}ʐɔ^{31}/ [lʐ^{33}**ẽ**^{55}ʐɔ^{31}] 「指(#32)」

/ɛ̃/ [ɛ̃]: /**ɛ̃**^{33}/ [**ɛ̃**^{33}] 「呼ぶ(#297)」、/ɐ^{55}m**ɛ̃**^{31}ŋ^{33}kɤ^{33}/ [ɐ^{55}m**ɛ̃**^{31}ŋ^{33}kɤ^{33}] 「今(#451)」、/ɐ^{55}ȵi^{55}ʐo^{31}x**ɛ̃**^{31}/ [ɐ^{55}ȵi^{55}ʐo^{31}x**ɛ̃**^{31}] 「子を産む(#46)」

/ɐ̃/ [ɐ̃]: /xo^{33}m**ɐ̃**^{31}/ [xo^{33}m**ɐ̃**^{31}] 「象(#160)」、/xu**ɐ̃**^{31}s**ɐ̃**^{33}/ [xu**ɐ̃**^{31}s**ɐ̃**^{33}] 「田ウナギ(#202)」(< Ch. 黄鱔)、/the^{31}f**ɐ̃**^{33}/ [t^{h}e^{31}f**ɐ̃**^{33}] 「100 万(#93)」

/ɔ̃/ [ɔ̃]: /l**ɔ̃**^{33}gɛ^{33}/ [l**ɔ̃**^{33}gɛ^{33}] 「石(#115)」、/j**ɔ̃**^{55}tɕɤ̃^{33}/ [j**ɔ̃**^{55}tɕɤ̃^{33}] 「ヴィエンチャン(#499)」(< L. ວຽງຈັນ wiíaŋcān)

/ɤ̃/ [ɤ̃]: /thɐ^{33}m**ɤ̃**^{31}/ [t^{h}ɐ^{33}m**ɤ̃**^{31}] 「馬(#176)」、/ɐ^{31}ɣ**ɤ̃**^{33}bɐ^{55}/ [ɐ^{31}ɣ**ɤ̃**^{33}bɐ^{55}] 「明日(#454)」

/õ/ [õ]: /tʂ**õ**^{33}ko^{31}u̯^{33}/ [tʂ**õ**^{33}ko^{31}u̯^{33}] 「漢語(#300)」(< Ch. 中国+/u̯^{33}/「ことば」)、/ɕ**õ**^{55}tu^{31}ɐ^{33}/ [ɕ**õ**^{55}tu^{31}ɐ^{33}] 「賢い(#435)」

/ũ/ [ũ] : /mɛ^{33}x**ũ**^{33}/ [mɛ^{33}ç**ũ**^{33}] 「染める(#271)」

[緊喉母音]

緊喉母音は無気音の頭子音とのみ結合する。有気音の頭子音とは結合しない。

通時的な問題としては緊喉母音の由来が挙げられる。漢語あるいはラオ語からの借用語には見られない。すべて固有語であると考えられる。その由来は祖形の段階において音節末に阻害音子音が推定され、その脱落による代償により母音の緊喉化が生じたと考えられる。

/i̱/ [i̱]: /l**i̱**^{31}ɐ^{33}/ [l**i̱**^{31}ɐ^{33}] 「重い(#412)」、/ȵ**i̱**^{55}ɐ^{33}/ [ȵ**i̱**^{55}ɐ^{33}] 「少ない(#95)」

/e̱/ [e̱]: /gu^{33}p**e̱**^{33} (ɐ^{33})/ [gu^{33}p**e̱**^{33}(ɐ^{33})] 「踊る(#311)」、/m**e̱**^{33}ji^{33}/ [m**e̱**^{33}ji^{33}] 「涙(#5)」

/ɛ̱/ [ɛ̱]: /l**ɛ̱**^{33}ẽ^{55}ʐɔ^{31}/ [l**ɛ̱**^{33}ẽ^{55}ʐɔ^{31}] 「指(#32)」、/ɐ^{55}j**ɛ̱**^{31}xo^{31}/ [ɐ^{55}j**ɛ̱**^{31}xo^{31}] 「鶏肉(#183)」、/n**ɛ̱**^{33}mo^{33}tʂo^{33}/ [n**ɛ̱**^{33}mo^{33}tʂo^{33}] 「胸(#34)」

/a̱/ [a̱]: /m**a̱**^{33}ti^{33}ɕi^{33}/ [m**a̱**^{33}ti^{33}ɕi^{33}] 「上る(#479)」、 /li^{31}b**a̱**^{33}/ [li^{31}b**a̱**^{33}] 「墓(#131)」、/ȵi^{55}n**a̱**^{31}mo^{33}/ [ȵi^{55}n**a̱**^{31}mo^{33}] 「クモ(#188)」、/tʂho^{33}l**a̱**^{33}/ [tʂho^{33}l**a̱**^{33}] 「塩(#255)」

/ɐ̱/ [ɐ̱]: /nɒ^{31}pj**ɐ̱**^{33}/ [nɒ^{31}pj**ɐ̱**^{33}] 「湿っている(#414)」、/me^{31}l**ɐ̱**^{33}/ [me^{31}l**ɐ̱**^{33}] 「口(#19)」

/ɔ̱/ [ɔ̱]: /l**ɔ̱**^{31}bɤ̱^{33}ɐ^{33}/ [l**ɔ̱**^{31}bɤ̱^{33}ɐ^{33}] 「太っている(#439)」

/ɤ̱/ [ɤ̱]: /**ɤ̱**^{55}ɐ^{33}/ [**ɤ̱**^{55}ɐ^{33}] 「低い(#388)」、/ɐ̱^{33}b**ɤ̱**^{55}**ɤ̱**^{55}dɯ̱^{33}/ [ɐ̱^{33}b**ɤ̱**^{55}**ɤ̱**^{55}dɯ̱^{33}] 「乳首(#35)」、/dʑɤ^{31}g**ɤ̱**^{31}/

[17] また借用語形の由来から推定すると、鼻母音を持つ固有語と思われる語形も祖形の段階で音節末に鼻音を有し、その脱落の代償などにより鼻母音を生ぜしめたと考えることも可能である。ただし、現時点ではまだ詳しい分析ができていない。

[dʑɤ^{31}gɣ̞^{31}] 「腰(#36)」

/o̞/ [o̞]: /g**o̞**^{31}lɛ^{33}/ [g**o̞**^{31}lɛ^{33}] 「帰ってくる(#476)」、/k**o̞**^{33}t**a̞**^{33}n**a̞**^{33}/ [k**o̞**^{33}t**a̞**^{33}n**a̞**^{33}] 「カエル(#200)」、/ɐ^{31}t**o̞**^{33}/ [ɐ^{31}t**o̞**^{33}] 「火(#127)」

/u̞/ [u̞]: /lo^{31}lo^{33}**u̞**^{33}/ [lo^{31}lo^{33}**u̞**^{33}] 「ロロ語(#298)」、/d**u̞**^{33}ji^{33}/ [d**u̞**^{33}ji^{33}] 「出る(#478)」、/the^{31}t**u̞**^{33}/ [the^{31}t**u̞**^{33}] 「1000(#90)」

/ɯ̞/ [ɯ̞]: /ɯ^{33}d**ɯ̞**^{33} / [ɯ^{33}d**ɯ̞**^{33}] 「頭(#10)」、/ɤ^{55}p**ɯ̞**^{33}/[ɤ^{55}pɯ̞^{33}] 「腹(#37)」、/lɛ̞^{31}g**ɯ̞**^{31}/ [lɛ̞^{31}g**ɯ̞**^{31}] 「手(#26)」

次に二重母音を掲げる。現時点でのデータでは二重母音は普通母音(あるいは第 2 母音が鼻母音)からなる。/ie, iẽ//iɐ, iɐ̃//uɐ/の上昇二重母音と/ɐi//ɐo//ui/の下降二重母音のグループが在証される。いずれのグループにおいてもラオ語および漢語からの借用語が散見される。

/ie, iẽ/ [ie, iẽ]: /ɐ^{55}tɕ**ie**^{31}/ [ɐ^{55}tɕ**ie**^{31}] 「姉(#339)」、/lɐ^{31}pjɐo^{31}tʂi^{33}tɕh**iẽ**^{33}/ [lɐ^{31}pjɐo^{31}tʂɹ^{33}tɕh**iẽ**^{33}]「友達(#347)」

/iɐ, iɐ̃/ [iɐ, iɐ̃]: /tɕ**iɐ**^{33}/ [tɕ**iɐ**^{33}] 「引っ張る(#63)」、/ɐ^{33}no^{55}tɕ**iɐ̃**^{33}tɕi^{33}/ [ɐ^{33}no^{55}tɕ**iɐ̃**^{33}tɕi^{33}] 「蝉(#192)」

/ɐi/ [ɐi][18]: /ɣɤ^{33}b**ɐi**35/ [ɣɤ^{33}b**ɐi**35] 「中(#464)」、/k**ɐi**^{33}/ [k**ɐi**^{33}]「市場(#289)」(< Ch. 街 [19])

/ɐo/ [ɐo]: /l**ɐo**^{31}ko^{33}u^{33}/ [l**ɐo**^{31}ko^{33}u^{33}] 「ラオ語(#299)」(< L. [ᨣᨾᨣᨿ᨞ ᨣᨾᨣᨿ [pháasǎa]láaw +ko^{33}u^{33})、/x**ɐo**^{31}ɐ^{33}/ [x**ɐo**^{31}ɐ^{33}]「よい(#422)」(< Ch. 好 + /ɐ^{33}/ 「動詞接辞」)

/ui/ [ui]: /vu^{33}k**ui**^{33}/ [ɣ^{33}k**ui**^{33}] 「亀(#202)」(< Ch. 乌龟)、/i^{31}ɕ**ui**^{31}thɛ^{55}thɔ^{31}/ [i^{31}ɕ**ui**^{31}thɛ^{55}thɔ^{31}] 「雨季(#460)」(< Ch. 雨水天 + /thɔ^{31}/ 「季節」)

/uɐ, uɐ̃/ [uɐ, uɐ̃]: /k**uɐ**^{33}tɕi^{33}ɕi^{33}/ [k**uɐ**^{33}tɕi^{33}ɕi^{33}] 「落ちる(#481)」、/x**uɐ̃**^{31}sɐ̃^{55} / [x**uɐ̃**^{31}sɐ̃^{55}] 「田ウナギ(#202)」(< Ch. 黄鳝)

3.4 声調

最後に声調について概観しよう。ロロ・ポ語の声調は基本的に 55 調、33 調、31 調の 3 種が認められる。現時点のデータからはロロ・ポ語の tone bearing unit は音節である。語声調的な特徴は見られない。また緊喉母音は 33 調および 31 調を持つことが多い。

以下、例を挙げる。

/55/: /ʂɐ^{33}ɳi$^{\mathbf{55}}$/ [ʂɐ^{33}ɳi$^{\mathbf{55}}$] 「砂(#116)」、/ŋɐ$^{\mathbf{55}}$ʐo^{31}/ [ŋɐ$^{\mathbf{55}}$ʐo^{31}] 「鳥(#162)」、/vɯ^{33}lɔ$^{\mathbf{55}}$/ [vɯ^{33}lɔ$^{\mathbf{55}}$] 「手に持つ(#60)」

/33/: /ɳi$^{\mathbf{33}}$/ [ɳi$^{\mathbf{33}}$] 「あなた(2SG) (#483)」、/ɐ$^{\mathbf{33}}$tɕɐ$^{\mathbf{33}}$ŋɐ$^{\mathbf{33}}$/ [ɐ^{33}tɕɐ^{33}ŋɐ^{33}]「何(#491)」、/lɔ^{33}/ [lɔ$^{\mathbf{33}}$] 「舌(#20)」

/31/: /ɳi$^{\mathbf{31}}$/ [ɳi$^{\mathbf{31}}$] 「2(#74)」、/gɣ̞$^{\mathbf{31}}$/ [gɣ̞$^{\mathbf{31}}$] 「与える(#363)」、/nɛ̞$^{\mathbf{31}}$/ [nɛ̞$^{\mathbf{31}}$] 「精霊(#357)」、/ɐ^{33}tɤ^{33}ɣ̞^{55}lɔ$^{\mathbf{31}}$gɛ^{33}/ [ɐ^{33}tɤ^{33}ɣ̞^{55}lɔ$^{\mathbf{31}}$gɛ^{33}] 「下(#463)」

[18] 速い発話では[ɛ]のように発音される。

[19] 「街」は漢語雲南方言では[kai44]のように発音される。

このほかに 35 調が特定の形態素に見られることがある。以下の例を見られたい。

/35/: /xuɛ̃^{33}mɤ^{31}gɛ$^{\mathbf{35}}$/ [xuɛ̃^{33}mɤ^{31}gɛ$^{\mathbf{35}}$] 「上(#462)」、/ɣɤ^{33}bɐi$^{\mathbf{35}}$/ [ɣɤ^{33}bɐi$^{\mathbf{35}}$]「中(#464)」、/ɤ^{33}bɐi$^{\mathbf{35}}$/ [ɤ^{33}bɐi$^{\mathbf{35}}$] 「南(#469)」、 /mɤ^{33}ɳi^{55}ʥo^{55}gɛ^{55}bɐi$^{\mathbf{35}}$/ [mɤ^{33}ɳi^{55}ʥo^{55}gɛ^{55}bɐi$^{\mathbf{35}}$] 「西(#471)」、/nɛ$^{\mathbf{35}}$nɛ̰^{33}/ [nɛ$^{\mathbf{35}}$nɛ̰^{33}] 「近い(#473)」

35 調が見られるのは上記のように主に方向や位置関係を表す語彙である。形態音韻論的な影響によりこれらが 35 調を持つようになったのではないかと考えられるが、今後の継続的な検討が必要である。現時点では基本的な声調に含めるとまでは言いがたいが[20]、語彙表を含め、35 調を音素的に表記しておきたい。

4. おわりに

以上、ラオス北部ルアンナムター県ムアンシン地区で話されるロロ・ポ語の音論の記述を中心に、その特徴を素描した。表 1 の再掲となるが、現時点でのデータによる音素体系としてはやはり表 2 のようにまとめられよう。

表 2: ロロ・ポ語（ムアンシン方言)の音素体系

[子音]			
p ph b	t th d		k kh g
	tʂ tʂh dʐ	tɕ tɕh dʑ	
m	n	ɳ	ŋ
f v	ʂ ʐ	ɕ j	x ɣ
(w)	l		

[普通母音]			[鼻母音]			[緊喉母音]		
i	ɯ	u	ĩ		ũ	ḭ	ɯ̰	ṵ
e	ɤ	o	ẽ	ɤ̃	õ	ḛ	ɤ̰	o̰
ɛ		ɔ	ɛ̃		ɔ̃	ɛ̰		ɔ̰
a		ɐ			ɐ̃	a̰		ɐ̰

[声調] 55, 33, 31 (,35)

ただし、表 2 に掲げた分節音の音声上の注意点として以下の特徴が挙げられる。

(2) a. 子音における相補分布が以下の条件で見られる。
/ɕ/→[s]/_{ɛ, ɐ, ɤ}, [ɕ]/ elsewhere
b. 子音における自由変異が以下のように見られる。
/j/は母音/ɐ/との結合時、[z]と[ʝ]が自由に交替する。

[20] 35 調を純粋に音素として分析しにくいもう 1 つの問題点は、いくつかの語彙で 35 調が 31 調でも発音されることがあることである。/xu^{55}mi^{31}bɐi$^{\mathbf{35}}$/ [xu^{55}mi^{31}bɐi$^{\mathbf{35}}$ ~ xu^{55}mi^{31}bɐi$^{\mathbf{31}}$] 「前」など。この点からも 35 調は 31 調が何らかの影響で変調を起こした結果であると分析した方が良いかもしれない。

/ʨ/は母音/ɐ/との結合時、 [ʨ]と[ts]が自由に交替する。

c. 母音における相補分布が以下の条件で見られる。

/i/→[ʅ]/ [+retroflex]_, [i]/ elsewhere

/u/→[ɣ]/ [+labiodental] _, [u]/ elsewhere

今後は現地調査を継続して、さらに多くの語彙データを収集するとともに、文例データやテキストの採集を進めることにより、より詳細で包括的な音論の構築を目指して行きたい。また同時に収集されたデータを他のロロ・ビルマ諸語と比較し、その地域言語学的特徴と歴史的発展の問題の解明に取り組みたいと考えている。

略号一覧

Ch: 漢語，L：ラオ語，PTB：チベット・ビルマ祖語，SG：単数

参考文献

Benedict, Paul K. 1972. *Sino-Tibetan: A Conspectus.* London and New York: Cambridge University Press.

Bradley, David 2002. The Subgrouping of Tibeto-Burman. In Christopher I. Beckwith (ed.), *Medieval Tibeto-Burman Languages.* pp. 73-112. Leiden, Boston and Köln: Brill.

高華年 [Gao, Huanian] 1958. 《彝語語法研究》北京：科学出版社。

黄布凡 [Huang, Bufan] (主编) 1992. 《藏缅语族语言词汇》 北京：中央民族学院出版社。

Kato, Takashi 2008. *Linguistic Survey of Tibeto-Burman Languages in Lao P.D.R.* Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA).

Lama, Ziwo Qiu-Fuyuan 2012. Subgrouping of Nisoic (Yi) Languages: A Study from the Perspectives of Shared Innovation and Phylogenetic Estimation. Ph.D. Dissertation to The University of Texas at Arlington.

Liétard, Alfred 1909. Notions de grammaire lolo (dialecte a-hi). *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*. Tome 9. pp. 286-314.

馬學良 [Ma, Xueliang] 1951. 《撒尼彝語研究》上海：商務印書館。

Matisoff, James A. (with Stephen P. Barow and John B. Lowe) 1996. *Languages and Dialects of Tibeto-Burman.* (STEDT Monograph Series, No.2) Berkeley: Center for Southeast Asia Studies, University of California, Berkeley.

Rattanavong, Humphan 1997. *Sū thin sāo Lōlōphō = On the way to the Lolopho land.* Vientiane: Sathāban Khonkhwā Vatthanatham, Kasūang Thalǣngkhāo læ Vatthanatham. [ラオ語・英語]

Sathāban Vithayāsāt Sankhom Hængsāt 2009. *Sɔ̄k-hu sonphao nai Lāo.* [『ラオス国内の民族情報』]Vientiane: Sathāban Khonkhwāsonphao læ sāsanā. [ラオ語]

Saya U Aung Caw, Caw Caay Hān Maū and Caw Khun Aay 2001. 『シャン文化圏言語調査表』東京: 寮庵汎而学研究所.

鈴木博之 2013. 「ɣ —チベット・ビルマ系諸言語における "唇歯母音"—」大西正幸・稲垣和

也・伊藤雄馬(編)『地球研言語記述論集 5』pp. 17-26. 京都: 総合地球環境学研究所.
Vial, Paul 1909. Notes sur les dialectes lo-lo. *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient.* Tome 9. pp.549-575.

[付録] ロロ・ポ語(ラオス・ムアンシン地区)基礎語彙/ Tentative Wordlist of Lolopho

最後に付録として、まだ今後の調査結果により分析の変更が求められる可能性もあるが、ロロ・ポ語の基礎語彙データを参考に掲げる。ここに掲げているのは Kato (2008)に挙げられている約 300 語に、筆者が独自に約 200 語を追加した約 500 語の語彙(文例も含む)である。なお、意味範疇の順序で並べてあることに注意されたい。

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
1	体毛	body hair	ຂົນ	gɐ^{33}khu^{31}mɯ^{33}
2	はだ	skin	ຜິວ, ຫນັງ	ʥo^{33}kǫ^{33}
3	骨	bone	ກະດູກ	gɐ̱^{31}gɐ̱^{31}
4	血	blood	ເລືອດ	ʂi^{31}
5	涙	tears	ນ້ຳຕາ	mɐ̱^{33}ji^{33}
6	汗	sweat	ເຫື່ອ	kɛ^{55}ji^{33}
7	膿み	pus	ຫນອງ(ຝີ)	bi^{33}ji^{33}
8	つば	saliva	ນ້ຳລາຍ	ɐ̱^{33}ji^{33}
9	痰	phlegm	ຂີ້ກະເທີ່, ສະເຫລດ	di^{55}tɕhi^{31}lɐ^{55}thɐ^{33}
10	頭	head	ຫົວ	ɤ^{55}dɯ̱^{33}
11	額	forehead	ຫນ້າຜາກ	ɣɯ̱^{33}mɯ^{55}ɳi^{55}
12	髪の毛	hair	ຜົມ	ɤ^{55}tɕhɤ^{33}
13	櫛	comb	ຫວີ	u^{55}pi^{55}
14	顔	face	ຫນ້າ	phɐ^{31}mɐ̱^{33}
15	眉毛	eyebrow	ຂົນຄິ້ວ	mɐ̱^{55}tɕi^{55}mɯ^{55}
16	目	eyes	ຕາ	mɐ̱^{33}dɯ̱^{31}
17	耳	ears	ຫູ	no^{55}pɐ^{33}
18	鼻	nose	ດັງ	no^{55}bi̱^{33}
19	口	mouth	ປາກ	me^{31}lɐ̱^{33}
20	舌	tongue	ລີ້ນ	lɔ^{33}

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
21	歯	teeth	ແຂ້ວ	ʂɤ^{31}
22	ひげ	beard/ mustache	ຫນວດ, ເຄົາ	mi^{31}tɕi̯^{33}, bo^{31}tsɣ̯^{33}thɐ^{55}
23	首	neck	ຄໍ	lɛ^{33}bɛ̯^{33}
24	のど	throat	ຄໍ, ລຳຄ	sɐ̃^{31}kuɐ̃^{31}
25	肩	shoulder	ບ່າ	vɛ^{33}phi^{31}dʑɯ^{33}
26	手	hand	ມື	lɛ̯^{31}gɯ̯^{31}
27	右手	right-hand	ດ້ານຂວາ	ju^{55}lɛ̯^{31}
28	左手	left-hand	ດ້ານຊ້າຍ	vɛ^{55}lɛ̯^{31}
29	腕	arm	ແຂນ	lɛ̯^{31}gɯ^{31}pu^{55}
30	肘	elbow	ສອກ	lɛ̯^{31}kuɛ^{31}tʂi^{33}
31	手のひら	palm	ຝາມື	lɛ̯^{31}khɐ^{55}thɐ^{55}
32	手の指	finger	ນິ້ວ	lɛ̯^{33}ẽ^{55}ʐɔ^{31}
33	手の爪	fingernail	ເລັບ	lɛ̯^{33}ẽ^{55}sɛ^{31}khu^{31}
34	胸	breast	ຫນ້າເອິກ	nɛ̯^{33}mo^{33}tʂo^{33}
35	乳首	nipple	ຫົວນົມ	ɐ̯^{33}bɤ̯^{55}ɤ̯^{55}dɯ̯^{33}
36	腰	waist	ແອວ	dʑɤ^{31}gɤ̯^{31}
37	腹	belly	ທ້ອງ	ɤ̯^{55}pɯ̯^{33}
38	へそ	navel	ສາຍບື	tha^{55}pɤ^{31}li^{33}
39	尻	buttocks	ກົ້ນ	ɛi^{31}du^{31}pɤ̯^{33}
40	糞	feces	ຖ່າຍຫນັກ, ຂີ້	ɛi^{31}
41	糞を出す	to defecate	ຖ່າຍຫນັກ	ɛi^{31} xo^{33}ji:^{33}ɐ^{33} [21]
42	尿	urine	ນ້ຳຍ່ຽວ	ɛi^{33}
43	排尿する	to urinate	ຖ່າຍເບົາ, ຍ່ຽວ	ɛi^{33} tʂi^{55} [22]
44	放屁する	to fart	ຕົດ	vi^{31}phjɔ^{31}

[21] 「排泄する」という意味の動詞はおそらく xo^{33} であろう。
[22] 「排尿する」という意味の動詞はおそらく tʂi^{55} であろう。

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
45	発熱する	to have a fever	ມີໄຂ້ຫວັດ	tʂi^{55} nɔ^{33}nɔ^{33}ɐ^{33}, lɯ^{55}tɕhu^{33}ɐ^{33}
46	出産する	to give birth	ອອກລູກ, ເກີດລູກ	ɐ^{55}ɳi^{55}ʐɔ^{31}xɛ̃^{31}
47	脚	leg	ຂາ	tɕhi^{55}gɤ̞^{31}
48	足	foot	ຕີນ	tɕhi^{55}lɔ^{55}phɛ^{55}
49	太もも	thigh	ຂາໂต้	bu^{33}pɛ̞^{33}
50	膝	knee	ຫົວເຂົ່າ	tɕi^{33}tɕhi^{55}kɤ̞^{31}pɤ̞^{33}
51	ふくらはぎ	calf	ບີແຂ່ງ	gɤ^{31}pɐ^{33}lje^{33}
52	筋	tendon	ເອັນ, ເສັ້ນເອັນ	dʑu^{31}
53	背中	back	ສັນຫລັງ	sɛ^{55}xo̞^{31}
54	見える、見る	to see, to look	ເບິ່ງ, ເຫັນ	mjɐ^{33}tɛ^{33} (見える), ĩ^{33} (見る)
55	聞こえる、聞く	to hear, to listen	ຟັງ, ໄດ້ຍິນ	bo^{33}dʑo^{31}ɐ^{33} (聞こえる), dɐ^{31}nɔ^{33} (聞く)
56	嗅ぐ	to smell	ດົມກິ່ນ	xɤ^{55}tɛ^{33}ɐ^{33}
57	食べる	to eat	ກິນ	dʑɔ^{31}
58	飲む	to drink	ດื่ม	dɐ^{33}
59	咬む	to bite	ກັດ	khɤ^{55}
60	手に持つ	to hold with the hand	ຈັບໄວ້	vɯ^{33}lɔ^{55}
61	置く	to put, to place in/on	ວາງ, ໃສ່, ຈັດ	mɐ^{55}, tɕi^{33}ti^{55}tɕi^{33}
62	押す	to push	ດັນ, ຊุก	dɤ^{31}, kuɛ̞^{31}
63	引く	to pull	ດึง	tɕiɐ^{33}(ɕɛ^{33}lɛ^{33})
64	投げる	to throw	ໂຍນ	lo^{55}
65	拾う	to pick up	ເກັບ	kɛ^{55}
66	すくい上げる	to ladle	ຈອງ	lɐo^{31}to^{33}le^{33} (<Ch. 捞 + to^{33}le^{33})

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
67	歩く	to walk	ຍ່າງ	(ʥo^{33}mo^{33}) ko^{33} [23]
68	止まる	to stop	ຢຸດ	ɤ^{33}
69	走る	to run	ແລ່ນ	pe^{33}
70	座る	to sit	ນັ່ງ	tɕhu^{33}
71	立つ	to stand up	ຢືນ	ŋɛ^{31}to^{33}le^{33}
72	咳き込む	to cough	ໄອ	tʂi^{55}
73	一	1	ຫນຶ່ງ	the^{31}
74	二	2	ສອງ	ȵi^{31}
75	三	3	ສາມ	ʂɔ^{33}
76	四	4	ສີ່	li^{33}
77	五	5	ຫ້າ	ŋɔ^{31}
78	六	6	ຫົກ	tɕho^{55}
79	七	7	ເຈັດ	ɕi^{31}
80	八	8	ແປດ	xɛ̰^{55}
81	九	9	ເກົ້າ	kɤ^{33}
82	十	10	ສິບ	tɕhɛ^{33}
83	十一	11	ສິບເອັດ	tɕhɛ^{33}ti^{55}
84	十二	12	ສິບສອງ	tɕhɛ^{33}ȵi^{31}
85	二十	20	ຊາວ	ȵi^{31}tɕɛ^{33}
86	九十九	99	ເກົ້າສິບເກົ້າ	kɤ^{33}tɕhɛ^{33}kɤ^{33}
87	百	100	ຫນຶ່ງຮ້ອຍ	the^{31}xo^{33}
88	百一	101	ຫນຶ່ງຮ້ອຍຫນຶ່ງ	the^{31}xo^{33}the^{31}
89	百十	110	ຫນຶ່ງຮ້ອຍສິບ	the^{31}xo^{33}(nɛ^{31})tɕhɛ^{33}
90	千	1000	ຫນຶ່ງພັນ	the^{31}tu^{33}
91	一万	10000	ສິບພັນ	the^{31}vɛ̰^{55} (<the^{31} + Ch. 万)

[23] これは厳密には句と考えるべきかもしれない。/ʥo^{33}mo^{33}/は「道」を指す。

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
92	十万	100000	ຫນຶ່ງແສນ	$the^{31}me^{31}$
93	百万	1000000	ຫນຶ່ງລ້ານ	$the^{31}f\tilde{e}^{33}$
94	多い	many	ຫລາຍ	$mju^{31}ɐ^{33}$
95	少ない	few	ນ້ອຍ	$ɲi^{55}ɐ^{33}$
96	すべて	all	ທັງຫມົດ	$ɲi^{31}ɕɐ^{55}tɐ^{33}$
97	一人	one person	ຄົນດຽວ	$the^{31}ɣo^{31}$
98	空	sky	ຟ້າ	$mɯ^{31}dɐ^{31}$
99	雲	cloud	ຂີ້ເຜື້ອ	$mɯ^{55}xɯ^{55}$
100	霧	fog	ຫມອກ	$tʂi^{55}ji^{33}$
101	太陽	sun	ຕາເວັນ	$mɯ^{31}ɲi^{33}$
102	月	moon	ເດືອນ	$ɕo^{33}bo^{33}$
103	星	star	ດາວ	$kɛ^{55}ʐo^{31}$
104	風	wind	ລົມ	$mɯ^{31}ɕɛ^{55}$
105	吹く	to blow	ພັດ, ເປົ່າ (口で吹く)	$ɕɛ^{55}$, $mɯ^{55}$
106	雨	rain	ຝົນ	$ɐ^{55}mɯ^{31}$
107	降る	it rains	ຝົນຕົກ	$ɐ^{55}mɯ^{31}xo^{33}ɐ^{33}$
108	光	light	ແສງ	$lj\tilde{e}^{55}$ (<Ch. 亮)
109	影	shadow	ເງົາ	$ɐ^{33}ji^{55}ɕi^{31}$
110	明るい	bright	ແຈ້ງ, ສະຫວ່າງ	$bɤ^{33}lɤ^{33}ɐ^{33}$
111	暗い	dark	ມືດ	$nɛ^{55}mɐ^{31}$
112	雷	thunder	ຟ້າຮ້ອງ	$mɯ^{31}kɯ^{33}ɐ^{33}$
113	雷が落ちる	it thunders	ຟາຜ່າ	$mɯ^{31}kɯ^{33}$ $dɑ^{31}ɐ^{33}$
114	土	soil, earth	ດິນ	$mi^{55}dɐ^{31}$
115	石	stone	ຫີນ	$lɔ̃^{33}gɛ^{33}$
116	砂	sand	ຊາຍ	$ʂɐ^{33}ɲi^{55}$ (<Ch. 沙泥?)
117	鉄	iron	ເຫລັກ	$xɤ^{33}$

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
118	さび	rust	ຂີ້ຫນ້ຽງ	mɛ^{55}ŋ̊i^{33}
119	金	gold	ຄຳ	sɛ^{33}
120	銀	silver	ເງິນ	phju^{33}
121	銅	copper	ທອງ	ʥi^{31}
122	山	hill, mountain	ພູ	ɣo̯^{31}mɛ^{31}
123	谷	valley	ເຫວ	lɐ^{33}khu^{31}
124	水	water	ນ້ຳ	ɐ^{31}vu^{55}
125	湖	lake	ຫນອງ	xɐ̃^{55}thɐ̃^{33}
126	川	river	ແມ່ນ້ຳ	lɐ^{33}mo^{33}
127	火	fire	ໄຟ	ɐ^{31}to̯^{33}
128	煙	smoke	ຄວັນ	ɐ^{55}khɯ^{31}xɯ^{55}
129	家	house	ເຮືອນ	e̯^{55}khɐ^{33}
130	屋根	roof	ຫລັງຄາ	xe^{33}phɛ^{33}
131	墓	grave	ຫລຸມສົບ	li^{31}ba̯^{33}
132	開ける	to open	ເປີດ	phɤ^{33}
133	閉じる	to close	ອັດ, ປິດ	pi^{55}
134	柱	pillar	ເສົາເຮືອນ	kɐ^{33}jɛ^{33}mo^{33}
135	扉	door	ປະຕູ	ɐ^{55}du^{31}
136	窓	window	ປ່ອງຢ້ຽມ	ɐ^{55}du^{31}ʐo^{31}
137	床	floor	ພື້ນ	ti^{31}pɐ̃^{31} (<Ch. 地板)
138	鍵	key	ລູກະແຈ	ʥo^{33}phu^{33}
139	ござ	mat	ສາດ	mo^{33}thɛ^{33}
140	布団	covering	(ເຄື່ອງຄຸມ)	bɛ^{33}bɛ^{33}
141	枕	pillow	ຫມອນ	ɤ^{55}dɯ̯^{31}gɯ̯^{33}
142	蚊帳	mosquito net	ມຸ້ງ	wɛ̃^{31}tʂɐ̃^{55} (<Ch. 蚊帐)
143	テーブル	table	ໂຕະ	tʂu^{33}tʂu^{33} (<Ch. 桌桌?)
144	椅子	chair	ຕັ່ງອີ້	pɐ^{33}tɤ^{33} (<Ch. 板凳)

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
145	掃く	to sweep	ບັດ	da^{33}
146	水を撒く	to splash water	ສາດ	ɐ^{31}vu^{55} ʂi^{55}
147	ナイフ	knife	ມີດ	ɐ^{55}tho^{31}lje^{31}
148	刀	sword	ດາບ, ງ້າວ	ɐ^{55}tho^{31}ʂi^{33}
149	鎌	sickle	ກ່ຽວນ້ອຍ	mɛ^{55}khu^{33}
150	切る	to cut	ຕັດ, ປາດ	dɐ^{33}ʨhie^{33}(<Ch. 打切?), khɛ^{31}
151	釘	nail	ຕະປູ	xɤ^{33}tĩ^{33} (< xɤ^{33} + Ch. 钉?)
152	はしご	ladder	ຂັ້ນໄດ	tshɛ^{55}gɯ̰^{31}
153	かご	basket	ກະຕ່າ	tjɐo^{55}lo̰^{31}(<Ch. 吊箩?)
154	ひも	rope	ເຊືອກ	tsa^{55}va̰^{31}
155	棒	stick	ໄມ້ຄ້ອນເທົ້າ	bɐ^{33}bu^{55}to^{33}
156	尾	tail	ຫາງ	mɛ^{55}tɛ^{33}
157	つの	horn	ເຂົາ	zɐ^{31}ʨhu^{33}
158	翼	wing	ປີກ	du^{55}lɛ̰^{33}
159	虎	tiger	ເສືອ	jɨ̰^{31}mɛ̰^{33}
160	象	elephant	ຊ້າງ	xo^{33}mɛ̃^{31}
161	ネズミ	mouse	ຫນູ	xɐ^{33}mɛ^{31}
162	鳥	bird	ນົກ	ŋɐ^{55}zo̰^{31}
163	飛ぶ	to fly	ບິນ	bjo^{33}
164	鶏の卵	(chicken's) egg	ໄຂ່	(ɐ^{55}jɛ̰^{33})fu^{33} [24]
165	卵を産む	to lay eggs	ອອກໄຂ່	jɐ^{31}fu^{33}fu^{33}ɐ^{33}
166	スズメ	sparrow	ນົກຈອກ	ʨhɛ^{33}dɐ^{33}ŋɐ^{33}
167	カラス	crow	ກາ	ɐ^{33}nɛ̰^{33}
168	鷹	hawk	ແຫລວ	ʨɛ^{55}mɛ̰^{31}
169	クジャク	peacock	ນົກຍຸງ	xo^{31}xuɐ^{55}

[24] /ɐ^{55}jɛ̰^{33}/は「鶏」の意味である。

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
170	水牛	buffalo	ຄວາຍ	$u^{33}ɳ̩u^{55}$
171	猫	cat	ແມວ	$u^{33}mi^{55}$
172	牛肉	beef	ຊີ້ນງົວ	$ɐ^{55}ɳ̩u^{31}xo^{31}$
173	豚	pig	ຫມູ	$ɐ^{55}vɛ̰^{31}$
174	豚肉	pork	ຊີ້ນຫມູ	$ɐ^{55}vɛ̰^{31}xo^{31}$
175	猿	monkey	ລີງ	$xɐ^{33}mo̰^{31}$
176	馬	horse	ມ້າ	$thɐ^{33}mɤ̰^{31}$
177	ウサギ	rabbit	ກະຕ່າຍ	$thɐ^{33}lo^{55}ʐo^{31}$
178	熊	bear	ຫມີ	$ɣɯ^{55}mɐ^{31}$
179	犬	dog	ຫມາ	$ɐ^{33}no^{55}$
180	吠える	to bark	ເຫົ່າ	lu^{33}
181	ヤギ	goat	ແບ້	$ɐ^{33}tʂhɯ^{55}$
182	牛	cattle	ງົວ	$ɐ^{55}ɳ̩u^{31}$
183	鶏肉	meat of chicken	ຊີ້ນໄກ່	$ɐ^{55}jɛ̰^{33}xo^{31}$
184	アヒル	duck	ເປັດ	$ɐ^{33}mo^{33}pjɐ^{33}$
185	蜂	bee	ແມ່ເຜີ້ງ	bjo^{31}
186	ハエ	fly	ແມງວັນ	$jɐ^{33}mi^{55}$
187	蚊	mosquito	ຍຸງ	$bɯ^{31}ʂi^{33}$
188	クモ	spider	ແມງມຸມ	$ɳ̩i^{55}na̰^{31}mo^{33}$
189	ウジ	maggot	ໂຕຫນອນ	$ɕõ^{33}gɛ^{33}$
190	蟻	ant	ມົດ	$bjo^{31}jo^{33}$
191	蝶	butterfly	ແມງກະເບື້ອ	$bɯ^{31}lɯ^{33}$
192	蝉	cicada	ແມງຈັກຈั่ນ	$ɐ^{33}no^{55}tɕiɛ̃^{33}tɕi^{33}$
193	ミミズ	earthworm	ຂี้ກະເດືອນ	$ɐ^{33}di^{33}li^{33}$
194	ムカデ	centipede	ຂี้ເຂັບ	$pa̰^{31}a̰^{55}ʐo^{31}$
195	蛇	snake	ງູ	$sɛ^{55}mɛ̰^{31}$
196	ヤモリ	gecko	ຈิ้ຈກ	$pɤ^{33}nɛ^{55}xo^{31}$

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
197	魚	fish	ປາ	ŋo^{55}ʐo^{31}
198	エビ	shrimp	ກຸ້ງ	ŋo^{55}ʨɐ^{33}pu^{33}
199	カニ	crab	ກະປູ	ɐ^{33}ʨɐ^{33}lɐ^{33}
200	蛙	frog	ກົບ, ຂຽດ	kǫ^{33}tạ^{33}nạ^{33}
201	田ウナギ	eel	ອ່ຽນ	xuɐ̃^{31}sɐ̃^{55} (<Ch. 黄鳝)
202	亀	turtle	ເຕົ່າ	vu^{33}kui^{33} (<Ch. 乌龟)
203	魚を釣る	to fish (with a rod)	ຕົກປາ	ŋo^{55}ʐo^{31} tjɔ^{33} [25]
204	狩りをする	to hunt	ລ່າເນື້ອ, ລ່າສັດ	xo^{31}gɐ^{33} je^{55}ɐ^{55}
205	撃つ	to shoot	ຍິງ	xo^{31}bạ^{33}
206	銃	musket	ປືນສັ້ນ, ປືນໃຫຍ່	ʨho^{33}ʐo^{31}, ʨho^{33}mo^{33}
207	殺す	to kill	ຂ້າ	ɕɛ^{55}
208	種	seed	ແກ່ນ, ເມັດ	ʂi^{55}sɛ^{31}ʂi^{55}mo^{33}
209	種を蒔く	to seed	ເອົາແກ່ນອອກ	gɐ^{31}
210	芽	sprout	ຫໍ່	zɐ^{31}bị^{33}
211	茎	stem	ກ້ານ	ʐɐ^{31}ɣɯ^{31}
212	木	tree	ຕົ້ນໄມ້	ɕi^{33}ʥɯ^{33}
213	葉	leaf	ໃບ	ŋɐ^{33}phɛ^{55}
214	幹	trunk	ລຳຕົ້ນ	ɕi^{33}fɛ^{33}
215	根	root	ຮາກ	ɕi^{33}ʨɛ^{33}
216	草	grass	ຫຍ້າ	mǫ^{31}
217	生える	to grow	ເຕີບໃຫຍ່	jɛ̣^{31}
218	枯れる	to wither	ຫ່ຽວແຫ້ງ, ຮ່ອງໂຮຍ	fɛ^{33}
219	花	flower	ດອກໄມ້	vɛ^{33}lụ^{33}
220	咲く	to bloom	ບານ	vɛ^{33}lụ^{33} bɛ^{31} [26]

[25] 「釣る」を表す動詞語根は tjɔ^{33} である。
[26] 「咲く」という意味の動詞語根は bɛ^{31} である。

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
221	ケシ	poppy	ດອກຝິ່ນ	jɐ^{31}jẽ^{33}vɛ^{33} (< Ch. 鸦烟？+/vɛ^{33}/ 「花」)
222	とげ	thorn	ຫນາມ	ɐ^{55}tʂhu^{31}
223	豆	bean	ຫນາກຖົ່ວ	no^{55}ɕɛ̰^{31}
224	竹	bamboo	ໄມ້ໄຜ່	mo^{55}phu^{31}
225	竹の子	bamboo shoot	ຫໍ່ໄມ້	mo^{55}bḭ^{55}
226	キノコ	mushroom	ເຫັດ	mɯ^{33}
227	稲	paddy plant	ຕົ້ນເຂົ້າ	dzɔ̰^{33}dzɤ^{33}
228	米	rice	ເຂົ້າ	dzɔ̰^{33}
229	トウモロコシ	corn	ເຂົ້າໂພດ, ເຂົ້າສາລີ	ʂi^{55}pɤ^{33}
230	冬瓜	wax gourd	ຫນາກເຕົ້າ	phu^{31}mɤ^{33}
231	キュウリ	cucumber	ຫນາກແຕງ	ɕɛ^{31}tɕi^{55}
232	苦瓜	bitter melon	ຜັກຂົມ	khu^{31}kuɐ^{33} (<Ch. 苦瓜)
233	カボチャ	pumpkin	ຫນາກອຶ	mẽ^{55}kuɐ^{33} (<Ch. 面瓜)
234	茄子	eggplant	ຫນາກເຂືອ	gɐ^{33}li^{55}
235	トマト	tomato	ຫນາກເລັ່ນ	gɐ^{33}li^{55}tɕhie^{33} (<gɐ^{33}li^{55} + Ch. 茄?)
236	パパイヤ	papaya	ຫນາກຫຸ່ງ	ɕu^{55}pɐ^{33}tɕɐo^{33}
237	ごま	sesame	ຫນາກງາ	o^{33}bɛ^{33}
238	落花生	peanut	ຫນາກຖົ່ວດິນ	li^{33}ti^{55}ɕu^{33}
239	生姜	ginger	ຫົວຂິງ	tʂhɐ^{31}phi^{31}
240	果物	fruit	ຫນາກໄມ້	ɕi^{55}ɕɛ^{31}
241	バナナ	banana	ຫນາກກ້ວຍ	ŋɐ^{55}mi^{31}ɕɛ^{31}
242	マンゴー	mango	ຫນາກມ່ວງ	mẽ^{55}mɤ̃^{31}ɕɛ^{31} (<L.ຫນາກມ່ວງ màakmuuaŋ)
243	みかん	orange	ຫນາກກ້ຽງ	xuẽ^{31}ko^{31} (<Ch. 黄果)
244	マンゴスチン	mangosteen	ຫນາກມັງກຸດ	—
245	タマリンド	tamarind	ຫນາກກ້ຽງ	ɕẽ^{55}tɕɔ^{31}ɕɛ^{31} (<Ch. 酸角＋ɕɛ^{31})

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
246	ジャックフルーツ	jackfruits	ຫມາກມີ້	mi^{31}to^{55}lo^{55}ɕɛ^{31}
247	サトウキビ	sugar cane	ຕົ້ນອ້ອຍ	lɯ^{55}ɣɯ̱^{31}
248	キンマ	betel nut	ຫມາກຂ້ຽວ	ɕɐ^{33}thɐo^{31}
249	植える	to plant	ປູກ	gɐ^{31}
250	鋤	plow	ໄຖ	mi^{55} mo^{31}
251	水田	irrigated field	ນາ	tɛ^{33}mi^{33}
252	畑	upland field	ໄຮ່	ɕɐ^{33}mi^{33}
253	焼畑	slash and burn terrace	—	—
254	油	oil	ນ້ຳມັນ	tɕhɛ^{33}
255	塩	salt	ເກືອ	tʂho^{31}la̱^{31}
256	砂糖	sugar	ນ້ຳຕານ	ɕɐ^{55}thɐ̱^{31}
257	唐辛子	chilli	ຫມາກເຜັດ	lɐ^{55}tʂi^{31} (<Ch. 辣子)
258	茶	tea	ຊາ	lo^{31}
259	酒	wine	ເຫລົ້າ	dʐi^{55}bɛ^{31}
260	タバコ	cigarette/ tobacco	ຢາສູບ, ຢາເຮັ້ນ	ɐ^{55}khɯ^{31}
261	米を炊く	to cook rice	ຫຸງເຂົ້າ	dʐo^{33} pɛ^{33}dʐo^{31}
262	薪	firewood	ຟືນ	ɕi^{55}
263	鍋	pot	ຫໍ້	lo^{33}ko^{33}
264	ゆでる	to boil	ຕົ້ມ	tɕɛ^{55}
265	焼く	to roast	ປີ້ງ	tɕhu^{33}
266	布	cloth	ເຄື່ອງນຸ່ງ	phjɐ^{33}lɔ^{55}
267	縫う	to sew	ຫຍິບ	na̱^{31}
268	針	needle	ເຂັມ	gɤ^{31}na̱^{31}
269	糸	thread	ເສັ້ນດ້າຍ	tɕɛ^{33}tɕɤ^{33}
270	編む	to knit	ຖັກ	mɛ^{55} tɕhɛ^{31}

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
271	染める	to dye	ຍ້ອມ	mɛ^{33}xũ^{33}
272	服を洗う	to wash clothes	ຊັກ	mɛ^{33}tɕhi^{31}mɛ^{33}lɐ^{55}
273	服を干す	to sun clothes	ຕາກ, ແຈ້ງ, ຕາກແດດ	(mɛ^{33}) phjɐ^{33}lɤ^{55}, mu^{33}tɕhu^{33}lɤ^{55}, lɤ^{55}fɛ^{33}
274	服	clothes	ເສື້ອຜ້າ, ເຄື່ອງນຸ່ງ	phjɐ^{33}bɛ^{31}phjɐ^{33}lɔ^{55}
275	帽子	hat	ໝວກ	u^{55}tɕu^{55}
276	ボタン	button	ກະດຸມ	lɐ^{33}ɕɛ̰^{31}
277	靴	shoes	ເກີບ	tɕhɛ^{33}nɤ^{33}
278	作る	to make	ເຮັດ	mi^{33}gɐ^{31} mi^{33}lɔ^{55}
279	壊す	to break	ແຕກ	bɛ^{31}wɐ^{33}
280	着る	to wear	ນຸ່ງ	phjɐ^{33}vɛ̰^{31}
281	脱ぐ	to undress	ແກ້ຜ້າ, ບ້ານ	phjɐ^{33}lḭ^{31}
282	道	road	ຖະໜົນ	ʥo^{33}mo^{33}
283	村	village	ໝູ່ບ້ານ, ບ້ານ	khɐ^{33}
284	背負う	to carry on the back	ແບ້	bɤ^{31}
285	買う	to buy	ຊື້	(mɛ^{31}ɲi^{31}) vɛ^{33} [27]
286	売る	to sell	ຂາຍ	(mɛ^{31}ɲi^{31}) vu^{31}
287	得る	to get	ໄດ້	ɣo^{33}ɐ^{33}
288	失う	to lose	ເຄື່ອງຫາຍ	mɛ^{31}ɲi^{31} phi^{55}wɐ^{33}
289	市場	market	ຕະຫລາດ	kɐi^{33} (<Ch. 街)
290	金	money	ເງິນ	phju^{33}, thɐ^{31}jɛ^{31}phju^{33}
291	裕福な	rich	ຮັ່ງມີ	tʂhɐ^{33}dʐɐ^{33}bɐ^{33}, (tʂhɐ^{33})tɐ^{55}fu^{55}
292	貧しい	poor	ທຸກຍາກ	ɕɔ^{55}me^{31}ɐ^{33} [28]
293	盗む	to steal	ລັກ	khɯ^{31}
294	話す	to speak	ເວົ້າ, ປາກ	dɐ^{31}pjɔ^{31}, dɐ^{31}pɤ^{55}thɯ^{33}

[27] mɛ^{31}ɲi^{31}は「もの」を指す名詞であると考えられる。
[28] 語末に現れる/ɐ^{33}/は主として静態的な動詞の引用形式に生起すると考えられるが、詳しい分析は今後の課題としたい。

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
295	尋ねる	to ask	ຖາມ, ຂໍ	dɐ^{31}no^{33}, xo^{33}dɐ^{31}no^{33}
296	答える	to answer	ຕອບ	dɐ^{31}kho^{55}
297	呼ぶ	to call	ເອີ້ນ	ɛ̃^{33}
298	ロロ語	Lolopho language	ພາສາ~	lo^{31}lo^{33}u̱^{33}
299	ラオ語	Lao language	ພາສາລາວ	lɐo^{31}ko^{33}u̱^{33}
300	漢語	Chinese language	ພາສາຈີນ	ɕe^{55}u̱^{33}, tʂoŋ^{33}ko^{31}u̱^{33} (< Ch. 中国+/u̱^{33}/「ことば」)
301	書く	to write	ຂຽນ	ʂu^{55} va̱^{31} (<Ch. 书 + va̱^{31})
302	読む	to read	ອ່ານ	ʂu^{55} ĩ^{33}, ʂu^{55} ɛ̃^{33} (<Ch. 书 + ĩ^{33}/ ɛ̃^{33})
303	手紙	letter	ຈົດໝາຍ	ʂu^{55} (<Ch. 书)
304	本	book	ປຶ້ມ	ʂu^{55}pen^{31} (<Ch. 书本)
305	紙	paper	ເຈ້ຍ	thɐ^{31}jɛ^{31}
306	貼る	to stick	ຕິດ	ɳɐ^{55}
307	遊ぶ	to play	ຫລິ້ນ	kɐ^{33}vu^{33} jɐ^{33}
308	話、物語	story	ເລື່ອງ, ນິຍາຍ	le^{33}du^{31}
309	語る	to tell a story	ເລົ່າເລື່ອງ	ku^{31}li^{31}ku^{31}tɐi^{35}
310	歌	song	ເພງ	mɛ^{31}go̱^{31}
311	踊る	to dance	ເຕັ້ນ	gu^{33}pe̱^{33}(ɐ^{33})
312	勝つ	to win	ຊະນະ, ໄດ້ໄຊ	ɣo^{31}wɐ^{33}
313	負ける	to lose a game	ແພ້	n^{33}ɣo^{31}
314	疲れる	to get tired	ເມື່ອຍ	ɣɔ^{31}ɣɯ̱^{33}ɐ^{33}
315	休む	to rest	ພັກຜ່ອນ	ɣɔ^{31}nɔ^{55}
316	寝る	to sleep	ນອນ	ji̱^{31}jɐ^{33}
317	夢を見る	to dream	ຝັນ	ji̱^{31}mɤ^{33}khɐ^{33}, ji̱^{31}mi^{33}khɐ^{33}
318	起き上がる	to get up	ຕື່ນນອນ	tɕu^{55}tɕhu^{31}to^{33}ljɐ^{33}
319	死ぬ	to die	ຕາຍ	ɕi^{33}wɐ^{33}
320	年齢	age	ອາຍຸ	khɔ^{55}ɕu^{55}

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
321	病む	to be ill	ບໍ່ສະບາຍ, ບ່ວຍ	ɤ^{55}ɲi^{31}ɕi^{31}
322	痛い	painful	ເຈັບປວດ	no^{33}ɐ^{33}
323	しゃっくりが出る	to hiccough	ສະເອີ	ɤ^{31}phɤ^{31}tɛ^{31} ~ ɤ^{33}phɤ^{33}tɐi^{33}
324	寝言を言う	to talk in one's sleep	ເວີ	ji̱^{31}mi^{33}je̱^{33}ɐ^{33}
325	しらみ	louse	ເຫົ້າ	ɕɛ^{33}, ɤ^{55}dɤ^{33}ɕɛ^{33}, gɐ^{55}di^{31}ɕɛ^{33}
326	薬	medicine	ຢາ	na^{55}ʨhi^{31}
327	弓	bow	ຄັນທະນູ	ʨhɛ^{33}
328	矢	arrow	ລູກທະນູ	ʨhɛ^{33}me̱^{31}
329	名前	name	ຊື່	mĩ^{31}tʂi^{55} (<Ch. 名字)
330	父	father	ພໍ່	ɐ^{31}bo^{31}
331	母	mother	ແມ່	ɐ^{33}mɐ^{33}
332	夫	husband	ຜົວ	ʨhɐ^{55}pho^{31}
333	妻	wife	ເມຍ	ʨhɐ̃^{55}gɛ^{55}
334	息子	son	ລູກຊາຍ	ʨhɐ^{55}pho^{31}ʐo^{31}
335	娘	daughter	ລູກສາວ	ʐo^{31}mɛ^{31}ʐo^{31}
336	子供	child	ເດັກນ້ອຍ	ɐ^{33}ɲi^{33}ʐo^{31}
337	兄	elder brother	ອ້າຍ	ɐ^{33}vu^{33}
338	弟	younger brother	ນ້ອງຊາຍ	ɲi^{55}me̱^{31}
339	姉	elder sister	ເອື້ອຍ	ɐ^{55}ʨie^{31}(tʂi^{33}) (<Ch. 阿姐(＋tʂi^{33}))
340	妹	younger sister	ນ້ອງສາວ	nɤ^{55}mo^{33}
341	祖父	grandfather	ພໍ່ເຖົ້າ	ʨhɐ^{55}mɐ^{31}ku^{33}
342	祖母	grandmother	ແມ່ເຖົ້າ	ʐo^{31}mɛ^{31}mɐ^{31}ku^{33}
343	孫	grandchild	ຫລານ	li^{55}po^{55} (male), li^{55}mo^{33} (female)
344	おじ	uncle	ລຸງ, ອາວ, ນ້າບ່າວ	tɐ^{55}tje^{33} (<Ch. 大爹), ɐ^{33}vɐ^{33}, ɐ^{33}ʨu^{55} (<Ch. 阿舅)
345	おば	aunt	ປ້າ, ອາ, ນ້າສາວ	tɐ^{55}mɐ^{33}(<Ch. 大妈?), ɐ^{55}ji̱^{31}(<Ch. 阿姨), ɐ^{33}ɲi^{33}mo^{33}

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
346	いとこ	cousin	ລູກອ້າຍລູກນ້ອງ	ɐ^{33}ko^{33}ɲi^{33}mɐ^{31}
347	友達	friend	ຫມູ່	lɐ^{31}pjɐo^{31}tʂi^{33}ʨhiẽ^{33}
348	男	male/ man	ຜູ້ຊາຍ	tʂhɐ^{33}pho^{31}
349	女	female/ woman	ຜູ້ຍິງ, ແມ່ຍິງ	ʐo^{31}mɛ^{31}
350	人間	man/ human being	ມະນຸດ, ຄົນ	ʨhɐ^{33}, ʨhɐ^{33}le^{55}ʂi^{55}kɛ^{55}
351	ロロ・ポ人	Lolopho people	ຄົນໂລໂລໂຜ	lo^{33}lo^{55}pho^{31}tʂhɐ^{33}
352	ラオ人	Lao people	ຄົນລາວ	lɐo^{31}ko^{31}tʂhɐ^{33}
353	中国人	Chinese people	ຄົນຈີນ	tʂoŋ^{55}ko^{31}tʂhɐ^{33}
354	医者	doctor	ຫມໍ	ji^{33}ʂɤ̃^{33} (<Ch. 医生)
355	教師	teacher	ຄູ, ອາຈານ	nɐi^{31}khu^{31} (<L. ຄູ khúu), lɐo^{31}ʂi^{33} (<Ch. 老师)
356	シャーマン	shaman	ຫມໍຜີ	ɐ^{31}pe^{55}mɐ^{31}
357	幽霊	god, spirit	ຜີ	nɛ̰^{31}
358	寺	temple	ວັດ	mi^{33}ɕi^{33}mɛ̰^{31}
359	僧侶	priest	ພະ	–
360	結婚する	to marry	ແຕ່ງດອງ, ແຕ່ງ	dʑɤ^{55}bɛ^{31}dɐ^{33}
361	会う	to meet with	ພົບພໍ້	ko^{33}tje^{55}
362	待つ	to wait for	ລໍ, ລໍຖ້າ	ɕɐ^{33}lo^{55}
363	与える	to give to	ໃຫ້	gɤ̰^{31}
364	使う	to use	ໃຊ້	mjɐ^{31}tɐ^{55}
365	探す	to look for	ຫາ, ຊອກ	(ɐ^{33}tsɐ^{33}tsɐ^{33}) ʨo^{33}
366	笑う	to laugh	ຫົວ	jɛ̰^{33}
367	愛する	to love	ຮັກ	lɤ^{33}tɛ^{33}ɐ^{33}
368	恐れる	to fear, to be afraid of	ຢ້ານ	dʑu^{55}ɐ^{33}
369	おびえる	to be frightened	ຕື່ນຕົກໃຈຢ້ານ	ʨɯ̃^{55}tɛ^{33}ɐ^{33}
370	驚く	to be surprised	ຕົກໃຈ	ʨɯ̃^{55}tɛ^{33}ɐ^{33}

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
371	知る	to know	ຮູ້	ɕɐ^{55}ɐ^{33}
372	覚えている	to remember	ຈື່ຈຳ, ລຳລึก	ɕu^{55}tɕhi^{31}
373	忘れる	to forget	ລืม	n^{31}ɕu^{55}tɕhi^{31} [29]
374	寒い	cold	ເຢັນ	tʂhi^{55}kuɐ^{33} (冷たい), ʥʑ^{55}ɐ^{33} (寒い)
375	暑い	hot	ຮ້ອນ	lɯ̃^{55}ɐ^{33}, xɯ^{55}ɐ^{33}
376	飢えた	hungry	ຫິວເຂົ້າ	ʥo^{33}mɛ^{31}ɐ^{33}
377	喉が渇いた	thirsty	ຫິວນ້ຳ	ɐ^{31}vu^{33} ɕi^{55}ɐ^{33} [30]
378	酔った	drunk	ເມົາ	bo^{55}ɐ^{33}
379	おいしい	delicious	ແຊບ	nɛ^{33}ɐ^{33}
380	甘い	sweet	ຫວານ	tʂhi^{55}ɐ^{33}
381	酸っぱい	sour	ສົ້ม	tɕie^{55}ɐ^{33}
382	辛い	pepper-hot	ເຜັດ	phe^{55}ɐ^{33}
383	塩辛い	salty	ເຄັม	tʂho^{31}lɐ^{31} tɕhɐ^{33}
384	物	thing	ເຄื่ອງຂອງ	ɐ^{33}tɕɐ^{33}tɕɐ^{33}mɛ^{31}ŋ̊i^{31} [31]
385	大きい	big	ໃຫຍ່	jɛ^{31}ɐ^{33}
386	小さい	small	ນ້ອຍ	jɐ^{33}
387	(背が)高い	tall, high	ສູງ	mɯ^{55}ɐ^{33}
388	(背が)低い	low	ຕ່ຳ	ɣ̃^{55}ɐ^{33}
389	長い	long	ຍາວ	ʂi^{33}ɐ^{33}
390	短い	short	ສັ້ນ	ŋ̊u^{55}ɐ^{33}
391	広い	broad, wide	ກວ້າງ	khuɐ̃^{33} (<Ch. 宽)
392	狭い	narrow	ແຄບ	tɕɐ̃^{31}ɐ^{33}
393	厚い	thick	ຫນາ	tho^{33}ɐ^{33}

[29] この例における否定辞 /n^{31}/は[ŋ̊i^{31}]のようにも発音される。
[30] 直訳としては「(水が) 喉渇く」のような表現になっていると考えられる。
[31] この形式は/ɐ^{33}tɕɐ^{33}tɕɐ^{33}/「もの」と/mɛ^{31}ŋ̊i^{31}/「もの」の合成によってできたものと考えられる。

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
394	薄い	thin	ບາງ	bo^{31}ɐ^{33}
395	深い	deep	ເລິກ	nɛ̰^{55}ɐ^{33}
396	浅い	shallow	ຕື້ນ	de^{33}ɐ^{33}
397	滑らかな	smooth	ຮາບຮຽງ, ຮຽບ	bɛ^{33}ɐ^{33}
398	粗い	rough	ຫຍາບ	po^{33}ɐ^{33}
399	丸い	round	ກົມ	lɤ̰^{55}lɤ^{33}
400	鋭い	sharp	ຄົມ	thɛ^{33}ɐ^{33}
401	鈍い	dull	ບໍ່ແຫລມ	n^{31}thɛ^{33}
402	尖った	pointed	ແຫລມ	thɛ^{33}ɐ^{33}
403	色	color	ສີ	jen^{31}ɕɤ^{31} (<Ch. 颜色)
404	赤い	red	ແດງ	ŋ̊i^{55}ŋ̊i^{33}
405	黄色い	yellow	ເຫລືອງ	ɕɛ^{55}ɕɛ^{33}
406	青い	blue	ຟ້າ	lu^{55}lṵ^{33}
407	白い	white	ຂາວ	phju^{55}phju^{33}
408	黒い	black	ດຳ	nɛ^{55}nɛ̰^{33}
409	緑色	green	ຂຽວ	lu^{55}dʑɤ^{31}dʑɤ^{31}ɤ^{33}
410	音	sound, noise	ສຽງ	tɕho^{31}thɤ^{33}
411	軽い	light	ເບົາ	lɐ^{33}
412	重い	heavy	ຫນັກ	lḭ^{31}ɐ^{33}
413	乾いた	dry	ແຫ້ງ	fɛ^{33}ɐ^{33}
414	濡れた	wet	ປຽກ	nɔ̰^{31}pjɐ̰^{33}
415	柔らかい	soft	ອ່ອນ	nu^{31}ɐ^{33}
416	硬い	hard	ແຂງ	kɯ^{55}ɐ^{33}
417	満ちた	full	ເຕັມ	bḭ^{33}ɐ^{33}
418	新しい	new	ໃຫມ່	jɐ^{31}ɕi^{55}
419	古い	old	ເກົ່າ	jɐ^{31}li^{33}mɐ^{31}
420	生の	raw	ຂອງດິບ	jɐ^{31}dʑɛ^{31}

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
421	熟れた	done, ripe	ສຸກ	mi̯^{33}ɐ^{33}
422	良い	good	ດີ	xɐo^{31}ɐ^{33} (<Ch. 好)
423	悪い	bad	ບໍ່ດີ, ຊົ່ວ	n^{31}xɐo^{31}
424	難しい	difficult	ຍາກ	pɛ^{33} ɕo^{55}ɐ^{33} [32]
425	易しい	easy	ງ່າຍ	pɛ^{33} ɕi^{31}ɐ^{33}
426	高価な	expensive	ແພງ	phɤ^{31}khɐ^{33}
427	安価な	cheap	ຖືກ	(jɐ^{31}phɤ^{31}) ɯ^{55}ɐ^{33}
428	清潔な	clean	ສະອາດ	kɐ^{33}ʨi^{31}ɐ^{33}
429	汚い	dirty	ເປື້ອນ	li^{55}thɐ^{33}
430	優しい	gentle	ໃຈດີ	nɛ^{33}mo^{33} tsɛ^{33} ɐ^{33}
431	怒っている	angry	ຮ້າຍ	dɯ̯^{33}ɐ^{33}
432	うれしい	happy, glad	ມີຄວາມສຸກ	go̯^{31}ɕi^{33}ɐ^{33}
433	恥ずかしい	ashamed	ຫນ້າອາຍ	ɕi^{55}tɐ^{33}
434	愚かな	stupid	ໂງ່	jɐ^{31}xa^{31}pɤ^{33}
435	賢い	clever	ສະຫລາດ	ɕõ^{55}tu^{31}ɐ^{33}
436	速い	quick, fast	ໄວ	lɛ̯^{31}lɐ^{55}
437	遅い	slow	ຊ້າ	phi^{31}ɐ^{33}
438	早い	early	ເຊົ້າ	nɛ̯^{31}ɐ^{33}
439	太った	fat	ອ້ວນ, ຕຸ້ຍ	lo̯^{31}bɤ̯^{33}ɐ^{33}
440	痩せた	thin	ຈອຍ	tɔ^{33}kɤ^{33}ɐ^{33}
441	年老いた	old of age	ເຖົ້າ	mɐ^{31}(ɐ^{33})
442	若い	young of age	ຫນຸ່ມ	le^{55}ɐ^{33}
443	年	year	ປີ	khɔ^{55}ɕu^{55}
444	今年	this year	ປີນີ້	ʨhɛ^{55}nɛ^{31}khɔ^{55}
445	去年	last year	ປີກາຍ	ɐ^{31}nɛ^{33}khɔ^{55}

[32] /pɛ^{33}/は「する」という意味のようである。#425 の「易しい」も同様である。

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
446	来年	next year	ປີຫນ້າ	nɛ^{33}xɛ^{55}m^{31}bɐ^{55}
447	月	month	ເດືອນ	ɕo^{33}bo^{33}
448	今月	this month	ເດືອນນີ້	ɕo^{33}bo^{33}ʨhɔ^{55}mɔ̰^{33}
449	先月	last month	ເດືອນທີແລ້ວ	ɕo^{33}bo^{33}nɔ^{55}mɔ̰^{33}
450	来月	next month	ເດືອນຫນ້າ	ɕo^{33}bo^{33}kui^{31}bɐ^{55}mɔ̰^{33}
451	今	now	ດຽວນີ້, ເວລານີ້, ຕອນນີ້	ɐ^{55}mɛ̃^{31}ŋ^{31}kɤ^{55}
452	今日	today	ມື້ນີ້	ɯ^{55}ŋ̊i^{33}
453	昨日	yesterday	ມື້ວານ	ɐ^{31}ŋ̊i^{33}bɐ^{55}
454	明日	tomorrow	ມື້ອື່ນ	ɐ^{31}ɣɤ̃^{33}bɐ^{55}
455	毎日	everyday	ທຸກມື້	thɛ^{31}ŋ̊i^{31}thɛ^{31}ŋ̊i^{33} [33]
456	朝	morning	ຕອນເຊົ້າ	ɐ^{55}nɛ̰^{33}kɐ^{33}
457	昼	noon	ຕອນກາງເວັນ, ຕອນສວາຍ	ɯ^{55}ŋ̊i^{33}kɐ^{33}
458	夕刻	evening	ຕອນແລງ	ɕɐ^{55}ʨɤ^{31}bɛ^{31}
459	夜	night	ຕອນກາງຄືນ, ຕອນຄ່ຳ	ɐ^{55}mɤ^{31}ʨhi^{55}kɐ^{33}
460	雨季	rainy season	ລະດູຝົນ	i^{31}ɕui^{31}thɛ^{55}thɔ^{31} (<Ch. 雨水天＋thɔ^{31})
461	冬	cold season	ລະດູຫນາວ	ʥɛ^{55}thɔ^{31}
462	上	above	ເທິງ	xuɛ̃^{33}mɤ^{31}gɛ^{35}
463	下	below	ລຸ່ມ, ກ້ອງ	ɐ^{33}tɤ^{33}ɣ̰^{55}lɔ^{31}gɛ^{35}
464	中	inside	ໄນ	ɣɤ^{33}bɐi^{35}
465	外	outside	ນອກ	ŋ̊ɐ^{55}bɐi^{35}
466	前	front	ທາງຫນ້າ	xu^{55}mi^{31}bɐi^{35}
467	後ろ	back	ທາງຫລັງ	gu^{55}dɐ^{55}bɐi^{35}
468	北	north	ທິດເຫນືອ	gɐ^{55}bɐi^{35}
469	南	south	ທິດໃຕ້	ɤ^{33}bɐi^{35}

[33] /thɛ^{31}ŋ̊i^{33}/「一日」の重複形である。

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
470	東	east	ທິດຕາເວັນອອກ	mɤ^{33}ŋ̊i^{55}du^{55}gɛ^{55}bɐi^{35}
471	西	west	ທິດຕາເວັນຕົກ	mɤ^{33}ŋ̊i^{55}ʥo^{55}gɛ^{55}bɐi^{35}
472	遠い	far	ໄກ	mɔ^{55}vi^{31}ɐ^{33}
473	近い	near	ໃກ້, ມ່	nɛ^{35}nɛ̰^{33}
474	来る	to come	ມາ	lɛ^{33}
475	行く	to go	ໄປ	ji^{33}
476	帰る	to return	ກັບໄປ, ກັບມາ	tɔ^{55}khu^{55}ji^{33}, gɔ̰^{31}lɛ^{33}
477	入る	to enter	ເຂົ້າ	di^{31}ji^{33}
478	出る	to exit	ອອກ	dṵ^{33}ji^{33}
479	登る	to climb,to ascend	ປີນ, ຂึ้น	ma̰^{33}ti^{33}ɕi^{33}
480	降りる	to descend	ລົງ	ɤ^{33}tɕɛ^{33}lɛ^{33}
481	落ちる	to fall	ຕົກ	kuɐ^{33}tɕi^{33}ɕi^{33}
482	私	I	ຂ້ອຍ	ŋɔ^{33}
483	あなた	you, thou	ເຈົ້າ	ŋ̊i^{33}
484	彼, 彼女	he, she	ລາວ	ʐɐ̰^{31}
485	私たち	we	ພວກເຮົາ, ພວກ ຂ້ອຍ	ŋɔ^{33}kɛ^{33}
486	あなたたち	you, ye	ພວກເຈົ້າ	nɛ^{31}kɛ^{33}
487	彼ら	they	ພວກລາວ	ʐɐ̰^{31}kɛ^{33}
488	誰	who	ໃຜ	ɐ^{31}ɕɛ^{31}
489	これ	this	ອັນນີ້	tɕhɔ^{55}mo̰^{33}
490	あれ	that	ອັນນั้น	nɔ^{55}mo̰^{33}
491	何	what	ຫຍັງ	ɐ^{33}tɕɐ^{33}ŋɐ^{33}
492	どこ	where	ບ່ອນໃດ, ຢູ່ໄສ	ɐ^{31}dɐ^{33}ɤ^{55}ŋɐ^{33}
493	なぜ	why	ເປັນຫຍັງ, ຍ້ອນ ຫຍັງ	ɐ^{33}tɕɐ^{33}pi^{33}ɐ^{33}, ɐ^{31}dɛ^{33}ʥɐ^{55}ŋɐ^{33}
494	とても	very	~ຫລາຍ	xɐo^{31}**tu^{33}**ɐ^{33}(very good)[34]

[34] 状態動詞の意味を強調する場合、/tu^{33}/を後接させる。

番号	日本語	English	Lao	Lolopho
495	まだ	still	ຍັງບໍ່ທັນ~	n^{31}**go^{55}**ʥo^{31}**xɛ^{31}**. (I have not eaten yet)[35]
496	私はロロ・ポ人だ	I am Lolopho.	ຂ້ອຍແມ່ນໂລໂລໂຜ	ŋɔ^{33} lo^{31}lo^{55}pho^{31} ŋɐ^{33}. [36]
497	私はロロ・ポ人ではない	I am not Lolopho.	ຂ້ອຍບໍ່ແມ່ນໂລໂລ ໂຜ	ŋɔ^{33} lo^{31}lo^{55}pho^{31} n^{31} ŋɐ^{33}.
498	私には3人の子供がいる	I have three children.	ຂ້ອຍມີລູກສາມຄົນ	ŋɔ^{33} ɐ^{55}ɳi^{55} ʂɔ^{33} lɤ^{55} **ʥɐ^{33}**.
499	私はヴィエンチャンから来た	I came from Vientiane.	ຂ້ອຍມາແຕ່ວຽງ ຈັນ	ŋɔ^{33} jɔ̃^{55}tɕɤ̃^{33} lɛ^{33} ŋɐ^{33}.[37]
500	私はヴィエンチャンに行く	I will go to Vientiane.	ຂ້ອຍຊິໄປວຽງຈັນ	ŋɔ^{33} jɔ̃^{55}tɕɤ̃^{33} ji^{33} bɐ^{33} ŋɐ^{33}. [38]

[35] 「まだ〜」を表す場合、動詞語根を go^{55} と xɛ^{31} で挟む。
[36] /ŋɐ^{33}/はコピュラであると考えられる。
[37] 「ビエンチャン」はロロ・ポ語では/jɔ̃^{55}tɕɤ̃^{33}/の形式となる。
[38] /bɐ^{33}/はおそらく未来あるいは叙想法(irrealis)を標示する機能辞であると考えられる。

北パキスタン諸言語のコピュラ

吉岡　乾

国立民族学博物館

1　はじめに

本論文では、パキスタン北部で用いられている幾つかの言語におけるコピュラの、振る舞い上の相同相異を明らかにする。結論としては、有生性での区別と地理的・系統的な近さが相関関係にある点と、否定において幾つかのカテゴリが中和する現象がブルシャスキー語を中心に分布している点を示す。

2　本稿で扱う言語

ここで扱う言語は、以下の 6 言語である：カティ語、カラーシャ語、コワール語、シナー語、ドマーキ語、ブルシャスキー語。ブルシャスキー語に関しては主に、5 節で 3 つの方言の差に関して扱う。各言語の地理的分布に関しては、次ページの個別言語分布図（図 1～図 6）と、その次の全体図（図 7）を参照されたい。

・印欧語インド・イラン語派ヌーリスタン諸語[1]：
　カティ語 Kt

・印欧語インド・イラン語派ダルド語群[2]：
　カラーシャ語（ルンブール方言）Kl、コワール語（イシュコマン方言）Kw、
　シナー語（ギルギット方言）Sh

・印欧語インド・イラン語派インド語派中央インド語派[3]：
　ドマーキ語（モミナバード方言）Dm

・系統的孤立語：
　ブルシャスキー語（東ブルシャスキー語 EB（フンザ方言 BH、ナゲル方言 BN）、
　西ブルシャスキー語 WB（ヤスィン方言 BY））

---

[1] ヌーリスタン諸語に関して最近は、インド・イラン語派には括られつつも、インド語派、イラン語派と並ぶ位置に置かれる傾向にある（Morgenstierne 1974 など）。ダルド語群と系統的に近いと考えられていたことや同一視されていたこともあったが（Grierson 1906 など）、Morgenstierne（1926）は截然と、二者が別物であると述べている。その分類史は Edelman（1983）に詳しい。

[2] ダルド語群に関しては、インド語派の下位であると考えるのが今では主流である。但し、曾てはヌーリスタン諸語と同様に、インド・イラン語派内の位置付けで議論があった程度に、質的な特異性を持っているグループである（Grierson 1919、Varma 1978 など）。

[3] 今でも Вайнрайх（2011）などは、ドマーキ語をダルド語群と関連付けて示している。Morgenstierne（1973 [1947]: 232）でもダルドとされていたが、Morgenstierne（1974）では外されている。

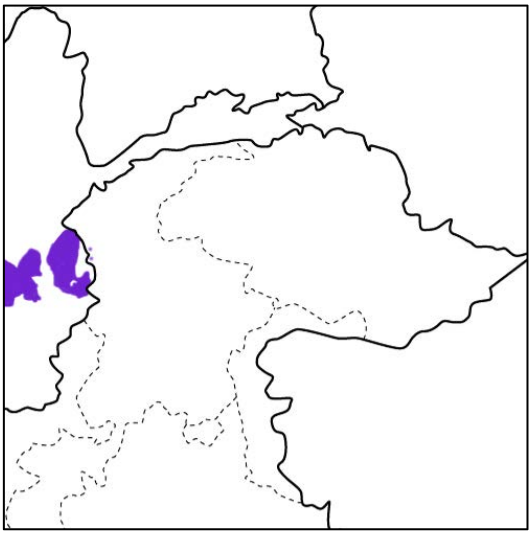


図 1：カティ語

図 2：カラーシャ語

図 3：コワール語

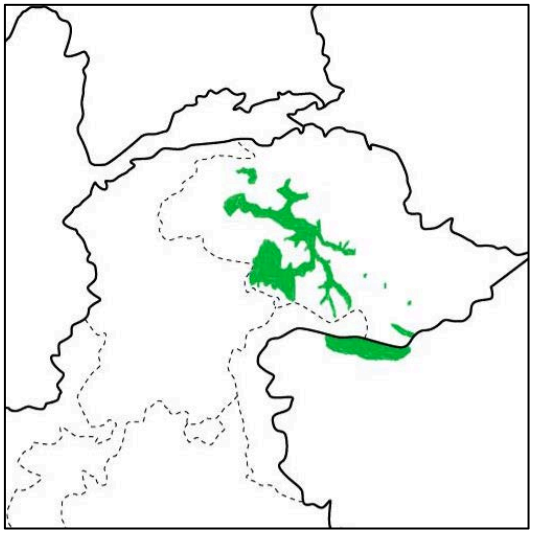


図 4：シナー語

図 5：ドマーキ語

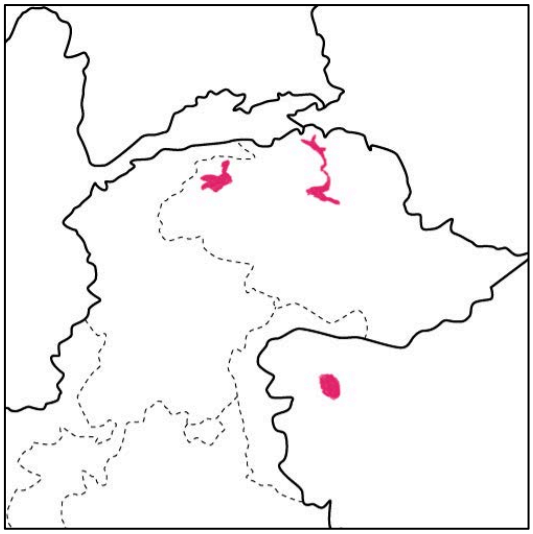


図 6：ブルシャスキー語

図 7：6 言語分布図

これらはいずれも、SOV 語順の膠着語である。いずれの言語でも、形容詞は名詞的な扱いを強く受けている。

カティ語、カラーシャ語、コワール語には名詞クラスがなく、シナー語、ドマーキ語には 2 つ（男性・女性）、ブルシャスキー語には 4 つ（ヒト男性・ヒト女性・具象物・抽象物）の名詞クラスがある。

なお、本稿で用いるデータは特筆がない限り、全て筆者が現地調査で得たものである。

3　コピュラの同定

本稿では、類型的な裏付けの上で、A=B 文を作る際に節内に現れて、主部と人称・数・クラスなどのカテゴリで一致を果たし、TAM を標示するために用いられることのある要素をコピュラと見做した。[4]　言語によって、コピュラが全く動詞的に活用するか、動詞とはやや異なった活用をするかには違いがある。

[4] 本稿では形容詞述語コピュラ文を分析の基礎としたが、これはこの文が共通して並行的に取れている例文だったからである。本稿で対象としている言語のいずれでも、形容詞述語文の他に、A=B 文（指定分、措定文）、存在文、所有者場所表現を伴った所有文（「X の所に Y がある」、即ち、「X は Y を所有する」）などが、一律、コピュラを用いた文で表現される。

(1)	Ur	*ye*	*laṛkī*	*aččhī*	*hē*
		ye	laṛkī	ačč̌h-ī	h-ē̃
		これ	少女	良い-F	COP:NPST-3SG

この少女は良い

パキスタンの国語であるウルドゥー語の例(1)では、文末にある *hē*が、主部である *ye laṛkī*「この少女」と人称・数で一致を果たしており、叙述形容詞 *aččhī*「良い」に伴うことで述部を構成しているコピュラである。

以下、各言語での同意の文例である。多少、用いられている要素の異なりや、分析の違いはあるが、いずれもコピュラ文はウルドゥー語の(1)と並行的な様相を見せている。

(2)	Kt	*iné*	*juk*	*last*	*asə́*
		iné	júk	lást	as-ə
		これ	少女	良い	COP-3SG

この少女は良い

(3)	Kl	*ía*	*kúa·k*	*pruṣṭ*	*ásaw*
		ía	kúa·k-Ø	prúṣṭ	ás-w
		これ	少女-NOM	良い	COP:ANI-PRS:3SG

この少女は良い

(4)	Kh	*hayá*	*kumóru*	*jam*	*asúr*
		hayá	kumóru-Ø	jám	as-r
		これ	少女-NOM	良い	COP:ANI-NPST:3SG

この少女は良い

(5)	Sh	*ée*	*muláay*	*míšto*	*han*
		ée	muláay-Ø	míšto	hán-Ø
		この:F	少女-ABS	良い	COP-3

この少女は良い

(6)	Dm	*aṣáay*	*jóṭi*	*šooní*	*čhi*
		aṣáay	jóṭi-Ø	šoon-i	čh-i
		これ:F	少女-ABS	良い-F	COP-INTR:3SG.F

この少女は良い

(7) EB *khiné* *dasín* *šuáan* | *bo*
khiné dasín-Ø šuá-an | bá-o-Ø
これ:H 少女-ABS 良い-INDF.SG | COP-3SG.HF-NPRS
この少女は良い

(8) WB *khomó* *dasín* *šuáan* | *bu*
khomó dasín-Ø šuá-an | bá-u-Ø
これ:HF 少女-ABS 良い-INDF.SG | COP-3SG.HF-NPRS
この少女は良い

これらの、独立して用いられる直説法のコピュラの形式を次節以降で総覧する。

4 各印欧語のコピュラのパラダイム

ここでは、各言語のコピュラ直説法定形のパラダイムを示す。肯定形現在、肯定形過去、否定形現在、否定形過去の順に並べた。なお、パラダイム理解の便宜のため、必要に応じて例文を後置した。

本節では印欧語のみを対照し、ブルシャスキー語に関しては次節で述べる。

4.1 カティ語

カティ語のコピュラは、不定詞は *bú-stə* という形式だが、定活用形では補充法で *as-*という語根が現れる。（ペルシア語の *bū-dan* と *hast-*などと同様）

表 1：カティ語の直説法コピュラ

	肯定・現在		肯定・過去		否定・現在		否定・過去	
	SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
1	*asúm*	*asə́miš*	*asyúm*	*asímiš*	*naasúm*	*naasə́miš*	*naasyúm*	*naasímiš*
2	*ɛsíš*	*asə́ə*	*asíiš*	*asíš*	*nɛɛsíš*	*naasə́ə*	*naasíiš*	*naasíš*
3	*asə́*	*aí*	*asíi*	*así*	*naasə́*	*naaí*	*naasíi*	*naasí*

過去形は現在形語幹に*-y-*という接尾辞が付加しているものだと思われる。

否定形は現在も過去も、接頭辞 *na-*で作られている。これは一般動詞と同じ手法である。

4.2 カラーシャ語

カラーシャ語のコピュラは、3 人称で有生物主語か無生物主語かの異なりを反映している。有生物コピュラは *ás-ik*、無生物コピュラは *š-ik* が不定詞形である。カティ語の *bú-stə* に対応する形式は *h-ik*「なる、である」。

表 2：カラーシャ語の直説法コピュラ

		肯定・現在		肯定・過去		否定・現在		否定・過去	
		SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
1	ANI	*ásam*	*ásik*	*ásis*	*áimi*	*ne ásam*	*ne ásik*	*ne ásis*	*ne áimi*
2	ANI	*ásas*	*ása*	*ái*	*áili*	*ne ásas*	*ne ása*	*ne ái*	*ne áili*
3	ANI	*ásaw*	*ásan*	*áis*	*áini*	*ne ásaw*	*ne ásan*	*ne áis*	*ne áini*
	INA	*šiw*	*šíen*	*ašís*	*ašíni*	*ne šiw*	*ne šíen*	*ne ašís*	*ne ašíni*

(9) Kl *ía* *ḍa* *pruṣṭ* *šiw*
ía ḍá-Ø prúṣṭ š-w
これ ワイン-NOM 良い COP-PRS:3SG
このワインは良い

カラーシャ語では現在と過去とで人称接尾辞が別系統になり、有生コピュラ現在には一般動詞の未来人称接尾辞（*-m*, *-s*, *-w* など）、コピュラ過去には一般動詞の過去人称接尾辞（*-is*, *-i*, *-aw* など）が、語幹 *ás-* と共に用いられている[5]。3 人称単数過去の *á-is* は不規則変化、或いは現在形との同音衝突を回避した形式だろうか。無生コピュラでは語幹が現在 *š-* と過去 *a-š-* とで異なっており、人称接尾辞は一般動詞未来のものが共通して用いられている。

否定形は一般動詞と同様に、*ne* を前置して表現している。

4.3 コワール語

コワール語のコピュラは、3 人称で有生物主語か無生物主語かの異なりを反映している。有生物コピュラは *as-ík*、無生物コピュラは *š-ik* が不定詞形である。但し、助動詞コピュラでは有生物でも *š-* 系の語形が用いられる場合がある（1・2 人称でも）。カティ語の *bú-stə* に対応する形式は *b-ik*「なる、である」。

表 3：コワール語の直説法コピュラ

		肯定・現在		肯定・過去		否定・現在		否定・過去	
		SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
1	ANI	*asúm*	*asúsi*	*astám*	*astám*	*no asúm*	*no asúsi*	*no astám*	*no astáam*
2	ANI	*asús*	*asúmi*	*astáo*	*astámi*	*no asús*	*no asúmi*	*no astáo*	*no astáami*
3	ANI	*asúr*	*asúni*	*astáy*	*astáni*	*no asúr*	*no asúni*	*no astáy*	*no astáani*
	INA	*šer*	*šéni*	*ošóy*	*ošóni*	*néki*		*néki*	

[5] 過去形で 1 人称単数以外の語幹が *a-* になっているが、*as-* が保たれている形式の記録もある（Trail & Cooper 1999: 15）。Trail & Cooper（1999）はブンブレット谷方言を中心としつつルンブール谷方言・ビリール谷方言も記述している辞書であり、未詳の方言差という可能性も考えられる。

(10) Kh *hayá* *ren* *jam* *šer*
hayá rén-Ø jám š-r
これ ワイン-NOM 良い COP-NPST:3SG
このワインは良い

コワール語では現在と過去とで人称接尾辞が別系統になり、有生コピュラ現在には一般動詞の非過去人称接尾辞（*-m*, *-s*, *-r/y*[6]など）が語幹 *as-*と共に、コピュラ過去には一般動詞の過去人称接尾辞（*-am*, *-ao*, *-ay* など）が語幹 *as-t-*と共に、用いられている。無生コピュラでは語幹が現在 *š-*と過去 *o-š-*とで異なっており、人称接尾辞は一般動詞未来のものが共通して用いられている。

否定形は有生コピュラの場合は一般動詞と同じように、前に否定辞 *no* を付けて表現されている。無生コピュラの場合は単複の区別も現在・過去の区別も消失し、(11)・(12)にあるように、*néki* という形式で一括して表現されるようになる。

(11) Kh *hayá* *ren* *jam* *néki*
hayá rén-Ø jám néki
これ ワイン-NOM 良い COP.NEG
このワインは良くない

(12) Kh *ma* *gona* *hame* *ketap* *naki* [7]
má gón-a hamít ketáp-Ø néki
私:GEN 所(?)-LOC これら 本-NOM COP.NEG
私はこれらの本を持っていなかった（／いない）

カラーシャ語と対比すると、無生物コピュラの否定形に関してのみ大きく異なっている。即ち、カラーシャ語が到って規則的に否定形を形成するのに対して、コワール語は中和が部分的に起こっている点が顕著である。

4.4 シナー語

シナー語のコピュラでは、単数形で性（名詞クラス）の異なりによる形式差が出て来る。コピュラの不定詞は *bo-ók* という形式であるが、定形では補充法で *hán-*や *as-*といった語根が現れている。

---

[6] 異形態の出現条件は、*-r*／{*i*, *u*, *e*}_ と、*-y*／{*a*, *o*}_ か。

[7] この例文に関しては Facebook のチャット機能で聞き取りをした為、表記を話者の用いた綴りそのままにしてある。調査日は 2014 年 12 月 1 日、協力者は Asīf Zamān。

表 4：シナー語の直説法コピュラ

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">肯定・現在</th><th colspan="2">肯定・過去</th><th colspan="2">否定・現在</th><th colspan="2">否定・過去</th></tr>
<tr><th></th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th></tr>
<tr><td>1 M</td><td>hánus</td><td rowspan="2">hánas</td><td>asúlus</td><td rowspan="2">asúles</td><td colspan="2" rowspan="6">nuš</td><td>ne asúlus</td><td rowspan="2">ne asúles</td></tr>
<tr><td>F</td><td>hánis</td><td>asílis</td><td>ne asílis</td></tr>
<tr><td>2 M</td><td>hánoo</td><td rowspan="2">hánat</td><td>asúloo</td><td rowspan="2">asúlat</td><td>ne asúloo</td><td rowspan="2">ne asúlat</td></tr>
<tr><td>F</td><td>hányee</td><td>asílee</td><td>ne asílee</td></tr>
<tr><td>3 M</td><td colspan="2" rowspan="2">han</td><td>asúlo</td><td rowspan="2">asíle</td><td>ne asúlo</td><td rowspan="2">ne asíle</td></tr>
<tr><td>F</td><td>asíli</td><td>ne asíli</td></tr>
</table>

コピュラの 1･2 人称に関しては、現在･過去に関わらず、一般動詞の人称接尾辞（*-us* (1SG.M), *-is* (1SG.F), *-oo* (2SG.M), *-yee* (2SG.F)など）が用いられている。一方で、3 人称に関しては、過去は一般動詞同様に*-o* (M), *-i* (F), *-e* (PL)が用いられているが、現在では一切用いられていない。即ち、現在形では 3 人称が単複、男女、いずれにおいても、*han* という形式に中和しているように見える[8]。但し、3 人称肯定現在が中和したようになるのはコピュラだけに限らず、子音終わり語幹の自動詞だと人称接尾辞が落ちることが間々あるようだ。次の(13)と表 5 を参照されたい（(13)では子音終わりではないようにも見えるが、最後の *e* は活用を見ると添加音であるようだ）。

(13) Sh {*anú* / *aní* / *ané*} *áã̃* *áale*
anú aní ané áã̃ aa-l-Ø
これ:M これ:F これら ここ 来る-PFV-3
｛彼／彼女／彼ら｝がここに来た

表 5：シナー語の自動詞の単純過去形

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">「来た」</th><th colspan="2">「死んだ」</th></tr>
<tr><th></th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th></tr>
<tr><td>1 M</td><td>áalus</td><td rowspan="2">áalas</td><td>múus</td><td rowspan="2">múas</td></tr>
<tr><td>F</td><td>áalis</td><td>múis</td></tr>
<tr><td>2 M</td><td>áaloo</td><td rowspan="2">áalat</td><td>múo</td><td rowspan="2">múat</td></tr>
<tr><td>F</td><td>áalyee</td><td>múye</td></tr>
<tr><td>3 M</td><td colspan="2" rowspan="2">áale</td><td>múu</td><td rowspan="2">múe</td></tr>
<tr><td>F</td><td>múi</td></tr>
</table>

[8] Schmidt & Kohistani（2008）を見ると、インダス・コーヒスタン方言では中和していない。

従って、子音終わりの語幹 *hán-*の場合には、そもそも 3 人称では単複、男女同形になるのだと考えられる。

シナー語で更に目立つのが、コピュラ否定現在形の中和である。(14)のように 3 人称単数女性であろうが、(15)のように 1 人称複数であろうが、何人称何数であっても、否定の現在は *nuš* という形式になる。コワール語で、3 人称無生物が否定形で単複や時制の違いを失っていたのとは、「否定における中和」としては共通しているが、中和の範囲が異なっている。

(14) Sh *ée* *muláay* *míšto* *nuš*
ée muláay-Ø míšto núš
この:F 少女-ABS 良い COP:PRS.NEG
この少女は良くない

(15) Sh *be* *míšto* *nuš*
bé míšto núš
私たち:ABS 良い COP:PRS.NEG
私たちは良くない

否定の過去形に関しては、肯定形に否定辞 *ne* を付加しただけの、シンプルな形をしている。

4.5 ドマーキ語

ドマーキ語のコピュラでは、3 人称単数形でのみ性（名詞クラス）の異なりによる形式差が出て来る。コピュラの不定詞は *hu-iná* という形式であるが、定形では補充法で *čh-*という語根が現れている。

表 6：ドマーキ語の直説法コピュラ

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">肯定・現在</th><th colspan="2">肯定・過去</th><th colspan="2">否定・現在</th><th colspan="2">否定・過去</th></tr>
<tr><th></th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th></tr>
<tr><td>1</td><td>čhíis</td><td>čhóom</td><td>čhíisaka</td><td>čhóomaka</td><td colspan="2" rowspan="4">náa</td><td colspan="2" rowspan="4">náaka</td></tr>
<tr><td>2</td><td>čháay</td><td>čhóot</td><td>čháayaka</td><td>čhóotaka</td></tr>
<tr><td>3 M</td><td>čha</td><td rowspan="2">čhe</td><td>čháaka</td><td rowspan="2">čhéeka</td></tr>
<tr><td>F</td><td>čhi</td><td>čhíika</td></tr>
</table>

肯定現在形に関しては、語根 *čh-*に一般自動詞の完了人称接尾辞が付けられているのみである。過去形は、現在形に非現実接尾辞*-aka* が後接されて形成されている。この接尾辞は一般動詞では、(16)の文末にあるような、反実仮想表現にのみ用いられる。なお、コピュラ過去形はコピュラ反実仮想形でもある。

(16) Dm *mas* *páa* *rupaié* *čhéekata,* *u*
m-as páa rupaié-Ø čh-e-aka=ta ú-Ø
私:OBL-INS.SG ところ お金-ABS COP-INTR:3PL-IRR=CONJN 私-ABS
háay *gaarí* *γaṣás* *léesaka*
háay gaarí-Ø γaṣ-as le-is-aka
これ:F 車-ABS 売買-INS.SG 取る-INTR:1SG-IRR
もしも私にお金があったなら、この車を買っていた

シナー語が現在形の否定が中和していたのみであったのに対し、ドマーキ語は過去形の場合も、中和した否定現在形＋*-aka* で形成されており、実質的に人称・数・性の中和が起こっている。

(17) Dm *aṣéŋ* *jóṭiŋa* *šooné* *náaka*
aṣéŋ jóṭi-ŋa-Ø šoon-e náa-aka
これら 少女-PL-ABS 良い-PL COP:NEG-IRR
この少女たちは良くなかった

なお、ドマーキ語の一般定形動詞の否定は、否定辞 *ni* を前接させて形成される。

4.6 北パキスタンの印欧語のまとめ

本節では、各印欧語のコピュラのパラダイムを概観した。表 7 にそれぞれの語形、有生性による区別の有無、中和の起こる領域をまとめた。言語順は、地理的に西から東への並びになっている。参考までに、言語系統としてヌ（ーリスタン諸語）、ダ（ルド語群）、印（ド語派）も明記した。

表 7：北パキスタンの印欧語のコピュラ

言語名	語形				有生性の区別	中和の範囲(人称；3 人称/All)				系統
	不定詞	現在	過去	否定辞		肯現	肯過	否現	否過	
Kati	*bú-stə*	*as-*	*as-y-*	*na-*	×	——	——	——	——	ヌ
Kalasha	*ás-ik* *š-ik*	*ás-* *š-*	*ás-* *a-š-*	*ne=*	○	—— ——	—— ——	—— ——	—— ——	ダ
Khowar	*as-ík* *š-ik*	*as-* *š-*	*as-t-* *o-š-*	*no=*	○	—— ——	—— ——	—— 数・時制(3)	—— 数・時制(3)	ダ
Shina	*bo-ók*	*hán-*	*as-l-*	*ne=*	×	——	——	性・数(A)	——	ダ
Domaki	*hu-iná*	*čh-*	*čh-*	(*ni=*)	×	——	——	性・数(A)	性・数(A)	印

全体の傾向を考えると、見たところ、各言語の不定詞（カラーシャ語、コワール語に関しては動詞「なる」の不定詞：Kl *h-ik*、Kh *b-ik*）は共通性があることが窺える[9]。補充法で用いられている定形活用語根に関しても、現在語幹ではカティ語からコワール語まで、過去語幹はカティ語からシナー語までが、共通して *as-*という形式を用いているのが見て取れた[10]。ダルド系言語の中では、西側のカラーシャ語とコワール語が有生・無生でコピュラを使い分けていて、それらが共通して、一般動詞とは異なった過去形の形成をしている点も注目すべきであろう。

一方で、コピュラが中和を見せ始めるのはコワール語より東である。シナー語とドマーキ語は否定で人称・性・数が中和するという点で、共通しているが、反面、コワール語とドマーキ語とが否定の現在でも過去でも中和を見せるという点で共通している部分もある。この中で、ドマーキ語は他のどの言語とも系統的に近くないのに、そういった共通性がある点が興味深い。

5　ブルシャスキー語の名詞クラスとコピュラ

前の節では、北パキスタンの印欧語のコピュラをざっと見比べてみた。そこでは有生・無生の区別や、否定形での中和などが、一部の言語間での共通特徴として観察された。

本節では、ブルシャスキー語の方言間のコピュラを対比してみる。繰り返すが、ブルシャスキー語は名詞クラスでヒト男性(HM)、ヒト女性(HF)、具象物（含 動物）(X)、抽象物(Y)を区別している言語である。

5.1　ブルシャスキー語フンザ方言

ブルシャスキー語フンザ方言のコピュラは、H 類（ヒト＝HM＋HF）は *bá-*、XY 類（モノ）は *b-*という語幹を取る。

表 8：ブルシャスキー語フンザ方言の直説法コピュラ

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">肯定・現在</th><th colspan="2">肯定・過去</th><th colspan="2">否定・現在</th><th colspan="2">否定・過去</th></tr>
<tr><th></th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th></tr>
<tr><td>1</td><td>báa</td><td>báan</td><td>báyam</td><td>bam</td><td>apáa</td><td>apáan</td><td>apáyam</td><td>apám</td></tr>
<tr><td>2</td><td>báa</td><td>báan</td><td>bam</td><td>bam</td><td>apáa</td><td>apáan</td><td>apám</td><td>apám</td></tr>
<tr><td>3 HM</td><td>bái</td><td rowspan="2">báan</td><td>bam</td><td rowspan="2">bam</td><td>apái</td><td rowspan="2">apáan</td><td>apám</td><td rowspan="2">apám</td></tr>
<tr><td>HF</td><td>bo</td><td>bom</td><td>apó</td><td>apóm</td></tr>
<tr><td>X</td><td>bi</td><td>bién</td><td>bim</td><td>bim</td><td rowspan="2">apí</td><td>apíen</td><td rowspan="2">apím</td><td>apím</td></tr>
<tr><td>Y</td><td>bilá</td><td>bicán</td><td>bilúm</td><td>bicúm</td></tr>
</table>

[9] サンスクリットの *bhu-*「なる」も参考のこと。
[10] サンスクリットの *as-*「ある」も参考のこと。

肯定現在形は、語幹＋人称接尾辞で構成されており、肯定過去形は、肯定現在形＋非現在接尾辞*-m* で構成されている。3 人称複数 H 類が中和するのは、言語全体での傾向であり、コピュラに特有の現象ではない。

ブルシャスキー語フンザ方言の動詞類の否定は、否定接頭辞 *a-*によって標示される。この接辞は、アクセントを近くへ引き寄せつつ、直後の濁音（有対有声阻害音）を清音化（無声閉鎖音化）する：例 *bién* ⇒ *apíen*。フンザ方言では、3 人称 Y 類が、否定現在でも否定過去でも、単複の区別を失い、更に 3 人称単数 X 類と形式的に等しくなっている。

(18) BH	*guké*	*kitáapičiŋ*	*šuáik*	*bicán*
	guké	kitáap-ičiŋ-Ø	šuá-ik	b-ican-Ø
	これら:Y	本-PL-ABS	良い-INDF.PL	COP-3PL.Y-NPRS
	これらの本は良い			

(19) BH	*guké*	*kitáapičiŋ*	*šuáik*	*api*
	guké	kitáap-ičiŋ-Ø	šuá-ik	a-b-i-Ø
	これら:Y	本-PL-ABS	良い-INDF.PL	NEG-COP-3SG.X-NPRS
	これらの本は良くない			

現在形で 1〜3 人称複数 H 類が、過去形で 3 人称単数 HM 類、2 人称単数、1〜3 人称複数 H 類が、同形になってしまっているのは、形態音韻論的な帰結であって、中和であるとは考えない（可能性としてはあり得るが、異なった形式になる筈のものが同形になるのとは同じ扱いにしない）。

5.2　ブルシャスキー語ナゲル方言

ナゲル方言は、フンザ方言と合わせて東ブルシャスキー語を構成していると称して構わないくらいに、フンザ方言とは似ており、ヤスィン方言とは目立って異なっている[11]。ナゲル方言のコピュラは、H 類が *bá-*、X 類が *b-*という語幹を取るという点でフンザ方言と共通しているが、単数 Y 類が *d-*という語幹を取る点で異なっている。複数 Y 類は X 類と同様の *b-*である。

表 9：ブルシャスキー語ナゲル方言の直説法コピュラ

	肯定・現在		肯定・過去		否定・現在		否定・過去	
	SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
1	*báa*	*báan*	*báyam*	*bom*	*apáa*	*apáan*	*apáyam*	*apóm*
2	*báa*	*báan*	*bom*	*bom*	*apáa*	*apáan*	*apóm*	*apóm*

[11] ブルシャスキー語を東西に分けるのは、Yoshioka（2012）以降の筆者の考えである。

3 HM	*bái*	*báan*	*bom*	*bom*	*apái*	*apáan*	*apóm*	*apóm*
HF	*bo*		*bom*		*apó*		*apóm*	
X	*bi*	*bió*	*bim*	*bióm*	*api*	*apío*	*apím*	*apíom*
Y	*dilá*	*bicán*	*dilúm*	*bicúm*				

上述した語幹の差以外は、フンザ方言と大きな違いがない。3 人称複数 X 類の接尾辞や、過去形での母音が、やや異なった音を持っているくらいである。

中和に関してはフンザ方言と同様である。Y 類が（単数）X 類と中和する為、語幹の違いも解消されている。

5.3　ブルシャスキー語ヤスィン方言

ヤスィン方言は、シナー語に分断されてフンザ・ナゲルと地理的にも方言的にも大きく異なっている。とは言え、H 類の語幹が *bá-*、X 類・複数 Y 類が *b-*、単数 Y 類が *du-*であるという分布は、全てナゲル方言と共通している（語幹の形はやや異なる）。

表 10：**ブルシャスキー語ヤスィン方言の直説法コピュラ**

	肯定・現在		肯定・過去		否定・現在		否定・過去	
	SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
1	*ba*	*ban*	*bam*	*bam*	*apá*	*apán*	*apám*	*apám*
2	*ba*	*ban*	*bam*	*bam*	*apá*	*apán*	*apám*	*apám*
3 HM	*bái*	*ban*	*bam*	*bam*	*apái*	*apán*	*apám*	*apám*
HF	*bu*		*bum*		*apú*		*apúm*	
X	*bi*	*bién*	*bim*	*biém*	*api*	*apíen*	*apím*	*apíem*
Y	*duá*	*bicá*	*dulúm*	*bicúm*				

5.4　ブルシャスキー語のコピュラ

3 つの方言を見たが、中和のスタイルには全く差がなかった。この中和は、東西に分化する以前からの現象なのだろうか。

なお、単数 Y 類のコピュラが独自の語幹を持つナゲル方言とヤスィン方言だが、前者が複合時制に現れる助動コピュラでは *dilá* ではなく *bilá* という形式になるのに対し、後者は助動コピュラでも *duá* という形式を取り続ける点で、異なっている。恐らくは、コピュラ独立形で *d-*系列の語根を用いるのが古い形式であり、他の語根からの影響、助動コピュラとしての用法、或いはヤスィン方言に見られる複合動詞内の*-m* 要素[12]などといったポイントのいずれ

[12] 西ブルシャスキー語では複合時制形式の語構成が、動詞の分詞形＋コピュラとなっている。分詞は単純時制の定形動詞から人称接尾辞を除き、形容詞派生接尾辞*-m* を付加した形式である。例えば、*bal-*「落ちる」を用いた現在完了形の「（それ（Y）は）落ちた；(it) has fallen」は、東ブルシャスキ

かが要因となって、フンザ方言のように、独立形でも *b*-系列を用いるように変化して来たのではないかと考えられる。

6　まとめ

本稿では、筆者がこれまでに調査をした北パキスタン諸言語に関して、コピュラの直説法形式がどうなっているのかを駆け足で一覧して来た。4 節で印欧諸語に関して、5 節でブルシャスキー語諸方言に関して対比をし、相同相異を検証した。表 11 では、両節の内容を改めてまとめている。

表 11：北パキスタン諸言語のコピュラ

言語名	有生性の区別	中和の範囲				系統
		肯現	肯過	否現	否過	
カティ	×	——	——	——	——	Nuristani
カラーシャ	○	——	——	——	——	Dardic
コワール	○	——	——	（3 人称無生）数・時制		Dardic
西ブルシャスキー	△	——	——	（3 人称）性・数	（3 人称）性・数	Burushaski
シナー	×	——	——	人称・性・数	——	Dardic
ドマーキ	×	——	——	人称・性・数	人称・性・数	Indic
東ブルシャスキー	△	——	——	（3 人称）性・数	（3 人称）性・数	Burushaski

ブルシャスキー語の場合、ヒト名詞か非ヒト名詞かで語幹が使い分けられており、更にフンザ方言以外では非ヒト名詞でも具象物（X 類）か抽象物（Y 類）かで異なる語幹を用いていた。具象物には動物が含まれ、抽象物には含まれていないという点を考慮すると、コピュラが語幹で有生性に関する区別をしていると見ることもできる。但し、X 類には無生物以外も多く含まれているため、厳密には違った概念が必要であり、カラーシャ語やコワール語の区別とは（同一範疇内の話であったとしても）別物であると言うべきであろう。表 11 では「△」でその箇所を示した。

ブルシャスキー語の非ヒト 3 人称の否定形におけるクラス・数の中和は、幾分偏ったグルーピングを示していた（即ち、複数 X 類を取り零している）が、その背景には具象物（X 類）より抽象物（Y 類）のほうが、数の概念に関してのこだわりの希薄さのようなものがあるのかも知れない。いずれにしても、3SG.X・3SG.Y・3PL.Y が中和するという図式は東西のブルシャスキー語に確認され、ブルシャスキー語と直接に接触している 3 つの印欧語が否定形で中和を見せているという所は見逃せない。即ち、これは現在は東西に分断されているブルシャスキー語が曾ては大きな一塊としての分布をしており、それが今の中間地域や周辺地域の言

一語が BH *balílá* [*bal*+COP]、BN *balí bilá* [*bal*+COP]であるのに対し、西ブルシャスキー語は BY *balúm duá* [*bal-m*+COP]である。

語に接触した結果、影響を及ぼして広まった現象なのではないかと考えられる。[13]

7　おわりに

本論文では、筆者がこれまでに調査をして来た言語全般に話を広げて、コピュラに関する異同を確認した。系統的な、或いは地理的分布による有生性での語根の使い分けや、ブルシャスキー語から広まったであろう否定における中和現象にまで話は及んだが、一方で、更に広範な地域を見ないと、それぞれの現象に関する決定打は放てないことも分かった。但し、これ以上広範囲に調査を広げようとすると、中々個人で賄える規模ではなくなってくる上、地域的にもアフガニスタンや、ディール県[14]、カシミールなどといった、現状で入域困難な地帯になってしまう為、悩ましい話である。

加えて、今回のデータはエリシテーションによって得たものであり、パルーラ語などの周辺言語で見られ（Henrik Liljegren, p.c.）、当該地域でもあり得るであろうゼロコピュラの文が含まれていない。コピュラが形式を持つ文と、ゼロコピュラ文との対比も、今後は考察に含めて行く必要性があるだろう。

謝辞

本論文は、アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）の言語ダイナミクス科学研究プロジェクトの、フィールド言語学ワークショップ 第 8 回文法研究ワークショップ「コピュラ・存在表現」(2)（2014 年 12 月 6 日、AA 研）、並びに、2nd Kashmir International Conference on Linguistics（2015 年 5 月 4～5 日、University of Azad, Jammu and Kashmir (Pakistan)；館長リーダーシップ経費（平成 27 年度、「国際学会での研究発表：2nd Kashmir International Conference on Linguistics」）による）での発表に基づく。各発表で有益なコメント・質問を下さった方々、論文執筆に当たってコメントを下さった長田俊樹氏、鈴木博之氏に深く御礼申し上げる。また、根気よく調査に協力してくれた各言語のインフォーマントの方々にも心より感謝の意を表したい。言うまでもなく、本稿に残る誤り全ての責任は著者にある。なお、本研究は、東京外国語大学の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム（短期派遣 AA）」（2012 年度、「ドマーキ語／ドマー語の記述言語学的研究」）、日本学術振興会特別研究員奨励費(PD)（課題番号 25・6625、2013 年度、「ドマーキ語／ドマー語の記述言語学的研究」）、国立民族学博物館

[13] コピュラやその周辺でのカテゴリ中和は、様々な言語で見られ、例えば北パキスタンを離れると、コピュラではなく存在動詞だが、否定形における人称カテゴリの中和が、ベンガル語などにも見られる。インドのチョターナーグプル地方においても、非現在時制でコピュラと存在動詞とが中和する現象が語族の壁を越えて分布していることが、長田（1991）で詳細に指摘されている。このように、この手の中和現象自体は北パキスタン特有でも珍しいものでもないが、系統・地理的に密接したカラーシャ語には見られないカテゴリ中和が、コワール語のコピュラには確認できるという点は、注目に値する筈である。

[14] カイバル・パクトゥンクゥー州ディール県。チトラール県の南に位置する、一時期外国人が狙われるテロや人攫いの多かった地域であり、2014 年現在は南方のペシャーワル市からの陸路アクセスが禁じられている。

の館長リーダーシップ経費（平成 26 年度、「ブルシャスキー語、ドマーキ語およびシナー語調査」）、および、所属博物館から受けた研究費によって行われた調査での資料などを用いている。

インフォーマント概要

・カティ語（2008 年に調査）
　　Ināyat ul-Lāh、1979 年生まれ、ルンブール谷シャハナンデ村出身
・カラーシャ語 ルンブール方言（2008 年に調査）
　　Yasīr Arafat、1979 年生まれ、ルンブール谷バラングルー村出身
・コワール語 イシュコマン方言（2008 年から調査）
　　Saīd Ghulām Nabī Wafā、1968 年生まれ、イシュコマン谷チャトルカンド村出身
　　Asīf Zamān、1993 年生まれ、イシュコマン谷チャトルカンド村出身
・シナー語 ギルギット方言（2014 年から調査）
　　Masūd Rehmān、1968 年生まれ、ギルギット市アンファリー村出身
・ドマーキ語 モミナバード方言（2005 年から調査）
　　Xushān、1978 年生まれ、フンザ谷モミナバード村出身
　　Alī Ahmad Jan、1986 年生まれ、フンザ谷モミナバード村出身
・ブルシャスキー語 フンザ方言（2004 年から調査）
　　Essa Karīm、1976 年生まれ、フンザ谷カリマバード町出身
　　Musa Bēg、1979 年生まれ、フンザ谷ガネシ村出身
・ブルシャスキー語 ナゲル方言（2008 年から調査）
　　Ainūr Xayāt、1973 年生まれ、ホパル谷ゴシュシャル村出身
・ブルシャスキー語 ヤスィン方言（2007 年に調査）
　　Arshād Ali、1989 年生まれ、ヤスィン谷ゴジャルティ村出身

略号一覧

ABS	absolutive	INA	inanimate	NPST	non-past
ANI	animate	INDF	indefinite	OBL	oblique
CONJN	conjunctive	INS	instrumental	PFV	perfective
COP	copula	INTR	intransitive	PL	plural
F	feminine	IRR	irrealis	PRS	present
GEN	genitive	M	masculine	SG	singular
H	H-class	NEG	negative	X	X-class
HF	HF-class	NOM	nominative	Y	Y-class
HM	HM-class	NPRS	non-present	1/2/3	1st/2nd/3rd person

参考文献

Edelman, D. I. 1983. *The Dardic and Nuristani Languages (Languages of Asia and Africa)*. Moscow: „Nauka“ Publishing House.

Grierson, George Abraham. 1906. *The Piśāca Languages of North-Western India*. London: The Royal Asiatic Society.

_____. 1919. *Linguistic Survey of India. vol.VIII: Indo-Aryan Family. part II: North-Western Group, Specimens of the Dardic or Piśācha Languages (Including Kāshmīrī)*.

Morgenstierne, Georg. 1926. *Report on a linguistic mission to Afghanistan (Instituttet for sammenlignende kulturforskning, serie C I-2)*. Oslo: H. Aschehoug.

_____. 1947. Metathesis of Liquids in Dardic. (Reprinted in Morgenstierne, Georg. 1973. *Irano-Dardica*, 231–40. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.)

_____. 1974. Languages of Nuristan and surrounding regions. In Karl Jettmar and Lennart Edelberg (eds.), *Cultures of the Hindukush. Selected papers from the Hindu Kush Cultural Conference held at Moesgård 1970*, 1–10. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

長田俊樹. 1991. 「インド東部チョターナーグプル地方における言語輻合について」『神戸市外国語大学外国学研究』23, 143–77. 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.

Schmidt, Ruth Laila and Razwal Kohistani. 2008 *A Grammar of the Shina Language of Indus Kohistan*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Trail, Ronald L. and Gregory R. Cooper. 1999. *Kalasha Dictionary –with English and Urdu*. Islamabad: National Institute of Pakistan Studies Quaid-i-Azam University, and Summer Institute of Linguistics.

Вайнрайх, М. 2011. Домааки язык. In Т. И. Оранская, Ю. В. Мазурова, А. А. Кибрик, Л. И. Куликов, and А. Ю. Русаков (eds.), *Языки мира: Новые индоарийские язык*. 165–94. Москва: Academia.

Varma, Siddheshwar. 1978. *Dardic or Pisacha Languages: A Linguistic Analysis.* Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vishva Bandhu Institute of Sanskrit and Indological Studies, Punjab University.

Yoshioka, Noboru. 2012. A Reference Grammar of Eastern Burushaski. Unpublished PhD thesis, Tokyo University of Foreign Studies.

庄垣内さんの思い出

長田 俊樹

庄垣内さんが亡くなって、早一年以上の月日がたってしまった。言語記述論集に執筆しておられる若い大学院生の中には、直接、庄垣内さんに教わっていない方もだんだん多くなってきた。個人的に言えば、残念なことに、学問的な影響はあまり受けたとは思えない。ただ、人間のつきあいとしては、庄垣内さんから学ぶことが多々あった。そこで、この論集に一筆、書かせていただくことにした。

１.

庄垣内さんに初めてお会いしたのは、大学の教室でも、研究室でもない。私が生まれ育った家だった。というのも、庄垣内さんは父・長田夏樹の勤務先であった神戸市外大に赴任し、父の同僚となり、赴任の挨拶をかねて、長田家にやってきたのだ。庄垣内さんの年譜をみると、1980 年 1 月に神戸市外大に赴任しているので、その正月に初めてお会いしたのだと思う。そのとき、わたしは北大文学部で言語学を専攻していた。最初、北大に入ったときは理系にいた。しかし、理学部地質鉱物学科に進学したわたしは、鉱物に全く興味がわかず、転部して、1979 年 4 月から言語学を学びはじめたばかりだった。

父は庄垣内さんが大のお気に入りだった。家では、庄垣内くん、庄垣内くんといって、何かにつけて、庄垣内さんが引き起こす珍事を、脚色を加えて、母や姉に紹介していたらしい。しかし、すでに神戸を離れ札幌にすんでいたわたしは、庄垣内さんについて、全く何も知らなかった。

庄垣内さんが赴任の挨拶で長田家にやってきたとき、ちょうど正月で帰省していたわたしに、父は喜び勇んでこういった。

「俊樹、こっちに来なさい。おまえも言語学を学ぶようになったのだから、庄垣内くんに挨拶をしなさい」

そう応接間から声がかかった。そして、庄垣内さんに初めてお会いしたのだ。しかし、父の期待とは裏腹に、庄垣内さんには反発しか覚えなかった。それはなぜか。庄垣内さんが着ていた三つ揃いが気にくわなかったのだ。公式的な儀式以外で、三つ揃いを着ているのはヤクザぐらいしかいない。そんな短絡した思考しかもちあわせてなかったのだ。三つ

揃いだけはない。あの独特な関西弁にも気にくわなかった。具体的にどんな発言をしたのかは覚えてはいない。しかし、かなり罵詈雑言を浴びせかけたことだけは覚えている。また、父がずいぶんと焦って、ハラハラした様子だったことも覚えている。ただ、「庄垣内くんに何を言うんだ。謝りなさい」と怒られることはなかった。父はハラハラドキドキしながらも、内心どこかで面白がっていたに違いない。父と庄垣内さんの関係はそういうものだった。

このときのことは庄垣内さんもよく覚えておられた。亡くなる前、北野病院にお見舞いに行ったときにも、懐かしそうにこうおっしゃっていた。

「あのころの俊樹は壁に向かって吠える犬のようやったな」

わたしはどうも自分の意にかなわない状況になると、やたら人にかみつく癖がある。人はそれをよく狂犬病にたとえたものだった。とくに、お酒が入るとその傾向がひどくなる。１９７８年の正月明けに、民博に行ったときもすごく荒れた。わたしたちは探検部の一員として、１月末からインドに行くことになっていたのが、そのとき探検部の顧問をやっておられた佐々先生に紹介されて、館長だった梅棹忠夫に、挨拶に行ったのだ。たぶん、梅棹さんの態度が気にくわなかったのだろう。ひどく酔って、梅棹の馬鹿野郎とか叫んで、ドア蹴りまくったという。そのとき一緒だった探検部の友人は大変困ったそうだ。ただ後日、ことの顛末を話す友人はどこかうれしそうでもあった。

梅棹さんのどこが気にくわなかったのか。今となっては全く思い出せない。しかし、庄垣内さんと出会ったとき、なぜ気にくわなかったのか、今でもはっきりと覚えている。庄垣内さんの服装が、いや何となく庄垣内さんの存在が気に入らなかったのだ。今から振り返ると、この愛憎なかばのアンビバレンツな関係はずっと続いていたように思う。どこかで、庄垣内さんを怒らせることをねらって、いやがるようなことばかりを言ってきた。一方で、庄垣内さんから本当に怒られることもあったし、親身に世話をしてくれたこともあった。

なお、この思い出の記では庄垣内さんと呼んでおく。実のところ、わたしは皮肉や嫌みでない限り、庄垣内先生と呼んだこともないし、庄垣内さんから直接、言語学を習ったこともない。庄垣内さんの授業を受けたのは定年の時の最終講義だけである。追悼文だからといって、先生と持ち上げてみたところで、後で落とすための言いぐさだろうと警戒されるだけなので、庄垣内さんで通させてもらう。

２.

庄垣内さんとの出会いは最悪だった。それにもかかわらず、ずいぶんと可愛がってもらった。いつしか、休みで神戸に帰ると、一度ならず、二度三度、庄垣内家を訪問するようになる。北大の友人を連れて、家を訪れたこともあった。それでも、庄垣内さんに会うと、何かを言い出さないと気がすまない。

ある日の庄垣内家で、こんなことがあった。そのころ、インコを飼っておられたのだが、そのインコがなんと「庄垣内くん、がんばって」と叫ぶのだ。それはそれで微笑ましくていい。がんばることに口挟みたくなったわけではない。その後で「インディアン、嘘つかない」と続く。それが問題で、どうしても噛みつきたくなってくる。

「インディアン、嘘つかないはおかしい」

「なんでやねん。インディアンが嘘をゆえへんのはええことやろ」

「インディアンは真っ当な英語がでけへんことを前提にして、変な日本語訳をつけていることに憤りを感じないのか」

さすがの庄垣内さんも、これには黙ってしまった。もちろん、その姿を見て、勝ったと喜んでいる自分がそこにいた。何ともたわいもない。小さな男だ。

ついでにもう一つ。１９８４年７月からインドのラーンチー大学に留学することになり、留学前に、神戸市外大まで庄垣内さんに会いにいった。留学するわたしを前に、庄垣内さんは非常に上機嫌だった。

「俊樹も、いよいよ昼食大学に留学するので、昼食ぐらいおごらんとな」

「ラーンチー大学はＲから始まるので、昼食とは違うんですけど」

これもパンチを繰り出せたと満足したことを覚えている。もっとも、正直言って、こんなことしか、思い出さない自分が恥ずかしい。

一方で、いたずら好きの庄垣内さんが顔を出すこともよくあった。

天理図書館は貴重書を持っていることで知られる。北大の後輩に天理大学の関係者がおられ、その伝で天理図書館の収蔵図書を見せてもらうことになった。そこで天理までご一緒したことがある。大阪駅で乗り換えて、地下鉄に乗るため、地下鉄のホームに降り立っ

たときのことだった。プラットフォームにパンが落ちていたのだ。まだパンの形をとどめていたし、見た目はきれいそうだった。

「俊樹、あの落ちたパンを食べたら、１０００円やるで。」

「なんでやねん。あんなパン食えるか」

「５０００円やったらどうや。いくら何でも１００００円やったら、食べるやろ」

「ワシの後輩Ｔやったら、食べよるで。何せプラスチック製のパンにかじりついたくらいですから」

じじつ、我々の間では、Ｔはプラスチックのパンをかじったことから、パンちゃんと呼ばれていた。庄垣内さんのこうしたいたずらはよくあったが、天理図書館に行くときの出来事はこのエピソードとともによく覚えている。

３.

庄垣内さんから一方的にこっぴどく怒られたこともある。

1990 年 10 月に、妻と娘を連れてインド留学から帰国した。ムンダ人との結婚に反対していた母から勘当されていたため、実家には帰れなかった。さいわい、AA 研の峰岸さん一家のご厚意で、埼玉県与野市（現在はさいたま市）に家を借り、これまた峰岸さんのご紹介で高校の非常勤講師の職を得て、なんとか生活をしていた。

1991 年、処女英語論文がデリーから出版された本に掲載された。また、博士論文の審査にもようやく通過したころだった。何のためだったか、すっかり忘れてしまったが、日帰りで神戸に行くことがあった。そのときに、神戸市外大の庄垣内研究室を訪ねた。吉田豊さんも同席していた。英語論文の話に及ぶと、突然、声を荒げて、怒り出したのだ。

「俊樹、英語論文を書いたから、それでええ思ってるんちゃうか。おまえはもう３０半ばなのに、論文一つ書いただけや。それで、すぐ満足してるんはおかしいんちゃうか」

こうして延々と叱責されたのだ。なんでもすぐ有頂天になってしまう自分の性格をよく見抜いた庄垣内さんの攻撃になんの反論もできなかった。同席していた吉田豊さんが「庄垣内さんは期待している人にしかおこらないのだから」と慰めとも取れなくはないが、どこか腑に落ちない言葉をかけられたこともよく覚えている。

この話には裏がある。じつは、この英語論文を草稿の段階で父に送ったところ、庄垣内さんから、英語ではなく、日本語にしたらどこかに掲載してあげるというお誘いを父を通じて受けた。そこで日本語にして庄垣内さんに送った。ところが、これがなかなか掲載してくれるところがなかったのだ。留学当時は知るすべもなかったが、だいぶ経ってから聞かされた。とくに、さる方から日本の大学に所属がない人の論文を掲載するのは難しいといわれたことには、ずいぶんとお怒りだったそうだ。それならば、ということで、当時庄垣内さんたちが出していた『内陸アジア言語の研究』に掲載してくださることになったのだ。曰く、「ムンダ語は内陸アジアで話されているようなもんや」。

庄垣内さんが亡くなってから、姉に聞かされたのだが、父には「俊樹は言語学の才能がある。だからそれを伸ばしてやらんとアカン」とつねづね言っていたのだそうだ。そんなわけで、京大言語に非常勤で教える機会を与えてくださったし、『言語研究』に掲載するような論文を書くようにも勧めてくださった。ムンダ語の論文など、ほとんどの人が読んではいないにもかかわらず、庄垣内さんはしっかりと読んでいた。ありがたいことである。

いろいろとご恩を受けたことも決して忘れたわけではない。しかし、それでもなお、なぜか、庄垣内さんにはどこかで一言返さないといられない。そんな関係が最後まで続いた。この追悼文もその延長にある。

４.

庄垣内さんの学問的な側面にも言及すべきだろう。しかし、わたしにはその資格がない。モンゴル語も、トルコ語も、ウイグル語もまったく知識がない。そこで、父と庄垣内さんとの奇妙な関係にふれながら、父がよく口にしていたことを書いておこう。

「庄垣内君は職人だ」。それが父の口癖だった。その根拠はというと、「あんだけ穴だらけのウイグル文を読んでみせるのだから」というものだった。父は職人だと言うことを庄垣内さんにも直接言っていたに違いない。じじつ、この職人説には、庄垣内さんが「古文献言語の研究と職人」というエッセイのなかで、こんなことを述べている。

「文献言語の研究には職人の仕事に似たところがあって、そこを言語研究者がしばしば指摘する。その指摘は嫌いである。実際そのような性質があるのだから、いやがる必要はないのに、何年やっていても気に障る」

父が庄垣内さんの気に障るように、君は職人なんだからと言い続けた結果、こんな発言をしているのではないか。この文章を読んだときにまっさきに思ったが、それは考えすぎだろうか。

ところで、この職人という言葉は父が編み出したものではない。大学闘争が華やかだったころ、父は造反教官として、ハンストをやったことがあった。そのときに、岡山大学にいた江実さんが大阪まで来て、父に造反教官など止めるように説得しに来たときに、「長田君、君は職人に徹しなさい」と言われたのだ。それ以来、何かがあると職人という言葉を使うようになったのだ。なお、江さんは戦争中、張河口にあった蒙古文化研究所の副所長（所長はモンゴル人）で、父はそこの所員という関係だった。父が乞食をしていたときに、江さんと偶然出会って、研究所に誘われたという。当人たちはじめ、そのころを知る人々はほとんど亡くなってしまった今、どこまでが事実なのかはわからない。

話がずれた。庄垣内さんにもどろう。父がよく言っていたことがもう一つある。ウイグル人の漢字の読みについて、ウイグル独自の訓読みがあるとの説は「オレの説を継承したのだ」と。その真偽のほどはまったくわからない。

一方、庄垣内さんは父をどうみていたのだろうか。一度だけ、父の学問的評価を聞いたことがある。最晩年、父が朝鮮学報に掲載した論文を京都産業大学に持ってあがったところ、「俊樹、おまえには文献のことがわからんと思うけど、長田先生の論文、まだまだ衰えてへんで」とおっしゃっていた。

ただ、父が勲三等の勲章をもらってから、庄垣内さんは「あんだけ勲章なんかもらえへんと言うておきながら、もらいよった」といって、父の元を訪問することはなかった。なんでも、昔、「長田先生も結局は勲章もらうんでしょう」とからかったときに、父から殴られたのだそうだ。両者を知るわたしには、これは事実だったと容易に想像できる。

「長田先生はなんやかんやいうても、海軍主計少将の息子や。それに比べると、庄垣内家は国家権力に睨まれているから、勲章をもらうはずもない」と豪語していた。

ところが、学士院賞をもらい、天皇を前にご進講をすることになったことは皆さんもご存じだろう。父の叙勲に怒った人がご進講をしたのだから、今度あったときにはさんざんからかってやろうと手ぐすねを引いていた。その矢先、体調を悪くされ、結局、その機会を逸したまま、庄垣内さんは亡くなってしまった。

なお、江実さんについては、『月刊言語』に掲載された、庄垣内さんの言語学界怪人伝に「ステッキ紛失症」として登場する。その次に、言語学界怪人伝として、長田夏樹を登場させるつもりだったそうだが、月刊言語が廃刊となったため実現しなかった。亡くなる前、北野病院でお目にかかったときに、そうおっしゃっていた。

５．

庄垣内さんが京都産業大学に赴任してから、地球研に近いこともあって、２，３ヶ月に一度は昼食をともにすることがあった。吉本新喜劇など、笑いに造詣が深かったし、いつも楽しい会話が多かったが、ときには怒らせることもあった。メルカトル教授としてドイツに行かれたときは、メルカトル教授に選ばれるのを誇りに思うのも、天皇家から勲章を受けるのを誇りに思うのも、同じやといって、怒らせた。このときは同席していた、庄垣内さんの教え子が取りなしたので、大げんかに至らなかった。

いつものように、昼食をともにするため京産大にうかがおうとしたとき、体調がもう一つなので、また今度にしてくれと言われたのが 2011 年の秋だった。その年 12 月、恩師池上二良先生の追悼会が北大であった。池上先生とご一緒に、学会に参加されるなど、懇意にしておられた庄垣内さんも参加されていた。そこで、体調のことをうかがうと、「あれは何ともなかった」といって、お酒を飲んでおられたが、年が明けてから、ガンがわかり、ついには帰らぬ人となった。

北野病院に入院されているときに、お見舞いにいこうかどうか、ずいぶんと悩んだ。考えてみると、庄垣内さんをからかうことはしてきたが、死を覚悟した庄垣内さんをからかうなんて、さすがにできない。さりとて、亡くなる前にもう一度会っておきたい。結局、いろいろと考えあぐねた末、北大時代に庄垣内さんのところに一緒に行くことが多かった姉とお見舞いに行った。いろいろな思いが交錯するなか、ドアを開けて、病室に入ったのだが、「よう来てくれたな」の一言で、それまでのモヤモヤは一遍に吹っ飛んだ。

病院にお見舞いに行ったとき、庄垣内さんの大きさを改めて知らされた。ガンで死に逝く人がここまで冷静にいられるのか。わたしならばとても人に会えるような状態ではない。「おまえ新聞に出てたな」からはじまって、「壁に向かって吠える犬だった」、そして言語学界怪人伝に長田先生を書こうと思っていた話まで、そのいつもと変わらぬ口調に、圧倒された。庄垣内さん、俊樹は本当に弱い犬ほどよく吠えるの典型です。

愛すべき庄垣内さんへ、心よりの哀悼の意を表します。向こうの世界で、また父と心おきなく飲み交わしてください。

編集後記

『言語記述研論集』をご覧頂き、ありがとうございます。最近の研究会はますます活気づき、それにつれ論集もより大部に、また多彩になりました。その時分の研究会の様子が反映されやすい論集で、背後にある研究会の「空気」を感じていただけるのではないでしょうか。その空気が気になった方は、是非研究会に参加してください。きっと楽しいですよ。

ホームページのアドレスが http://lg.let.kumamoto-u.ac.jp/kijutsuken に変わりました。このページから過去の研究会の内容や論文を見られるようになっています。是非ご覧ください。

(2015 年 3 月，伊藤雄馬記)

地球研言語記述論集 7

大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬（編）
言語記述研究会

総合地球環境学研究所プロジェクト
「アジア・太平洋における生物文化多様性の探究」
（プロジェクトリーダー：大西正幸）

2015 年 3 月 29 日発行

発行：総合地球環境学研究所
京都市北区上賀茂本山 457 番地 4
http://lg.let.kumamoto-u.ac.jp/kijutsuken
ISBN 978-4-906888-15-3